高松市埋蔵文化財調査報告　第29集

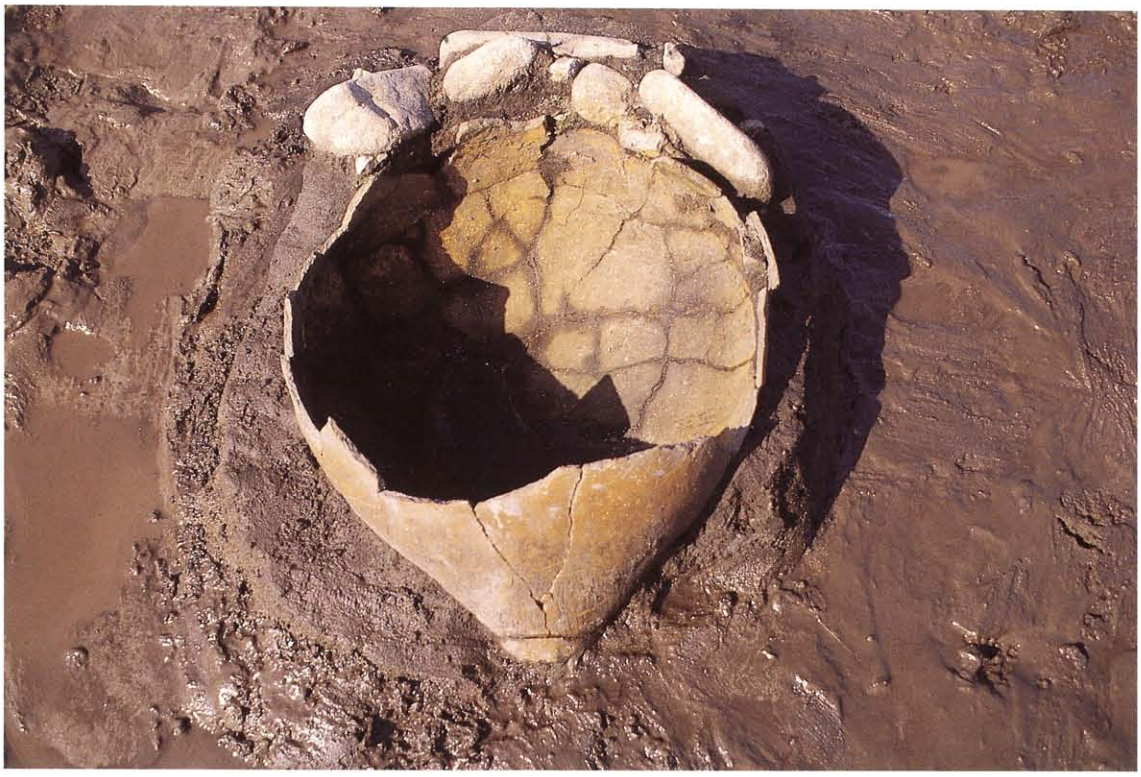
一般国道11号高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第六冊

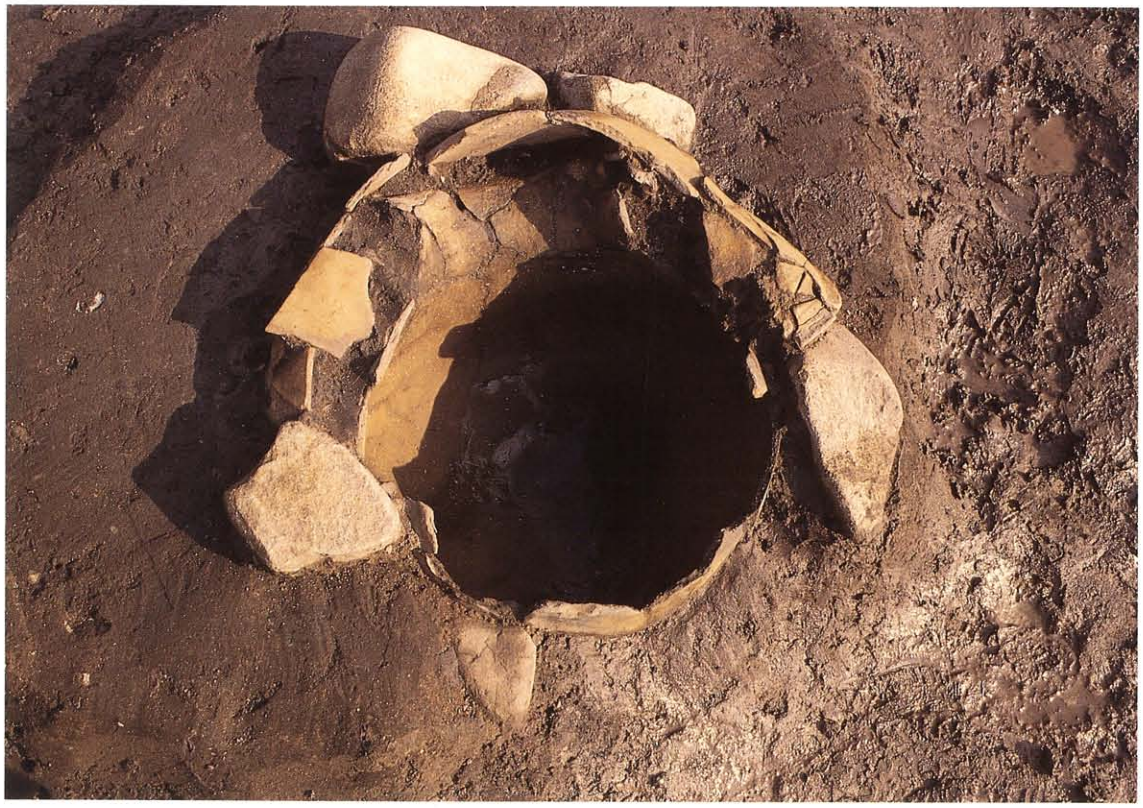
蛙　股　遺　跡
KAERU MATA

1995.10

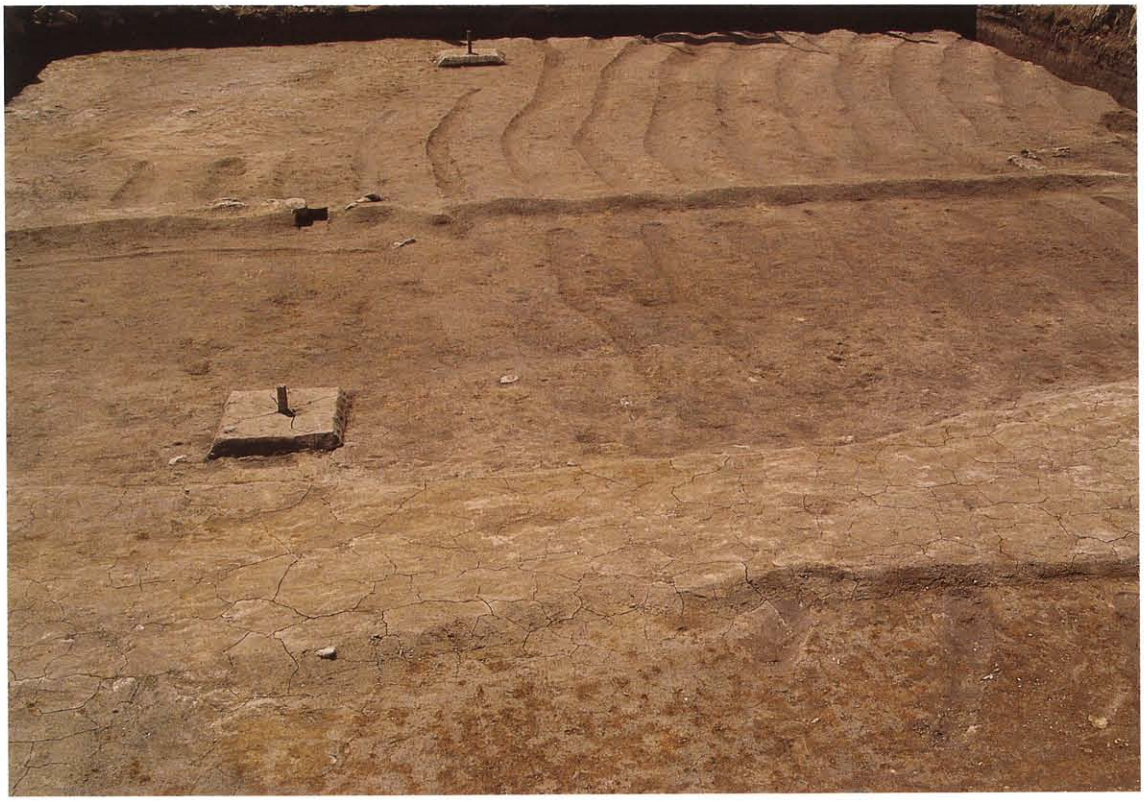
高松市教育委員会
建設省四国地方建設局



1．土器棺１完掘状況



2．土器棺２完掘状況



1．第1期水田完掘状況

2．居石2号塚集石検出状況

はじめに

私たちの高松市は，瀬戸内海に面した風光明媚な土地柄を誇るまちでございます。市民は，豊かな自然に囲まれて充実した生活を送る一方，四国の中枢管理都市としての利便性も，享受しているところでございます。そうした意味では，高松というまちは私共に，少なからず満足を与えてくれる都市であると思っております。

しかしながら，現状のままという訳にはまいりません。高松という都市がより発展をしていくためには，いつまでも活力を持ち続け，変わり続けなければなりません。

有名な兵法書「孫子」に，「敵を知り己を知り得れば，百戦危うからず。」という言葉がございますように己を知り得ることが如何に重要か，それは我々が経験則で十分承知をしておるところでございます。

文化の充実についても，同じでございます。高松独自の文化を築くということが，本当に大切になります。そのためには，郷土の歴史を把握することが大切だと考えるのでございます。そうすることによって，高松というまちに根ざした文化が育まれるのではないか，そのように考えております。

そうした見地に立ちますと，埋蔵文化財調査の重要性が垣間見えてくるのでございます。高松市というまちの生い立ちを探り，また，発展を探ることは，重要なことであるといえましょう。郷土すなわち，土地から遊離した，文化はございません。「一生懸命」という言葉がございますように，高松という土地に根ざした，高松という土地に懸けた文化がほしいのでございます。

そうしたことから，今後とも，個々の遺跡の発掘調査に，できる限りの努力を傾注したいと考えております。最後になりましたが，今回の調査にご協力いただきました関係者・関係機関に，厚くお礼申しあげますとともに，変わらぬご協力を賜りますようお願い申しあげます。

平成7年10月

高松市教育委員会
教育長　山　口　寮　弍

例　　言

1　本書は，一般国道11号高松東道路建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書の第６冊で，高松市太田下町，伏石町に所在する蛙股（かえるまた）遺跡の調査報告を収録した。

2　本事業は，高松東道路上天神－前田東間８kmのうち太田第２土地区画整理事業地に含まれる約1.7kmを対象とする。

3　本事業は，建設省四国地方建設局から高松市が受託し，高松市教育委員会（本文１Ｐ参考）が発掘調査を実施した。

4　事業費は，建設省四国地方建設局が全額を負担した。

5　調査にあたって下記の関係諸機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

建設省四国地方建設局　　建設省四国地方建設局香川工事事務所
香川県教育委員会　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
高松市都市開発部太田第２土地区画整理事務所

石上英一　牛嶋　茂　大久保徹也　片桐孝浩　金田章裕　笹川龍一　高橋　学
外山秀一　丹羽佑一　橋詰清孝　山元素子　（敬称略）

6　本書の科学的な報告にあたっては，次の方に分析を依頼した。

火山灰分析　（株）京都フィション・トラック　檀原　徹　（敬称略）

7　調査全般を通じて，末光甲正氏，中西克也氏の協力を得た。

8　本遺跡の調査および整理作業は，文化財係長藤井指導のもと山本，中西，山元が別記整理補助員の協力を得てあたった。本報告書の執筆は第２章，附載１を山本が，第３章第１節，第２，３節の遺構部分および第４章第２，３節を中西が執筆し，その他を山元が行った。全体の編集は執筆者である山本，中西の協力を得て山元が行った。

9　写真は，遺構については調査担当者が撮影し，遺物写真については写房楠華堂（楠本真紀子）に委託した。

10　本遺跡の調査における各業務の委託先は次のとおりである。

遺跡写真測量業務	国際航業株式会社（３区）
	アジア航測株式会社（１．２．４区）
埋蔵文化財発掘調査掘削工事	東讃建設株式会社（１．２区）
	大通土建株式会社（３区）
	中塚工業株式会社（４区）

11　本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

ＳＫ　土坑　　ＳＤ　溝状遺構　　ＳＲ　自然河川　　ＳＸ　性格不明遺構
ＳＰ　ピット

12　本文の挿図中で国土地理院発行の５万分の１地形図「高松」，「高松南部」，「丸亀」，「玉野」を一部改変して使用した。

13　発掘調査で得られた資料のすべては，高松市教育委員会で保管している。活用されたい。

14　蛙股遺跡については，これまでに下記の文献に遺跡の概要等を報告している。ただし，これらの報告については，調査の途中段階や整理作業の途中段階のものであるため，本報告書の見解との違いが生じている箇所が存在する。それらについては今回の報告書をもって，正式なものとする。

・山元敏裕「蛙股遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成４年度』香川県教育委員会1993．３
・『むかしの高松　第３号』高松市教育委員会1992．３

15　蛙股遺跡４区で確認した居石２号塚の参考のため，太田第２土地区画整理事業地内で調査を行った同様の塚である松ノ元１号塚，瓦礫１号塚，汲仏１号塚の３ヶ所の塚の成果を附載した。

16　遺構，遺物の記載は，基本的には調査区毎に時代の古い遺構，遺物から順に記載してい

るが，自然河川のように長期間の遺物を含むものについては，時代に関係なく一括してまとめたため，総ての遺構，遺物を時代順に統一する事ができていない。

蛙股遺跡発掘調査報告書

本　文　目　次

はじめに
例　　言
第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
　第３節　整理作業の経過 …… 9
第２章　地理的環境・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 11
　第２節　歴史的環境 …… 13
第３章　調査の成果
　第１節　調査区の設定 …… 21
　第２節　１区の調査 …… 25
　　１　概　　要 …… 25
　　２　基本土層 …… 25
　　３　弥生時代の遺構と遺物 …… 29
　　ＳＤ 01 …… 29
　　ＳＤ 02 …… 29
　　ＳＤ 03 …… 30
　　土器棺１ …… 31
　　土器棺２ …… 33
　　土器棺３ …… 35
　　ＳＲ 01 …… 35
　　４　古代の遺構と遺物 …… 48
　　５層水田 …… 48
　　４層水田 …… 51
　　５　近世の遺構と遺物 …… 51
　　ＳＤ 04 …… 51

ＳＤ 05 …… 51
ＳＫ 01 ～ 06 …… 52 ～ 54
第３節　２区の調査 …… 55
1　概　　要 …… 55
2　基本土層 …… 55
3　古代の遺構と遺物 …… 59
第Ⅱ期水田 …… 59
第Ⅰ期水田 …… 60
ＳＤ 01 …… 62
4　近世の遺構と遺物 …… 63
ＳＸ 01 …… 63
第４節　３区の調査 …… 64
1　概　　要 …… 64
2　基本土層 …… 67
3　弥生時代の遺構と遺物 …… 67
ＳＤ 01 …… 67
ＳＤ 02 …… 67
ＳＤ 03 …… 67
ＳＸ 01 …… 68
4　古代～中世の遺構と遺物 …… 69
水田土壌層 …… 69
5　近世の遺構と遺物 …… 70
ＳＤ 04 …… 70
ＳＤ 05 …… 70
ＳＤ 06 …… 70
ＳＤ 07 …… 70
ＳＤ 08 …… 71
ＳＤ 09 …… 71
ＳＤ 10 …… 72
ＳＤ 11 …… 72
ＳＫ 01 ～ 03 …… 72
ＳＸ 02 …… 72

ＳＰ 01 ～ 15 …… 74
第５節　４区の調査 …… 75
1　概　　要 …… 75
2　基本土層 …… 75
3　弥生時代の遺構と遺物 …… 76
ＳＤ 01 － 1 …… 76
ＳＤ 01 － 2 …… 79
ＳＤ 04 …… 79
ＳＸ 01 …… 80
4　中世の遺構と遺物 …… 81
ＳＤ 03 …… 81
5　近世の遺構と遺物 …… 81
ＳＤ 02 …… 81
ＳＤ 05 …… 81
ＳＫ 01 ～ 12 …… 82 ～ 85
居石２号塚 …… 85
第４章　調査のまとめ
第１節　出土土器について …… 99
第２節　土器棺について …… 105
第３節　中世の水田について－１，２区の土地利用の変遷－ …… 115
第４節　中・近世期に属する塚について …… 119

附　　載
第１節　太田第２土地区画整理事業域内の塚について …… 125
第２節　蛙股遺跡出土火山灰分析 …… 135

遺物観察表 …… 149
報告書抄録 …… 巻末

挿　図　目　次

第１図　試掘トレンチ配置図 …… 2
第２図　高松東道路路線内遺跡
調査位置図 …… 3 ～ 4
第３図　調査位置図 …… 11
第４図　遺跡分布図 …… 15 ～ 16
第５図　調査区設定図 …… 21
第６図　蛙股遺跡周辺微地形図 …… 23 ～ 24
第７図　１区遺構配置図 …… 25
第８図　１区南壁土層図 …… 27 ～ 28
第９図　ＳＤ 01 実測図 …… 29
第10図　ＳＤ 01 出土遺物実測図 …… 29
第11図　ＳＤ 02 土層図 …… 30
第12図　ＳＤ 02 出土遺物実測図 …… 30
第13図　ＳＤ 03 土層図 …… 31
第14図　ＳＤ 03 出土遺物実測図 …… 31
第15図　土器棺１実測図 …… 31
第16図　土器棺１出土遺物実測図 …… 32
第17図　土器棺２実測図 …… 33
第18図　土器棺２出土遺物実測図 …… 34
第19図　土器棺３実測図 …… 35
第20図　ＳＲ 01　8 ～ 10 層
出土遺物実測図（１）…… 36
第21図　ＳＲ 01　8 ～ 10 層
出土遺物実測図（２）…… 37
第22図　ＳＲ 01　8 ～ 10 層
出土遺物実測図（３）…… 38
第23図　ＳＲ 01　8 ～ 10 層
出土遺物実測図（４）…… 39
第24図　ＳＲ 01　8 ～ 10 層
出土遺物実測図（５）…… 40
第25図　ＳＲ 01　8 ～ 10 層
出土遺物実測図（６）…… 41
第26図　ＳＲ 01　8 ～ 10 層
出土遺物実測図（７）…… 41
第27図　ＳＲ 01　6,7 層
出土遺物実測図（１）…… 42
第28図　ＳＲ 01　6,7 層
出土遺物実測図（２）…… 44
第29図　ＳＲ 01　6,7 層
出土遺物実測図（３）…… 45
第30図　ＳＲ 01　6,7 層
出土遺物実測図（４）…… 45
第31図　ＳＲ 01　6,7 層
出土遺物実測図（５）…… 46
第32図　ＳＲ 01　6,7 層
出土遺物実測図（６）…… 47
第33図　５ａ層水田実測図 …… 48
第34図　５ａ層水田出土遺物実測図 …… 48
第35図　４層，５層水田土層図 …… 49 ～ 50
第36図　４ａ層水田足跡実測図 …… 51
第37図　２，３層出土遺物実測図 …… 51
第38図　ＳＤ 04 土層図 …… 51
第39図　ＳＤ 05 土層図 …… 52
第40図　ＳＫ 01,02 実測図 …… 52
第41図　ＳＫ 03 実測図 …… 53
第42図　ＳＫ 04 ～ 06 実測図 …… 53
第43図　２区遺構配置図 …… 55
第44図　２区土層図 …… 57 ～ 58
第45図　第Ⅰ・Ⅱ期水田土層図 …… 59
第46図　第Ⅱ期水田（耕作痕跡）実測図 …… 59

第47図　第Ⅰ期水田実測図 …… 60
第48図　第Ⅰ期水田水口実測図 …… 60
第49図　第Ⅰ期水田（耕作痕跡）
実測図 …… 61
第50図　第Ⅰ期水田出土遺物実測図 …… 62
第51図　ＳＤ01実測図 …… 62
第52図　ＳＤ01出土遺物実測図 …… 63
第53図　３区遺構配置図 …… 64
第54図　３区調査区内土層図 …… 65～66
第55図　ＳＤ01土層図 …… 67
第56図　ＳＤ02土層図 …… 67
第57図　ＳＤ03土層図 …… 67
第58図　ＳＸ01土層図 …… 68
第59図　３層出土遺物実測図 …… 69
第60図　ＳＤ04～08,10,
11土層図 …… 71
第61図　ＳＤ02,04,05
出土遺物実測図 …… 71
第62図　ＳＸ02実測図 …… 73
第63図　４区遺構配置図 …… 75
第64図　４区基本土層図 …… 76
第65図　ＳＤ01土層図 …… 77～78
第66図　ＳＤ01出土遺物実測図 …… 79
第67図　ＳＤ04土層図 …… 79
第68図　ＳＸ01実測図 …… 80
第69図　ＳＸ01出土遺物実測図 …… 80
第70図　ＳＤ03断面図 …… 81
第71図　ＳＤ02断面図 …… 81
第72図　ＳＤ05断面図 …… 82
第73図　４区近世土坑群実測図 …… 83
第74図　ＳＫ01,03,06,07
出土遺物実測図 …… 84
第75図　居石２号塚現況測量図 …… 87～88
第76図　居石２号塚東側墳丘
集石実測図 …… 89～90
第77図　東側墳丘第１主体部実測図 …… 91
第78図　東側墳丘第２主体部実測図 …… 92
第79図　西側墳丘出土
遺物実測図（１）…… 94
第80図　西側墳丘出土
遺物実測図（２）…… 95
第81図　東側墳丘出土遺物実測図 …… 96
第82図　東側墳丘第２主体部
出土鉄製品 …… 97
第83図　第２主体部出土鉄製品
想定模式図 …… 98
第84図　太田下・須川遺跡および蛙股
遺跡検出旧河道位置関係図 …… 99
第85図　高松市内の土器棺出土
遺跡分布図 …… 105
第86図　高松市内より
出土した土器棺 …… 106
第87図　土器棺の主軸方位 …… 110
第88図　土器棺の傾斜角度 …… 111
第89図　遺跡周辺の条里分布図 …… 115
第90図　２区遺構変遷図 …… 116
第91図　県内塚調査位置図 …… 119
第92図　塚と旧河道の位置関係 …… 123

挿　表　目　次

第１表　一般国道 11 号高松東道路埋蔵文化財調査事業調査遺跡一覧表 …… 1
第２表　整理作業工程表 …… 9
第３表　近世ピット計測一覧表 …… 74
第４表　高松市内の土器棺出土遺跡一覧表 …… 107 ～ 108
第５表　香川県内塚地名表 …… 120 ～ 121
第６表　塚分類表 …… 122

挿　写　真　目　次

写真１　３区遺構検出状況 …… 6
写真２　３区遺構掘削状況 …… 6
写真３　ＳＲ 01 出土杭 …… 47
写真４　ＳＤ 01 出土先端加工木 …… 63
写真５　ＳＸ 01 完掘状況 …… 68
写真６　ＳＤ 01 遺物出土状況 …… 76
写真７　第２主体部出土鉄製品 …… 98

付　図　目　次

付図１　蛙股遺跡１区遺構配置図
付図２　蛙股遺跡２区遺構配置図（１）
付図３　蛙股遺跡２区遺構配置図（２）
付図４　蛙股遺跡３区遺構配置図
付図５　蛙股遺跡４区遺構配置図

巻　頭　図　版

巻頭図版１－１　土器棺１完掘状況
　　－２　土器棺２完掘状況
巻頭図版２－１　第１期水田完掘状況
　　－２　居石２号塚集石検出状況

図　版　目　次

図版１－１　１区南壁土層堆積状況
－２　１区南壁土層堆積状況
－３　１区南壁土層堆積状況
図版２－１　１区ＳＲ01完掘状況
－２　ＳＲ01土器出土状況
図版３－１　１区ＳＤ01完掘状況
－２　１区ＳＤ02完掘状況
－３　１区ＳＤ03完掘状況
図版４－１　１区土器棺１検出状況
－２　１区土器棺１完掘状況
図版５－１　１区土器棺２検出状況
－２　１区土器棺２完掘状況
図版６－１　１区土器棺３完掘状況
－２　１区ＳＫ03完掘状況
図版７－１　１区ＳＫ04完掘状況
－２　４ａ層水田足跡検出状況
図版８－１　１区ＳＤ04,05完掘状況
－２　１区完掘状況（南東から）
図版９－１　２区３ａ層水田完掘状況
－２　２区３ａ層水田畦畔
図版10－１　２区３ｂ層畝状遺構検出状況
－２　２区３ｂ層畝状遺構完掘状況
図版11－１　２区３ｂ層畝状遺構完掘状況
－２　２区３層水口完掘状況
図版12－１　２区４ｂ層畝状遺構検出状況
－２　２区４ｂ層畝状遺構完掘状況
図版13－１　２区４ｂ層畝状遺構完掘状況
－２　２区ＳＤ01完掘状況
－３　２区ＳＤ01土層堆積状況
図版14－１　２区ＳＲ01完掘状況
－２　ＳＸ01完掘状況
図版15－１　２区完掘状況
図版15－２　発掘作業風景
図版16－１　３区西半完掘状況（北東から）
－２　３区東半完掘状況（西から）
図版17－１　３区西半南壁土層堆積状況
－２　３区東半南壁土層堆積状況
図版18－１　３区ＳＤ01,02完掘状況
－２　３区ＳＤ01土層堆積状況
－３　３区ＳＤ02土層堆積状況
－４　３区ＳＤ03土層堆積状況
図版19－１　ＳＤ08他完掘状況（西から）
－２　ＳＸ02完掘状況（北東から）
図版20－１　３区全景（西から）
－２　北東隅北壁土層堆積状況
図版21－１　調査区東壁土層堆積状況
－２　ＳＤ01完掘状況
図版22－１　ＳＤ01土層堆積状況
－２　ＳＸ01完掘状況（北から）
図版23－１　ＳＤ02,03完掘状況
－２　近世土坑群完掘状況（西から）
図版24－１　東側墳丘土層堆積状況
－２　東側墳丘土層堆積状況
図版25－１　東側墳丘土層堆積状況
－２　東側墳丘土層堆積状況
図版26－１　東側墳丘集石検出状況(北から)
－２　集石中遺物出土状況
図版27－１　第１主体部骨出土状況
－２　第２主体部骨出土状況
図版28－１　第２主体部鉄製品出土状況

－２　第２主体部完掘状況
図版29－１　土器棺１棺身
－２　土器棺１棺蓋
－３　土器棺２棺身
図版30　ＳＲ01　８～10層出土遺物（１）
図版31　ＳＲ01　８～10層出土遺物（２）
図版32　ＳＲ01　８～10層出土遺物（３）
図版33　ＳＲ01　6,7層出土遺物（１）
図版34　ＳＲ01　6,7層出土遺物（２）
図版35－１　ＳＲ01　6,7層出土遺物（３）
－２　ＳＲ01　６～10層出土石器
図版36　居石２号塚西側墳丘出土遺物
図版37　居石２号塚東側墳丘出土遺物

第１章

調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

昭和53年の一般国道11号高松東道路の都市計画決定にともない，香川県都市計画審議会は，昭和62年２月２日，路線周辺の計画的な市街化および都市基盤整備をすすめるとともに，民間事業の活性化を目的として香川中央都市計画事業太田第２土地区画整理事業の施行を決定した。事業は太田，木太，林，多肥の４地区にまたがる約360haにおよび，この範囲に含まれる高松東道路約1.7km分の用地も区画整理事業の換地処理によって確保されることとなったため，この区間の東道路用地については，高松市教育委員会が発掘調査を実施することで，昭和62年12月15日に四国地方建設局，香川県教育委員会，高松市の三者間で覚書が取り交わされた。

現地調査は平成元年夏の区画整理事業仮換地指定を受けて着手し，浴・長池および浴・松ノ木部分の試掘調査を実施して遺跡の範囲ならびに性格を確定した。そして平成元年度に浴・長池遺跡の発掘調査を実施した。

そして平成２年度以降は，前年度の試掘調査で遺跡の所在と範囲が確定している発掘調査と，新たに用地が確保された部分の試掘調査を平行して実施し，蛙股遺跡の調査を最後に平成４年９月末日をもって東道路予定地すべての発掘調査を終了した。

整理作業は，現地での発掘調査が進行している平成３年度後半から分類基礎整理に着手し，発掘調査が終了した平成４年10月から本格的な作業にかかった。そして平成５年３月に第１冊目として浴・長池遺跡の報告書を刊行し，昨年度までに，浴・松ノ木遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡の報告書の刊行を終了している。今年度は整理作業の最終年度にあたり，居石遺跡，蛙股遺跡の報告書の刊行をもって全ての事業が完了する。

遺跡名	調査期間	調査面積(m²)	主な遺構・時期	報告書刊行
浴・長池	元．８．15～２．３．20	7,757	竪穴住居，掘立柱建物，水田（弥生時代），水田（古代～中世）	Ｈ５．３(既刊)
浴・松ノ木	２．６．５～２．10．17	4,130	旧河道，溝，水田（弥生時代）	Ｈ６．３(既刊)
浴・長池Ⅱ	２．11．21～３．３．27 ３．７．29～３．９．30	7,420 440	竪穴住居，掘立柱建物，溝，水田(弥生時代)	Ｈ６．３(既刊)
井手東Ⅰ	３．４．16～３．９．18	4,170	溝，掘立柱建物，土壙(近世)，溝(弥生時代)	Ｈ７．３(既刊)
井手東Ⅱ	３．１．９～３．２．26 ３．５．２～３．６．５	2,202 200	溝（縄文～弥生時代），土坑（近世）	Ｈ７．３(既刊)
居石	３．６．15～４．２．７ ４．７．20～４．９．18	9,736 840	旧河道（縄文～古墳），溝（弥生時代），土坑，溝（近世）	Ｈ７．10 (刊行予定)
蛙股	３．12．12～４．３．27 ４．７．７～４．９．30	1,459 4,316	旧河道，壺棺，溝（弥生時代），畑，溝（古代），塚，溝（近世）	Ｈ７．10 (本報告書)
		42,670		

第１表　一般国道11号高松東道路埋蔵文化財調査事業調査遺跡一覧表

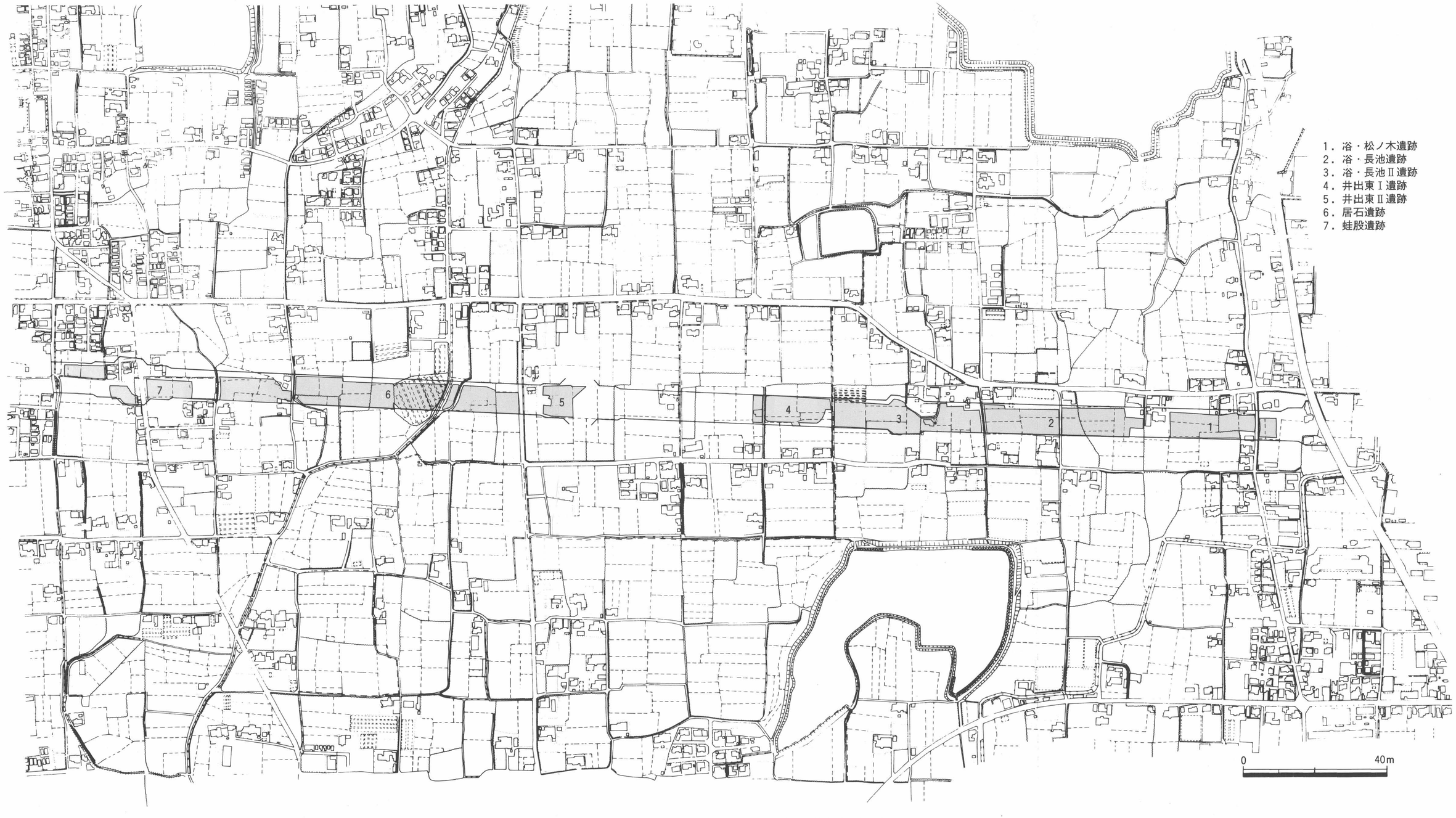
第２節　調査の経過

第１図　試掘トレンチ配置図

蛙股遺跡の試掘調査は，平成３年度の仮換地指定を受けて確保された13,500㎡について７～８月，11月の２次にわたって試掘調査を実施した。調査方法は，従来どおり宅地等で調査不能な部分を除く対象地ほぼ全域に，道路予定線両側に沿ってバックホーによるトレンチ掘削を行い，土層の確認を行った。周辺の地形の特徴から，調査対象地の東西に南北流する旧河道の存在が予想され，これらの間には比較的低位で起伏の変化にとむ微地形が想定された。これまでの遺物表採調査等でも須恵器・弥生土器・土師器等の散布が確認されており，平成元年度の㈶香川県埋蔵文化財調査センターによる太田下・須川遺跡の調査において甕棺等の分布が調査対象地東端部にもおよんでいることが確実で，高位においては集落・墓地等，低位では旧河道にともなう水田跡，河川廃棄後の遺物の投棄等の存在が想定された。

試掘調査の結果，県道中徳・三谷線の東側に設定した１～５Trでは，現地表下50～60㎝に黄色粘土の地山層が確認でき，これと現耕作土の間に近世，古代～中世と考えられる堆積層が挟まれている。古代～中世層の間には，溝，水田畦畔等の遺構が想定された。６～９Trにおいては現耕作土および床土直下に黄褐色～灰色の砂礫層がみられ，この上に溝（７，８Tr），ピット（８，９Tr）等の遺構を確認できた。一方県道中徳・三谷線の東側については，試掘調査に入る時点においても資材置場が機能しており，資材置場の進入路を確保しながらの試掘調査であった。多くの面積を占める資材置場については試掘調査にはいることができなかった。資材置場の北側と東側において設定した10,11Trでは南西から北東に流れる旧河道が確認できた。最深部で現地表下1.2ｍ，幅35～40ｍと推定され，埋土は黒色シルトが堆積しており，弥生時代後期の遺物が出土した。

以上のような試掘結果を受け，一部，平成３年度に本調査を実施した（３区）。調査期間は平成３年12月12日から平成４年３月27日にかけて工事請負方式により実施した。調査面積は



第２図　高松東道路路線内遺跡調査位置（高松市教育委員会調査分）

1,459㎡である。翌平成4年度には資材置場及び未退去家屋が残る部分は調査の対象から除外し，それ以外の部分について調査区を設定した1，2，4区の調査を工事請負方式により実施した。調査期間，面積はそれぞれ（1，2区）7月7日から9月30日調査面積1,374㎡，（4区）7月9日から9月30日調査面積2,942㎡である。上記の通り県道を挟み，調査予定地北側に未退去家屋が存在したり，同様に資材置場が機能していたり，調査が行えない箇所があり，また，3区の調査結果を受けて3，4区の間の部分を調査予定地から除外したことより，最終の総調査面積は5,775㎡で，当初の予定面積を大きく下回ることとなった。

発掘調査にかかる関係者は次のとおりであり，調査の詳細については，後の調査日誌抄を参照されたい。

発掘調査（平成3，4年度）

教育長	三木義夫（～H4．9）		
	山口寮弍（H4．10～）		
教育部長	多田　孜		
文化部長	増田昌三（～H4．9）	文化振興課（調査）	中西克也
	上里文麿（H4．10～）	非常勤嘱託	岡田信子
文化部次長	上里文麿（～H4．9）		玉田和子（～H4．2）
文化振興課長	多田恒男		金森澄子（～H4．2）
文化振興課	亀井　俊（～H4．3）		井口敬三（～H4．3）
課長補佐	藤田容三		宮内秀樹（～H4．3）
文化財係長	藤井雄三		松田重治（～H4．7）
文化財係主事	山本英之		
	川畑　聰		
	山元敏裕		
太田第2土地	小坂信夫		
区画整理事務所	山端　均		
	為定典生		

＜調査日誌抄＞

（３区）

Ｈ.４. １. ８　機械掘削（地山）

（一部上面精査，遺構確認）

21　上面精査

検出遺構平面実測（Ｓ＝１/100）

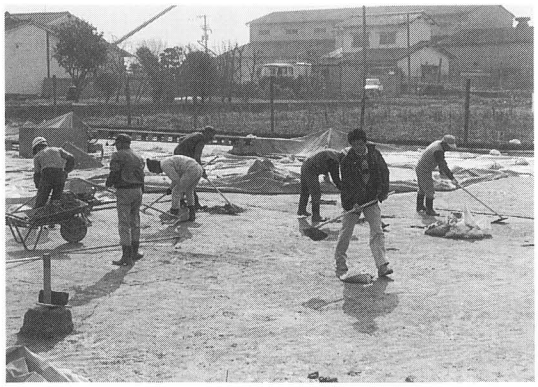


写真１　３区遺構検出状況

22　上面精査

床土直下褐灰色シルト（土壌層）除去中

24　褐灰色シルト（土壌層）除去中

溝状遺構掘り下げ中

31　現場状況不良のため，作業を中止する。

写真２　３区遺構掘削状況

2．6　溝状遺構，土層セクション写真撮影

東半部アカホヤ火山灰検出状況写真撮影

12　南側トレンチアカホヤ層上面まで掘り下げ中

西半南壁土層断面実測終了

17　東半部アカホヤ層除去ほぼ終了

自然地形の落ち込み完掘

東半部土層分層中

西・東・北壁分層終了

19　土層断面実測中

25　航空測量のための清掃

溝・土坑等土層チェック

27　航空測量，完掘状況写真撮影調査区内土層注記

ＳＸ02補足実測

28　アカホヤ火山灰分析用サンプル採集（２地点）

調査区北壁・西壁土層断面実測

（４区）

7．9　機械掘削（ルーズ）除去仮説道敷設

10　機械掘削（ルーズ）除去

15　居石２号塚　現況測量実測

17　機械掘削（地山）終了

18　調査区東端上面精査

27　東半部上面精査

居石２号塚　トレンチによる土層観察

28　居石２号塚　十字畦を残し墳丘

掘下げ　近世頃（18Ｃ後半頃）
の遺物を多く確認
調査区東半部　SD01掘り下げ中
29　北東隅低地部分（仮称ＳＤ01）
掘り下げ中
居石２号塚　第１層掘り下げ中
（コンテナ１箱分遺物出土）
8．3　居石２号塚　東側高まり墳丘掘り下げ（18Ｃ後半頃の陶磁器を確認－高まり基底部近くに集石が認められる。塚本体か？）
ＳＤ01第１層淡灰褐色シルト除去
4　台風接近のため，現場作業中止
6　居石２号塚　東側高まり畦部分を残して完掘（下部から集石確認）西側上面精査土坑等を確認
調査区北東部拡張（機械掘削）
7　居石２号塚　墳丘土層断面図作成（西・東側高まりとも）
調査区西側上面精査
17　居石２号塚　墳丘除去
居石２号塚　東側高まり下部集石精査居石２号塚　東側高まり下部集石検出状況写真撮影
19　居石２号塚　東側高まり集石実測用割付け　居石２号塚　東側高まり集石実測中
20　SD01褐灰色砂質土除去中　近世土坑群掘り下げ中　居石２号塚東側高まり集石平面実測終了
21　ＳＤ01灰褐色粘性シルト掘り下げ中
居石２号塚東側高まり集石遺構解体中
24　居石２号塚　集石遺構除去終了
居石２号塚　集石遺構下部骨出土状況写真撮影
居石２号塚集　石遺構下部トレンチ掘り下げ
ＳＤ01黒色シルト除去中
26　居石２号塚　集石遺構下部第２主体部精査中　SD01掘り下げ中
27　居石２号塚　集石遺構下部第２主体部検出状況図作成（S＝1/10）SD01灰褐色シルト（第１層）・黒褐色シルト（第２層）除去終了
近世土坑群掘り下げ終了
28　ＳＤ01-１・２完掘終了
居石２号塚　集石遺構下部人骨取り上げ　集石遺構下部墓坑完掘状況写真撮影　集石遺構下部基盤層除去終了
9．1　北壁土層分層中
ＳＤ01―１・２中央セクション土層　写真撮影
居石２号塚　東側高まり十字畦土層写真撮影　ＳＤ02完掘
調査区北端上面精査
居石２号塚土層断面図（S=1/20）
（１．２区）
H.4.7.7　機械掘削（地山）－廃材除去中
１区機械掘削（地山）除去

上面精査
２区現況測量
機械掘削（ルーズ）除去開始
15　側溝完掘・土層分層
調査区中央において大畦畔検出
16　第１期水田写真撮影・平面実測図終了
非土壌層（洪水砂層）上において，第１期水田制作時のものと思われる畝痕を確認
20　畝痕検出終了・写真撮影
小畦畔上の水口の立面図・平面図を作成
22　畝間溝完掘・写真撮影
下層水田（土壌層）検出中
23　第Ⅱ期水田・畝上面検出・写真撮影畝間の溝掘削
27　第Ⅱ期水田の平面図終了
第Ⅱ期水田の土壌層掘削
ＳＤ01掘削底面より加工木・土器（土師器・須恵器）出土
28　ＳＤ01遺物出土状況写真撮影・平面実測図作成　木製品の取り上げ
ＳＸ01・ＳＸ02掘削
29　午前中空測の準備　11：50より空測
ローリングタワー建設・写真撮影
30　深掘り開始。土層分層
8．3　調査区西壁・北壁土層図作成深掘り
4　台風のため，作業中止
5　南壁土層図終了
ベルトコンベヤーの移動
6　１区　北壁・東壁土層図作成
２区　北側側溝掘削
7　１区　深掘り部南壁分層写真撮影土層図作成。　２区　北側側溝掘削
17　東側側溝掘削。黒灰色土上面検出。
18　台風による雨のため，室内作業
20　近世水田層掘削
下層黒灰色土直上まで掘り下げ
21　黒灰色土直上まで掘り下げる畦畔状の高まり数カ所検出
28　黒灰色土直上まで掘り下げる
ＳＫ01，02検出，掘削
土層図作成。完掘。平面図作成。
9．1　黒灰色土直上までの掘り下げ終了近世の土坑（ＳＫ03・04・05・06）検出　西側に溝２本（近世）を検出
2　旧河道西肩の検出，掘削
土器棺２を検出，写真撮影
4　土器棺２の検出状況，平面図・断面図終了完掘・写真撮影後，取り上げ。黒灰色土を掘り下げ。
10　ＳＤ01完掘，平面図の作成
写真撮影
黒灰色土を掘り下げる
東側白色粘土上で多数の土器出土

南側側溝掘り下げ。土器やや多く出土

11　黒灰色土・黒色土を掘り下げる
東側微高地部の掘り下げ
肩部に溝を検出
土器出土状況平面図・写真撮影終了後，取り上げＳＤ01の東側に小石５個を集中して検出

12　黒灰色土・黒色土を掘り下げる
灰色土を掘り下げる
底面近くで土器が多数出土　完形に近い土器８点の実測，写真撮影

16　黒色土を掘り下げる。土器，石器が出土　東側のＳＤ03を検出・完掘

17　黒色土の掘り下げ終了
ＳＤ01の下にＳＤ02を検出，完掘調査区東半分の清掃を終了

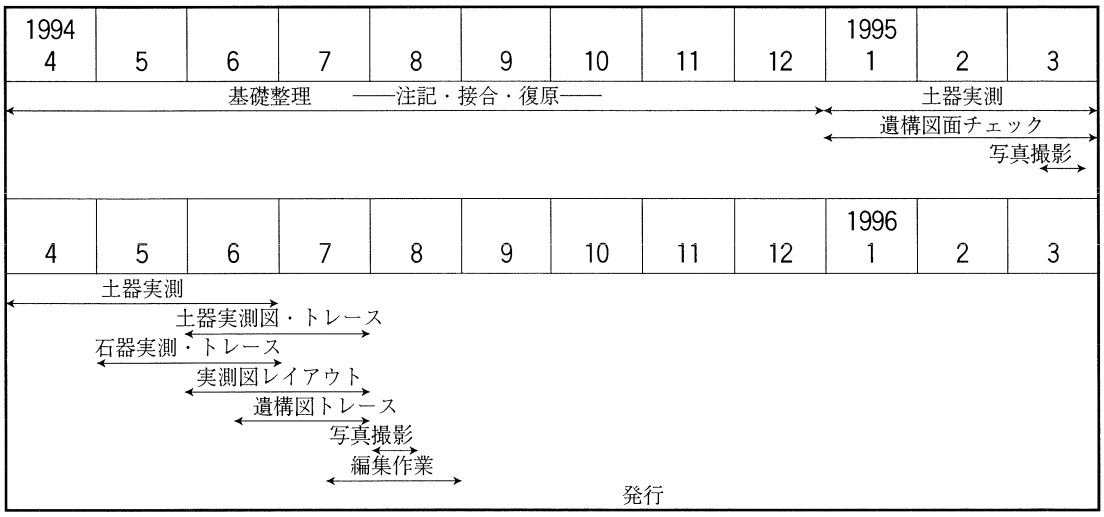
22　ＰＭ　12：00空測

28　調査区の東壁・南壁の土層図を作成　東壁実測終了

30　調査区の東壁の土層図を作成
土壌サンプリングを行う
土壌サンプル採集
１，２区のすべての調査を終了

第３節　整理作業の経過

蛙股遺跡の整理作業は平成６年度および７年度前半に居石遺跡の整理作業と並行して行った。整理作業は調査担当者を中心に整理作業を行い，下記の非常勤嘱託（整理補助員）の協力を得て行ったが，平成７年度は従来の整理補助員６名から１名増員し，計７名で整理作業を行い，作業の能率化を図った。整理作業の経過については第２表に示したとおりである。



第２表　整理作業工程表

なお，報告書作成時における整理作業の関係者は以下のとおりである。

（平成６，７年度）

教育長	山口　寮弍
文化部長	宮内　秀起
文化部次長	中村　榮治
（文化振興課長事務取扱）	
文化振興課長補佐	藤田　容三
文化財係長	藤井　雄三
文化財係主任主事	山本　英之
主事	山元　敏裕
主事	国方　菜緒子
事務員	大嶋　和則（Ｈ７．５～）
文化振興課非常勤嘱託	岡田　信子（～Ｈ７．３）
	竹林　弘子
	井口夫美子
	大川　玲子
	吉本みどり
	出石真理子
	山中　規子（Ｈ６．５～）
	上原　洋子（Ｈ７．５～）

第 2 章

地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

第３図　調査位置図

高松市は，四国の北東部，香川県のほぼ中央部に位置する。中央省庁の出先や大手企業の地方支店が多く立地し，四国の中枢管理機能を担う地方都市として33万人余の人口が集中している。

瀬戸内海沿岸に東西に連なる香川県の平野部は，一般に讃岐平野として総称されるが，実際は東から長尾平野，高松平野，丸亀平野，三豊平野といった地域単位の小平野に細分でき，いずれも南部の阿讃山脈に源を発する中小河川によって形成された沖積地である。このうち高松平野は，北を瀬戸内海，東を立石山系，南を阿讃山脈，西を五色台山塊に限られた総面積約19km^2，丸亀平野に続く規模をもち，大部分が高松市の行政区域に含まれる。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島，紫雲山等の島状の独立丘陵は，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成された，メサ，またはビュートと呼ばれるもので，讃岐ののどかな田園風景の象徴のひとつとなっている。

高松平野には，西から本津川，香東川，御坊川，春日川，新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流しているが，平野形成の大部分は塩江町に源を発する香東川に負っている。ただ春日川以東の部分のみが春日川，新川といった小河川の影響下になるものの扇状地の発達は見られない。

現在，石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は，17世紀はじめの河川改修によるもので，それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで，平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっている。そのほかにも，空中写真等から，林から木太地区にかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお，17世紀の廃川直前の流路は，御坊川として今でもその名残をとどめている。

大池等のため池は，年間1000㎜前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが，林，多肥地区周辺では扇状地末端部にあたることから，ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が古代から盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。これらの水源毎の受益範囲（水掛）は，近世以降の三条池，野田池等，微高地上に四周に堤防を巡らせ堤防の全部または一部が条里の阡陌に沿った皿池や，山麓部の三谷三郎池，神内池といった大規模なため池が整備されても大きな変化なく踏襲されてきたとされる。しかし，昭和50年の香川用水の通水によって，この一帯は三谷三郎池の受益範囲に取り込まれ，農業用水確保の不安が払拭された反面，大池，長池等のため池が三谷三郎池の子池となり，地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに，ため池や出水もその役割を失いつつある。

今回高松東道路の横断によって一連の調査を実施した太田，林地区は，地形的には扇状地の末端部にあたり，香東川の本流に接するとともにまさにこの“出水”に古くから農業と生活の多くを依存してきた地域であるといえる。

現在，東道路建設（平成5年開通）をはじめとする区画整理事業，空港跡地開発等に伴う大規模発掘調査によって，弥生時代から井戸，出水の確認例が頻繁で，水田も弥生時代前期から大規模に開発されていたことが明らかになりつつある。

参考文献

『讃岐国弘福寺領の調査』　高松市教育委員会　1992

『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊　浴・長池遺跡』高松市教育委員会　1993

『同　上　第二冊　浴・松ノ木遺跡』　高松市教育委員会　1994

『同　上　第三冊　浴・長池Ⅱ遺跡』　高松市教育委員会　1994

第2節　歴史的環境

蛙股遺跡が所在する太田，林地区周辺では，ここ10年足らずのうちに東道路建設他道路建設，旧高松空港跡地再開発，県立高松桜井高校建設等，開発ラッシュによって多くの遺跡が発掘されつつあり，その数は日を追って増加しているといえる状況にある。特に，国道11号高松東道路上天神－前田東間の8kmにわたる調査によって高松平野中央部に東西のトレンチを入り，一方，南北方向は都市計画道路福岡－多肥上町線，都市計画道路朝日町仏生山線等の予定地内の調査により南北のトレンチが入った。すなわち，高松平野に十字のトレンチが入ったことになり，従来不明であった高松平野の遺跡の状況がわかりつつある。これらの発掘調査の成果については，いくつかの報告書が公にされているが，これらの調査された遺跡の多くは，現在正式報告の刊行に向けて作業が進行中であるため，ここでは現段階で明らかとなっている調査成果を中心として本遺跡周辺（太田，林地区）の遺跡の分布を概観する。

旧石器時代に属する遺跡は太田，林近辺では現在のところ確認されていない。周辺では，東山崎町の久米池南遺跡（東山崎町）(1)，諏訪神社遺跡（東山崎町）(2)，雨山南遺跡（三谷町）(3)等でナイフ形石器が確認されている。これらの遺物は明確な遺構からの出土ではなく，前者2遺跡は，他の時期の遺構の混入遺物としての出土であり，後者は採集品である。

続く縄文時代では，大池遺跡（木太町）(4)で草創期の有舌尖頭器2点の採集が報告されている。また，地形環境の方面では井手東Ⅰ遺跡（伏石町）(5)，蛙股遺跡(6)で現地表下約40～70cmにアカホヤ火山灰の自然堆積層が確認されており，縄文中期の平野の形成課程をうかがうことができる。

縄文時代晩期では，林・坊城遺跡（六条町）(7)，浴（さこ）・松ノ木遺跡（林町）(8)，浴・長池遺跡（林町）(9)，浴・長池Ⅱ遺跡（林町）(10)，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡（伏石町）(11)，居石遺跡（伏石町）(12)，上天神遺跡（上天神町，三条町）(13)が確認されている。これらのうち，晩期でも前半に属する居石遺跡と井手東Ⅰ遺跡，上天神遺跡以外は，旧河道中に弥生前期初頭の土器と混在して出土し，両時期が密接に連携していることが改めてわかる。また，林・坊城遺跡では多量の土器とともに当時の農耕具が出土し，稲作導入期の当地域の状況の一端を知ることができた。

弥生時代前期になると，縄文晩期から連続する前述の遺跡に加えて中頃の天満・宮西遺跡（松縄町）(14)，前期末の空港跡地遺跡（林町）(15)，大池遺跡（木太町），松縄下所遺跡（松縄町）(16)等が新たに出現する。中でも浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から自然堤防上および後背湿地に，前期末以前と考えられる整った小区画の水田が営まれており，早い時期から稲作文化が受け入れられていたことが知られるほか，前述の天満・宮西遺跡では竪穴住居

等の直接の検出はできていないが，数棟の円形住居を囲む直径約300ｍと推定される周溝が検出されている。

続く弥生中期前半では，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，新たに出現する井手東Ⅰ遺跡，凹原遺跡（多肥下町）[17]，多肥松林遺跡[18]，日暮・松林遺跡[19]がみられる。このうち，浴・長池遺跡では４棟の竪穴住居，６棟の掘立柱建物跡，２基の周溝墓状遺構に加えて大量の河川投棄土器群が出土し，凹原遺跡でも石器製作工房と推定できる竪穴住居１棟を確認する。最近の調査例によれば多肥松林遺跡，日暮・松林遺跡において10数棟のまとまった住居跡と河川廃棄の遺物群が検出されている。

中期後半も中期前半と変わらぬ遺跡数である。この時期新たに丘陵部の遺跡が多く確認されている。周辺丘陵部では前田東・中村遺跡（前田東町）[20]，久米池南遺跡，中山田遺跡（池田町）[21]等があるが，平野部では浴・長池遺跡，上天神遺跡，空港跡地遺跡，多肥松林遺跡，日暮・松林遺跡が確認されている。これらの遺跡における立地の違いが何に起因するものなのか，個々の遺跡の詳細な検討が必要であろう。

弥生時代後期においては，後期前半は前時期と同様，遺跡の状況に変わりはなく，ある程度の状況がわかる遺跡は，上天神遺跡，太田下・須川遺跡（太田下町）[22]，のような10数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落が確認されている。資料が少ない現在の状況で高松平野において後期前半の集落は，上天神遺跡を中心とする地域と，大空遺跡（高松町），小山・南谷遺跡（高松町）を中心とする高松平野東部山間部の地域に分かれるようである。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭になると，同時期の遺跡は各地に営まれ，そのほかにも平野部山間部を問わずに遺跡数が一気に増加する傾向である。前述の遺跡の他に，平野部では，蛙股遺跡（伏石町・太田下町），居石遺跡，井手東Ⅰ遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，浴・松ノ木遺跡，林・坊城遺跡，六条上所遺跡（六条町）[23]，松縄下所遺跡，キモンドー遺跡（伏石町）[24]，一角遺跡[25]，空港跡地遺跡，多肥松林遺跡，日暮・松林遺跡等が知られている。このうち集落構造がある程度わかるのは空港跡地遺跡，凹原遺跡，天満宮西遺跡のみで，他の遺跡については不明な点が多い。

古墳時代の遺跡の状況は，弥生時代後期末から続く集落は古墳時代前期でも早い段階で消滅してしまい，それ以降継続するものは確認されていない。中期末から後期初頭については，集落遺跡では太田下・須川遺跡，空港跡地遺跡，水田遺跡では浴・松ノ木遺跡，居石遺跡が知られるのみである。その一方で古墳は，発生期と考えられる諏訪神社本殿古墳（東山崎町）[23]，鶴尾神社４号墳（西春日町）[26]をはじめとして平野周辺の丘陵上に，古墳時代の全期間にわたって継続的に展開しており，今後これらに対応する集落の確認が課題となる。古墳の中で，平野部に独立して立地するものに木太町の白山神社古墳[27]がある。竪穴式石室を主体部とする円墳で，

第４図　遺跡分布図（１：50,000）

5世紀前半頃の築造と推定されている。古墳の標高約2mを測り，これまで当時の海岸線と推定されている標高5mラインよりも低位にあるため，古墳時代の高松平野の地形環境に再考を促すという面でも注目される遺跡である。

古代では，条里遺構と古代寺院跡が注目される。

高松平野の条里分布は，平野南縁部を東西に貫く南海道とこれに直交する山田・香川両郡の直線郡界線を基準に敷設されたことが知られている。これらは，最近までは用水路，里道，水田区画によっても容易に復原できたが，今日急速にその姿を失いつつある。

その一方で条里遺構の確認例は増加し，浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，井手東Ⅰ遺跡，蛙股遺跡，上天神遺跡，凹原遺跡等で条里坪界線にあたると思われる遺構を検出している。同様に浴・長池Ⅱ遺跡では，山田・香川の郡界線にあたる部分に約6mの間隔を置いて平行する2本の溝状遺構を検出しているほか，松縄下所遺跡では南北200mにわたって貫通する道路状遺構と3ヶ所の交差点が条里区画に重なることが明らかになった。これらの成果には，弘福寺領讃岐国山田郡田図をはじめ弘福寺関係文書等の文献方面からの研究に負うところが大きいが[28]，埋蔵文化財の立場でも条里に関する遺跡が調査の対象として定着してきた結果である。これら条里遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み，一般に条里の施工期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔たりがあるが，蛙股遺跡，松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土をみた遺跡もあり，条里地割の施工時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。

古代寺院跡では宝寿寺跡（前田廃寺－前田東町）[29]，山下廃寺（新田町）[30]，下司廃寺（東植田町）[31]，高野廃寺（川島本町）[32]，拝師廃寺（上林町）[33]，坂田廃寺（西春日町）[34]，多肥廃寺（多肥上町）[35]，勝賀廃寺（香西西町）[36]等が平野部を中心に知られている。正式の発掘調査を経たデータがないため，寺域，伽藍等の全容がわかるものはないが，現在でも礎石や遺物の散布が見られる。なかでも下司廃寺の川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦や三尊像塼仏片，坂田廃寺の金銅製釈迦誕生仏が注目され，山田郡弘福寺領の存在とも合わせて白鳳時代から奈良・平安時代に中央政府と深い関係を持っていたことが想像できる。

中近世以降では，東道路関連の浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地（木太町・林町）等で，旧河道の埋没後の凹地に中世の小規模な区画の水田層が出土しており，その後現代に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから，この時期に現在の地形環境がほぼ形造られていたことがうかがえる。また東山崎・水田遺跡（東山崎町）[37]では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡や耕土層が発掘され豊富な木製品が発見されているほか，空港跡地遺跡では，中世前半と後半の2時期に分かれる屋敷地を区画する溝および掘立柱建物も確認されており，当該期の集落のあり方が次第に判明しつつある。また，現高松市美術館の紺屋町遺跡（紺屋町）[38]でも近世の陶磁器や木簡（荷札木片）が出土し，玉

藻町香川県県民ホールの高松城東ノ丸跡（玉藻町）[39]でも寛永年間の東ノ丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し，往時の城および城下町の一端をうかがうことができる。

遺跡分布図地名表

1　鶴尾神社４号墳
2　坂田廃寺
3　高松城東ノ丸跡
4　紺屋町遺跡
5　天満・宮西遺跡
6　白山神社古墳
7　松縄下所遺跡
8　キモンドー遺跡
9　大池遺跡
10　弘福寺領関係遺跡発掘地点北地区
11　弘福寺領関係遺跡発掘地点南地区
12　上天神遺跡
13　太田下・須川遺跡
14　蛙股遺跡
15　居石遺跡
16　井手東Ⅱ遺跡
17　井手東Ⅰ遺跡
18　浴・長池Ⅱ遺跡
19　浴・長池遺跡
20　浴・松ノ木遺跡
21　林・坊城遺跡
22　六条・上所遺跡
23　東山崎・水田遺跡
24　凹原遺跡
25　空港跡地遺跡
26　一角遺跡
27　拝師廃寺
28　多肥廃寺
29　高野廃寺
30　山下廃寺
31　諏訪神社本殿古墳
32　久米池南遺跡
33　宝寿寺跡（前田廃寺）
34　前田東・中村遺跡
35　雨山南遺跡

参考文献

（1）『久米池南遺跡発掘調査報告書』　高松市教育委員会　1989
（2）『香川県埋蔵文化財調査年報』　平成２年度　香川県教育委員会　1991
（3）藤井雄三『高松市雨山南遺跡発見の国府型ナイフ形石器』『香川考古』　創刊号　香川考古刊行会　1983
（4）浜田重人『高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器』『香川考古』　第２号　香川考古刊行会　1994
（5）『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第四冊　井手東Ⅰ遺跡』　高松市教育委員会　1995
（6）『香川県埋蔵文化財調査年報』　平成４年度　香川県教育委員会　1993
（7）『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二冊　林・坊城遺跡』　香川県教育委員会他　1993
（8）『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第二冊　浴・松ノ木遺跡』　高松市教育委員会　1994

(9)『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　谷・長池遺跡』　高松市教育委員会　1993
(10)『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第三冊　谷・長池Ⅱ遺跡』　高松市教育委員会　1994
(11)『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第五冊　井手東Ⅱ遺跡』　高松市教育委員会　1995
(12)山元敏裕『讃岐国弘福寺領の調査』　第2章第3節　高松市教育委員会　1992
(13)『香川県埋蔵文化財調査年報』　昭和59年度～昭和62年度　香川県教育委員会　1988
(14)『香川県埋蔵文化財調査年報』　平成元年度　香川県教育委員会　1990
川畑　聰『讃岐国弘福寺領の調査』　第2章第3節　高松市教育委員会　1992
(15)『空港跡地遺跡発掘調査概報』　平成3年度　香川県教育委員会他　1992
『空港跡地遺跡発掘調査概報』　平成4年度　香川県教育委員会他　1993
『空港跡地遺跡発掘調査概報』　平成5年度　香川県教育委員会他　1994
『空港跡地遺跡発掘調査概報』　平成6年度　香川県教育委員会他　1995
(16)山本英之『讃岐国弘福寺領の調査』　第2章第3節　高松市教育委員会　1992
(17)『香川県埋蔵文化財調査年報』　平成2年度　香川県教育委員会　1991
川畑　聰『讃岐国弘福寺領の調査』　第2章第3節　高松市教育委員会　1992
(18)『多肥松林遺跡発掘調査概報』　平成5年度　香川県教育委員会　1994
『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　多肥松林遺跡　鹿伏・中所遺跡』　平成6年度　香川県教育委員会　1995
『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　多肥松林遺跡』　平成6年度　香川県教育委員会　1995
(19)『香川県埋蔵文化財調査年報』　平成5年度　香川県教育委員会　1994
(20)『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三冊　前田東・中村遺跡』　香川県教育委員会他　1995
(21)『新編香川叢書　考古編』　香川県教育委員会　昭和58年
(22)『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第四冊　太田下・須川遺跡』　香川県教育委員会他　1995
(23)『香川県埋蔵文化財調査年報』　昭和63年度　香川県教育委員会　1988
(24)『香川県埋蔵文化財調査年報』　平成5年度　香川県教育委員会　1994
(25)『香川県埋蔵文化財調査年報』　平成5年度　香川県教育委員会　1994
(26)『鶴尾神社4号墳調査報告書』　高松市教育委員会　1983

(27) 『三谷石船古墳測量調査報告書』　高松工芸高校郷土史研究会　1992
『高松の古代文化』　高松市立図書館　昭和63年
山本英之『白山神社古墳』『香川考古』　第3号　香川考古刊行会　1995
(28) 『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報』Ⅰ～Ⅳ　高松市教育委員会　1988～1990・1992
『讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～』　高松市教育委員会　1992
(29) 木田郡史編纂部『木田郡誌』　木田郡教育部会　1940
『高松の古代文化』　高松市立図書館　昭和63年
(30) 『古高松郷土史』　古高松郷土誌編集委員会　1977
安藤文良『讃岐古瓦図録』『文化財協会報』　特別号8　香川県文化財保護協会　昭和42年
(31) 『新編香川叢書　考古編』　香川県教育委員会　昭和58年
大平要『下司廃寺出土の塼仏片について』『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』　創刊号　1975
(32) 安藤文良『讃岐古瓦図録』『文化財協会報』　特別号8　香川県文化財保護協会　昭和42年
『高松の古代文化』　高松市立図書館　昭和63年
(33) 『高松の古代文化』　高松市立図書館　昭和63年
(34) 『復刻版史跡名勝天然記念物調査報告（上巻）』　香川県文化財保護協会　昭和50年
『新編香川叢書　考古編』　香川県教育委員会　昭和58年
(35) 『多肥郷土史後編』　多肥郷土史編集委員会　1981
『高松の古代文化』　高松市立図書館　昭和63年
(36) 『高松の古代文化』　高松市立図書館　昭和63年
(37) 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第1冊　東山崎・水田遺跡』　香川県教育委員会他　1992
(38) 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』　香川県教育委員会　1987
『1988年出土の木簡香川・紺屋町遺跡』『木簡研究』　第11号　木簡学会　1989
(39) 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』　香川県教育委員会　1987

第３章

調査の成果

第１節　調査区の設定

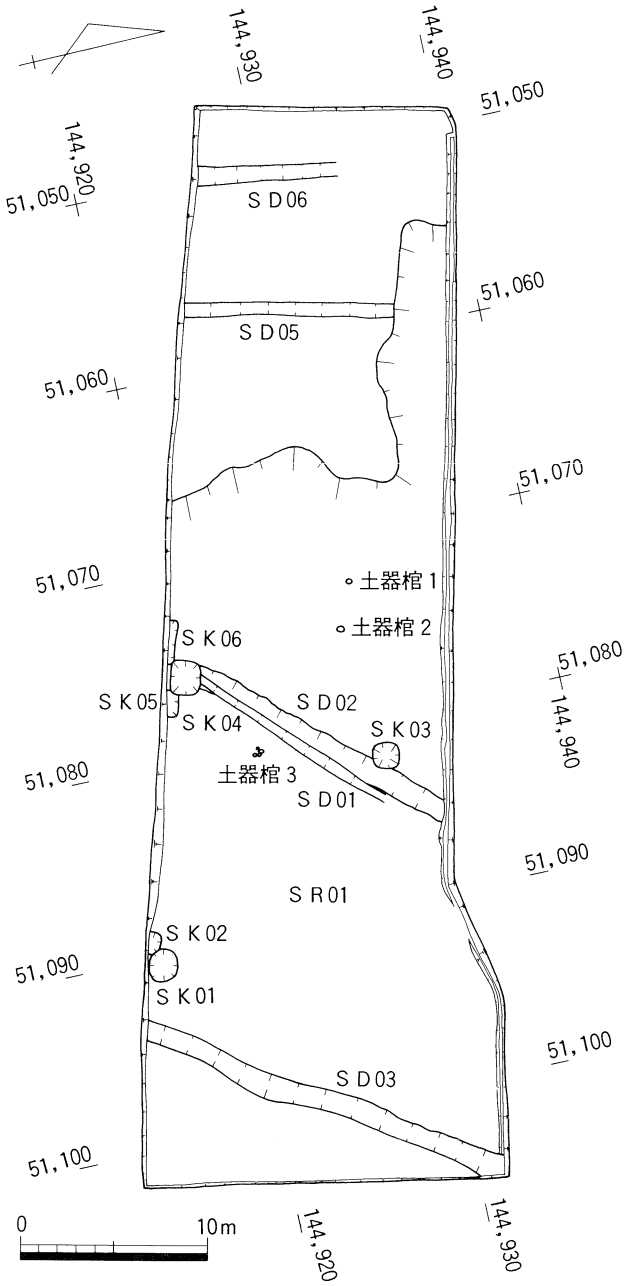
調査対象地は一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査において，高松市教育委員会が担当した範囲の西端部に位置する。調査区の設定にあたっては，平成３年７，８，11月に実施した試掘調査と東側に隣接する居石遺跡の調査結果を参考にして調査区を決定した。調査対象地のほぼ中央を南北に延びる県道中徳・三谷・高松線（158号線）より西側に100ｍ，東側に200ｍ，合わせて東西約300ｍ，南北約40ｍの範囲を調査地に設定し，発掘調査を実施した。

第５図　蛙股遺跡調査区設定図

調査区は道路・用水路・宅地等によって寸断されているため，西側から１～４区と呼称し，調査を行った。１区は県道158号線より西側において幅員のセンターを走る用水路より北側であり，東西約52ｍ，南北約15ｍを測る。１区の東側は宅地があるため調査は不可能であった。２区の西側は建設会社の廃材置き場であり，攪乱を受けていたため調査区から除いた。３区は県道158号線の東側60ｍの範囲であり，北側に宅地があるために幅は狭くなっている。４区は３区の東側であり，東西の長さは100ｍである。３区と４区の間の40ｍに関しては試掘調査の結果および３区の調査から削平を受けて遺構は確認されなかったので調査区外とする。各区の面積は，１区851㎡，２区523㎡，３区1,459㎡，４区2,942㎡であり，総面積は5775㎡である。

実際の調査は，調査範囲が分かれており，県道東側の３区だけが平成３年12月～３月にかけて調査が実施された。１区，２区，４区にかけては平成４年６月～９月にかけて調査が行われた。

第６図　蛙股遺跡周辺微地形図



第7図　1区遺構配置図

第2節　1区の調査

1　概　　要（第7図）

1区の全長は，東西57.4m，南北15.4mである。ただし，東端より13mまでは南北が4.5m長くなっている。調査以前はほぼ水平な水田であった。

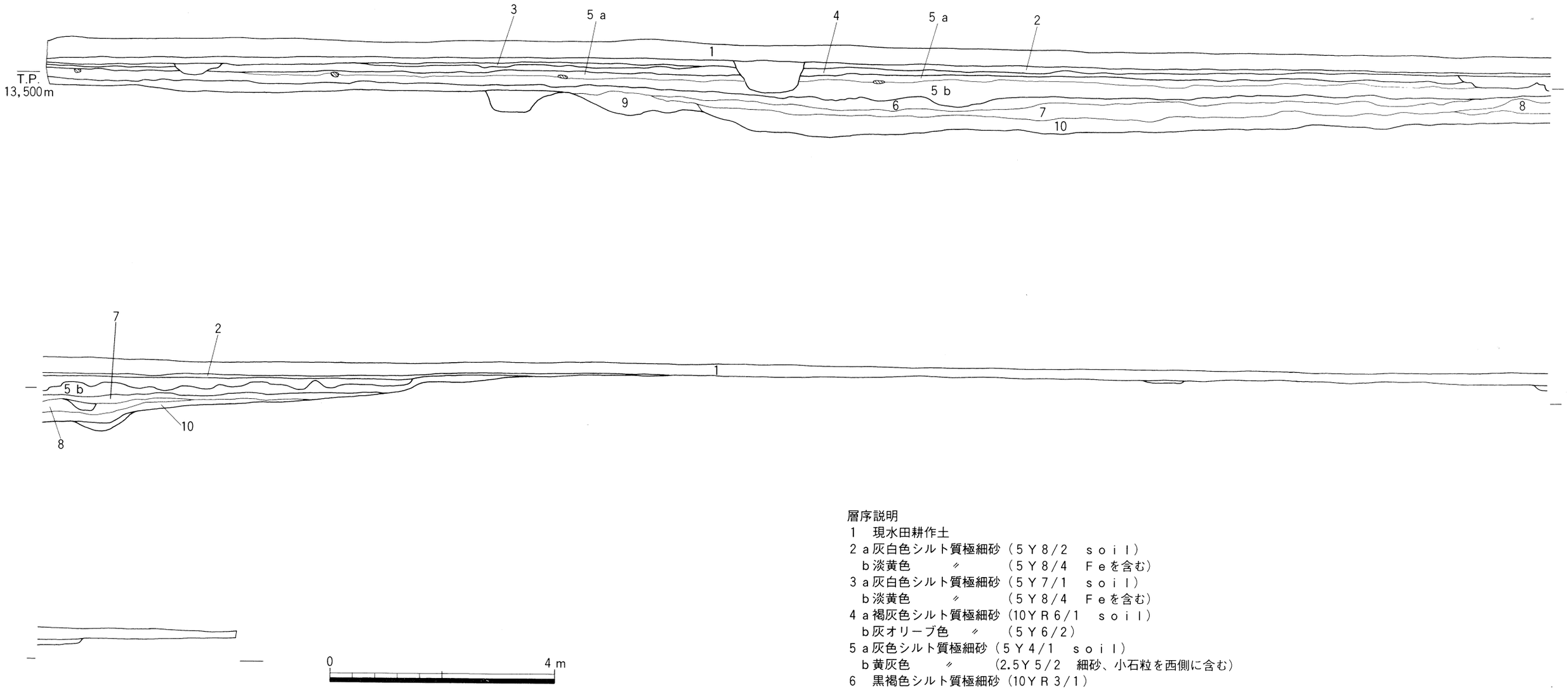
検出した遺構は溝，土坑，土器棺，旧河道であり，その時期は近世・古代・弥生時代の3期に分かれている。近世の遺構は調査区全域に散在している。古代の遺構は，調査区東半において水田が検出され，その上面に偶蹄類の足跡が残存していた。水田の区画は不明である。弥生時代の溝は東半部において南北に延び，土器棺は旧河道の西岸の緩傾斜面より検出された。旧河道は調査区中央東寄りに最深部があり，西岸は砂礫層となっている。弥生時代の旧地形は，西端に微高地があり，その東側は旧河道が南北方向に流れていた。

2　基本土層（第8図）

旧河道より以西では現水田耕作土の直下が砂礫層であり，土層の堆積は見られなかった。旧河道の凹地には厚く堆積が見られ，それらは10層に細分される。その詳細に関しては3.弥生時代の遺構と遺物において記述することとし，ここではその概略のみとする。土層はⅠ～Ⅴに大別される。

Ⅰ層－現水田耕作土の1層であり，全域に見られる。

Ⅱ層－2層と3層であり，それぞれ灰白色シルト質極細砂のa層と，淡黄色シルト質極細砂のb層に分かれ，a層は水田土壌層であると考えられる。2層は旧河道埋没後の凹地



層序説明

1　現水田耕作土
2 a 灰白色シルト質極細砂（５Ｙ８/２　ｓｏｉｌ）
　b 淡黄色　　〃　　（５Ｙ８/４　Ｆｅを含む）
3 a 灰白色シルト質極細砂（５Ｙ７/１　ｓｏｉｌ）
　b 淡黄色　　〃　　（５Ｙ８/４　Ｆｅを含む）
4 a 褐灰色シルト質極細砂（10ＹＲ６/１　ｓｏｉｌ）
　b 灰オリーブ色　〃　（５Ｙ６/２）
5 a 灰色シルト質極細砂（５Ｙ４/１　ｓｏｉｌ）
　b 黄灰色　　〃　　（2.5Ｙ５/２　細砂、小石粒を西側に含む）
6　黒褐色シルト質極細砂（10ＹＲ３/１）
7　黒褐色シルト質極細砂（2.5Ｙ３/１　粘性なく、植物遺体を含む）
8　黒褐色シルト質極細砂（10ＹＲ２/１　細砂を含む）
9　灰色シルト質極細砂＋灰白色シルト（５Ｙ５/１）
10　灰色シルト質極細砂（５Ｙ５/１　植物遺体を多く含む）

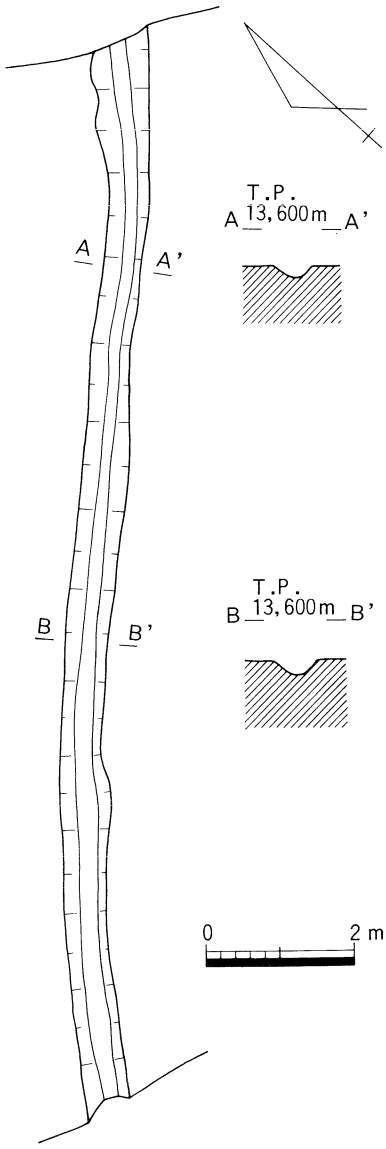
第８図　１区南壁土層図

全域に，３層は東部のみに堆積している。近世の条里型水田である。

Ⅲ層－褐灰色シルト質極細砂の４ａ層と灰オリーブ色シルト質極細砂の４ｂ層である。水田層であり，旧河道埋没後の凹地全域に見られる。

Ⅳ層－灰色シルト質極細砂の５ａ層，黄灰色シルト質極細砂の５ｂ・ｂ’層，細～中砂の５ｃ層である。ａ層は水田土壌層であり，凹地全域に厚く堆積している。

Ⅴ層－旧河道最深部に堆積している６～10層である。



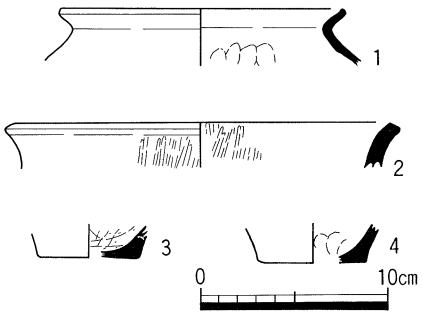
第９図　ＳＤ01実測図

ＳＤ01　（第９図）

調査区のほぼ中央部において黄灰色シルト質極細砂の５b層上面から掘り込まれているのが検出された。検出された全長は14.4ｍ，幅は0.6ｍを測り，深さは0.2ｍである。方向は南西－北東である。埋土は黒色シルト質極細砂であり，植物遺体を若干含む。断面は浅いＵ字形を呈する。底面は北側になるにしたがい少し高くなっている。

ＳＤ01　出土遺物（第10図）

１は甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁端部は上方向につまみ上げる。２は高坏の口縁部である。口縁端部はカットし，面をもつ。調整は内外面とも縦方向のヘラミガキを施す。口縁部外面には赤色顔料を塗布する。３，４ははいずれも甕の底部である。底部は平底で，内面にヘラケズリが認められる。

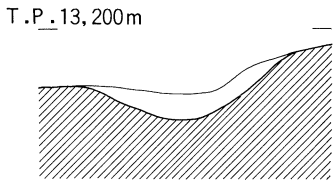


第10図　ＳＤ01出土遺物実測図

ＳＤ02　（第11図）

調査区のほぼ中央，ＳＤ01とほぼ同位置において検出された溝である。全長は16.8ｍ，幅1.1～1.3ｍを測り，その深さは0.4～0.74ｍである。方向は南西－北東であり，

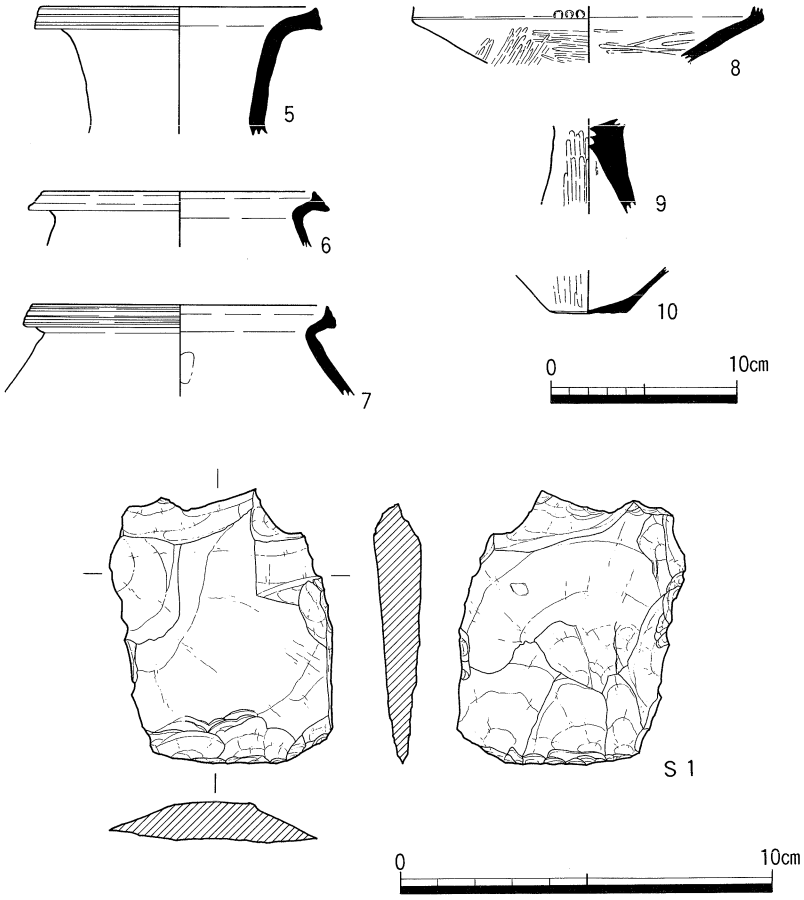
断面は緩やかな傾斜のU字形を呈する。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。底面は北側に行くにしたがいわずかに低くなっている。



第11図　ＳＤ02土層図

ＳＤ02　出土遺物（第12図）

５は広口壺である。やや外反気味に立ち上がる頸部をもち，口縁部は外側に屈曲し，口縁端部は上下に拡張する。口縁端部外面には凹線文を３条巡らす。６，７は甕である。頸部は「く」の字状に鋭く屈曲し，口縁端部は上下に拡張する。口縁端部外面に凹線文を数条巡らせる。８，９は高坏である。８は体部片，９は脚部片である。８は体部から口縁部の屈曲部外面に竹管文を施し，体部内外面には桝状のヘラミガキが認められる。10は甕の底部である。内面ヘラケズリ技法により薄く仕上げられている。一方外面は底部底面までヘラミガキで仕上げられている。Ｓ１は下縁部に粗い調整をもつ打製石斧（石鍬）と考えられるもので，上部が厚くつくられているのに比べ下縁部は先端にいくにしたがい薄くなり鋭利である。刃部の一部に使用によると考えられる磨耗が認められることから上記の器種を考えた。

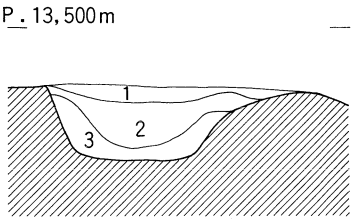


第12図　ＳＤ02出土遺物実測図

ＳＤ03　（第13図）

調査区東端において検出された溝である。全長は20.5ｍ，幅1.1～1.4ｍを測り，深さは

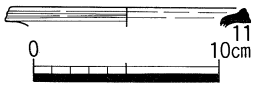
0.57～0.67mである。方向は南西－北東である。断面はコの字形を呈し，埋土は上位より黒褐色シルト質極細砂，褐灰色シルト質極細砂，灰オリーブ色シルト質極細砂である。底面はほぼ平坦である。溝の南端において中位より自然木が出土した。



第13図　ＳＤ03土層図

ＳＤ03　出土遺物（第14図）

11は甕である。口縁端部は上下に肥厚し，端部外面に凹線文を２条巡らす。弥生時代後期前半のものであろう。

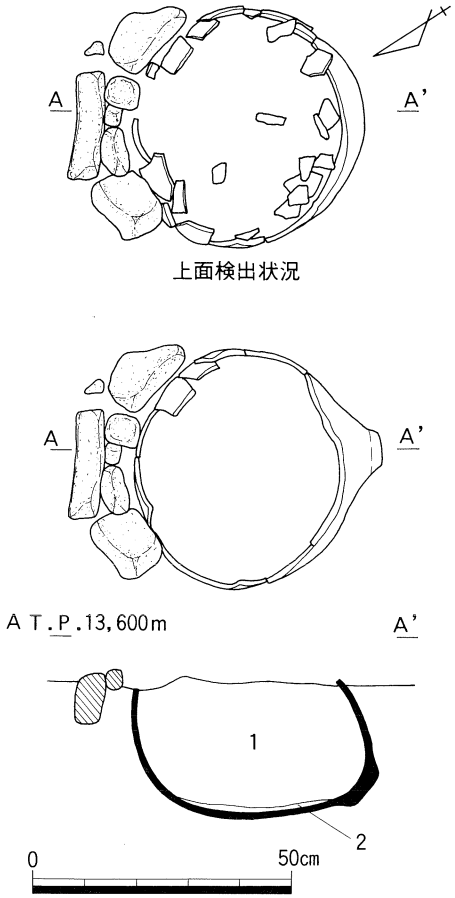


第14図　ＳＤ03出土遺物実測図

土器棺１　（第15図）

調査区のほぼ中央に位置する。旧河道（ＳＲ01）の西岸の緩やかな斜面に検出された。土壙の掘り込みは不明であり，土器棺の上部は調査時において割られてしまったが復原するとほぼ完形である。

土器棺は底部を南方に向け頸部を上にした，つまり主軸を南北にもち傾斜して置かれている。土器棺の北側には７個の大小の石が土器棺を取り囲むように置かれている。土器内面に別個体の土器があり，本来は蓋が存在していたと考えられる。土器内堆積物の大部分は黒灰色シルト質細～粗砂であり，底面に黒色シルト質細砂が非常に薄くみられる。これらの層は慎重に調査を行ったが，何も検出されなかった。

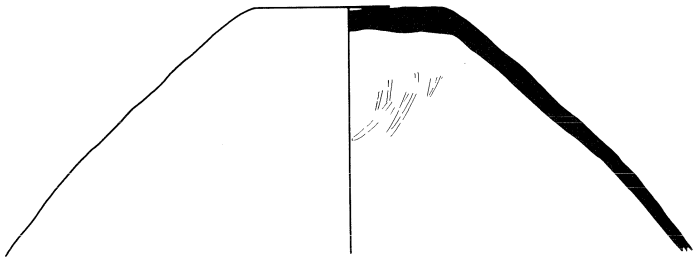


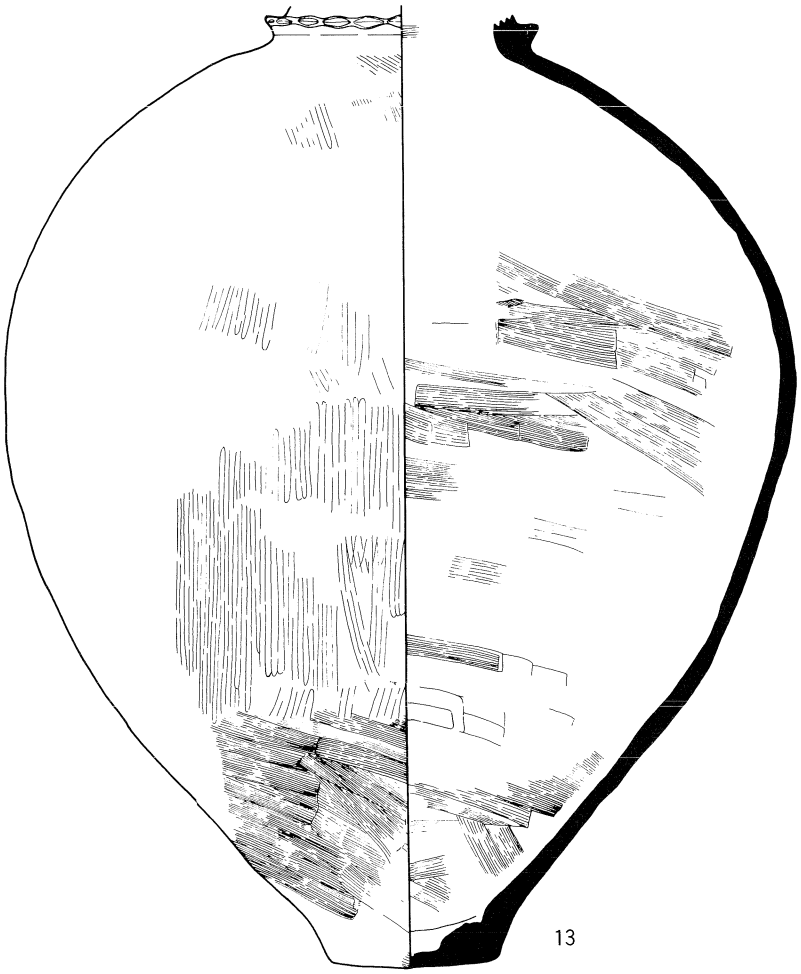
第15図　土器棺１実測図

土器棺１　出土遺物（第16図）

12は棺蓋である。大形の鉢を転用したもので，口縁部はなく形状は不明であるが，平底の底部をもつ。

13は棺身である。胴部が大きく張る形態をし，底部は平底である。頸部と胴部の屈曲部に刻目突帯文を一条巡らす。調整は外面上半ヘラミガキ，下半ハケ，内面はハケを施す。



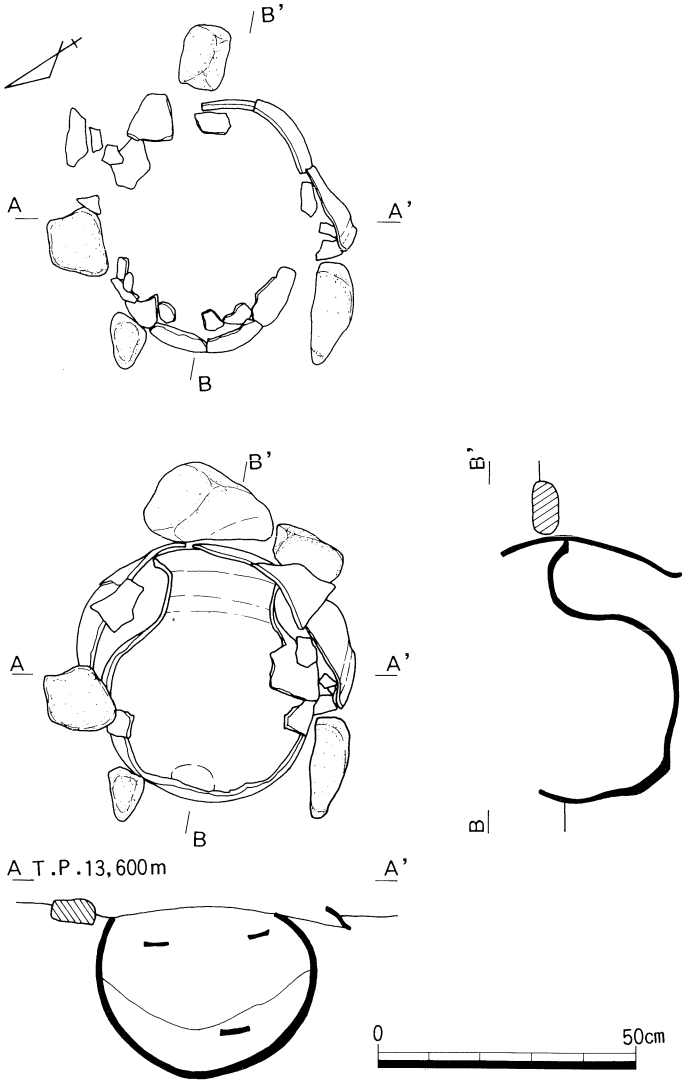


第16図　土器棺1出土遺物実測図

土器棺２　（第17図）

調査区ほぼ中央に位置する。土器棺１のすぐ東側にあり，旧河道の西岸斜面上に検出された。土壙の掘り込みは不明である。土器棺の上部は土圧と調査時の不注意により割れてしまったが復原するとほぼ完形である。

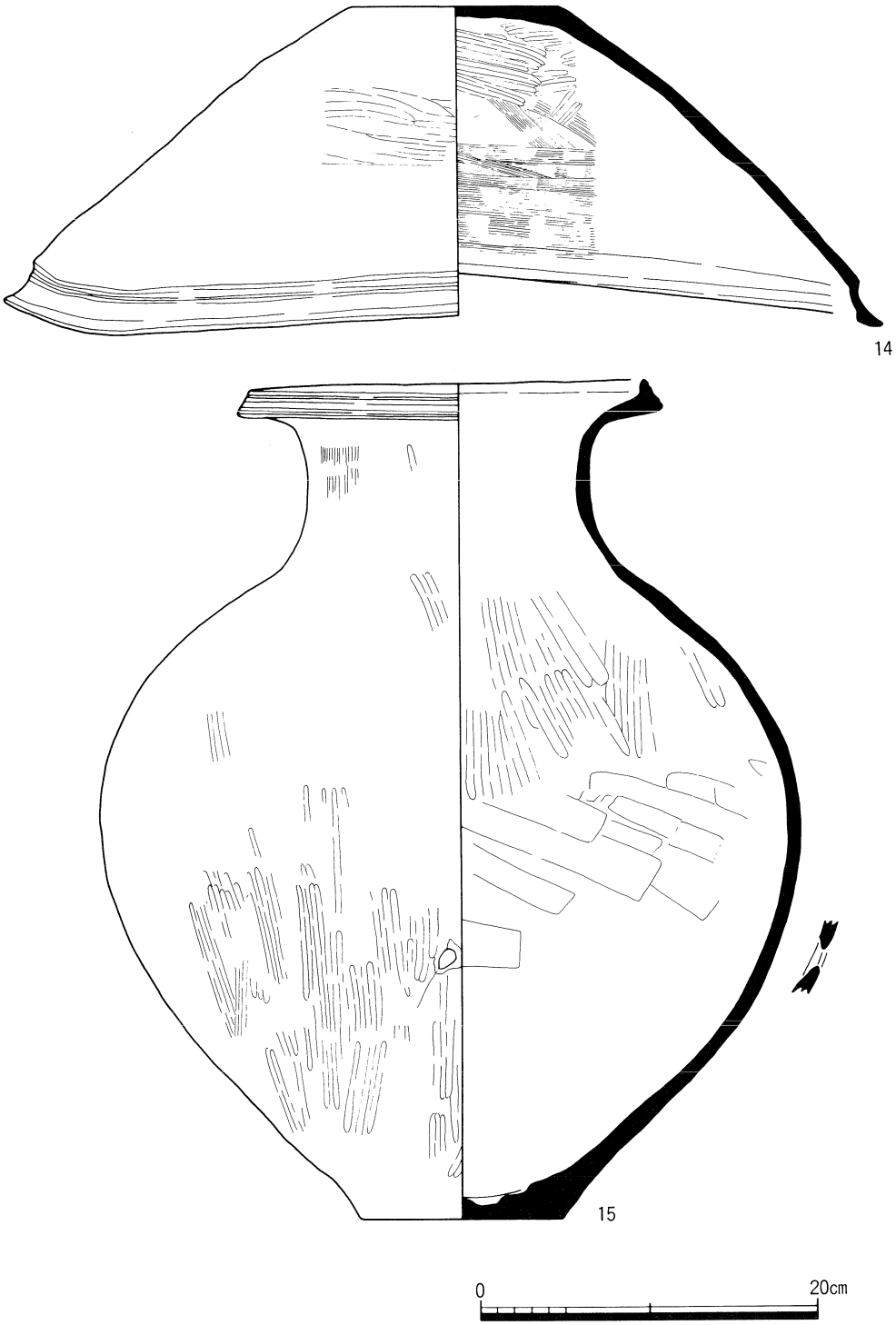
土器棺は底部を西下にし，口縁部を東上にして斜めに置かれ，口縁部には蓋として鉢形土器が置かれている。土器棺の主軸を東西に持ち，口縁部を斜め上にした状態で埋葬されていた。土器棺のまわりには６個の石が取り囲むように置かれている。土器内堆積土は２層に分かれており，上は黒灰色シルト質細～粗砂，下は黒灰色シルト質細砂である。土器内には数点の土器片が落ち込んでいたが，精密な調査を実施したにもかかわらず，その他は何も検出されなかった。



第17図　土器棺２実測図

土器棺２出土遺物　（第18図）

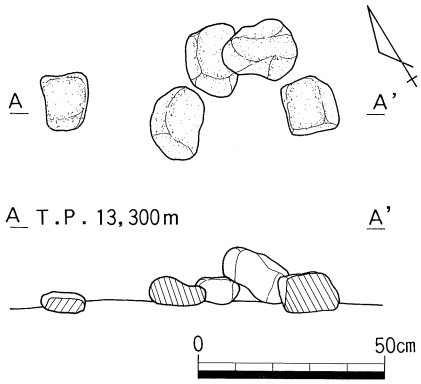
14は棺蓋である。土器棺１と同様大形鉢の転用である。口縁端部は左右に拡張し，底部は平底である。胴部下半底部近くに焼成後外からの穿孔がみられる。調整は外面ヘラミガキ，内面上半ハケ，下半ヘラミガキを施す。15は棺身である。底部は平底であり，胴部最大径は器高の中位に位置する。頸部は直立し，口縁部は外側に外反する。口縁端部は上部につまみ上げ，口縁部端面に凹線文を巡らす。調整は頸部外面ハケ，胴部外面ヘラミガキ，胴部内面上半ヘラミガキ，下半板ナデを施す。



第18図　土器棺２出土遺物実測図

土器棺３　（第19図）

調査区のほぼ中央に位置する。ＳＤ01・02の東側にあり，６層上面に検出された。長さ15cmの石４個をコの字状に配置しており，土器棺本体は検出されていないけれども，土器棺１，２にも同様に石を周囲に置いていることより判断して，この遺構も土器棺である可能性が高い。



第19図　土器棺３実測図

ＳＲ01　（第20～32図）

調査区中央やや東寄りの位置，ＳＤ02とＳＤ03のほぼ中間に河床最深部を有する旧河道である。推定幅は約50ｍであり，東岸は２区の北西隅に一部検出された。確認面から河床最深部までの深さは約1.3ｍである。河床はほぼ平坦であるが，南側がやや低くなっている。西岸は非常に緩やかな傾斜を呈しているが，東岸はＳＤ03の西側において急激に立ち上がり，以東は緩やかになっている。埋土は２～10層であるが，上部の２・３層は近世の水田層，４・５層は古代～中世の水田層であり，旧河道が埋没した後の僅かな凹地に堆積したと思われる。６層は黒褐色シルト質極細砂であり，中央以東に厚く堆積している。７層は黒褐色シルト質極細砂，８層は灰色シルト質極細砂であり，旧河道の最深部に堆積し，植物遺体を多量に含んでいる。９層は灰色シルト質極細砂＋灰白色シルトで，河床部の東側に堆積し，10層は黒褐色シルト質極細砂で西岸に堆積している。これらはレンズ状堆積を呈し，自然堆積である。ただし，５ｃ層は南東部に厚く堆積し，西側に次第に薄くなっており，南東方向からの洪水があったと考えられる。

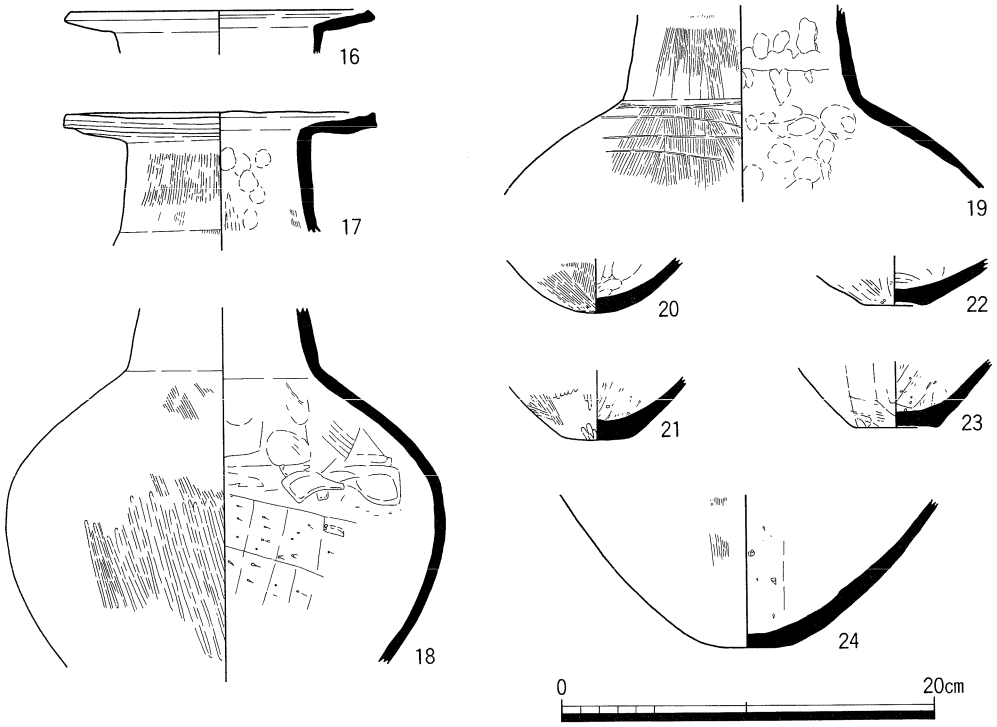
土器はほぼ全域から出土するが，河床部と東岸寄りに多く，河床最深部からは植物遺体が出土した。

８～10層出土遺物　（第20～26図）

８～10層からは壺，甕，高坏，鉢，製塩土器が出土しており，主体をなす「Ｂ類土器」については形態が限定されており個々の土器に大きな違いは認められない。一方，当遺跡では搬入土器と考えられる白色系の色調を持つ土器は甕，鉢，製塩土器等に認められ，特に甕の比率が高いようである。

壺　（第20図）

16～19は頸部が直立もしくは，内傾して立ち上がり，口縁部は屈曲して水平に広がる。口縁端部は上下方向に拡張する。口縁部内面には凹線状の窪みが数条めぐる。体部は大きく張るが，体部最大径は，体部中央より上にある。調整は口縁部内外面ヨコナデ，頸部外面ハケ，内

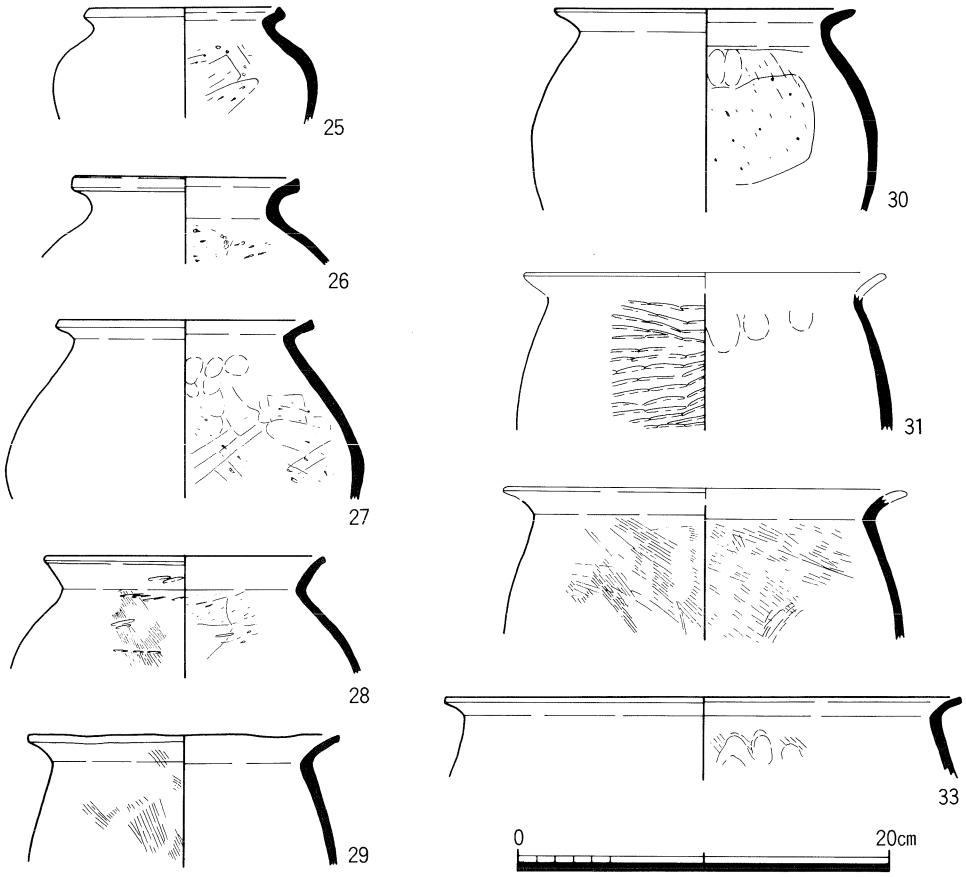


第20図　ＳＲ01　8～10層出土遺物実測図（1）

面ナデ，体部外面上半ハケ，下半ヘラミガキ，内面上半ナデ，下半ヘラケズリを施す。一部19のように体部外面に装飾性のあるヘラミガキも認められる。20～24は底部である。20，21，24のように丸底になるものと，22，23のように平底を残すものに分かれる。形態に差があるが，調整に差は認められない。

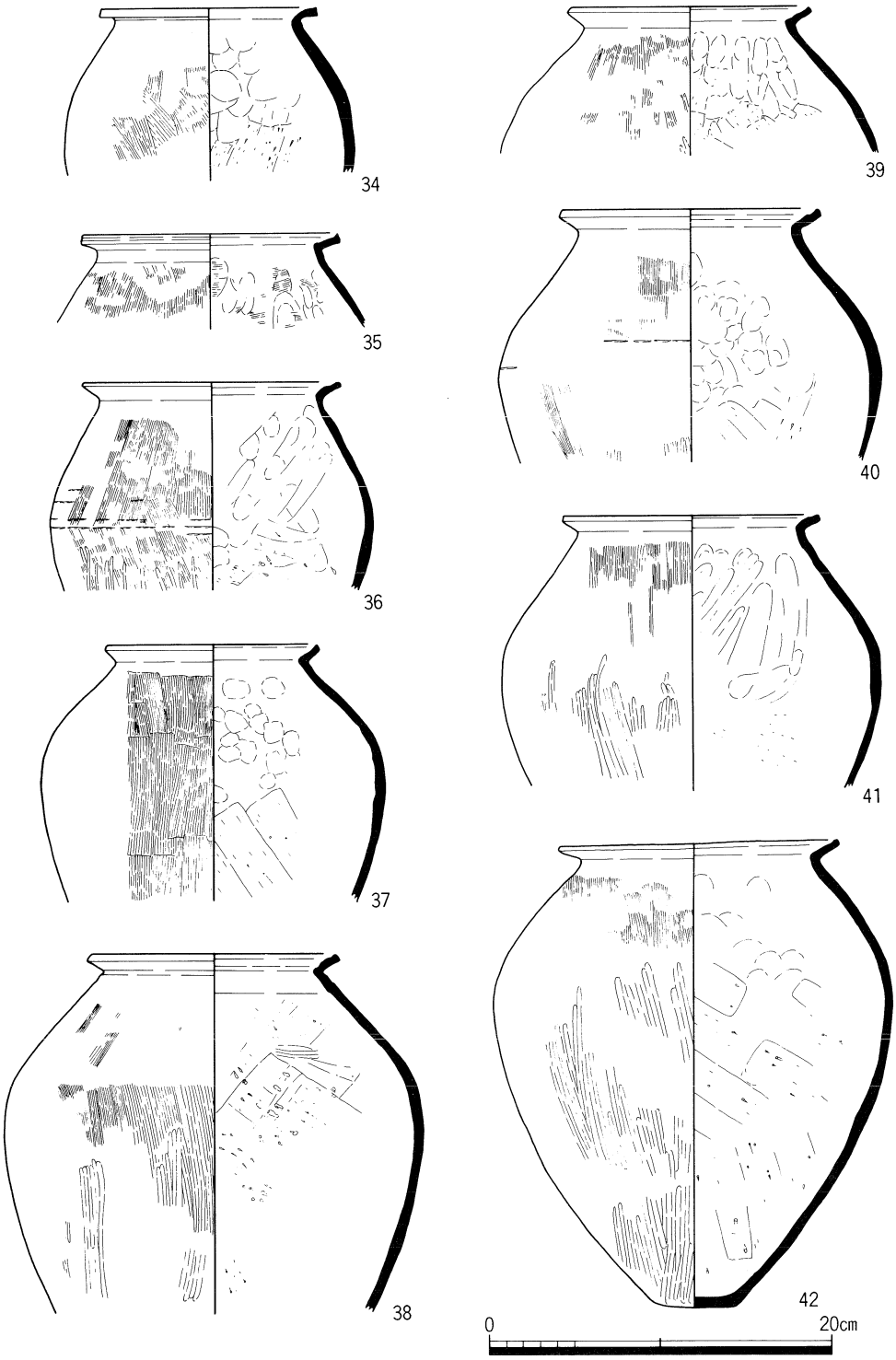
甕　（第21～23図）

甕は大きく白色系の土器と「Ｂ類土器」の２種類に分かれる。第21図は白色系の土器である。25は口径の割に器高が低い寸づまりの形態をするものである。口縁端部は上につまみあげ頸部は「く」の字状に鋭く屈曲する。調整は外面ヨコナデ，内面は頸部ちかくまでヘラケズリを施す。26は頸部の屈曲がゆるく頸部が長い甕である。口縁部は肥厚し，上部へつまみ上げる。調整は外面ヨコナデ，内面は25と同様，頸部ちかくまでヘラケズリを施す。このうち27は形態上は「Ｂ類土器」の形状に酷似するもので，口縁部の形態に若干の差はあるが，ほとんど変わりはない。28～33は頸部が「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。体部はあまり張らない。調整はいずれも口縁部は内外面ともヨコナデを施す。体部以下については，28は外面タタキ後ハケ，33は外面不明，内面ハケのちナデを施し，調整については統一性はな

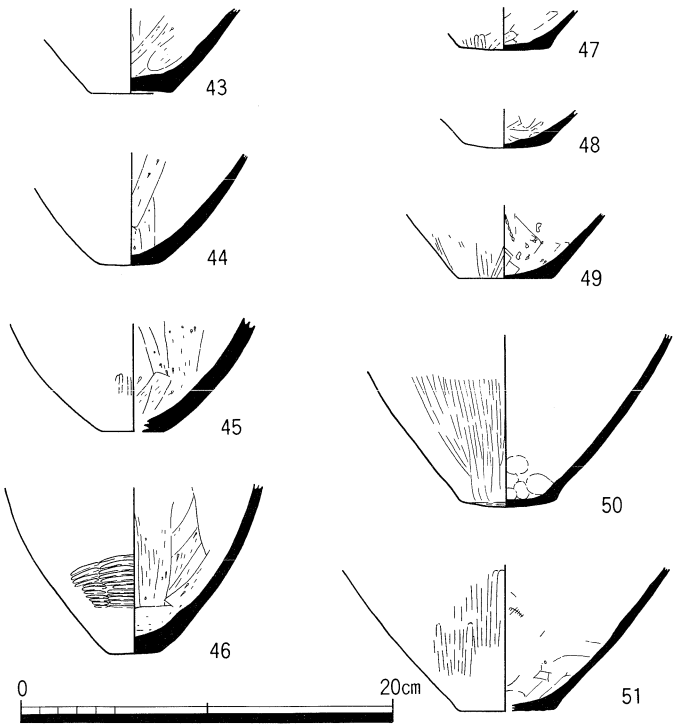


第21図　ＳＲ01　8～10層出土遺物実測図（2）

い。34は形態的に27と同様の形態をとるものである。27と同様口縁端部が肥厚し，上方につまみ上げる。35～42は，いわゆる「Ｂ類土器」の甕である。頸部は「く」の字状に鋭く屈曲し，口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内面に凹線状の窪みを数条めぐらせるものが大半で一部34のように端部を肥厚させてつまみ上げるもの，35のように端部を肥厚させ，外面に凹線文をめぐらせるものもみられるが，これは時期差によるものと考えられ，35は36～42に比べ古い様相をもつ。これは同時に出土した底部についても同様に時期差が認められる。体部上半はなで肩を呈し，体部は半分より上に最大径がくる。底部は直線的にすぼまり，角のとれた平底になる。調整は口縁部内外面ヨコナデ，体部外面ハケ後下半ヘラミガキ，内面ナデ後下半ヘラケズリを施す。一部36のように体部外面にタタキを残すものもみられる。43～46は白色系の色調をもつ甕の底部である。調整は外面の残りが悪いが，46のようにタタキがみられるものがある。一方内面はヘラケズリを施す。47～51は「Ｂ類土器」の底部である。平底をするもの（47，49）丸底に近いもの（48，50）がある。



第22図　ＳＲ01　8～10層出土遺物実測図（３）



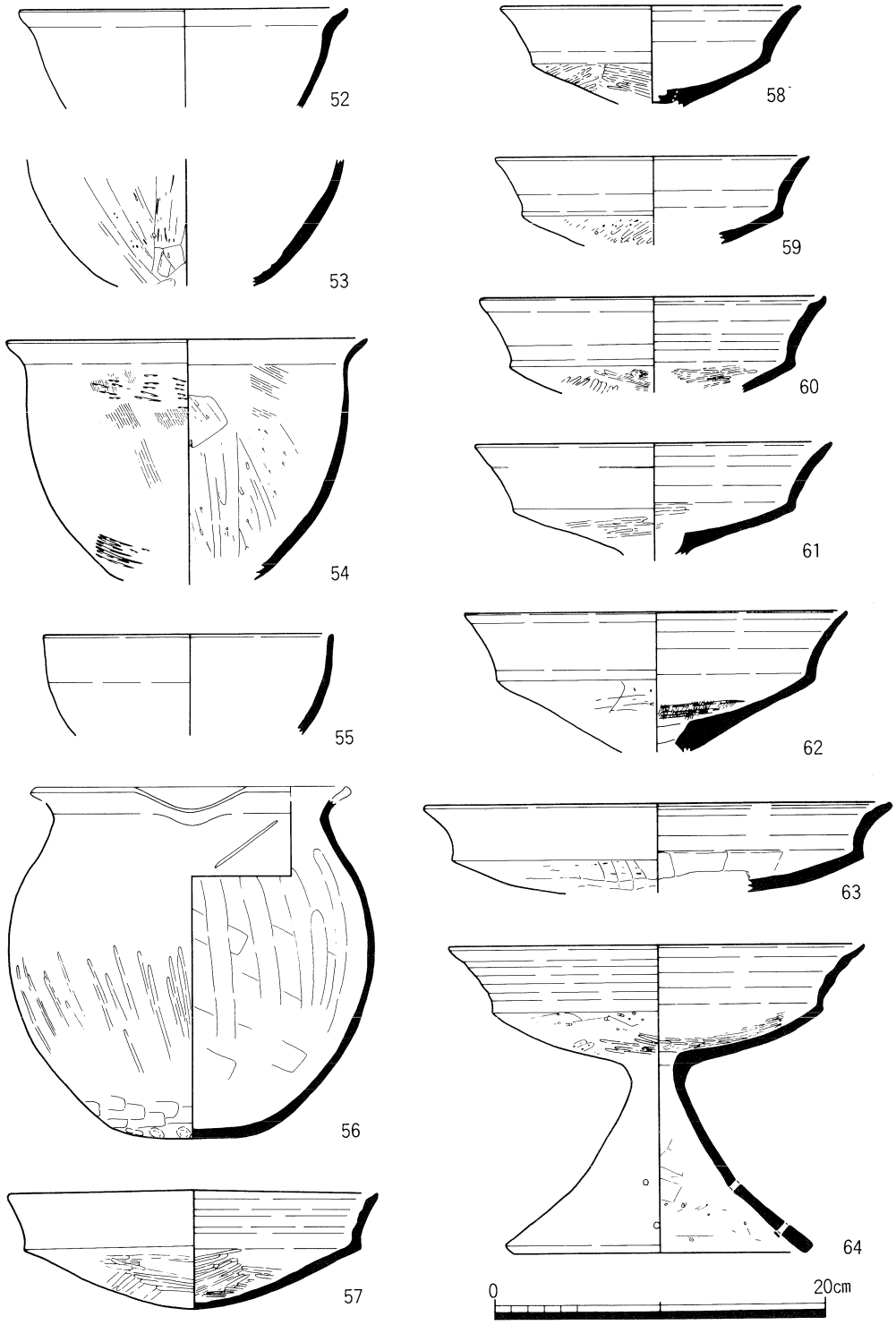
第23図　ＳＲ01　8～10層出土遺物実測図（4）

鉢，高坏　（第24図）

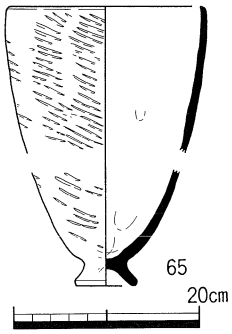
52～55は白色系の色調をもち，石英粒を胎土に多く含む土器である。52～54は体部が内湾気味にたちあがり，頸部はわずかに屈曲し，外側に開く口縁をもつものである。調整は53が外面ヘラケズリ，内面ナデ，54は外面タタキ後ハケ，内面上半ハケ，下半ヘラケズリを施す。55はボール状の体部をもつもので口縁部は直立する。調整は不明である。56は「Ｂ類土器」の胎土をもつ片口の鉢である。高松平野では今までみられなかった形態である。丸底気味の底部からたちあがり球形に近い体部をもち，頸部はゆるく「く」の字状に屈曲する。口縁部は端部を欠損しており形状は不明である。調整は外面下半板ナデ，上半ヘラミガキ，内面板ナデ後ナデを施す。57は浅い皿状の体部から屈曲し，口縁部は外反しながらたちあがる形態をするもので，この時期の高坏の坏部と同様の形態をする。口縁部内面に凹線状の窪みが数条めぐる。調整は高坏と同様，口縁部内外面ヨコナデ，体部内外面は桝状のヘラミガキが認められる。58～64は高坏である。一部59，60，62は鉢の口縁部の可能性がある。坏部は57と同様な形態をし，脚部は「ハ」の字状に開き，脚端部はあまり肥厚しない。調整は口縁部内外面ヨコナデ，体部外面ヘラケズリのちヘラミガキ，内面ヘラミガキ，脚部外面不明，内面ヘラケズリを施す。坏部は円盤充填を施す。

製塩土器　（第25図）

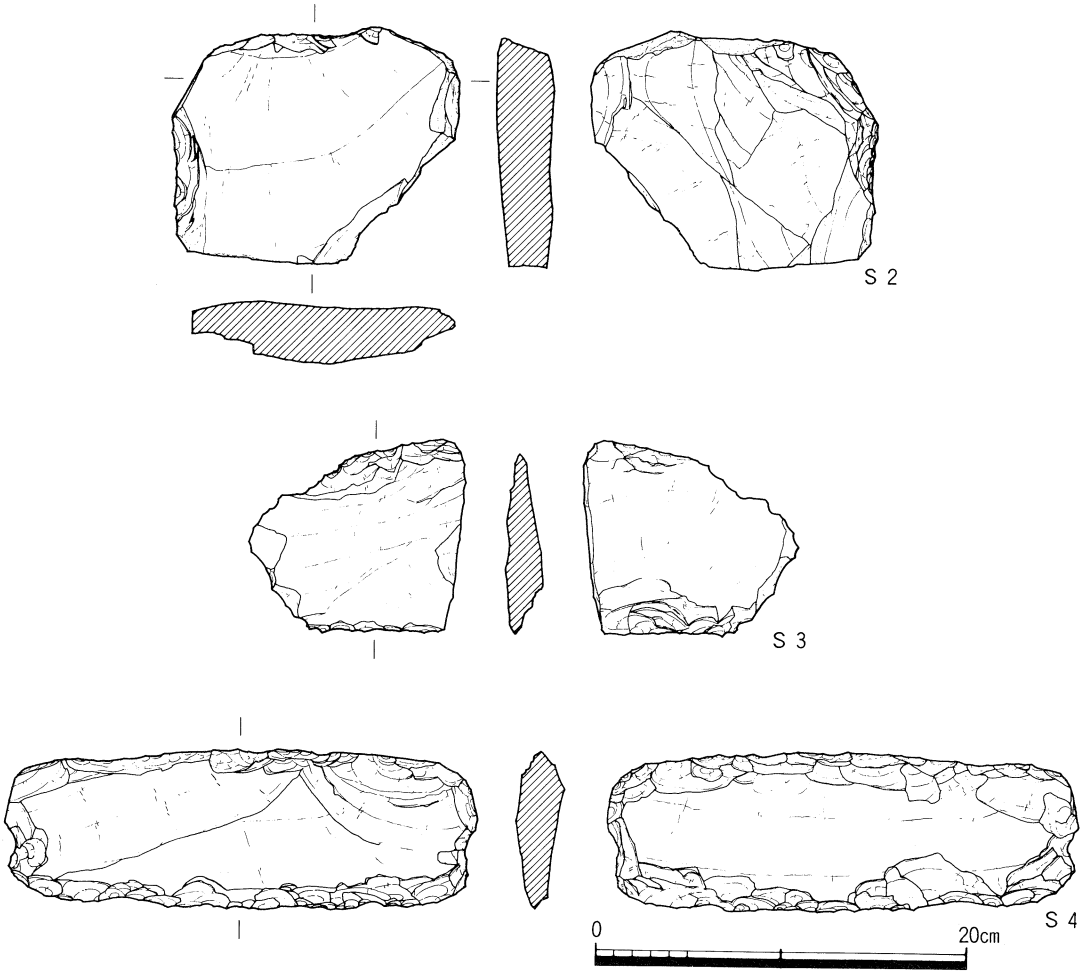
65は筒型の体部に小型倒坏形の脚部がつく。体部外面には並行タタキが顕著で，内面はナデ調整を施す。



第24図　ＳＲ01　8～10層出土遺物実測図（５）



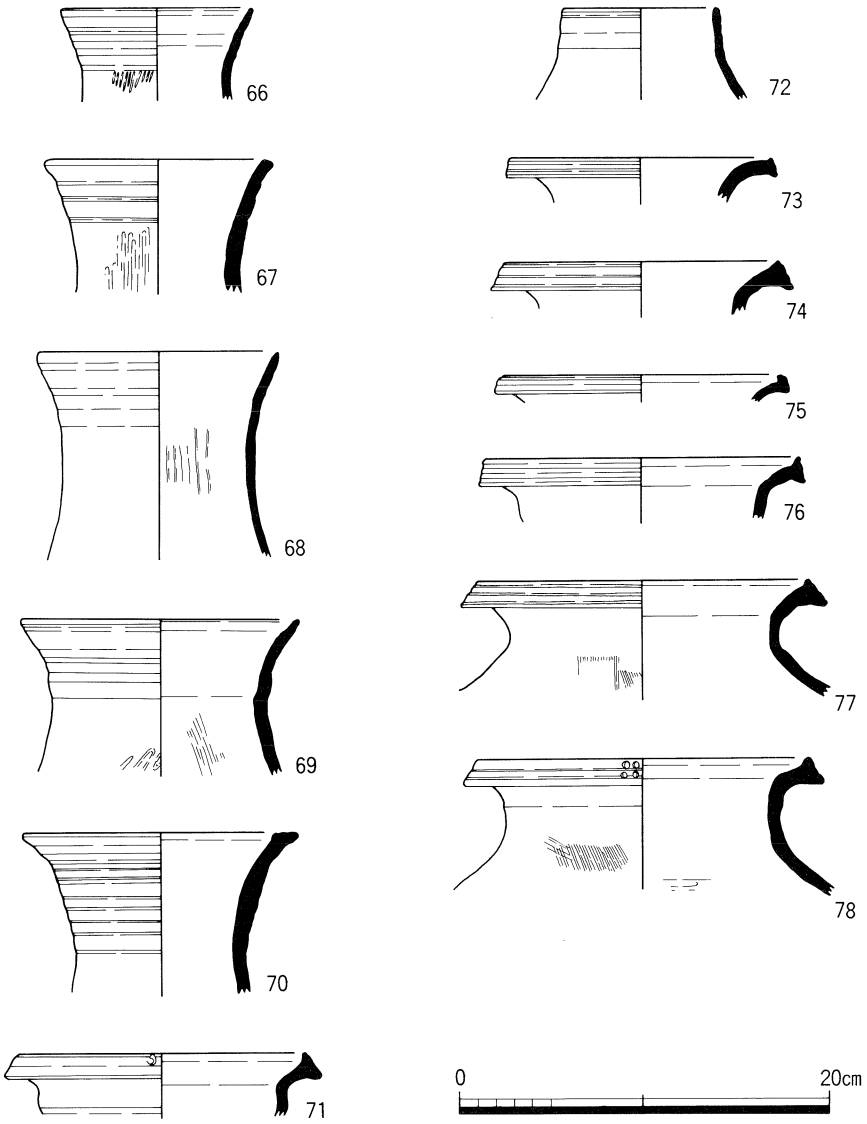
第25図　ＳＲ01　８～10出土遺物実測図（６）



第26図　ＳＲ01　８～10層出土遺物実測図（７）

6．7層出土遺物土器　（第27～31図）

6．7層からは弥生時代後期前半頃と考えられる一括の土器群が出土している。層位的な関係から述べれば，後述する黒色土より上位の層からの出土である為，層位学的に言う良好な堆積遺物ではない。後期前半に比定でき土器群は高松平野において確認例も少ないことから，出土遺物をできるだけ図化するよう努めた。これらの土器群は破片にはなっているものの，ローリングは受けていない。出土した土器は壺，甕，高坏等は多く確認できたが，鉢は1点のみの



第27図　ＳＲ01　6，7層出土遺物実測図（1）

確認にとどまった。以下器種ごとに特徴を述べることとする。

壺　（第27図）

壺には長頸壺，短頸直口壺，短頸広口壺が認められる。

66～70は口縁部から頸部外面上半にかけて退化凹線文を施すもので，4～5条の退化凹線文が確認できる。66は頸部下半外面にヘラ描文を施す。形状は直立気味に立ち上がる頸部をもち，口縁部がやや外反する。口縁端部は左右に開き面をつくる。口縁部から頸部同様，端面についても退化凹線文を施す。71は直立する頸部をもち，口縁部は外反し，端部は上下に拡張する。口縁部には退化凹線文，竹管文を施す。72は短頸の直口壺である。口縁部外面に退化凹線文を施す。73～78は短頸の広口壺である。短く屈曲する頸部をもち，口縁部は大きく外反し端部が上下に肥厚する。端面には明瞭な凹線文を施すものと，退化凹線文を施すものに分かれる。凹線文はいずれも3条程度である。その他の文様としては，端面に竹管文を施す78がみられる。調整は口縁部から頸部の内外面ともヨコナデ，体部外面ハケメ，内面ヘラケズリを施すようである。

甕（第28図）

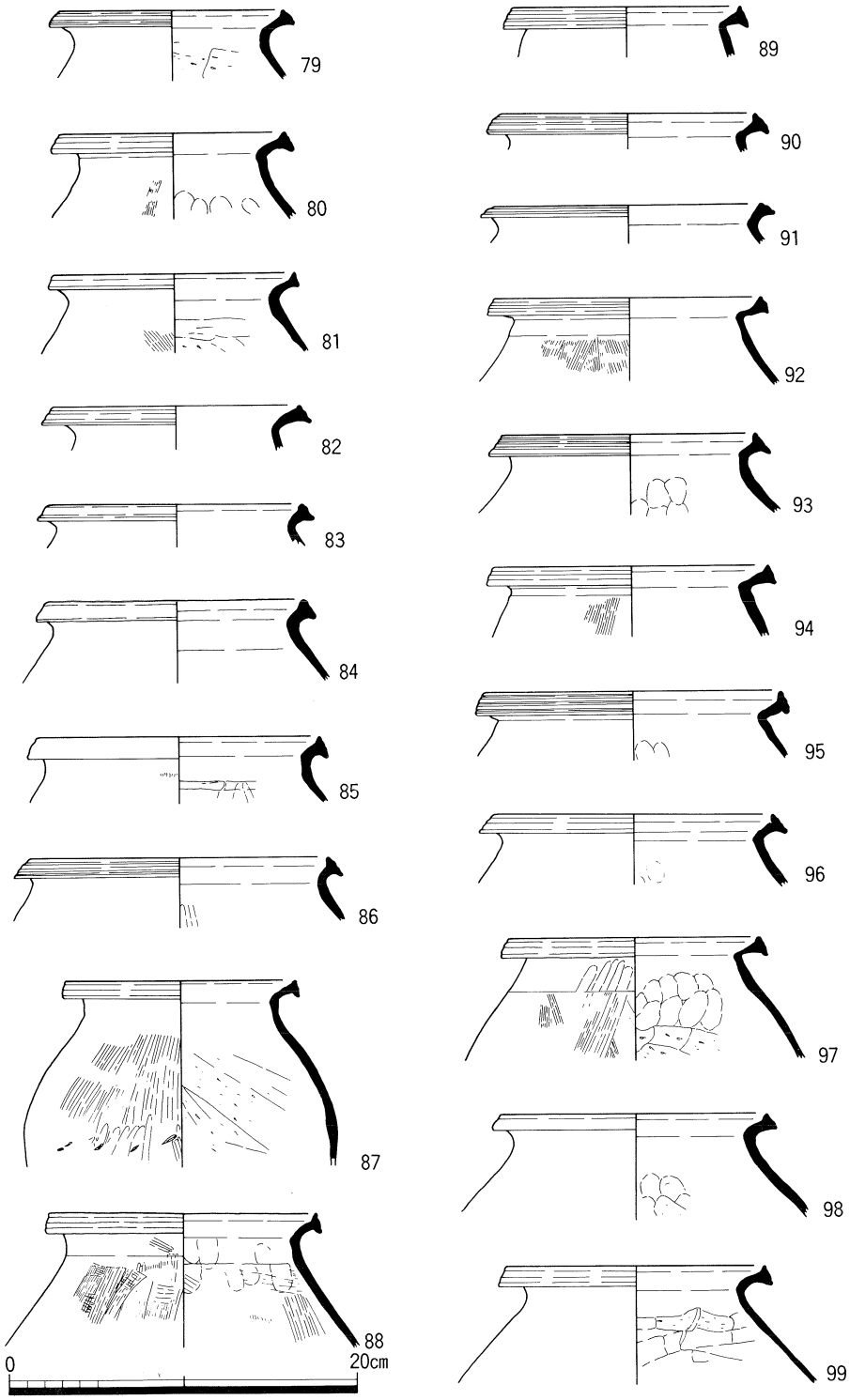
いずれも口縁部から体部上半にかけての破片で，全体の状況がわかるものはない。頸部の屈曲のゆるいものと（79～88），頸部の屈曲のきついもの（89～99）に分けたが，それ以外の形態による大きな違いは認められない。頸部の屈曲の違いは，製作時における粘土紐の接合の違いによるものと考えられる。79～88は頸部の屈曲はゆるく，89～99に比べ頸部が長い。口縁端部は上下に拡張し，端面に2～3条の凹線文，退化凹線文を施す。調整は口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメはいずれも同様で，内面ナデもしくは頸部近くまでヘラケズリを施すものに分かれる。一部88のようにハケメの前に叩きが行われていたと認められるものもみられる。89～99は頸部の屈曲がきついもので，79～88と同様，口縁端部が上下に拡張し，端面に2～3条の凹線文，退化凹線文を施す。調整は79～88と同様である。

底　部（第29図）

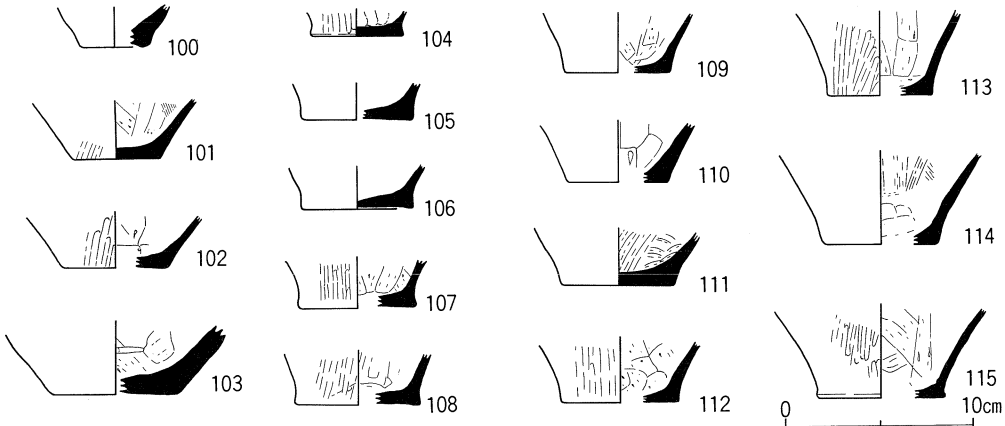
100～103は壺，104～115は甕の底部である。甕の底部はいずれも，ヘラケズリによる調整で薄く仕上げられている。外面はヘラミガキ，端部ヨコナデ，内面ヘラケズリを施す。

高　坏（第30図）

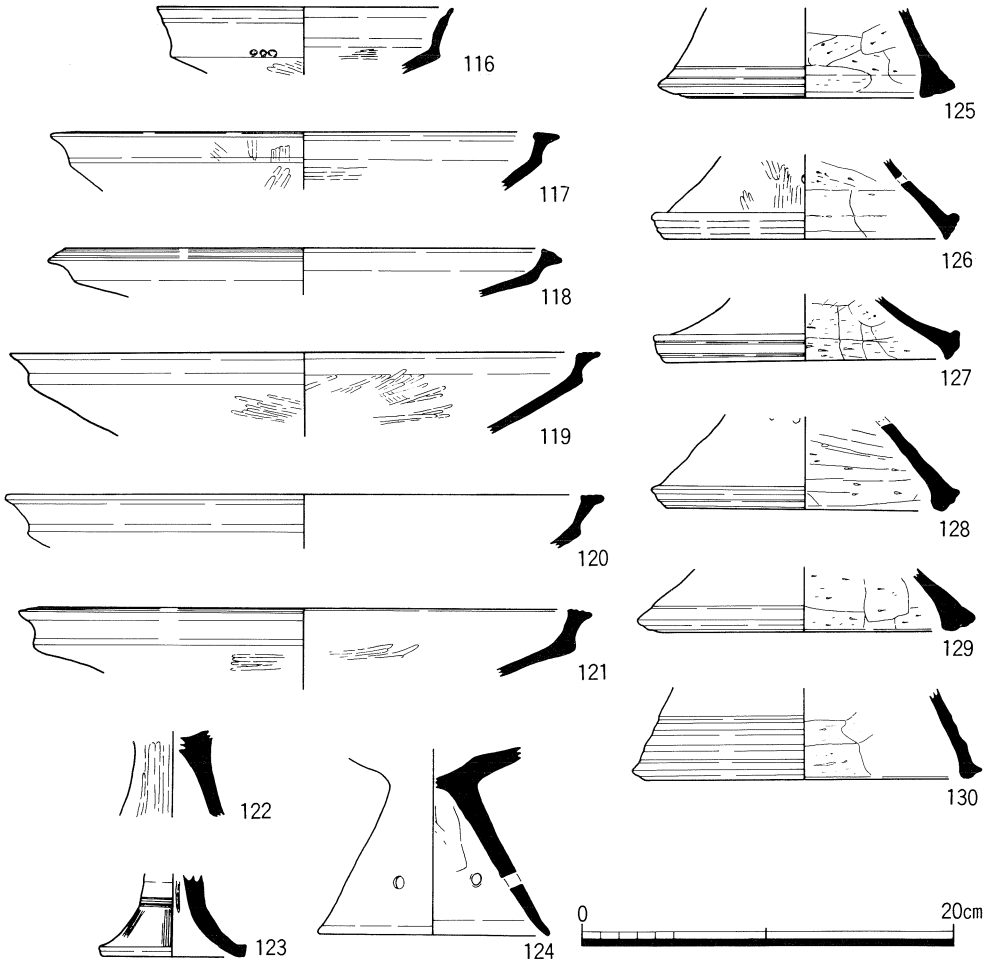
116は浅い坏部から屈曲し，直立気味に立ち上がる口縁をもち，端部は拡張せずに終わる。文様は坏部と口縁部の境に竹管文を施す。117～121は浅い坏部から屈曲し，直立気味に立ち上がる口縁をもち，端部は外面に大きく拡張する。拡張した端面には凹線文を施す。坏部内外面には丁寧なヘラミガキが施されている。122～130は脚部である。123は小型の脚部である。脚部外面に櫛描沈線文による文様がみられる。124は脚端部が拡張せず丸く終わる形態をする



第28図　ＳＲ01　６，７層出土遺物実測図（２）

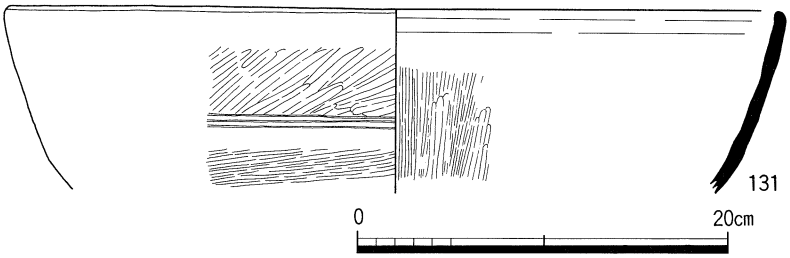


第29図　ＳＲ01　６，７層出土遺物実測図（３）



第30図　ＳＲ01　６，７層出土遺物実測図（４）

もので，脚部中央に円孔がみられる。125～130は「ハ」の字形に大きく開く脚部をもち，脚端部は大きく拡張する。端面および脚部外面に凹線文を施す。調整は外面ヘラミガキ，内面はヘラケズリを施す。



第31図　ＳＲ01　６，７層出土遺物実測図（５）

鉢　（第31図）

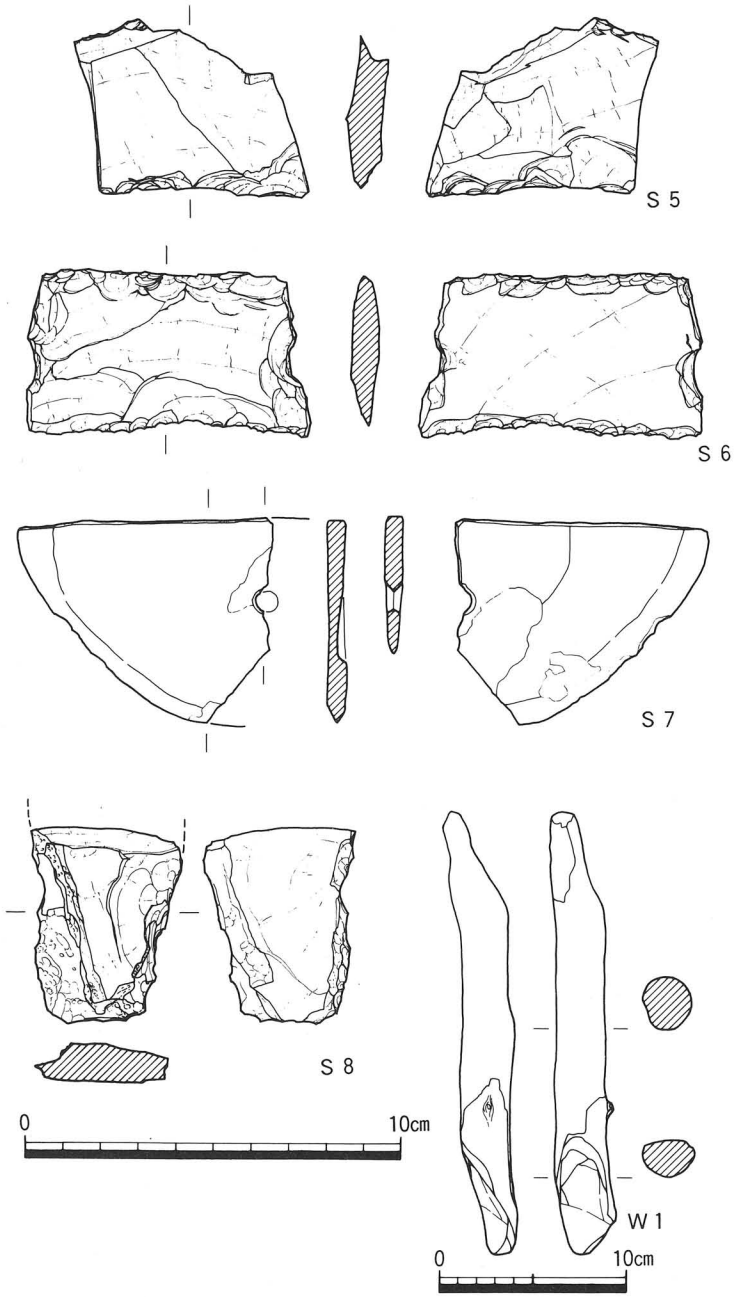
131は大形の鉢である。ボール状の形態をするもので体部は内湾しながら立ち上がり，端部は丸く終わる。体部外面に沈線文が数条みられる。調整は内外面ともヘラミガキを施す。

６．７層出土遺物　石器　（第32図）

６．７層から出土した石器で図化したのは４点である。Ｓ２はスクレイパーである。両側縁部に裁断面が残る。下縁部は両面からの調整により刃部をつくる。刃部は鋭利である。Ｓ３は小型の石庖丁である。断面形状は両面とも平坦面を多く残す素材を使用，平面形は長方形を呈し，両側縁部に抉りを施すものである。上縁部は敲打による背潰し，下縁部は両面からの調整により鋭利な刃部をつくる。Ｓ４は磨製の石庖丁である。半円形を呈するものと考えられるが，約１／２を欠損する。刃部は両面からの研磨により鋭利に仕上げられている。中央部には紐かけ用の孔が一孔残存しており，両面からの穿孔により作成されたことがわかる。Ｓ５は石槍の基部と考えられるもので，先端部を欠損する。整形は自然面を多く残し，調整も粗いことから別の用途も考えられる。

６．７層出土遺物　木器　（第32図）

Ｗ１は丸木を利用する杭である。加工が確認できるのは先端部のみであり，しかも一方向からのみの加工である。残存状況は良好である。



第32図　ＳＲ01　６，７層出土遺物実測図（６）

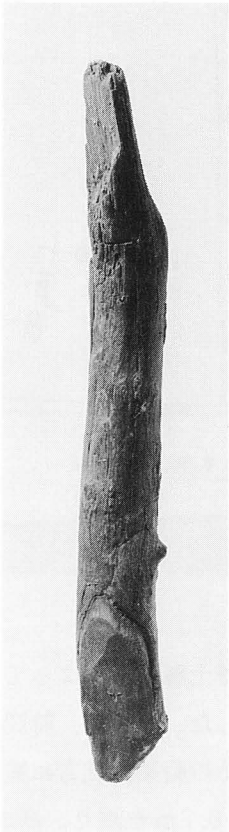
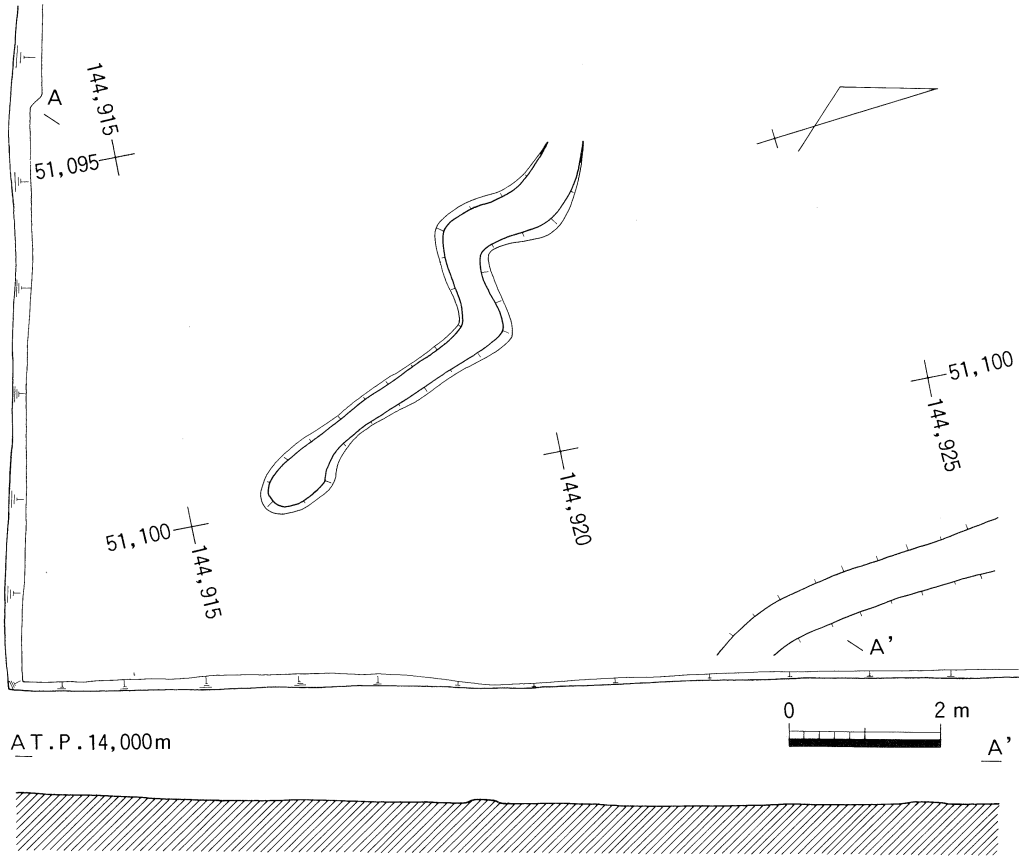


写真３　ＳＲ01出土杭

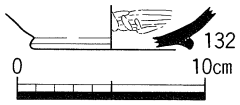
5層水田　（第33図）



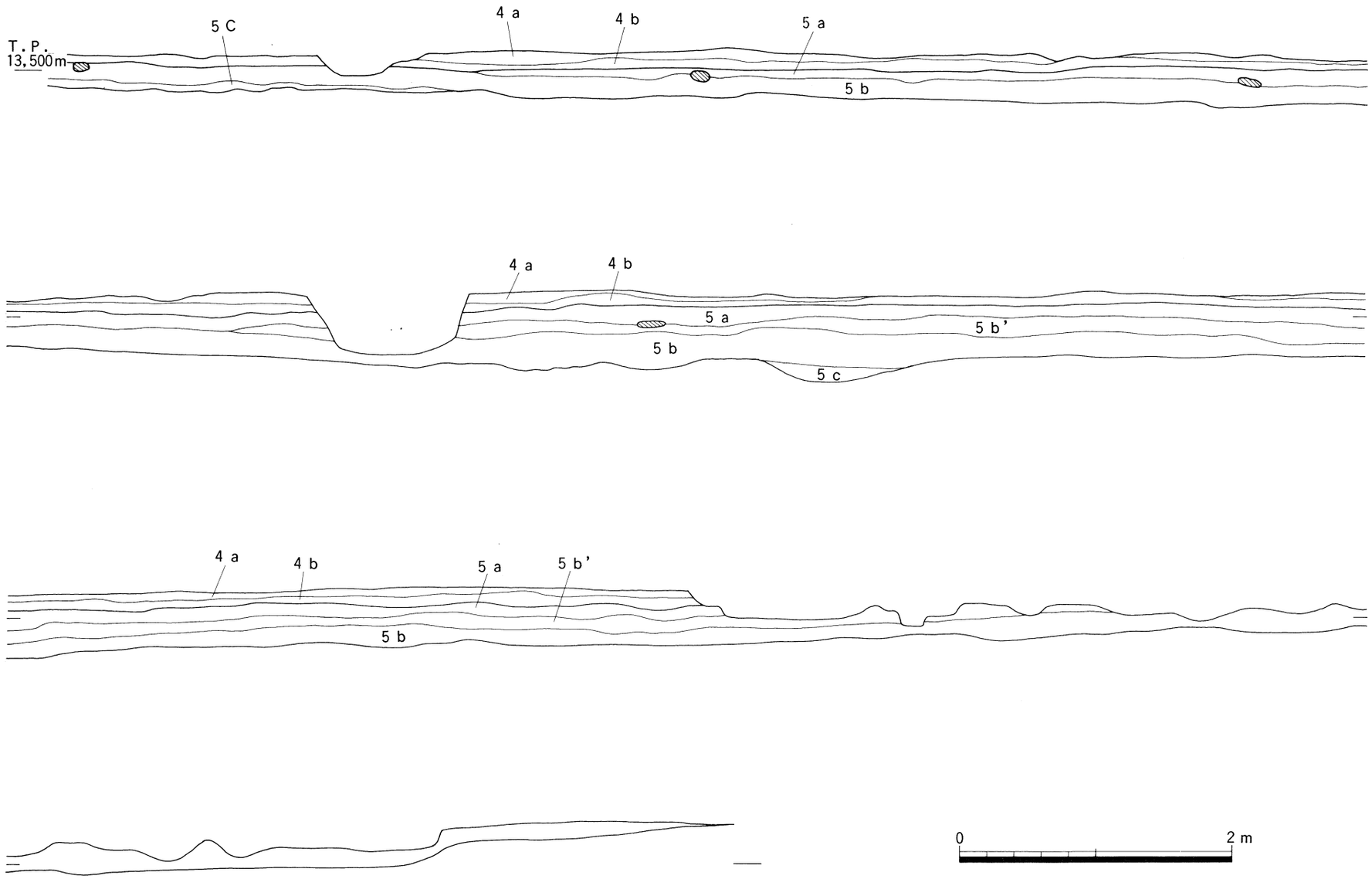
第33図　5ａ層水田実測図

南壁土層観察によって５ａ層が水田土壌層である可能性が高いと判断し，面的に確認することとした。しかし，時間的な制約があるために，調査区東端から７ｍの範囲のみの調査となった。その結果，北方に蛇行しながら伸びる畦畔状の高まりを２カ所検出した。その下場の幅は0.5～0.7ｍを測り，高さは平均４㎝であり，非常に小規模である。土層観察によれば，５ａ層はＳＲ01埋没後の僅かな凹地に堆積し，調査区中央より東側に厚い堆積がみられる。５ｂ・５ｂ’層上面には４ｍないし５ｍの間隔を持った石が検出されており，面的には確認されなかったが規則的な畦畔としての機能を有すると考えられる。

出土遺物は調査区南東隅において黒色土器Ａ類の椀が出土したのみであり，その時期から考えると，この水田の時期は12世紀中頃のものであろう。



第34図　5ａ層出土遺物実測図



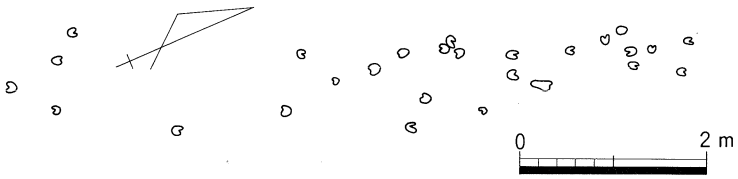
第35図　4層，5層水田土層図

5層出土遺物　（第34図）

132は黒色土器Ａ類の椀である。外側に踏ん張る高台をもつ。内面にはヘラミガキがみられる。

4層水田　（第36図）

ＳＲ01のほぼ埋没した後の僅かな凹地に堆積した4層は，土壌層と非土壌層に分けられ，水田面であると考えられる。土層観察と面的調査において明瞭な畦畔状高まりは検出されなかった。しかし，４ａ層上面に哺乳類偶蹄目の足跡と人間の足跡が検出された。これらの方向は不規則ながら南北方向に続いている。



第36図　４ａ層水田足跡実測図

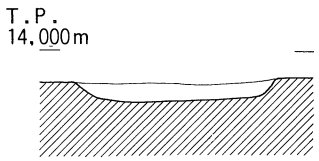
遺物の出土は皆無であるが，５層水田直上の堆積状況からみて，時期的には若干後出のものであると思われる。

２，３層出土遺物　（第37図）

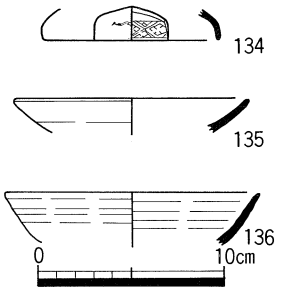
２，３層から量は少ないものの，近世と考えられる遺物が出土している。134は染付磁器の碗の蓋である。内面には雷文帯がはいる。135は陶器の皿である。136は土師器の椀である。全体に残存状況はよくない。

ＳＤ04　（第39図）

調査区西側において１層直下の砂礫層を掘り込んでいるのが検出された。検出全長は11.3ｍ，幅0.75ｍ，深さ６㎝を測る。方向は南北であり，調査区外へ延びている。底面は平坦である。埋土は白灰色シルト質細砂である。遺物の出土はないが，検出状況から近世に比定される。



第38図　ＳＤ04土層図



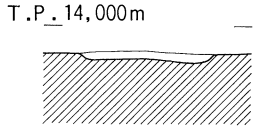
第37図　２，３層出土遺物実測図

ＳＤ05　（第38図）

調査区西端に位置し，ＳＤ04より７ｍ西側において検出された。検出全長は8.6ｍ，幅0.7

～1.08ｍを測り，深さは10㎝である。方向は南北であり，南側の調査区外に延びている。埋土は白灰色シルト質細砂である。

遺物の出土は無いが，検出状態から近世のものと考えられる。



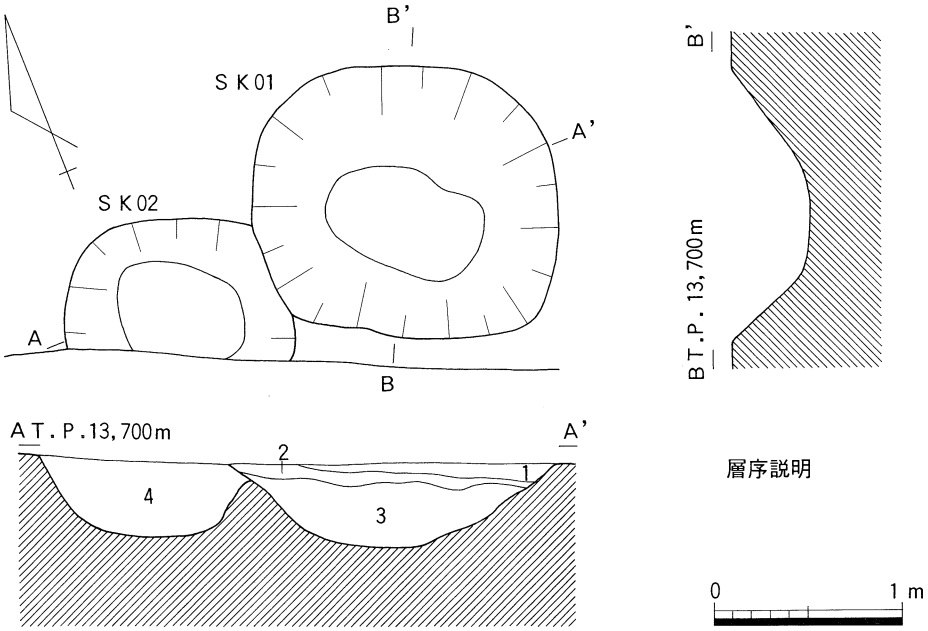
第39図　ＳＤ05土層図

ＳＫ01　（第40図）

調査区南東部に位置し，南西隅がＳＫ02と重なり合っている。平面形は隅丸方形を呈し，その規模は長径1.75ｍ，短径1.45ｍを測り，深さは38㎝である。埋土は白灰色シルト質極細砂であるが，３層に細分され，厚い堆積の３層は黒灰色極細砂を少量含む。切り合い関係はＳＫ01を切っている。遺物の出土は無いが，埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

ＳＫ02　（第40図）

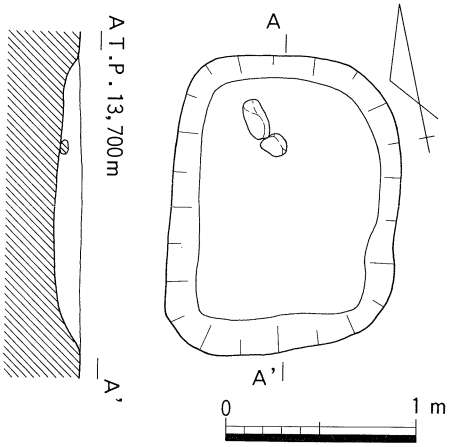
調査区南東部に位置し，ＳＫ01と西接する。南側は調査区外へのびるが，平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。長径は1.22ｍ，深さ38㎝を測る。埋土は単一層の白灰色シルト質極細砂であり黒灰色極細砂をブロック状に含んでいる。ＳＫ01によって切られている。出土遺物は少ないが，埋土の状況から近世の遺構と思われる。



第40図　ＳＫ01，02実測図

ＳＫ03　（第41図）

調査区中央の北側において単独で検出された。平面形は長方形を呈し，規模は1.57×1.22ｍ，深さは15㎝である。掘り込みは緩やかであり，埋土は単一層である。底面は平坦で，北側に２個の石が検出された。出土遺物，埋土の状況から判断して近世の遺構と考えられる。



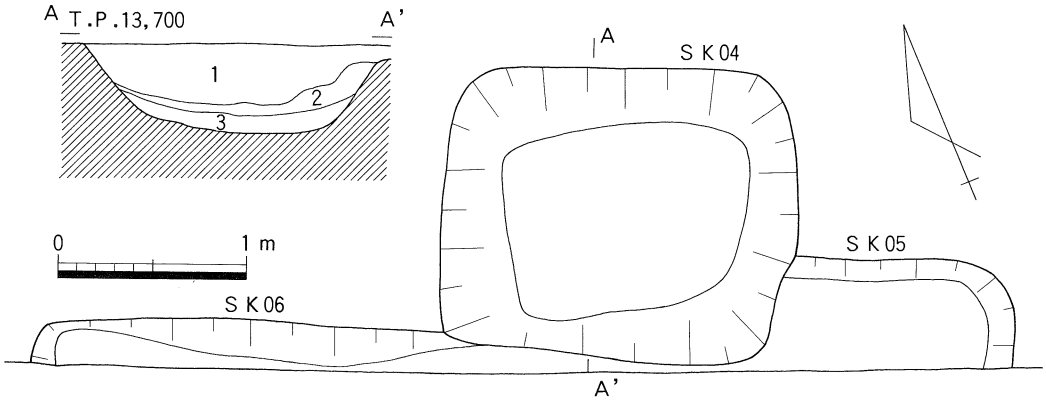
第41図　ＳＫ03実測図

ＳＫ04　（第42図）

調査区中央の南端の位置にあり，ＳＫ05・06と重なり合って検出された。平面形は方形を呈し，その規模は1.90×1.52ｍ，深さ45㎝を測る。底面は中央より西側が少し低くなっている。埋土は白灰色シルト質極細砂であり，３層に細分されレンズ状の自然堆積をしている。ＳＫ05と06を切っている。出土遺物，埋土の状況から近世の遺構と考えられる。ただし，遺構の掘り込みは４ａ層からであり，若干古くなるであろう。

ＳＫ05　（第42図）

調査区中央の南端において，ＳＫ04に西接して検出された。南側は調査区外へのびるため平面形，規模は不明である。深さは20㎝である。埋土は白灰色シルト質極細砂である。埋土の状況より近世の遺構と考えられ，ＳＫ04によって切られている。



第42図　ＳＫ04～06実測図

ＳＫ06　（第42図）

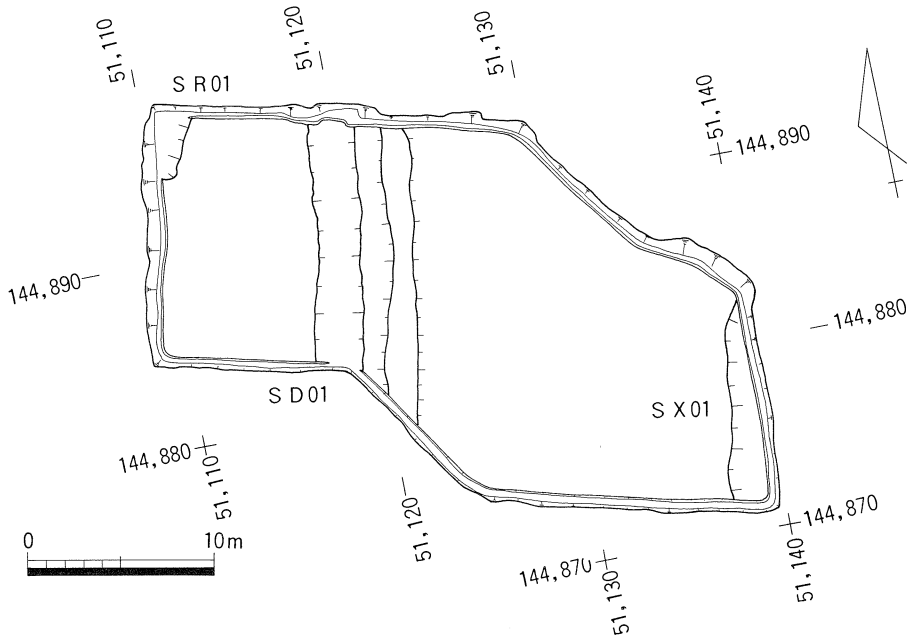
調査区中央の南端において，ＳＫ04に西接して検出された。南側は調査区外へのびるため平面形，規模は不明であるが，長方形を呈すると思われる。深さは15㎝を測る。埋土は白灰色シルト質極細砂の単一層である。ＳＫ04によって切られ，遺物の出土は無いが，その埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

第３節　２区の調査

１　概　　要

調査区の全長は33ｍ，幅20ｍを測り，北側が建設会社資材置き場への搬入路となっているため，不整形な調査区の設定となった。調査以前は荒地となっており，１ｍの厚さで廃土が積まれていたが，その以前は平坦な水田であった。

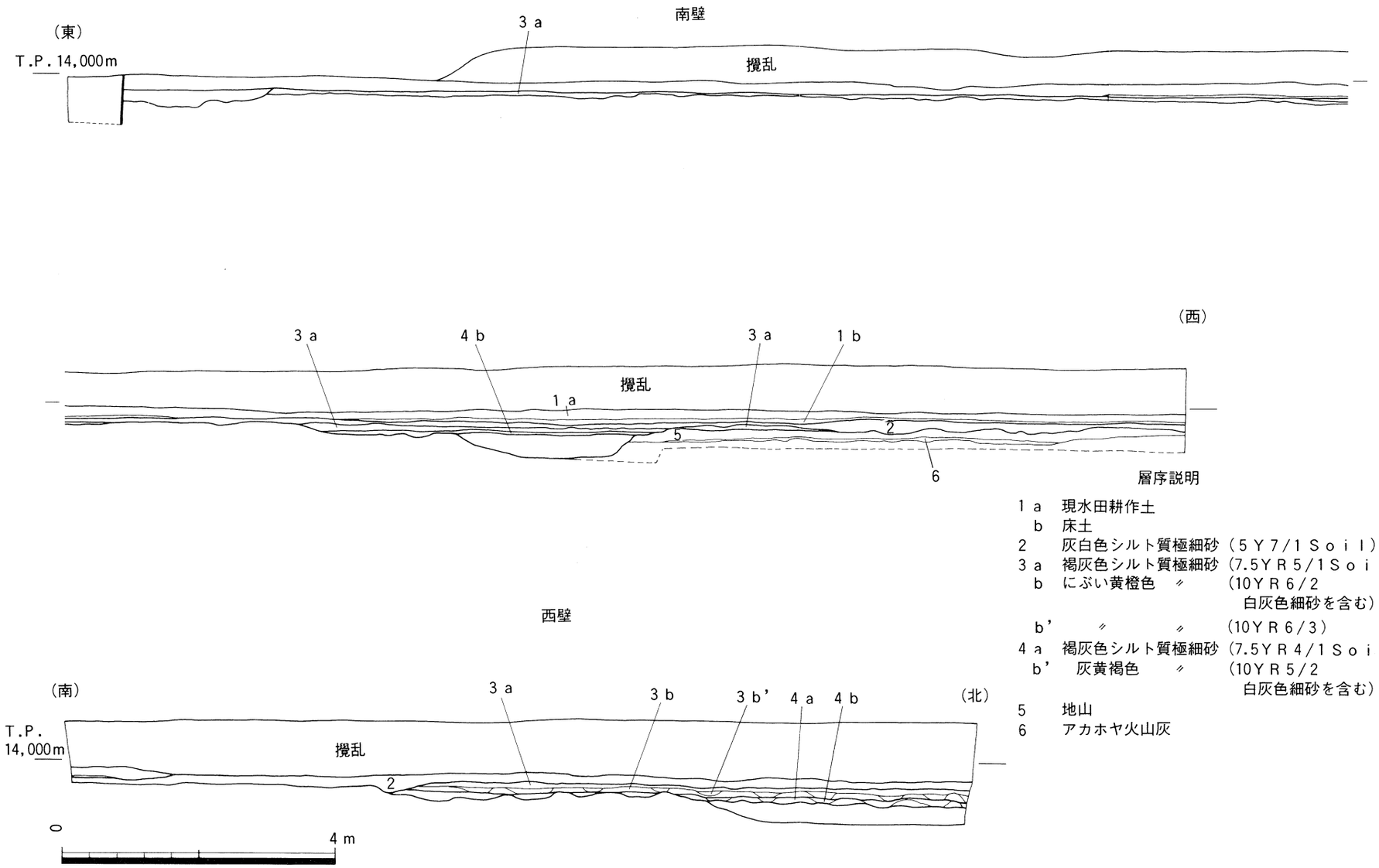
検出された遺構は，弥生時代の旧河道，古代の水田２面とそれに伴う溝と畦畔，近世の落ち込みである。旧河道は調査区北西隅のみの検出であり，１区のＳＲ01の東岸であるのでここでは省略する。水田は調査区中央より以西に検出されている。



第43図　２区遺構配置図

２　基本土層（第44図）

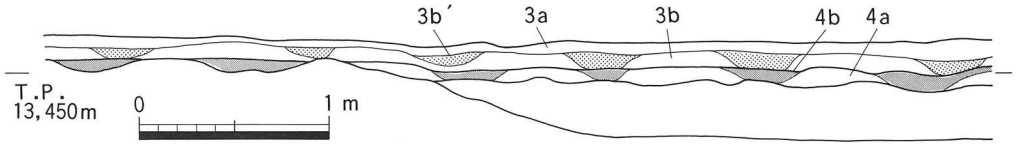
１ｍ近くの廃土の盛り土の下には現水田が一部だけ検出された。その下には近世の水田である２層灰白色シルト質極細砂が全域にみられる。古代の水田である３層，４層は調査区中央より以西に堆積している。この２枚の水田には畝状落ち込みが多数検出された。４層直下は高松平野では従来まで地山と考えられていた灰白色シルトとなっており，その下に火山灰（アカホヤ？）の薄い層があり，以下１ｍの間は５層のシルトが堆積し，最下位は砂礫層となる。



層序説明

1 a　現水田耕作土
　b　床土
2　灰白色シルト質極細砂（5Y7/1Soil）
3 a　褐灰色シルト質極細砂（7.5YR5/1Soil）
　b　にぶい黄橙色　〃　（10YR6/2 白灰色細砂を含む）
　b'　〃　〃　（10YR6/3）
4 a　褐灰色シルト質極細砂（7.5YR4/1Soil）
　b'　灰黄褐色　〃　（10YR5/2 白灰色細砂を含む）
5　地山
6　アカホヤ火山灰

第44図　2区土層図

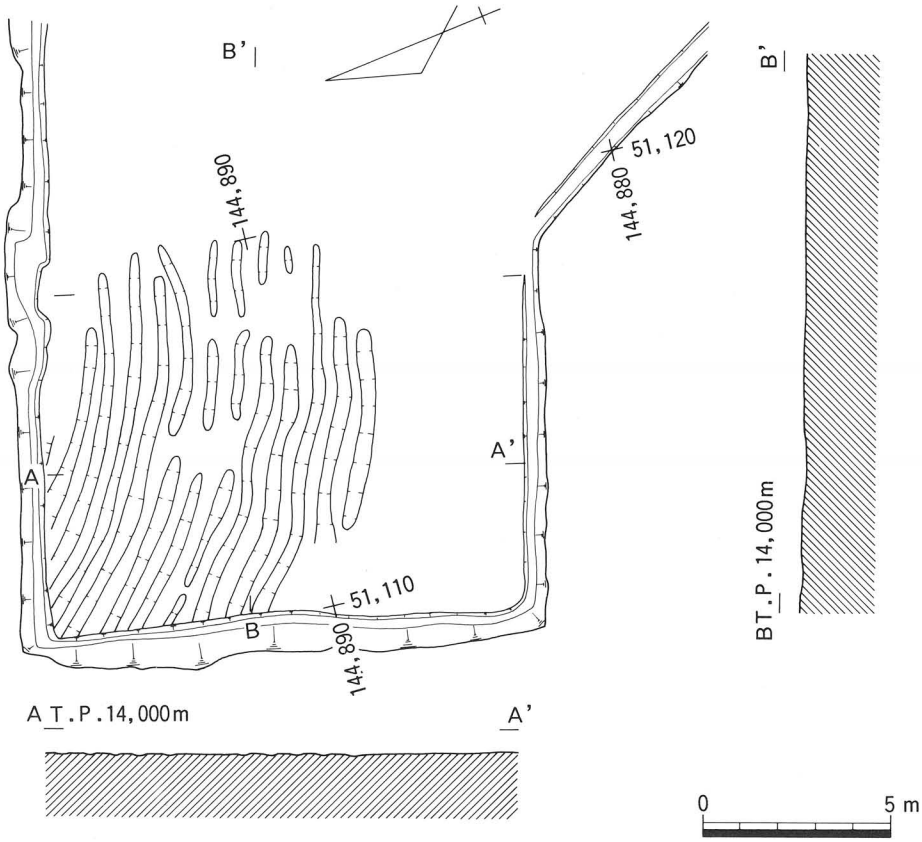


第45図　第Ⅰ・Ⅱ期水田土層図

第Ⅱ期水田　（第46図）

調査区西側に位置し，ＳＲ01とＳＤ01が埋没した後の平坦地と地山を掘り込んでいる畝状遺構が多数検出された。南西隅は地山が次第に上がっており，本来は水田が広がっていたと思われるが，後世の水田によって削平されたと考えられる。

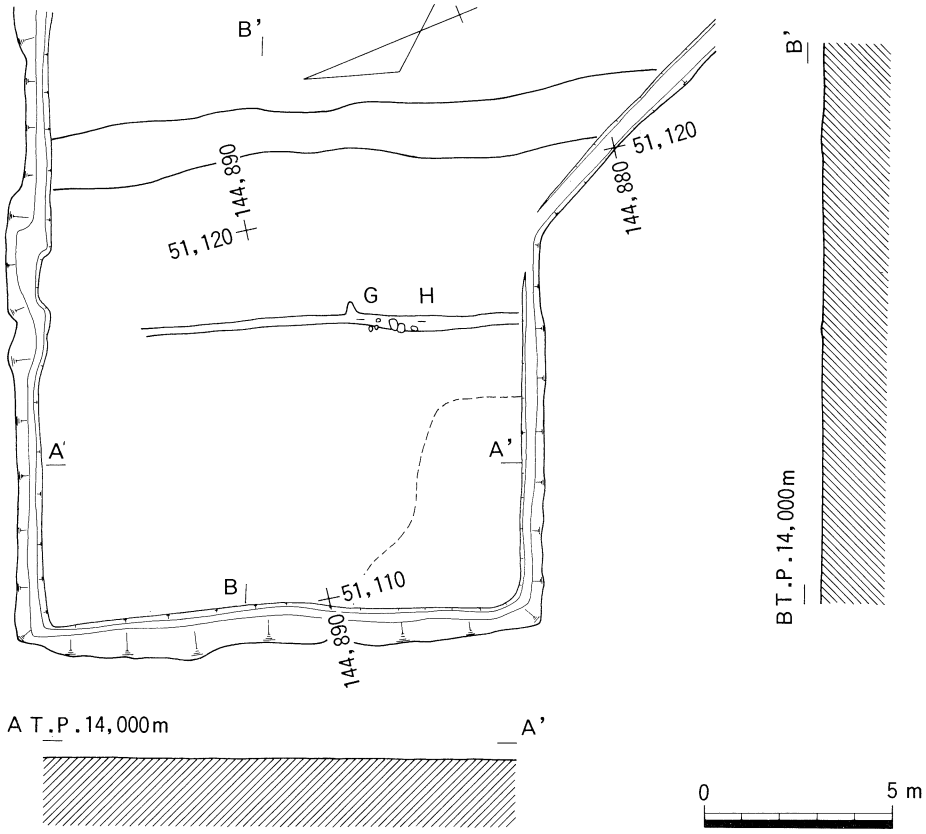
畝の幅は一律に30㎝を測り，僅かに湾曲しながら東西に並列している。畝の上部は３層水田によって削平されている。畝間の溝は８㎝を測り，地山を掘り込んでいる。土層観察によればＳＤ01より東側にはみられない。



第46図　第Ⅱ期水田（耕作痕跡）実測図

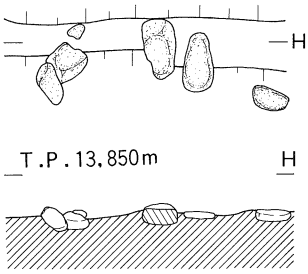
出土遺物はほとんどないが，ＳＤ01の上面に畝がみられることと堆積状況より考えると，ＳＤ01より以後，あまり時間を経ていない時期のものであろう。

第Ｉ期水田　（第47，48図）



第47図　第Ｉ期水田実測図

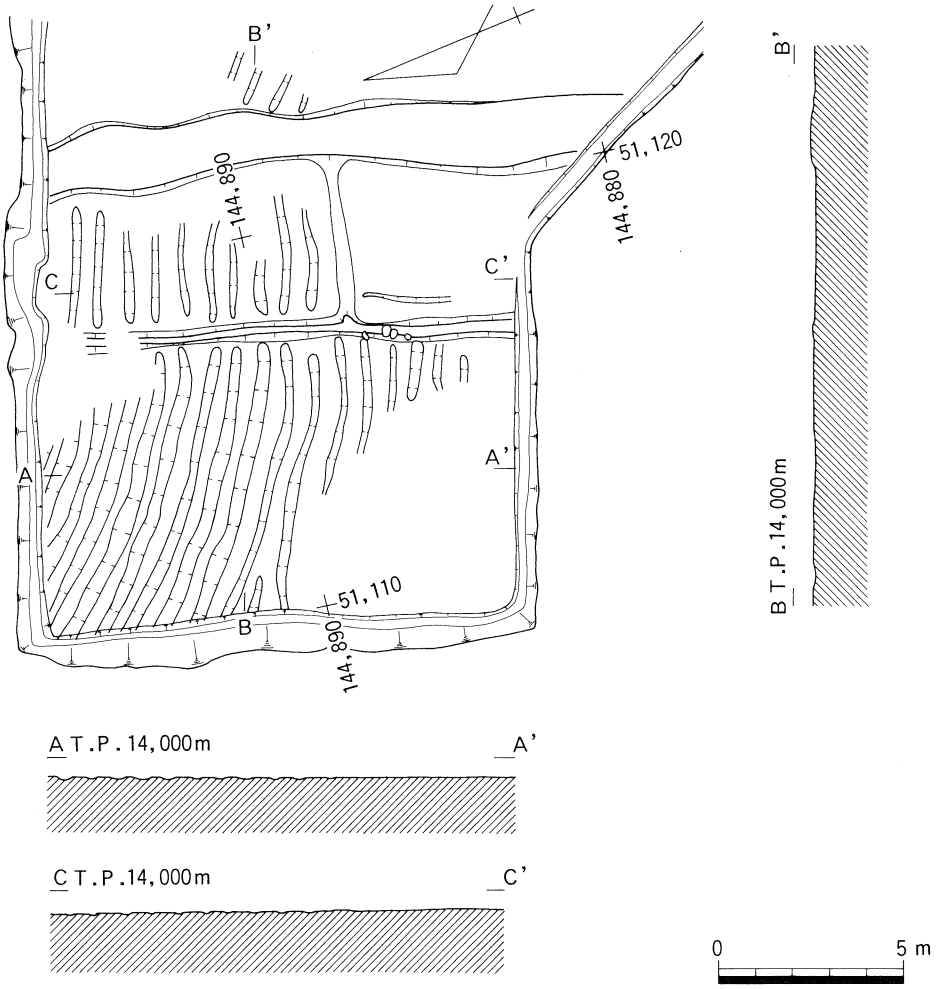
調査区全域に検出された水田であり，土層観察によれば土壌層の褐灰色シルト質極細砂と非土壌層のにぶい黄橙色シルト質極細砂の２層に分けられる。土壌層上面はほぼ平坦であり，標高13.65ｍを示す。調査区南西隅は地山が上がっており，水田層は後世の開発により削平されている。中央部において幅1.5ｍを測る地山の高まりが帯状に延びているのが検出された。方向は南北であり，大畦畔と考えられる。この大畦畔より約4.5ｍ西側において平行して延びる小畦畔が検出された。幅は20㎝である。畦畔の南端は地山整形によるもの



第48図　第Ｉ期水田水口実測図

であるが，北側は盛土となっている。小畦畔中央部に東方へ僅かに突出している部分があり，その南側には大小６個の石が畦畔上に並べられている。おそらく水口であると考えられる。

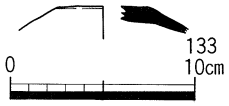
土壌層を取り除いた非土壌層上面において，小畦畔の痕跡，畝状遺構が検出された。小畦畔は前述した小突起部から東へ延びて大畦畔に達しており，幅40㎝を測りわずかに高くなっている。この大畦畔・小畦畔によって少なくとも４面の水田が区画されていた。水田①には幅30㎝の畝状遺構がわずかに湾曲しながら東西方向に並列している。畝間の溝は４～８㎝の深さで17条検出された。水田②は南北方向に長軸を持ち，水田①と同方向に畝状遺構がみられる。



第49図　第Ⅰ期水田（耕作痕跡）実測図

畝の幅は50㎝前後を測り，畝間の溝は３㎝の深さで10条検出された。水田③は南北方向に長軸を持ち，同方向に畝間の溝が１条検出された。水田④には畝間の溝が４条検出された。

この水田からの遺物の出土はわずかであるが，その堆積状況から判断して当該時期の範囲内に収まるものと考えられる。



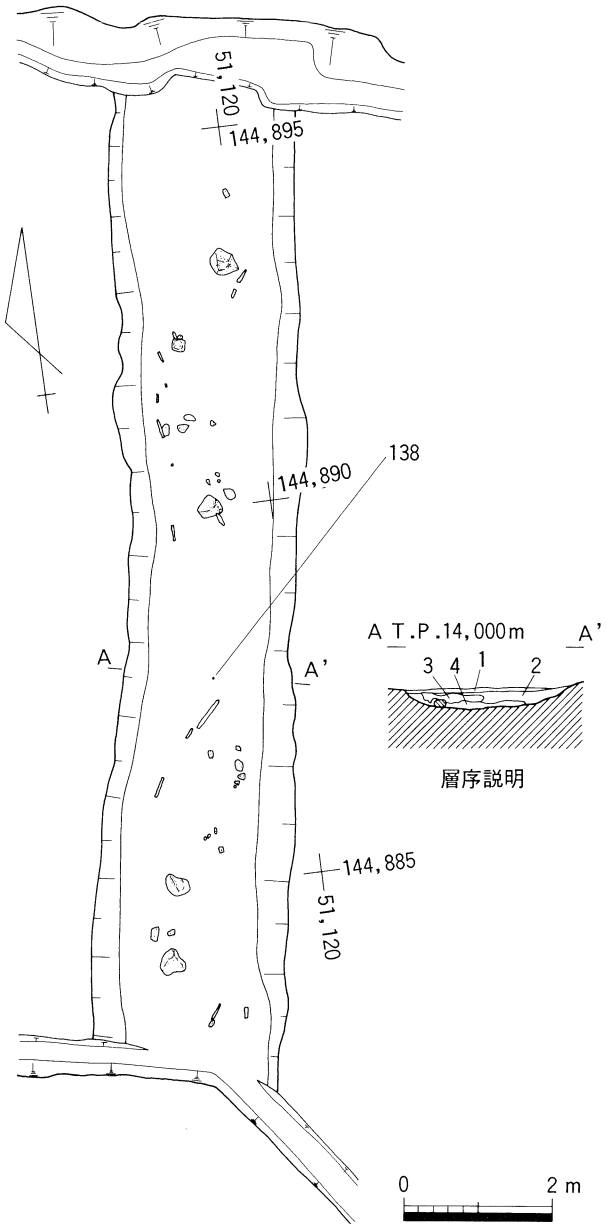
第50図　第Ⅰ期水田出土遺物

３層出土遺物　（第50図）

133は須恵器の坏蓋天井部である。厚めの天井部から直線的に外側に広がる体部をもつものであり，口縁部は欠損しているため，全体の状況は不明である。調整は底部外面ヘラ切り，体部内外面はヨコナデを施す。

ＳＤ01　（第51図）

調査区中央やや西寄りにおいて検出された。検出全長は13ｍであり，幅2.5ｍ，深さ28㎝を測る。方向は南北である。断面は非常に緩やかなＵ字形を呈し，底面は平坦であるが，そのレベルは北側に行くに従い若干低くなっている。水は南から北に流れていたと考えられる。埋土は４層に分けられ，最上の１層は水田層の一部と思われ，２～４層は白色砂層であり，その堆積状態は不規則である。底面直上には板材を含む植物遺体，大小の石が多量に出土し，須恵器の坏など僅かな土器も出土した。流水の影響による底面のえぐれや埋土より多量の水がかなり早く流れていたと考えられる。

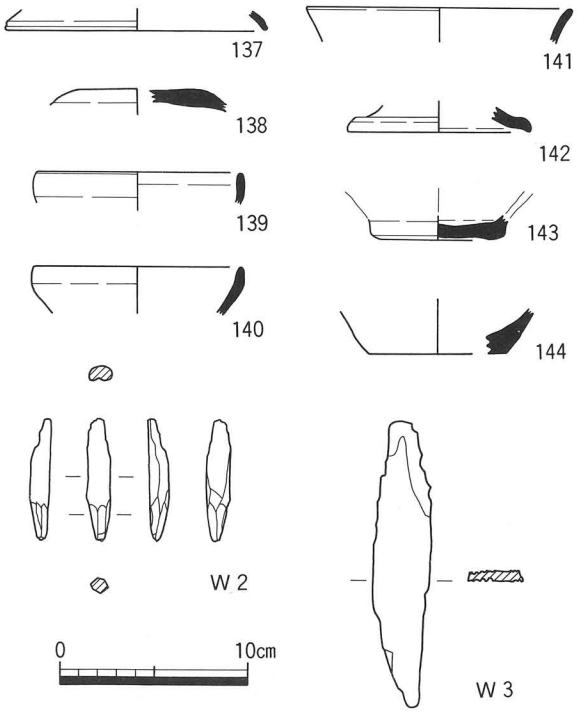


第51図　ＳＤ01実測図

ＳＤ01出土遺物　（第52図）

137，138は須恵器の坏蓋である。

139，140は須恵器の坏身である。いずれも調整はヨコナデである。141は外反する口縁部をもつ坏身である。端部は丸く終わる。142は須恵器の高坏脚部である。脚端部は屈曲し，広がる。143は円盤状高台をもつ土師器坏である。底部はあまり安定していない。調整は磨滅のため不明である。144は弥生土器の底部である。これらの遺物は７～８世紀代の遺物を多く含むが，143の土師器坏が11世紀中頃の所産であることより，溝の機能していた時期も，ほぼこのころの時期であると考えられる。Ｗ２は小形の先端加工木である。先端は６面からの加工が行われている。Ｗ３は板材である。



第52図　ＳＤ01出土遺物実測図

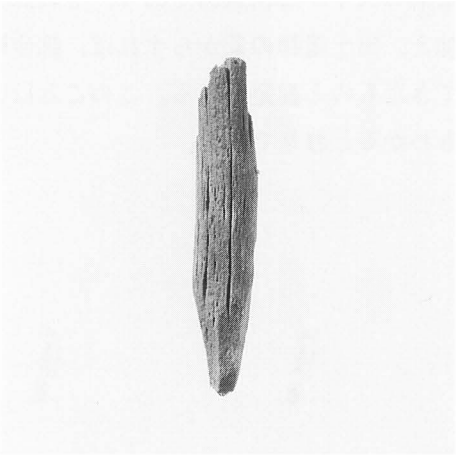


写真４　ＳＤ01出土先端加工木

ＳＸ01（第43図）

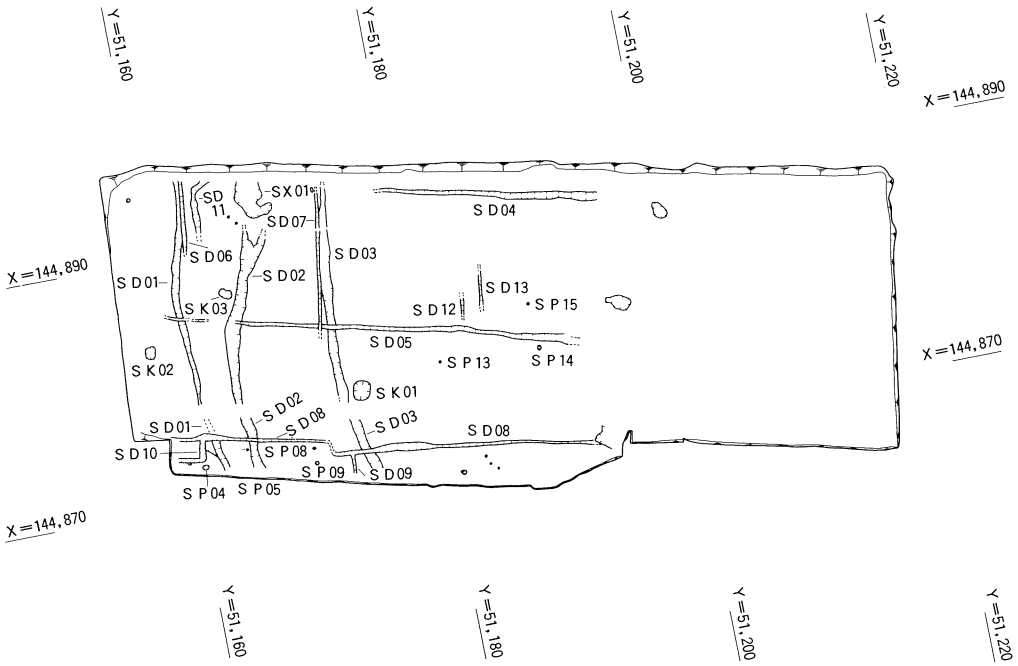
調査区東端において検出され，調査区外にのびている。深さは17㎝であり，埋土は白灰色中～粗砂の単一層である。その堆積状態は洪水によるものと考えられる。遺物の出土はないが，近世の水田層から掘り込んでいる。

第4節　3区の調査

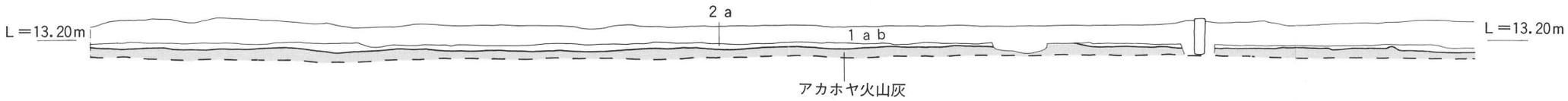
1　概　　要

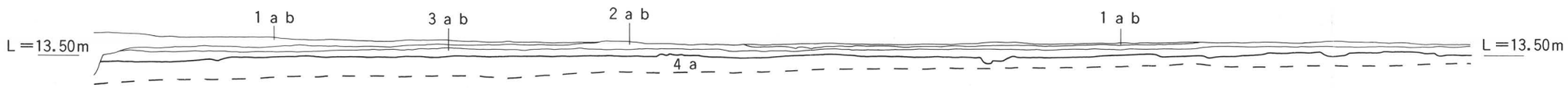
3区は県道中徳・三谷・高松線（県道158号線）の東側に位置する。北側に未退去家屋が存在する為，南北幅の狭い東西に長い調査区となった。調査区は東西62m，南北25.5mであり，調査面積は1,480㎡である。

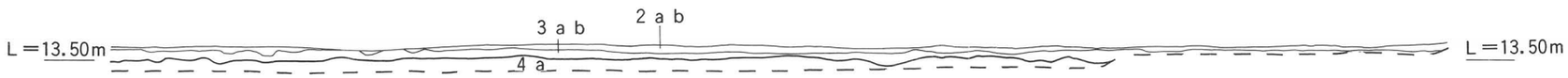
検出した遺構は，弥生時代後期－溝状遺構3，土坑1，水田遺構（古代～中世土壌層－畦畔は確認できず）1，近世－溝状遺構7，土坑3，性格不明遺構1であり，遺構密度は希薄である。検出した遺構からの遺物量は少なく，時期を決定するのが困難なものが多い。検出できた遺構の大半が溝状遺構であり，それ以外の遺構についても集落を想定できるものはないことに加え，出土遺物の量からすれば，弥生時代から現代に至るまで水田等の生産域として利用されてきたものと推定される。このことは県道を挟んで調査を行った1，2区の調査の状況を見てもわかるとおりである。

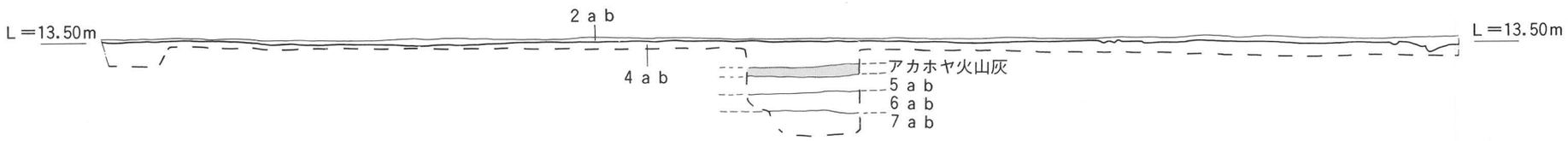


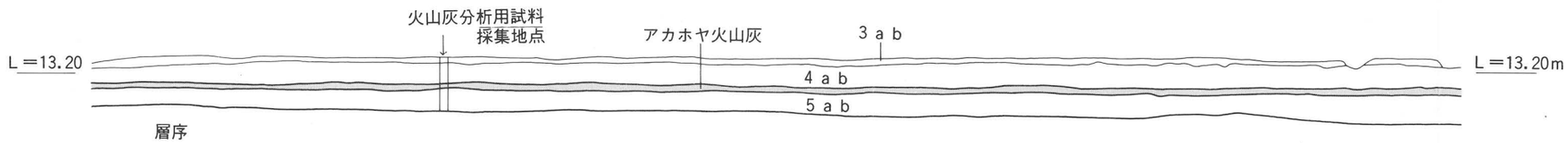
第53図　3区遺構配置図











層序

1 a b　現耕作および床土
2 a b　旧耕作および床土
3 a　灰黄褐色シルト（10Y R 5/2）
3 b　〃　（10Y R 6/2）
4 a　灰褐色シルト（7.5Y R 7/2）
4 b　褐灰色シルト（7.5Y R 6/1）
b　アカホヤ火山灰（7.5Y R 5/1）
5 a　赤褐色シルト（5 Y R 4/6）
5 b　明黄褐色粘性シルト（10Y R 7/6）
6 a　灰黄褐色シルト（10Y R 6/2）
6 b　褐灰色シルト（7.5Y R 6/1）
7 a　灰オリーブ色シルト質極細砂（7.5Y 6/2）
7 b　緑灰色細砂（5 G 6/1）

第54図　3区　調査区内土層図

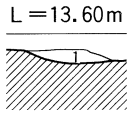
2　基本土層（第54図）

３区の基本土層は，上から１層－現耕作土，２層－旧耕作土，３層－段差のある東部以外の調査区全域に存在する奈良～平安時代にかけての水田土壌層ａ層灰褐色シルト（10YR５／２），ｂ層灰黄褐色シルト（10YR６／２）が堆積している。３層上面において畦畔等の水田遺構の検出に努めたが土壌層の残りが上部からの攪乱により，検出することができなかった。３層は南側にいくにしたがい残りはよかったが，調査区の北半分では土壌層がほとんど残っていなかった。４層以下は部分的な土層の確認であるため全体の広がりは不明である。４層はab層存在する淡黄色シルト（2.5Y８／４）縄文時代晩期以降の遺構面である。４層の上面から30㎝下に鬼界・アカホヤ火山灰が，層厚10㎝の幅で水平に堆積している。５層はab層存在し，ａ層赤褐色シルト（５YR４／６），ｂ層明黄褐色粘性シルト（10YR７／６），６層も同様でａ層灰黄褐色シルト（10YR６／２），ｂ層褐灰色シルト（7.5YR６／２），７層ａ層灰オリーブ色シルト質極細砂（7.5Y６／２），ｂ層緑灰色細砂（５G６／１）である。

3　弥生時代の遺構と遺物

ＳＤ01　（第55図）

調査区西端に位置する南北溝である。溝の規模は幅0.5ｍ，深さ0.1ｍを測る。土層埋土は，褐灰色シルト（５YR４／１）の単一層である。出土遺物は弥生土器が数片出土しているが，時期決定が行える土器はない。

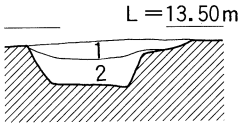


１．褐灰色シルト（５ＹＲ４/１）

第55図　ＳＤ01土層図

ＳＤ02　（第56図）

ＳＤ01の東側に位置する南北溝で途中で消滅する。溝の規模は幅0.9ｍ，深さは最も深いところで0.23ｍを測る。土層埋土は２層に分かれ，上から１褐灰色シルト（7.5YR４／１），２灰褐色シルト（7.5YR４／２）である。出土遺物は凹基式の打製石鏃が１点出土している。調整は丁寧で，基部の抉りはきつく入るもので，縄文時代まで遡る可能性がある。



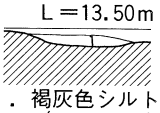
１．褐灰色シルト（7.5ＹＲ４/１）
２．灰褐色シルト（7.5ＹＲ４/２）

第56図　ＳＤ02土層図

ＳＤ03　（第57図）

ＳＤ02の東側に位置する南北溝で，ＳＤ02同様途中で消滅する。溝の規模は幅0.6ｍ，深さは最も深いところで0.06ｍを測る。出土遺物はない。

これらの３本の溝は同様な埋土を持ち，同様の規模を持つことから，同様の機能を有していたと考えられる。

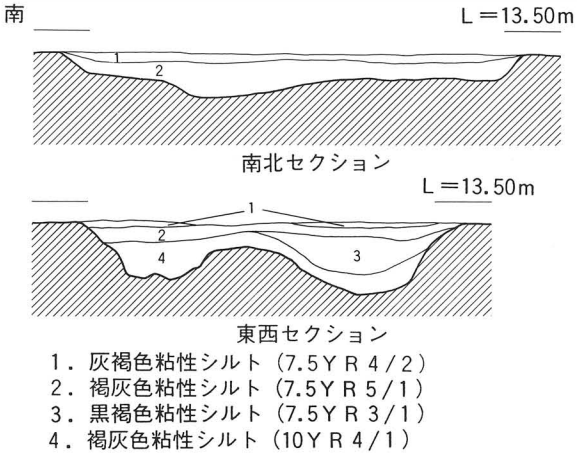


１．褐灰色シルト（５ＹＲ５/１）

第57図　ＳＤ03土層図

ＳＸ01　（第58図）

ＳＤ02の北側に存在する不整形の土坑である。規模は南北2.45ｍ，東西2.05ｍ，深さ0.45ｍを測るが，中央部が浅い。土層埋土は４層に分層でき，上から１灰褐色粘性シルト（7.5YR４／２），２褐灰色粘性シルト（7.5YR５／１），３黒褐色粘性シルト（7.5YR３／１），４褐灰色粘性シルト（10YR４／１）である。出土遺物は弥生土器後期後半以降と考えられる壺頸部片が数点出土しているのみであり，細かな時期については不明である。



第58図　ＳＸ01土層図

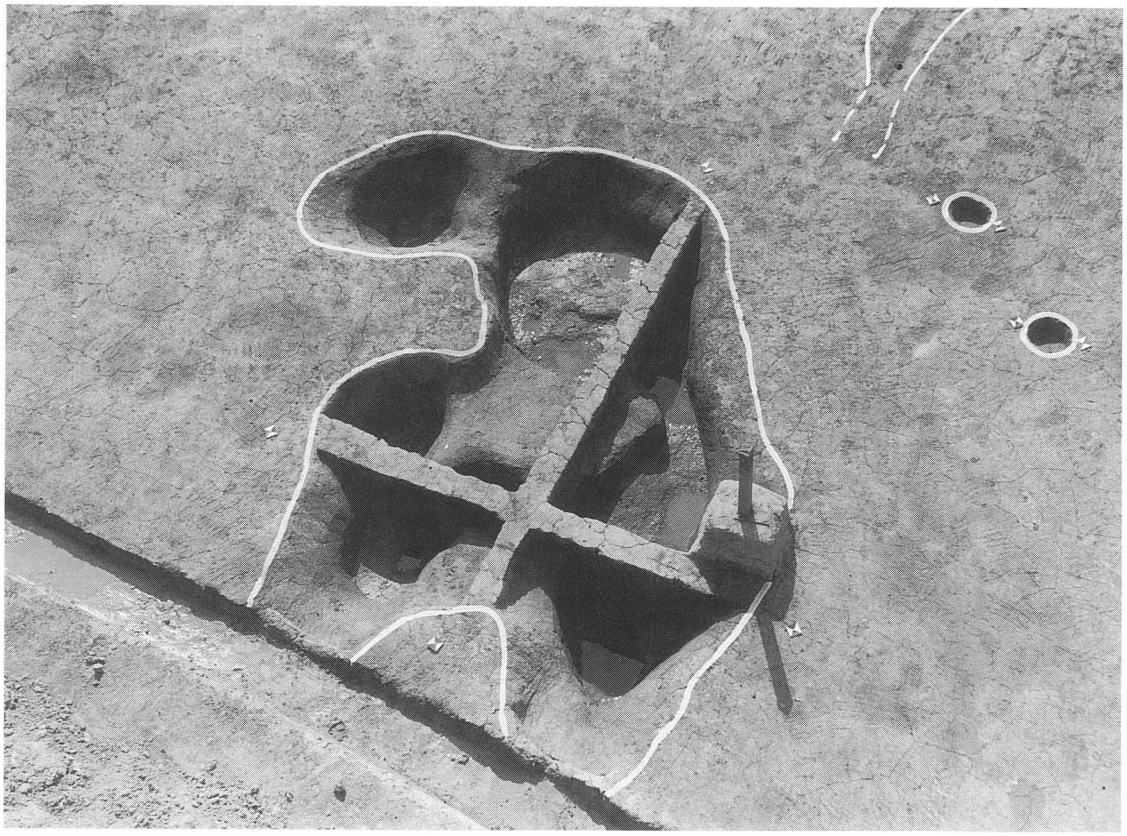


写真５　ＳＸ01完掘状況

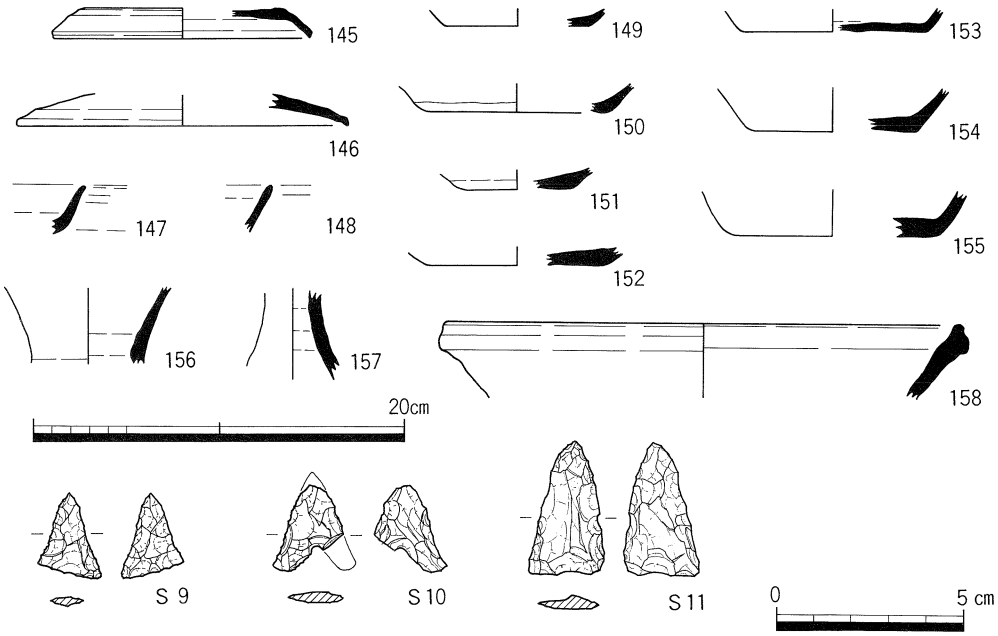
4　古代～中世の遺構と遺物

水田土壌層

調査区全域に広がる土壌層で，平均10㎝の層厚を持つ。1，2層を除去した段階で，土層断面および平面において水田畦畔の検出につとめたが，残念ながら畦畔を検出することができなかった。この原因は上層である2層が土壌層である3層まで深く入り込んでおり，畦畔が存在したとしても，すでに削平されたものと考えられる。3層の上層の標高は，最も高いところが13.66ｍ，最も低いところで13.55ｍであり，25ｍで10㎝傾斜する緩やかな地形である。土壌層は古代～中世を中心とする土器および混入と考えられる弥生時代の遺物もみられる。

土壌層（灰褐色シルト）出土遺物（第59図）

145，146は須恵器の坏蓋である。145は口縁部から天井部の屈曲が明瞭であるのに対して，146は不明瞭で，天井部中央部がやや高くなるものと考えられる。147は皿，148は坏の小片である。149，150は土師器の坏であろうか。151，152は須恵器の坏である。底部はヘラ切りが行われている。153～155も須恵器の坏である。底部はいずれもヘラ切りが行われている。155は153，154に比べ厚いつくりである。156は須恵器の壺頸部である。小片であるため，全体の状況は不明である。157は須恵器の高坏脚部である。内面はロクロ痕が残る。158は東播



第59図　3層出土遺物実測図

系のこね鉢である。口縁部がやや肥厚するもので，口縁端部外面が窪む。出土遺物のうち，一部9世紀頃まで遡る遺物も含まれるが，最も新しいと考えられる158の東播系のこね鉢が13世紀後半頃と考えられるため，当土壌層の所属時期についてもこの頃の所産であると考えられる。S 15～17は打製の石鏃である。S 15,16は凹基式，S 17は平基式である。調整はいずれも粗いつくりである。S 17はやや大形である。

5　近世の遺構と遺物

ＳＤ04　（第60図）

調査区北端に存在する東西溝である。残存状況は悪く，両側とも途中で消滅する。溝の規模は，幅0.4ｍ，深さ0.08ｍ，検出長18ｍを測る。土層埋土は明褐灰色シルト質極細砂（7.5YR 7／1）の単一層である。出土遺物は須恵器，土師器，染付磁器等が出土している。

出土遺物　（第61図）

159は土師器の皿である。160は須恵器の坏小片である。161は須恵器の坏底部であろうか，底部にはヘラ切りが行われている。

ＳＤ05　（第60図）

調査区中央部に存在する東西溝である。残存状況は悪く，ＳＤ04と同様両側とも途中で消滅する。溝の規模は，幅0.25ｍ，深さ0.1ｍ，検出長32ｍを測る。土層埋土は灰褐色砂混じりシルト（5 YR 6／2）の単一層である。出土遺物は土師器の甕が1点出土している。

出土遺物　（第61図）

162は土師器の甕である。胴部以下を欠損していて不明であるが，長胴の体部になるものと考えられる。調整は胴部外面に粗いハケメを施し，他はナデ調整である。

ＳＤ06　（第60図）

調査区西端に存在する南北溝である。残存状況は悪く，南側は途中で消滅する。溝の規模は幅0.25ｍ，深さ0.04ｍ，検出長6ｍを測る。土層埋土は灰黄褐色シルト質極細砂（10YR 6／2）の単一層である。出土遺物はない。

ＳＤ07　（第60図）

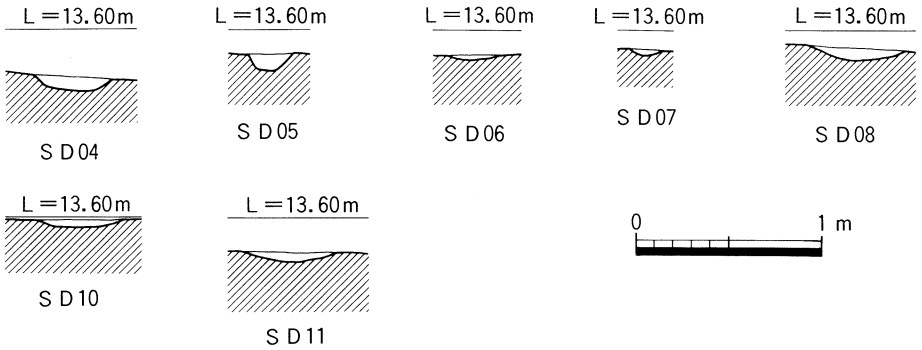
調査区中央部に存在する南北溝である。この溝も他の溝と同様，残存状況は悪い。溝の規模は幅0.15ｍ，深さ0.04ｍ，検出長11ｍを測る。土層埋土は灰黄褐色シルト質極細砂（10YR 6／2）の単一層である。出土遺物はない。

ＳＤ08　（第60図）

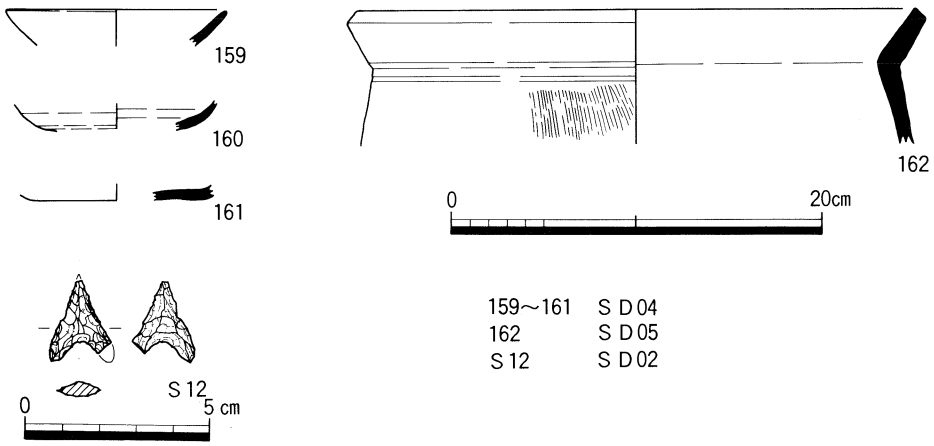
調査区南端に存在する南北溝である。西端でＳＤ10，中央部でＳＤ09が合流する。溝の規模は幅0.55ｍ，深さ0.06ｍを測る。土層埋土は灰黄褐色シルト質極細砂（10YR 6／2）の単一層である。出土遺物はない。

ＳＤ09　（第60図）

調査区南端中央に存在する溝で，ＳＤ08に合流する。溝の規模は幅0.30ｍ，深さ0.10ｍを測る。土層埋土は灰褐色シルト質極細砂（7.5YR 6／2）の単一層である。出土遺物はない。



第60図　ＳＤ04～08，10，11土層図



第61図　ＳＤ02，04，05出土遺物実測図

ＳＤ10　（第60図）

調査区西端に存在する溝で，西端から直角に曲がりＳＤ08に合流する。溝の規模は幅0.45ｍ，深さ0.04ｍを測る。土層埋土は灰黄褐色シルト質極細砂（10YR 6／2）の単一層である。出土遺物はない。

ＳＤ11　（第60図）

調査区西端に存在する南北溝で，一部のみの検出である。溝の規模は幅0.5ｍ，深さ0.06ｍを測る。土層埋土は褐灰色シルト（5 YR 5／1）の単一層である。出土遺物はない。

ＳＫ01

調査区中央部，ＳＤ03の東側に存在する不整形の土坑である。規模は南北1.50ｍ，東西1.35ｍを測る。土層埋土は明褐灰色シルト質極細砂（7.5YR 7／1）の単一層である。出土遺物はない。

ＳＫ02

調査区西端に存在する不整形の土坑である。規模は東西0.8ｍ，深さ0.08ｍを測る。土層埋土は灰褐色シルト（5 YR 6／2）の単一層である。出土遺物はない。

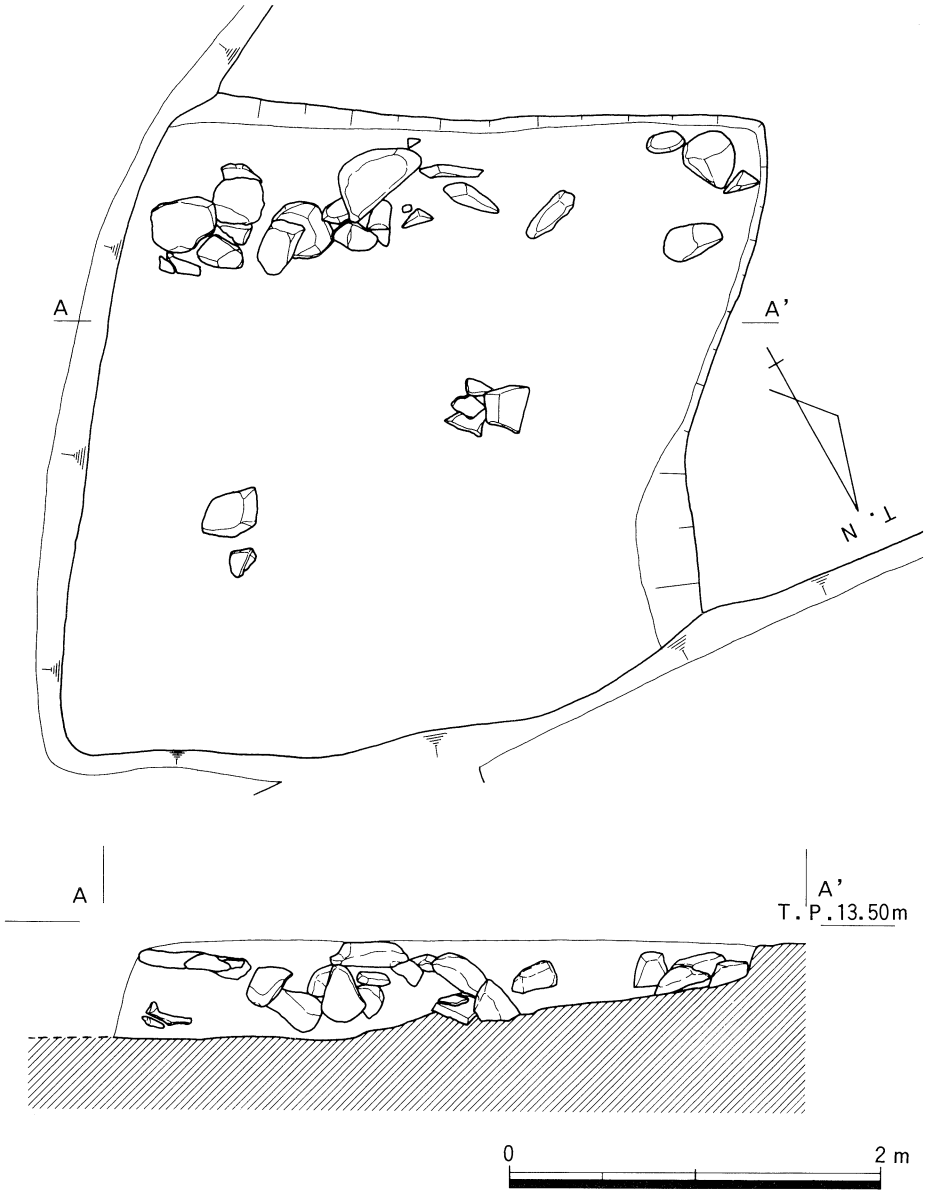
ＳＫ03

調査区西側ＳＤ02の西側に存在する不整形の土坑である。規模は東西1.05ｍ，深さ0.04ｍを測る。土層埋土は灰褐色粘性シルト（7.5YR 6／2）の単一層である。出土遺物はない。

ＳＸ02　（第62図）

調査区中央部南端に存在する遺構である。遺構の北側および東側は後世の地下げにより消滅している。南端にはφ20～30㎝大の河原石を積み上げた石列が存在する。残存部の状況では四角形状を呈する落ち込みである。最も深い東側部分で0.50ｍ，浅い西側部分で0.20ｍの規模を持つことより消滅している東側は，もう少し深いものと考えられる。

出土遺物には近世の瓦，陶磁器片等が出土しているが，いずれも図示できていない。



第62図　ＳＸ02実測図

近世ピット群

調査区北東隅を中心に近世頃と考えられるピット群を確認したが，掘立柱建物等を形成するようなまとまりがみられなかった上，深さも浅く出土遺物もないことから，ここでは一括して一覧表にしてまとめた。

Pit番号	規模（m）		埋　　土
	直径	深さ	
SP01	0.25	0.10	灰褐色粘性シルト（7.5YR 6／2）
02 03 04			
05	0.25	0.08	灰褐色粘性シルト（7.5YR 6／2）
06	0.25	0.10	灰褐色粘性シルト（7.5YR 6／2）
07	0.25	0.12	灰褐色粘性シルト（7.5YR 6／2）
08	0.20	0.10	褐灰色シルト質極細砂（7.5YR 6／1）
09	0.30	0.10	灰褐色シルト質極細砂（7.5YR 6／2）
10	0.20	0.08	褐灰色粘性シルト（5 YR 4／1）
11	0.15	0.08	褐灰色粘性シルト（5 YR 4／1）
12	0.20	0.15	褐灰色粘性シルト（7.5YR 4／1）
13			
14	2.40	0.12	褐灰色シルト質極細砂（7.5YR 6／1）
15	2.40	0.12	鈍い黄橙色シルト質極細砂（10YR 7／2）

第３表　近世ピット計測一覧表

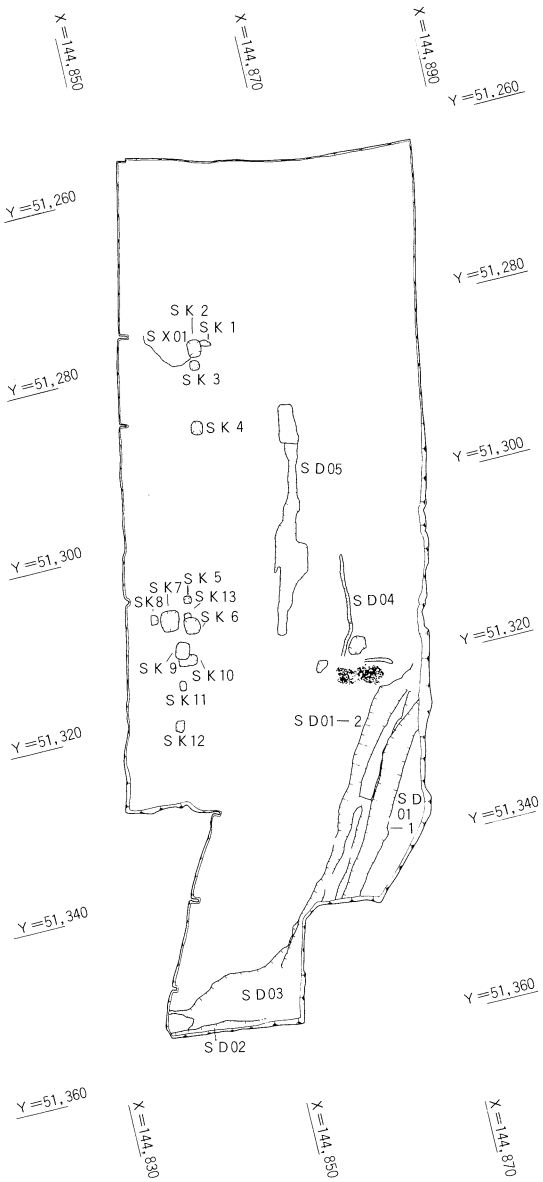
第５節　４区の調査

１　概　　要（第63図）

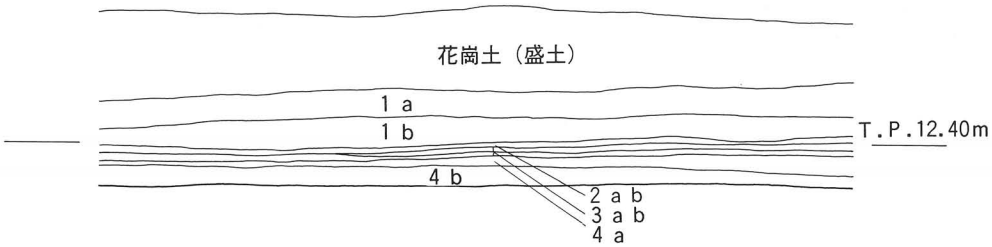
４区についても３区の遺構検出状況と同様，残存状況は悪い。調査前の状況では，調査区中央部北寄りに居石２号塚（仮称）が確認されていた以外，遺跡の存在は知られていなかった。遺構の広がりは，調査区南側の一段高い部分は後世の削平を多分に受けているためか，弥生時代に属すると考えられるＳＸ01を除けば，近世に属すると考えられる遺構ばかりである。最も低い北東部分に弥生時代の溝（ＳＤ01）がかろうじて残っている状況である。

２　基本土層（第64図）

調査区北側低地部分の状況を見ると，現在の水田層及び床土である１層があり，２層はにぶい黄橙色シルト質極細砂（10YR７／３）であり，低地部に薄く堆積する土壌層である。３層はａにぶい黄橙色シルト質極細砂（10YR７／３）と，ｂ灰黄褐色砂質シルト（10YR６／２）に分かれる水田層である。低地部に２層と同様薄く全域に堆積している。４層ａ層黒褐色シルト（10YR２／３），ｂ層黒褐色シルト（５YR３／１）の２層に分かれ，他の層に比べやや厚く堆積しており，ＳＤ01－１　１期の埋土にもなっている。ＳＤ01－１　２期はこの層を切り込んでつくられている。５層ｃ層灰色粗砂（５Ｙ４／１）のみである。この層は部分的な堆積でありＳＤ01の最下層に堆積する。その下に縄文時代晩期以降と考えられる遺構面が存在する。



第63図　４区遺構配置図



第64図　4区基本土層図

3　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構（一部古墳時代初頭の可能性のある時期のものを含む）は，調査区東北部の低地部に存在するＳＤ01－１，２，やや高い部分に存在するＳＤ04，最も高い部分に存在する性格不明遺構ＳＸ01の４遺構であるが，いずれの遺構の残りが悪く出土遺物が少ない為，時期決定にはやや不安がある。

ＳＤ01－１，２　（第65図）

調査区東北部において確認した，東南東－西南西を向く溝である。検出した当初，１本の溝として発掘を進めたが，調査途中で２本に分かれることがわかり，北側をＳＤ01－１，南側をＳＤ01－２として調査を行った。

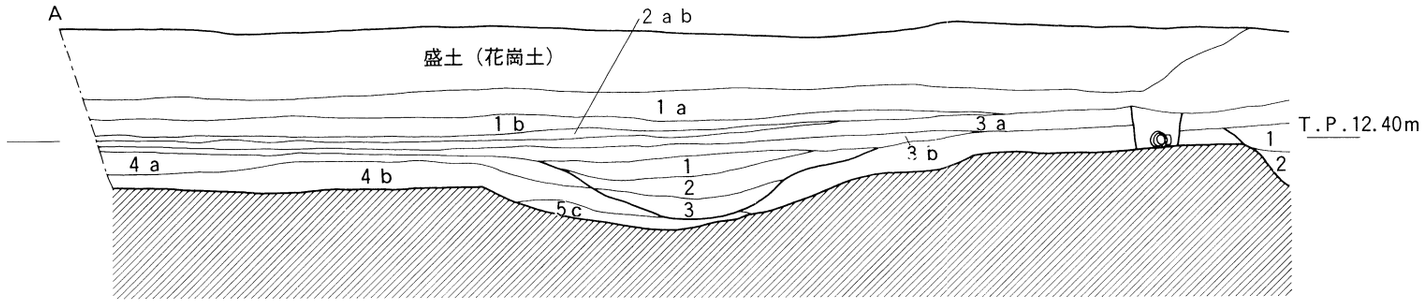
写真６　ＳＤ01遺物出土状況

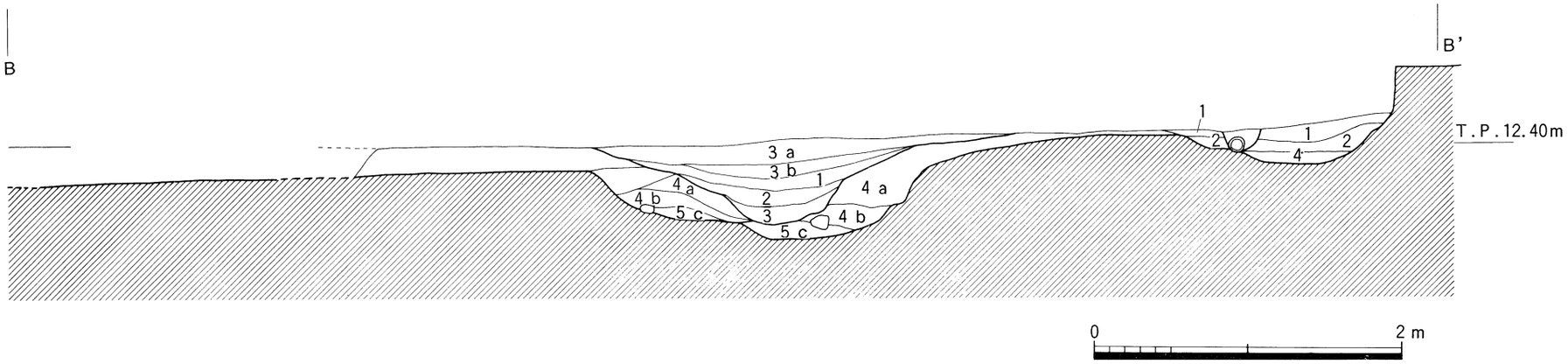
ＳＤ01－１

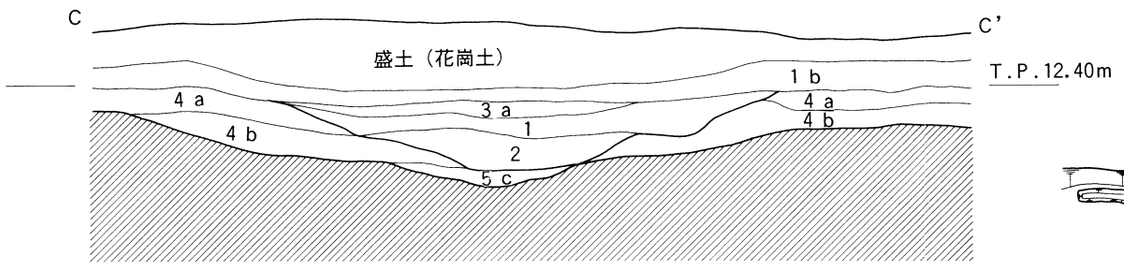
土層堆積状況からすれば２期に分かれる。

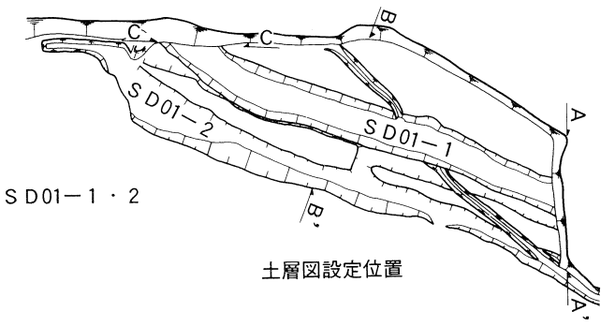
１期－中央部が深く両側が浅く広がるため正確な規模は不明であるが，溝の規模は幅3.40ｍ，深さ0.66ｍを測る。土層堆積層の４ａ，４ｂ，５ｃ層がこの時期に対応する。

２期－１期の溝が埋没した後，同位置で掘削される溝である。断面形状はＵ字形を呈し，溝









土層図設定位置

層序

1 a	現耕作土		1	黒褐色シルト	（10Y R 3/2）
1 b	床土		2	黒褐色粘性シルト	（10Y R 3/1）
2 a b	にぶい黄橙色シルト質極細細砂	（10Y R 7/3）	3	黒褐色砂質シルト	（10Y R 3/1）
3 a	にぶい黄褐色シルト	（10Y R 5/4）	4	褐灰色細砂	（10Y R 5/1）
3 b	灰黄褐色砂質シルト	（10Y R 6/2）			
4 a	黒褐色シルト	（10Y R 2/3）			
4 b	黒褐色シルト	（5 Y R 3/1）			
5 c	灰色粗砂	（5 Y 4/1）			

SD01－1・2

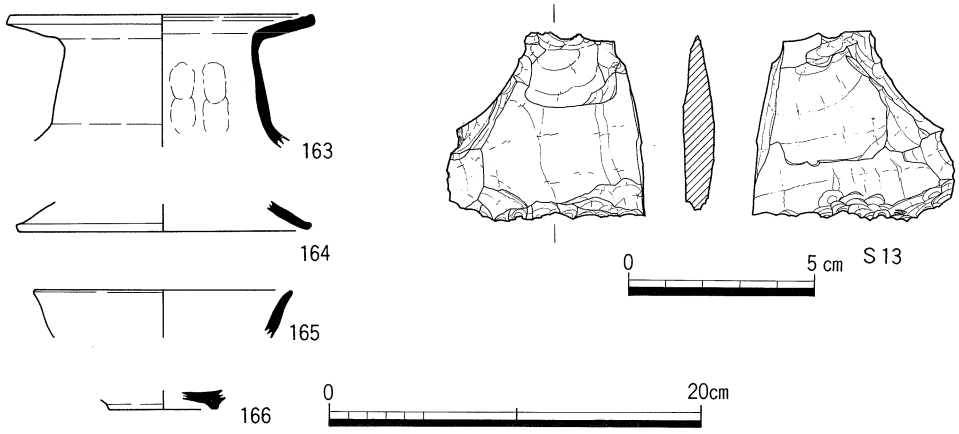
第65図　SD01土層図

の規模は幅2.70ｍ，深さ0.54ｍを測る。土層堆積層の１～３層がこの時期に対応する。この時期の溝はＳＤ02－２と同時期に機能していたものと考えられる。

いずれの時期の溝も堆積物の状況から徐々に埋没していったものと考えられる。少ない出土土器から推定すれば弥生時代後期末頃の時期が考えられる。

ＳＤ01－１　出土遺物　（第66図）

163は広口壺である。やや内傾する頸部から屈曲し，水平方向に広がる口縁部をもつ。口縁部内面に凹線状の窪みが認められる。164は高坏の脚部片と考えられるもので，端部がやや肥厚する。165，166はＳＤ01が機能を失い遺構が埋没した段階の層から出土したものである。165は土師器の皿である。口縁端部がやや外反する。調整は磨滅のため不明である。166は椀底部である。しっかりした高台を持つが，調整は163と同様磨滅のため不明である。３は下縁部に調整をもつスクレイパーである。調整はあまり丁寧ではなく粗い。上縁部に比べ下縁部のほうが厚く作られていることより，上下が逆であるのかもしれない。



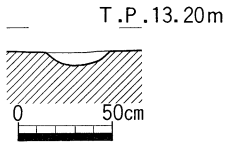
第66図　ＳＤ01出土遺物実測図

ＳＤ01－２

ＳＤ01－１とほぼ同様な方向を向く溝であり，ＳＤ01－１の南側において確認した。溝の規模は幅1.40ｍ，深さ0.26ｍの規模を持つ。土層堆積層の１，２，４層がこの溝の堆積層である。出土遺物はないが，土層堆積状況からＳＤ01－１同様，弥生時代後期末頃の時期が考えられる。

ＳＤ04　（第67図）

居石２号塚の南側において確認した東西溝である。検出長11.70ｍ，溝幅1.32ｍ，深さ0.10ｍの規模を持ち，東西とも伸びずに消滅する。土層埋土は灰黄褐色砂質シルト（10YR６／２）の単一層で



第67図　ＳＤ04土層図

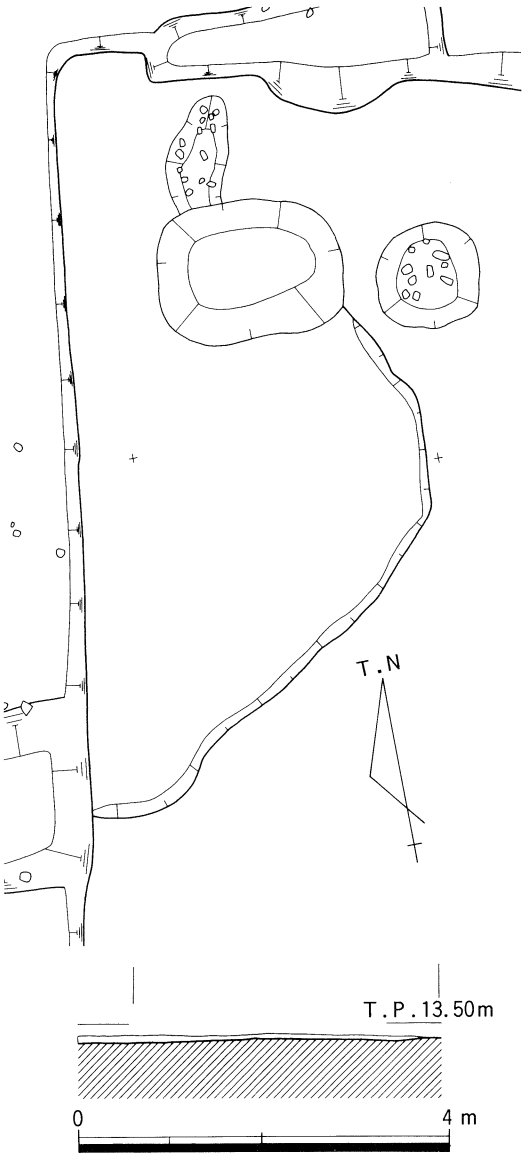
あり，出土遺物はない。この溝の用途は不明である。

ＳＸ01　（第68図）

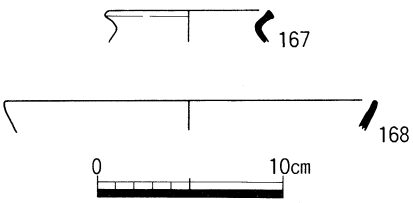
調査区南端西寄りで検出した遺構である。長辺6.50ｍ，短辺3.70ｍ，深さ0.07ｍの規模を持つ。遺構西半部が後世の地下げにより削平されていた。検出した当初平面形が半円形を呈していたため，竪穴住居の可能性も想定して調査を行ったが，調査の結果，床面は平坦であるが，柱穴，壁溝等は確認できず，竪穴住居と認定するには至らなかった。土層埋土は灰黄褐色シルト（10YR４／２）の単一層である。出土遺物は残存状況の悪い弥生時代後期頃の土器片が出土しており，ほぼこの時期に埋没したものと考えられる。

ＳＸ01出土土器　（第69図）

167はやや小型の甕である。「く」の字状に屈曲する頸部をもち，口縁端部は上下に肥厚する。調整は磨滅のため不明である。168は鉢である。細片のため全体の状況は不明である。２も１と同様，残存状況が悪く調整は不明である。



第68図　ＳＸ01実測図

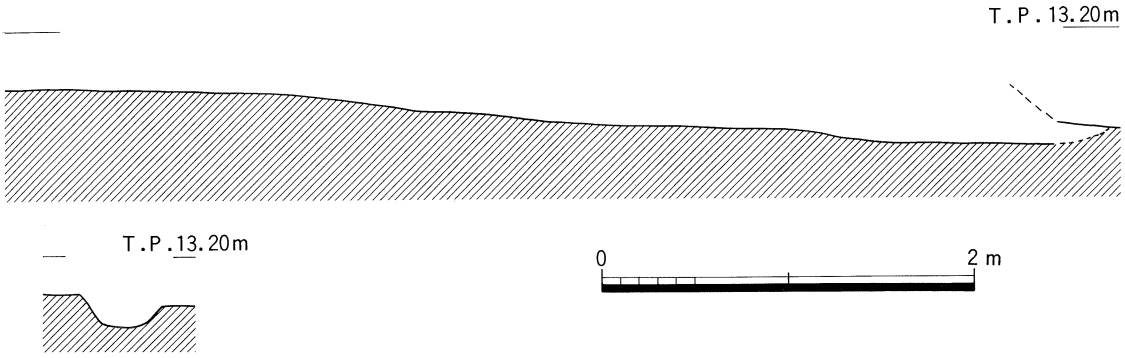


第69図　ＳＸ01出土遺物実測図

4　中世の遺構と遺物

ＳＤ03　（第70図）

調査区東端において確認した溝状遺構である。切り合い関係はＳＤ01－２を切り，ＳＤ05に切られる。規模は南側で幅0.35ｍ，深さ0.16ｍを測り，北側で大きく広がって11.0ｍ，深さ0.30ｍを測る。土層埋土は２層に分かれ，１灰黄色砂混じりシルト（10YR４／２），２褐灰色粘性シルト（10YR４／１）である。遺物は出土していないが，土層埋土からすればほぼこの時期の遺構と考えられる。

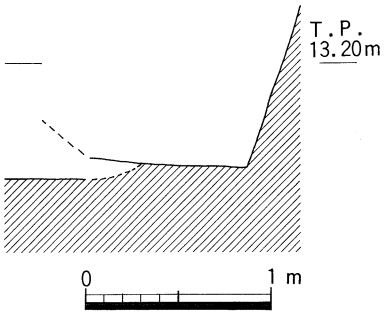


第70図　ＳＤ03断面図

5　近世の遺構と遺物

ＳＤ02　（第71図）

調査区東端において確認したＳＤ03を切る南北溝である。東半分は調査区外へ逃げるため全体の規模は不明であるが，溝幅1.70ｍ以上，深さ0.52ｍを測る。土層埋土は２層に分かれ，１，にぶい黄橙色シルト質極細砂（10YR６／３），２，褐灰色シルト質極細砂（10YR５／１）である。遺物は出土していない。

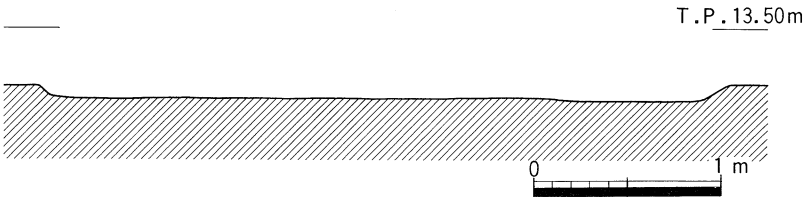


第71図　ＳＤ02断面図

ＳＤ05　（第72図）

調査区中央部において確認した東西溝である。検出長26ｍ，最大幅3.70ｍ，最小幅0.94ｍ，深さ0.10ｍを測る。

出土遺物は陶磁器片が若干出土している。



第72図　ＳＤ05断面図

ＳＫ01　（第63図）

調査区西側，ＳＸ01の北側において確認した土坑でＳＫ02に切られる。南北1.20ｍ以上，東西0.62ｍ，深さ0.20ｍの規模を持つ。出土遺物は陶器の皿が１点出土している。

出土遺物　（第74図）

169は陶器の皿である。調整は底部外面にヘラケズリを行う以外はヨコナデを施す。口縁部内外面に煤が付着していることから灯明皿として利用されていたものと考えられる。

ＳＫ02　（第63図）

調査区西側，ＳＸ01，ＳＫ01を切る土坑である。平面形態は長方形状を呈する。東西2.00ｍ，南北1.45ｍ，深さ0.36ｍの規模を持つ。出土遺物はない。

ＳＫ03　（第63図）

調査区西側，ＳＫ02の東側において確認した土坑である。平面形態は円形を呈する。直径1.10ｍ，深さ0.32ｍの規模を持つ。

出土遺物　（第74図）

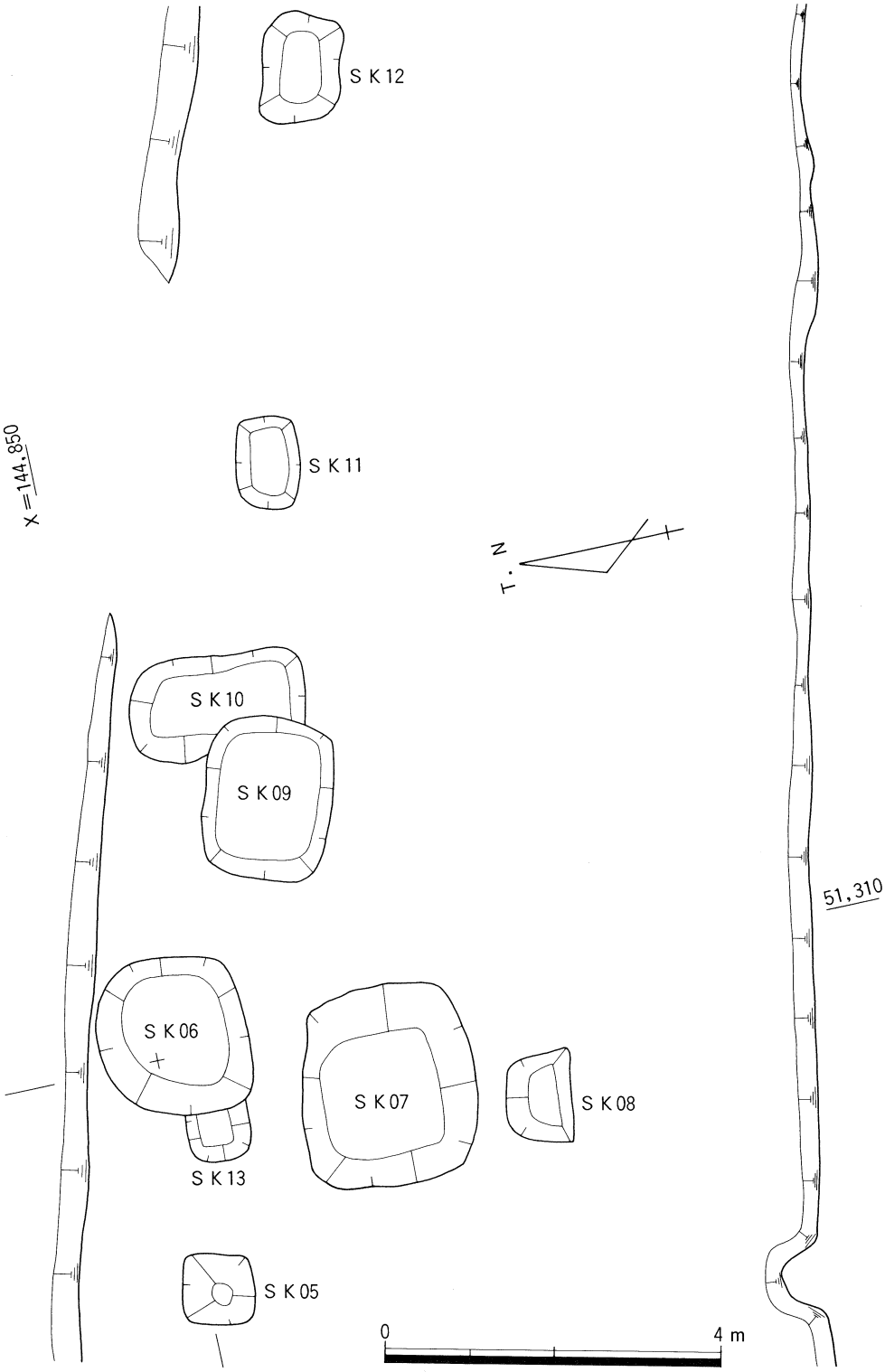
弥生時代のものと考えられる凹基式の石鏃が１点出土している。調整は丁寧である。

ＳＫ04　（第63図）

調査区西側，ＳＫ03の東側において確認した土坑である。平面形態は長方形状を呈する。東西1.55ｍ，南北1.25ｍ，深さ0.19ｍの規模を持つ。出土遺物はない。

ＳＫ05　（第73図）

調査区中央部南側において確認した土坑である。平面形態は正方形状を呈する。一辺0.80ｍ，深さ0.26ｍの規模を持つ。出土遺物はない。



第73図　4区近世土坑群実測図

ＳＫ06　（第73図）

調査区中央部南側において確認したＳＫ13を切る土坑である。平面形態は不整形を呈する。規模は東西1.85ｍ，南北1.80ｍ，深さ0.33ｍを測る。出土遺物は染付磁器が出土している。

出土遺物　（第74図）

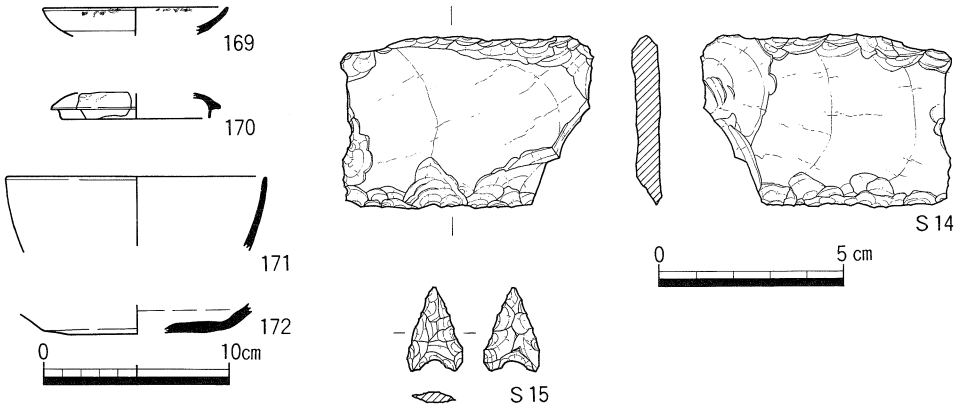
170は碗の蓋である。破片であるため全体の状況は不明であるが，体部外面に染付を施す。171は染付の碗である。やや深い体部をもち直立する口縁部をもつ。薄い青灰色の釉を施す。３は下縁部の一部を欠損するが，長方形を呈する石庖丁である。素材は平坦面を多く残すものを利用し，上縁部は敲打による背潰し，下縁部は両面からの調整により刃部をつくる。左側縁部に抉り状の調整が一部認められるが明瞭ではなく断定できない。

ＳＫ07　（第73図）

調査区中央部南側，ＳＫ06の南側において確認した土坑である。平面形態は長方形状を呈する。規模は東西2.35ｍ，南北2.10ｍ，深さ0.33ｍを測る。出土遺物は土師器の皿が出土している。

出土遺物　（第74図）

172は土師器の坏である。体部内外面にはロクロ痕を残し，底部はヘラ切りを行う。焼成は良好である。



第74図　ＳＫ01，03，06，07出土遺物実測図

ＳＫ08（第73図）

調査区中央部南側，ＳＫ07の南側において確認した土坑である。土坑南側は試掘トレンチによる破壊を受けているため，形状等は不明である。規模は南北0.80ｍ以上，東西1.05ｍ以上，深さ0.20ｍを測る。出土遺物はない。

ＳＫ09　（第73図）

調査区中央部南側，ＳＫ06の東側において確認した土坑である。平面形態は長方形状を呈する。規模は東西1.90ｍ，南北1.50ｍ，深さ0.15ｍを測る。出土遺物はない。

ＳＫ10　（第73図）

調査区中央部南側，ＳＫ09に切られる土坑である。平面形状は長方形を呈する。規模は南北2.10ｍ，東西1.20ｍ，深さ0.17ｍを測る。出土遺物はない。

ＳＫ11　（第73図）

調査区中央部南側，ＳＫ10の東側において確認した土坑である。平面形状は長方形を呈する。規模は東西1.10ｍ，南北0.75ｍ，深さ0.19ｍを測る。出土遺物はない。

ＳＫ12　（第73図）

調査区中央部南側，ＳＫ11の東側において確認した土坑である。平面形状は不整形を呈する。規模は東西1.30ｍ，南北0.90ｍ，深さ0.25ｍを測る。出土遺物はない。

ＳＫ13　（第73図）

調査区中央部南側，ＳＫ06に切られる土坑である。ＳＫ06に切られており平面形状は不明である。規模は東西0.5ｍ以上，南北0.80ｍ，深さ0.28ｍを測る。出土遺物はない。

ＳＫ14　（第63図）

調査区中央部北側，居石２号塚の西側において確認した土坑である。平面形状は不整形を呈する。規模は長軸2.35ｍ，短軸1.30ｍ，深さ0.49ｍを測る。出土遺物はない。

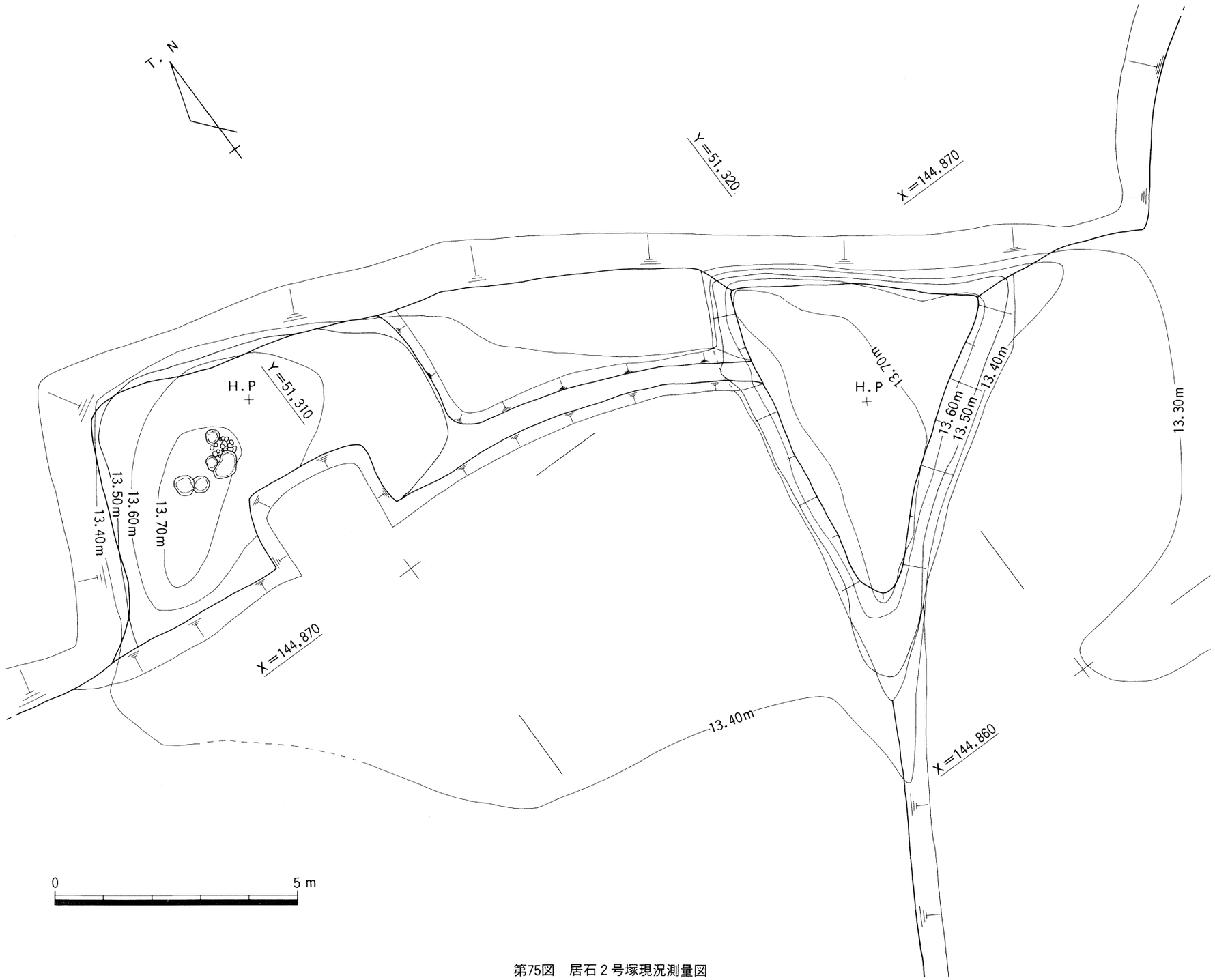
ＳＫ15　（第63図）

調査区中央部北側，居石２号塚の南側において確認した土坑である。平面形状は不整形を呈する。規模は長軸1.65ｍ，短軸1.00ｍ，深さ0.12ｍを測る。出土遺物はない。

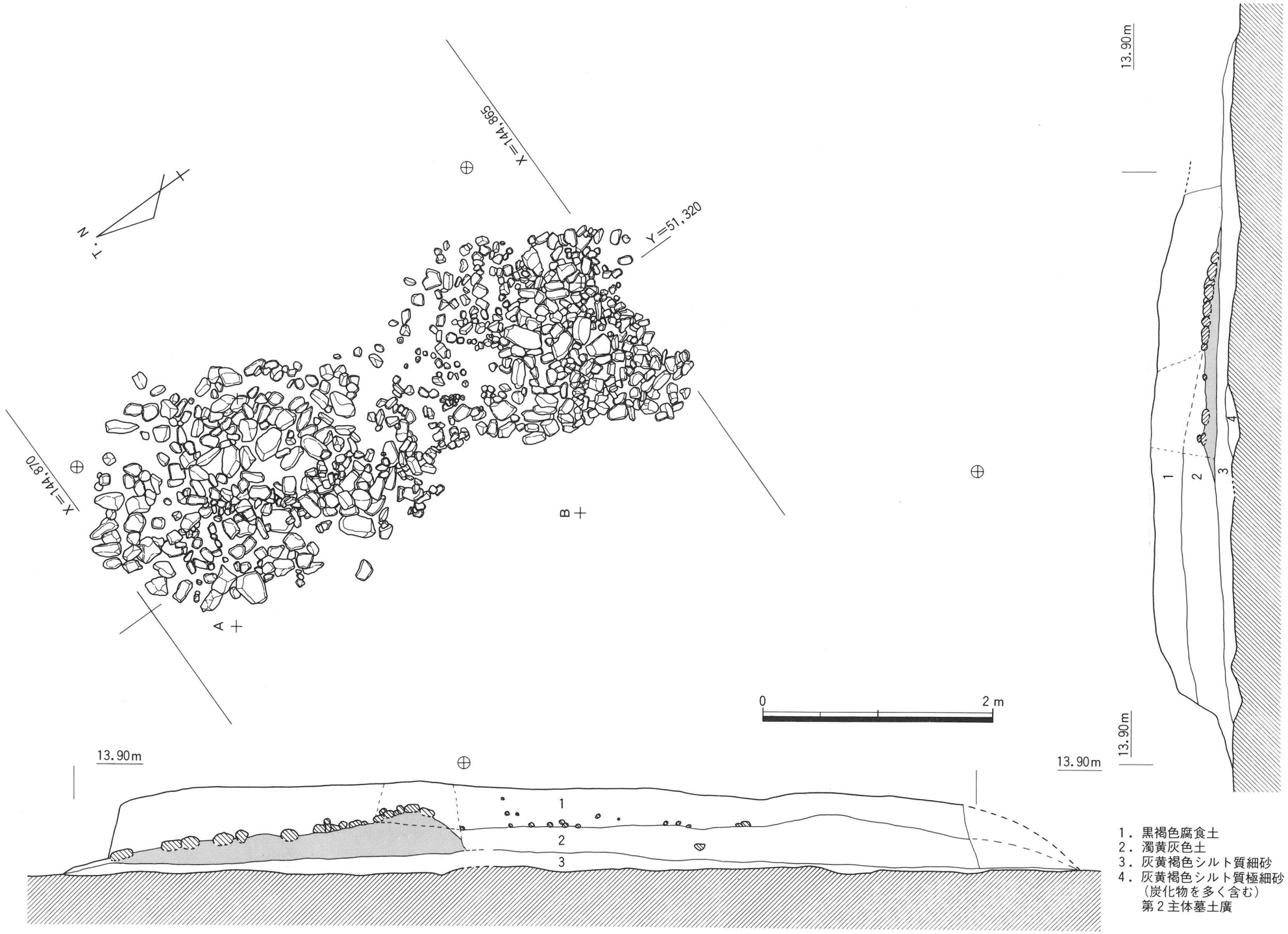
居石２号塚　（第75～78図）

〔調査前の状況〕

周辺は荒地となっており，調査前の状況では東側と西側に２つの墳丘が存在し，この２つの墳丘を畦道が結んでいた。西側の墳丘には石祠が祭られていたが，東側の墳丘にはそのような



第75図　居石２号塚現況測量図



第76図　居石２号塚東側墳丘集石実測図

状況は認められず竹林になっていた。昭和61年度に実施された高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査により，太田第２土地区画整理事業地内において25ヶ所の塚の所在が確認されている。[注(1)]その内，居石２号塚は太田地区で確認されているこれらの塚の中で最も大きな部類に属すると考えられ，塚の規模は長辺21.0ｍ，短辺9.50ｍ，高さ1.10ｍと記録されている。

調査を行う前に現況測量図を作成した結果　（第75図）

（西側墳丘）

東西7.50ｍ，南北5.00ｍ，高さ1.10ｍの平面形状は楕円形を呈していた。小丘上に10～15㎝大の河原石が散乱しており，南面に石祠がまつられていた。

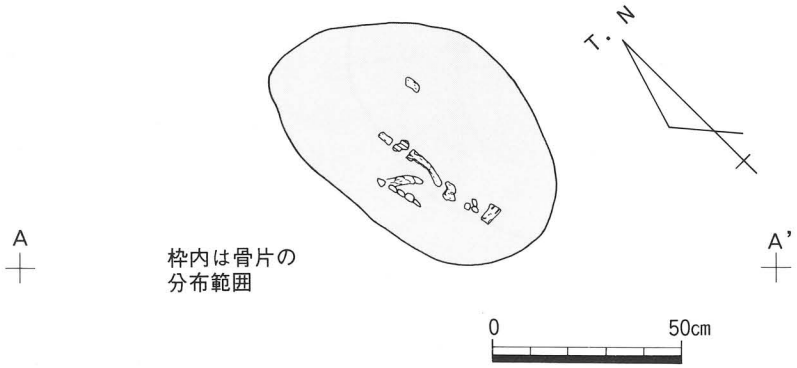
（東側墳丘）

東西7.00ｍ，南北9.00ｍ，高さ0.36ｍの規模を持ち，上面が平坦で平面形状が逆三角形を呈することが確認できた。

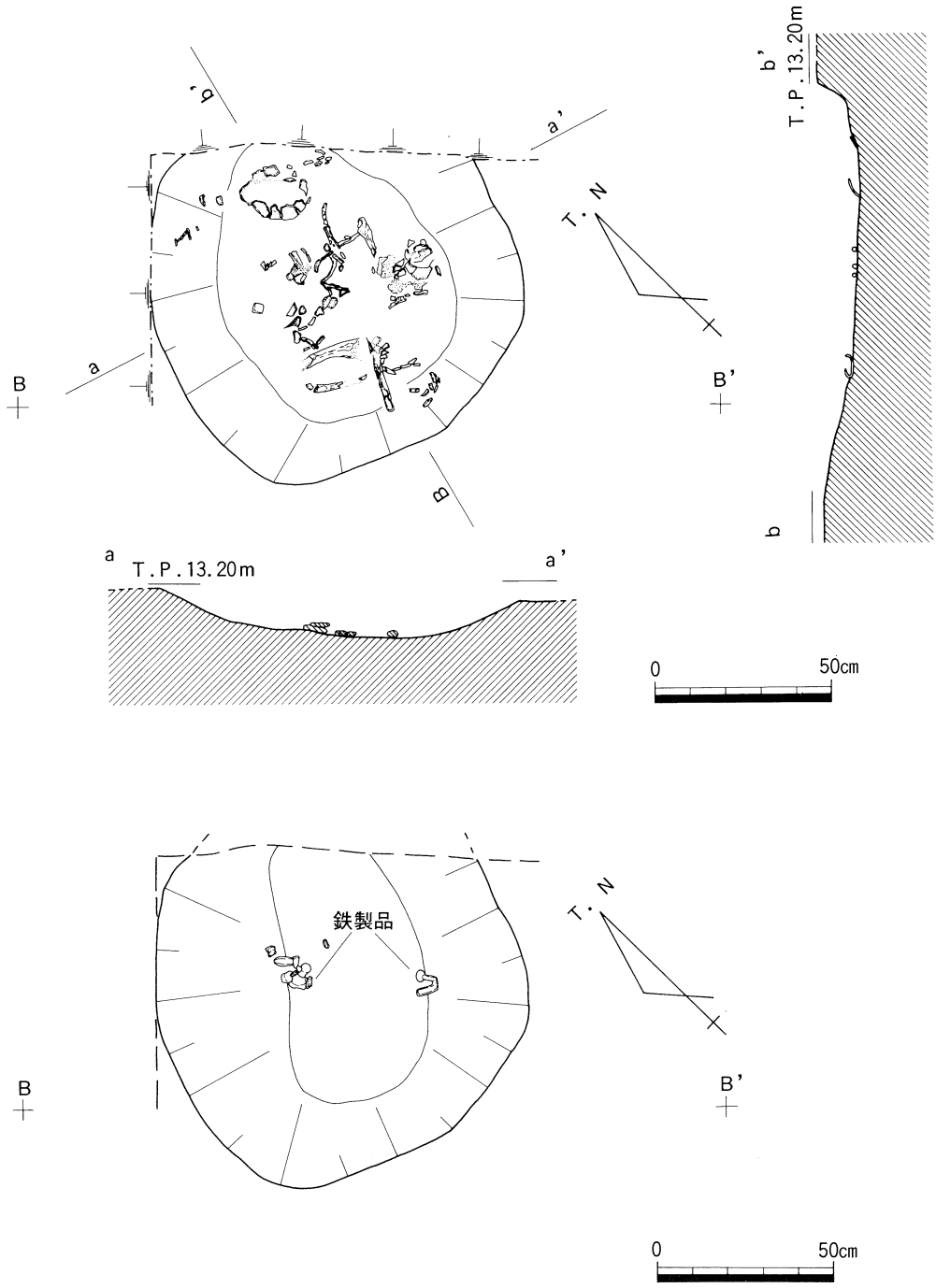
〔調査の結果〕

（西側墳丘）

東西の墳丘に十字トレンチを設定し，下部の状況を確認した結果，西側の墳丘については最も深いところで約50㎝下げた段階で遺構面に到達した。土層埋土は黒褐色土の単一層で，部分的に10～15㎝大の河原石が見られたが，まとまりを確認することはできなかったため，土層観察用の畦を残し，それ以外を遺構面まで下げたが下部に遺構を確認することはできなかった。盛土中からは陶磁器の他，土師器皿，数個体分の焙烙鍋等が出土した。



第77図　東側墳丘第１主体部実測図



第78図　東側墳丘第2主体部実測図

（東側墳丘）

西側墳丘同様，十字トレンチを設定し下部の確認を行った。盛土の埋土は，1黒褐色腐食土が全体に30～40㎝の深さで広がり，その下に遺構面の土とよく似た2濁黄灰色土が集石上面を覆っている状況が確認されたため，土層図作成の後，集石の平面的な広がりの確認を行った。

検出した集石は南北5.50ｍ，東西2.00ｍの範囲に広がっており，形はいびつであるが相円を呈し，集石は全体に20㎝程度積み上げられていた。集石を除去した段階で北と南の集石に対応するように2つの埋葬施設を確認した。北側の集石に伴うものは0.80ｍ×0.55ｍの範囲に骨片を確認し（第77図），南側の集石に伴うものは直径1.10ｍ，深さ0.10ｍの楕円形の土壙に一体分の人骨？及び不明鉄製品を確認した（第78図）。

以上のような成果から居石2号塚は墓である可能性が高く，しかもそれぞれに埋葬主体をもつ別々の集石墓が組合わさったものであるという事実が判明した。

埋葬主体である土壙から塚の構築時期を特定するような遺物の出土はないが，集石中から出土した遺物より江戸時代頃の所産である可能性が高い。

居石2号塚出土遺物　（第79～82図）

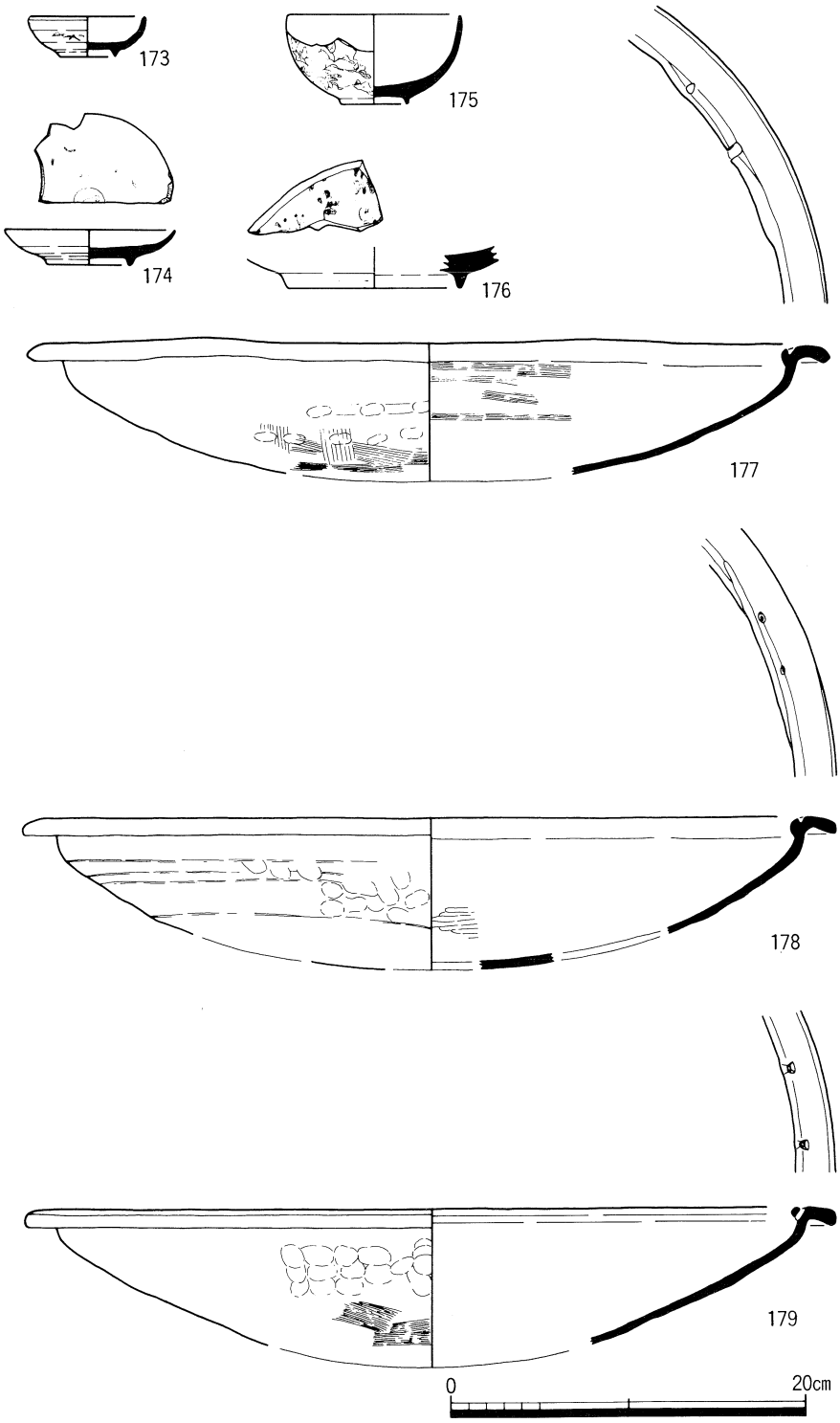
西側墳丘出土遺物　（第79，80図）

173～176は染付磁器である。173は小皿である。口縁部外面に竹の文様を描く。174も小皿である。灰色気味の釉を施し，内面見込みに蛇の目釉剝ぎを施す。175は碗である。高台はシャープにつくられており，外面に染付を描く。176は皿である。内面見込みに唐草文を描く。177～182は焙烙鍋である。焼成は182が瓦質である以外は土師質である。いずれも焼成は良好である。182以外は尖り底の底部をもち，浅い体部から内湾しながらたちあがり，口縁部は屈曲し下に少し垂れ下がる。内耳の孔は179以外貫通していない。調整は口縁部内外面ヨコナデ，体部外面上半ナデ，下半ハケ，体部内面ナデもしくはハケを施す。体部外面に接合痕が顕著である。

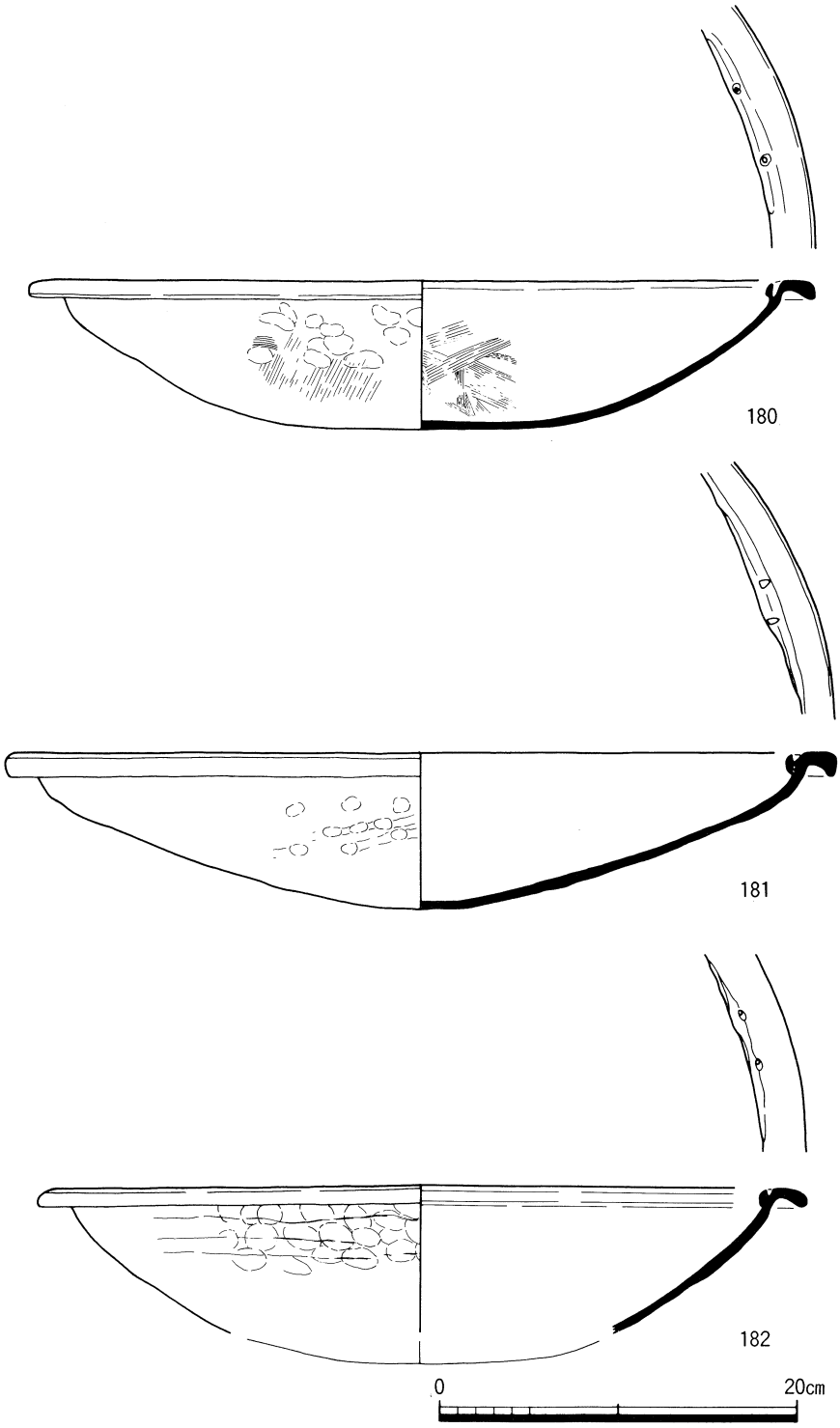
東側墳丘出土遺物　（第81，82図）

集積中出土遺物　（第81図）

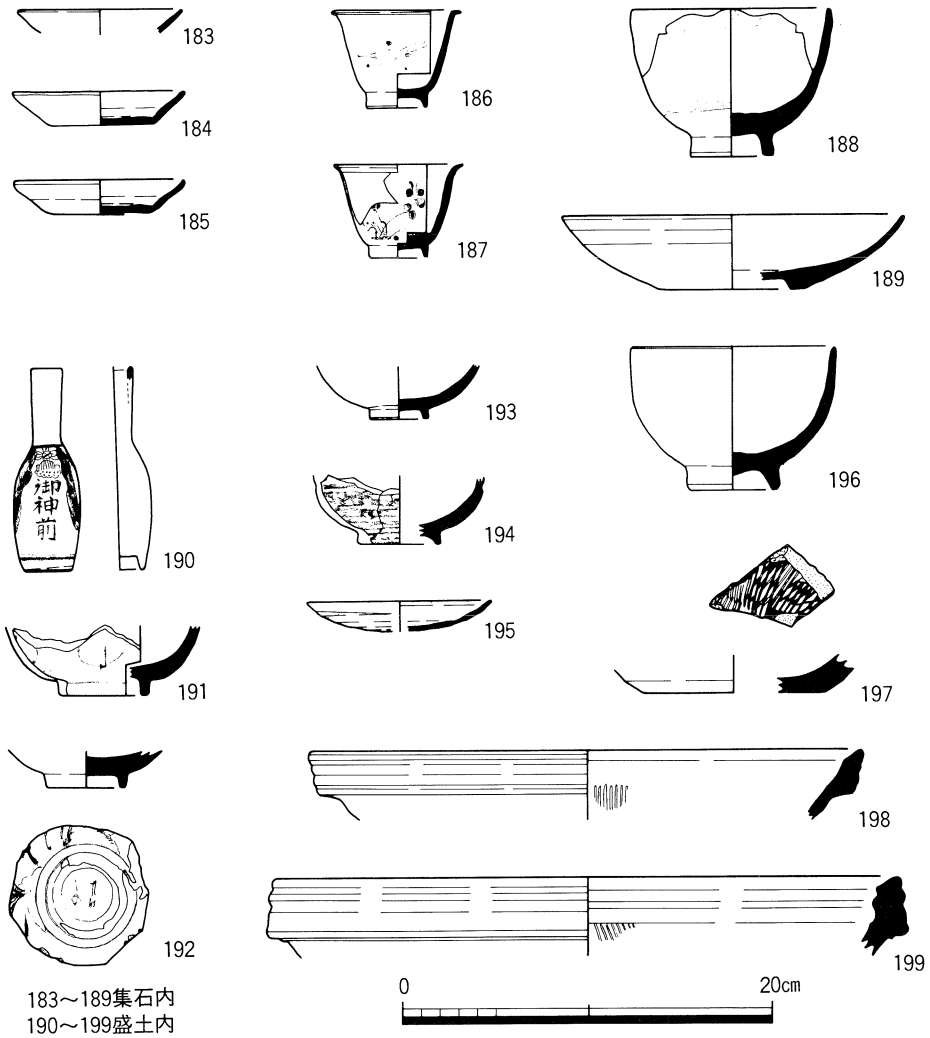
183～185は土師器の皿である。平底の底部から斜方向にたちあがる口縁部をもつ。底部外面ヘラ切り後ナデ，口縁部は底部近くと端部の二段ヨコナデを施す。いずれも焼成は良好である。186，187は染付磁器の小坏である。口縁端部が端反るもので，高台畳付けは無釉である。体部には186は山水文，187は草花文の染付を施す。188は陶器の掛分碗である。深い体部をもつもので口縁部に灰釉，下半に鉄釉をかける。瀬戸・美濃系か？。189は陶器の皿である。高台畳付以外は施釉する。



第79図　西側墳丘出土遺物実測図（1）



第80図　西側墳丘出土遺物実測図（2）

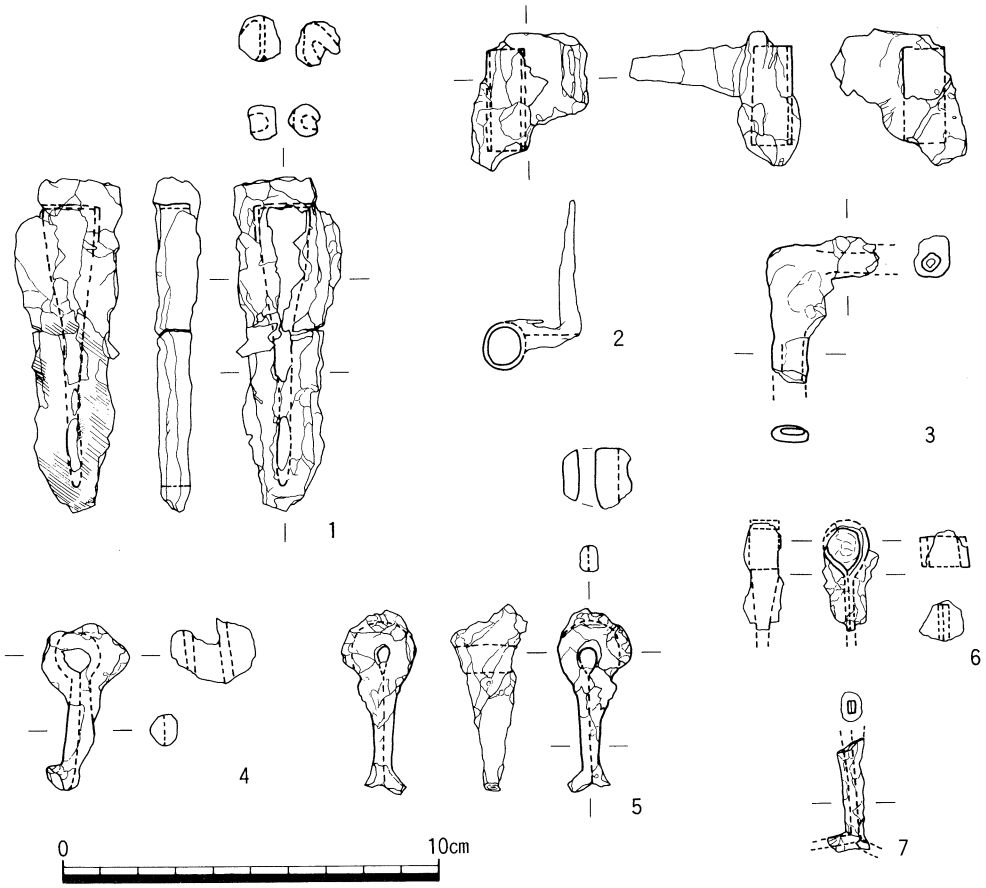


183～189集石内
190～199盛土内

第81図　東側墳丘出土遺物実測図

盛土中出土遺物　（第81図）

190は染付の神酒徳利である。体部に「御神前」の染付が入る。191は染付の碗である。体部に唐草文？を施す。高台以外は施釉するが，全体に貫入が著しい。192も染付碗である。体部外面及び高台内に染付を施す。193は陶器の碗である。高台は無釉である。194は瀬戸美濃系陶器の掛分碗である。胎土は粗い。196はやや大ぶりの陶器の碗である。全体に貫入が著しい。195は陶器の灯明皿である。調整は外面ヘラケズリ内面ヨコナデである。内外面に煤が付着する。197～199は陶器の擂鉢である。197は底部外面のヘラケズリ，内面の条溝の形状から堺焼の擂鉢で，198，199は産地が不明である。



第82図　東側墳丘第２主体部出土鉄製品

第２主体部出土遺物　（第82図）

第２主体部からは錠金具と考えられる鉄製品が出土している。

１は薄い鉄板を二等辺三角形状に加工したもので，留め具と考えられる。裏面と考えられる部分には木質の痕跡が残存する。全長8.2㎝，最大幅1.8㎝，厚さ0.2㎝を測る。２は１と接合すると考えるられるもので直径1.0㎝の管をもつ，４，５とセットで蝶番を構成するものと考えられる。３は１を固定する金具と考えられ，鍵形を呈する。６，７とセットになるものと考えられる。４，５は対をなすもので一枚の板を半分に折り，折り目の部分に直径0.7㎝程度の輪を作る。その下は密着させ，先端は左右に広げる。これは板材に打ち込んだ後，金具を固定するためと脱落を防ぐためのものと考えられる。全長は4.5㎝程度である。６，７は本来同一の個体と考えられ，制作方法は４，５と同様であると考えられるが，対をなすものではなく３とのセット関係を想定した。これらの部品の取り付け位置を想定したものが第82図である。これは出土鉄製品を総て利用し，想定したものであり，出土していない鉄製品があるとすれば

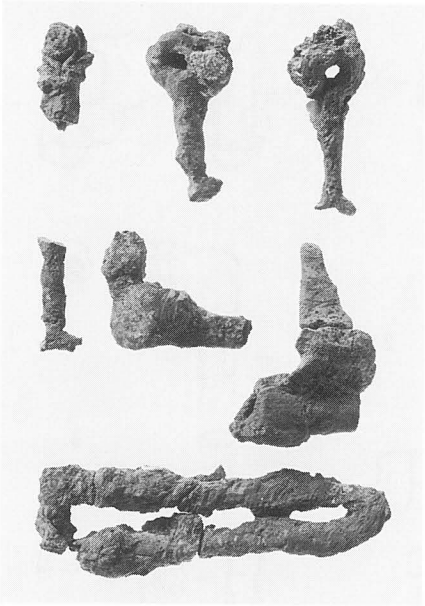
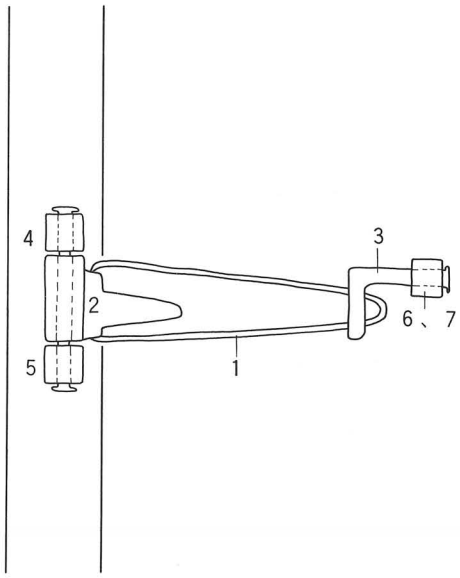


写真７　第２主体部出土鉄製品



第83図　第２主体部出土鉄製品想定模式図

想定図通りにはならない。

これらの金具の形状及び取り付け位置から推定すれば，これらの金具は箪笥か小形の箱物の錠金具と考えられる。(2)

註

1　「高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報」　高松市教育委員会　1987．３Ｐ　41～42
伊藤伍・三木一夫『多肥郷土史後編』多肥郷土史編集委員会　1981を参考にした第２表「塚一覧表」による

2　小泉和子「Ｉ箪笥の誕生」『ものと人間の文化史46箪笥』Ｐ50　Ｉ-30図　玉薬箪笥の図より推定した。

第 4 章

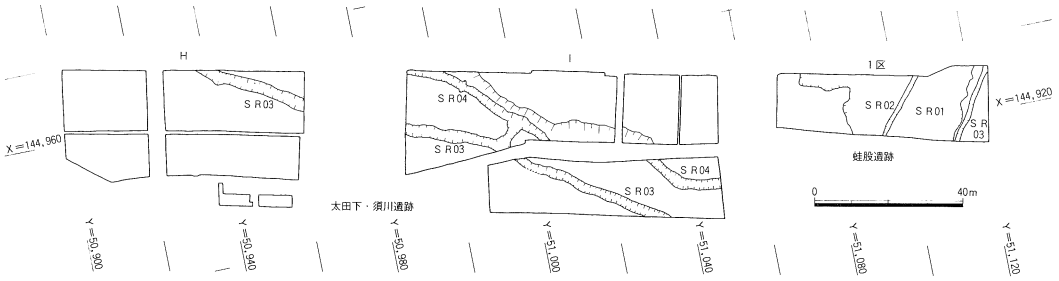
調査のまとめ

第１節　出土土器について

ここではＳＲ01の６，７層および８～10層から比較的まとまって弥生時代の土器が出土している。このうち前者は弥生時代後期初頭の土器群が，後者は弥生時代後期末の土器群がまとまって出土している。これらの土器は河跡出土資料ではあるが一括性が高く，時期限定ができることからこれらの土器の特徴を述べるとともに，当該期の蛙股遺跡の状況と周辺の遺跡の状況もふくめ若干のまとめを行なってみたい。

１　ＳＲ01について

蛙股遺跡ＳＲ01出土の土器を述べる前にＳＲ01と隣接する太田下･須川遺跡ＳＲ03，04，ＳＸ02の位置関係をおさえておきたい[(1)]。蛙股遺跡ＳＲ01については本文中に詳述しているため，ここでは詳しく述べないが，同様な時期の遺物を伴出し，水路を挟んで隣り合わせに位置する太田下・須川遺跡のＨ，Ｉ地区において検出しているＳＲ03，04との位置関係，規模，埋土等について若干整理しておきたい。太田下須川遺跡ＳＲ03，04は検出面より上位に巨大



第84図　太田下・須川遺跡および蛙股遺跡検出旧河道位置関係図

な湿地状の遺構であるＳＸ02の黒色粘土が厚く堆積し，その下部にＳＲ03，04は存在する。ＳＲ03は幅4.0ｍ，深さ約0.9ｍの規模をもち南東から北西に向かって流れる。埋土は黒色シルトや砂層が複雑に堆積しており，植物遺体を多量に含んでいる。ＳＲ04も同規模で方向，埋土もほぼ同様である。ＳＲ04と枝状の溝で「Ｈ」状につながっている。一方，蛙股遺跡ＳＲ01は規模推定幅約50ｍ，深さ確認面から河床最深部まで約1.3ｍである。方向は南西から北東方向を向く。土層埋土は黒色シルト質極細砂と灰色シルト質極細砂が堆積している。このうち最深部に堆積している８層では植物遺体を多量に含んでいる。両遺跡で確認された旧河道は位置関係の上では弥生時代後期前半頃には当遺跡の南側で分岐し，一方は北東方向へ，一方は北西に分岐して流れていたものと考えられる。しかし太田下・須川遺跡ＳＲ03，04の土層図等の詳細な図面が報告書中に記載されていないため，土層図の対応等詳細な確認作業ができないのが現状である。

2　6，7層出土の土器について

この時期の土器は西隣の太田下･須川遺跡ＳＲ03，04，ＳＸ02を中心に多量に出土していることから，当遺跡の土器群の特徴を述べるとともに太田下･須川遺跡の土器を中心に対比してみたい。

壺

当遺跡では長頸壺と短頸広口壺が見られる。当遺跡出土長頸壺実測図66～69と同様なものは，太田下･須川遺跡ＳＲ04出土遺物421，422，424にみられ，口縁部外面に退化した凹線文が数条みられる。口縁端部を拡張する70に類似するものに429がみられる。一方短頸広口壺では417，418，420に類似するものがみられる。口縁端部は上下に拡張し，端面に凹線文を数条めぐらせる。

甕

甕については頸部の屈曲が緩いものと，屈曲のきついものに分かれ，口縁端部は上下に拡張し凹線文をめぐらせる。一方体部は，大きく広がるものと，あまり広がらないものに分かれる。調整は外面ハケを基本とし，一部タタキがみられる。内面はナデを基本とするが，一部頸部近くまでヘラケズリを施すものもみられる。甕については太田下･須川遺跡の出土例と変わるところはみられない。

高坏

浅い坏部から屈曲し，斜方向に直線的に立ち上がる口縁部をもち，端部は左右に拡張する。拡張した端面に凹線文をめぐらせるものが大半で一部116のように口縁端部が拡張せずにシャープに終わるものもみられる。このような高坏は同様に弥生時代後期前半頃と考えられる高松市西植田町葛谷Ｇ地区出土の弥生土器第６図１～４に類例がみられる[(2)]。これらの高坏の口縁部の形態は後の後期後半の当地域の高坏の口縁部に受け継がれる形態である。調整は坏部内外面は丁寧なヘラミガキが施され，口縁部はヨコナデを施す。一方脚部は「ハ」の字状に開き，脚端部は拡張し，端面および周辺部に凹線文をめぐらす。脚端部の凹線文は太田下･須川遺跡の脚部例に比べ凹線文の退化傾向は弱い。調整は内面のヘラケズリが上部まで施される。

鉢および器台は当遺跡では未確認である。

以上同様の資料が出土した太田下･須川遺跡ＳＲ03，04出土の遺物を中心に比較を行ったが，個々の器種の形態および施文について大きな相違はみられない。一部，高坏の脚端部の凹線文において太田下･須川遺跡例の方が退化傾向が進行しているようにとれるが，当遺跡出土の土器群の出土量が少ないこともあり時期差によるものか現段階では不明である。しかし，大きくみれば，概ね同様な形態のものが出土していることより弥生時代後期初頭の土器群と考えてよさそうである。

3　8～10層出土土器について

この時期の土器については高松平野で普遍的にみられるいわゆる「下川津Ｂ類土器」は，器種器形が限定されてくる。当遺跡出土の土器についても違いは認められない。ここでは，諸特徴を検証し，時期比定を考えたい。

壺は頸部が直立もしくはやや内傾する広口壺のみである。いわゆる「Ｂ類型土器」のみの出土である。口縁部は頸部から直角に折れ外側に広がる。口縁端部は上下に拡張する。口縁部内面には擬凹線文の窪みが数条めぐる。体部は大きく張り，底部は丸底に近くなる。調整は口縁部内外面ヨコナデ，頸部外面ハケメ，内面ナデ，体部外面上半ハケメ，下半ヘラミガキ，内面上半ナデ，下半ヘラケズリを行う。

甕は大きく「Ｂ類土器」の甕とそれ以外の白色系の色調をもつ土器に分かれる。白色系の色調をもつ土器は頸部の屈曲がゆるく，口縁端部は丸く終わる。体部はあまり張らないものが多く砲弾型を呈する。底部はかろうじて平底を残す程度である。調整は口縁部ヨコナデ，体部外面ハケメ，タタキを施すものと，タタキの後，粗いハケメを施すものがみられる。一方，内面については頸部近くまでヘラケズリを施すものと，内面ハケ，ナデを施すものもみられる。白色系の色調をもつ土器には，前述の土器以外に「Ｂ類土器」のプロポーションに似る土器片がある。34はやや赤みを帯びるが，27は白色系である。頸部は「く」の字形に鋭く屈曲し，口縁端部はわずかに拡張し，体部は大きく張る。調整は口縁部内外面ヨコナデ，体部外面やや粗いナナメハケ，内面上半ナデ，下半ヘラケズリを施す。「Ｂ類土器」と比較した場合明らかに違うのは，この時期の甕の口縁部内面にみられる擬凹線文がみられないこと，口縁部がやや肉厚であること，体部外面上半のハケメが粗い上にハケメが斜め方向に施される等の違いがあるが，実測図にすればほとんど違いは目立たなくなる。この時期高松平野中西部に多く流通する「Ｂ類土器」を模倣したのかもしれない。今後注意を要する土器群である。一方，いわゆる「Ｂ類土器」の甕については，「く」の字形に鋭く屈曲する頸部をもち，口縁部は端部を上につまみ上げる。口縁部内面に擬凹線文をめぐらせるものが多い。体部は大きく張り，角のとれた平底もしくは，丸底に近い底部となる。調整は口縁部内外面ヨコナデ，体部外面上半タタキのち丁寧なハケメ，36の体部上半最大径付近には並行タタキが認められる。下半ヘラミガキ，底部底面にまでヘラミガキをするもの，底部外面底近くにヨコナデを施すものもみられる。体部外面は上半ナデ，下半ヘラケズリを施す。

鉢についても白色系の色調をもつものと，「Ｂ類土器」の胎土をもつものに分かれるが，形態にまとまりがない。白色系の土器は頸部がゆるく「く」の字形に屈曲し，口縁端部は丸く終わる。体部は内湾しながら立ち上がるものと，体部が内湾しながら立ち上がり，口縁部が直立して終わるものがある。調整は磨滅のため不明であるが，調整方法にはばらつきがあるようだ。

一方「B類土器」については，56のように片口になる鉢がみられるが，このような形態のものは，今回が初見である。調整は体部下半にヘラミガキ，底部板ナデ，内面上半ナデ，下半板ナデである。もう一つの鉢は，最近出土例の増加している形態のものである。この時期の高坏の坏部と同形態である。浅い皿状の坏部から屈曲し，外反しながら立ち上がる口縁部をもち端部は丸く終わる。口縁部内面には他の器種同様，擬凹線文をめぐらせる。坏部内外面に分割ヘラミガキを施す。

高坏は浅い坏部から屈曲し，外反しながら立ち上がる口縁部をもち，端部は丸く終わる。口縁部内外面に擬凹線文を巡らせる。脚部は「ハ」の字形に開き，端部はやや肥厚する。坏部と脚部の接合部は円盤充塡を行う。調整は坏部外面ヘラケズリの後，内外面分割ヘラミガキ，脚部内面ヘラケズリを施すのが特徴である。

近年の調査により，これらの土器群の出自に関する研究が進みつつある。下川津遺跡の当該期の土器の整理作業を行った大久保徹也氏は，在地の土器群とは明らかに違う胎土に角閃石を多量に含み，茶褐色の色調をもつ土器群に注目し，県下の当該期の土器を検討した結果，これらの土器は高松平野の香東川左岸付近の遺跡（その内上天神遺跡では9割以上がこの胎土をもつ土器でしめられる）から高い比率で出土することから，この付近に生産地があることを指摘し，これらの土器群を「下川津B類土器」と命名した[(3)]。最近調査が行われ，報告書が刊行された太田下･須川遺跡の報告書の中で森下友子氏は奥田尚氏の胎土分析の結果を受けて，出土土器の胎土に関する考察を行っている[(4)]。太田下･須川遺跡出土土器のうち，角閃石と考えられる黒色砂粒を含む土器の胎土を胎土1類＝「下川津B類土器」と呼称し，これらの胎土をもつ土器の土は高松市御厩町の津内山，高松市勅使町の石清尾山丘陵南端付近に分布していることから，これらの土を利用して土器がつくられていることを指摘し，特に石清尾山丘陵南端付近の土が可能性が高いとしている。太田下・須川遺跡では弥生時代中期中葉に胎土1類が出現し，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器はほぼ100％にちかい土器がこの胎土であるという。

報告書中森下氏は高松平野の同様な遺跡から出土した土器に含まれる胎土1類の割合を算出し，土の産出地から時期を追ってこの土器の分布が拡大していくことを指摘している。ただこれらの土器が数キロ離れた上天神遺跡や太田下･須川遺跡はじめとする遺跡に数多くの土器が搬入され使用されたかの要因までは言及していない。

以上のような出自に関する検討の結果，生産地が限定され始めているが依然不透明な点が多い。まず1点目として消費地である遺跡に大量に搬入される土器を一ヶ所の生産地で供給できるのかという問題である。「B類土器」とよばれる土器は，県内はもとより県外にも多く搬出されていることは周知の事実である。これらに供給するとすれば相当数の量が生産されている

はずである。実際，蛙股遺跡の８～10層出土の土器を観察した結果，角閃石を胎土中に多く含む土器の中に，色調をはじめ胎土および調整等に微妙な違いが存在するようであり，いくつかの生産地を示唆する状況が見られる。ただ焼成温度の違いによる色調の差や，同じ粘土採掘地でも含有鉱物の微妙なばらつきがでてくることも考えられることから，今後も詳細な分析が必要であろう。２点目として，生産地が仮に石清尾丘陵の南端だとすれば，この時期石清尾山丘陵に存在する鶴尾神社４号墳をはじめとする古式の前方後円墳の被葬者集団の動きとも関連して考えなければならないだろう。特にこの時期，次の古墳時代に続く権力を持つ集団が高松平野にも出現し始めており，集団の勢力範囲の中で一括して土器を供給するシステムが生まれつつあった可能性は考えられよう。ただ，周辺部の発掘調査の成果はあがってきているが，石清尾山周辺，特に南側の地域における発掘調査が行われていないことから，周辺部の発掘調査の今後の成果に期待するところが大である。

4　まとめ

以上，出土土器をとおして気づいた点を述べてみたが，まだまだ検討すべき課題は多く，資料の増加をまたなければならないが，蛙股遺跡の出土土器によって判明した点を述べて，おわりとしたい。

６，７層出土の弥生後期初頭の土器群の確認によって，当該期の土器が出土する遺跡は発掘調査の結果から，現在のところ西の上天神遺跡を西限とし，東は蛙股遺跡の１区を東限とする。この結果上天神遺跡をはじめとする後期初頭の遺跡群の東西の範囲がある程度予測できることとなる。南北の広がりは不明であるが，東西の範囲は1.5km程度と考えられることから，後期初頭の蛙股遺跡は上天神遺跡をはじめとする遺跡群の東限を示す位置にあることになる。一方，８～10層出土の弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器によって，出土土器全体に対する「Ｂ類土器」の割合は破片総数1130片に対し919片であり，全体に対する割合は84.9％を占め，周辺の遺跡の状況と同様である。このことからこの時期の蛙股遺跡は「Ｂ類土器」が主流を占める勢力範囲（流通範囲とする方が適当か）の中に取り込まれているものと考えられる。

註

（１）北山健一郎，森下友子『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　太田下・須川遺跡』　香川県教育委員会　（財）香川県埋蔵文化財調査センター　建設省四国地方建設局　1995．3

（２）「資料紹介　葛谷遺跡出土の弥生土器」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和58年度』香川県教育委員会　1984．12

（3）大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』　香川県教育委員会　（財）香川県埋蔵文化財調査センター　本州四国連絡橋公団
（4）註(1)文献　森下友子　「胎土１類土器について」

第２節　土器棺について

高松平野のほぼ中央に位置する本遺跡では，旧河道の西岸斜面において３基の土器棺が検出された。これまで土器棺は県内のほぼ全域から確認されているが，その大部分は丘陵部で検出されたものであった。しかし，最近の平野部での発掘調査に伴って本遺跡のように平野部での土器棺の出土例が増加してきた。そこで，高松市という限定した範囲において，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器棺を集成し若干の考察を加えてみたい。

ここで集成した遺跡は次の通りである。(1)

1　蛙股遺跡

高松市太田下町（第85図－１）

2　太田下・須川遺跡

高松市太田下町

（第85図－２，第86図－１．２）

3　凹原遺跡

高松市多肥下町

（第85図－３，第86図－３～５）

4　田村神社

高松市一宮町

（第85図－４，第86図－20．21）

5　諏訪神社遺跡

高松市東山崎町

（第85図－５，第86図－６）

6　久米山遺跡群（久米山墓地地区）

高松市東山崎町

（第85図－６，第86図－７～11）

7　久米八幡馬場先

高松市東山崎町（第85図－７）

8　通谷遺跡

高松市三谷町

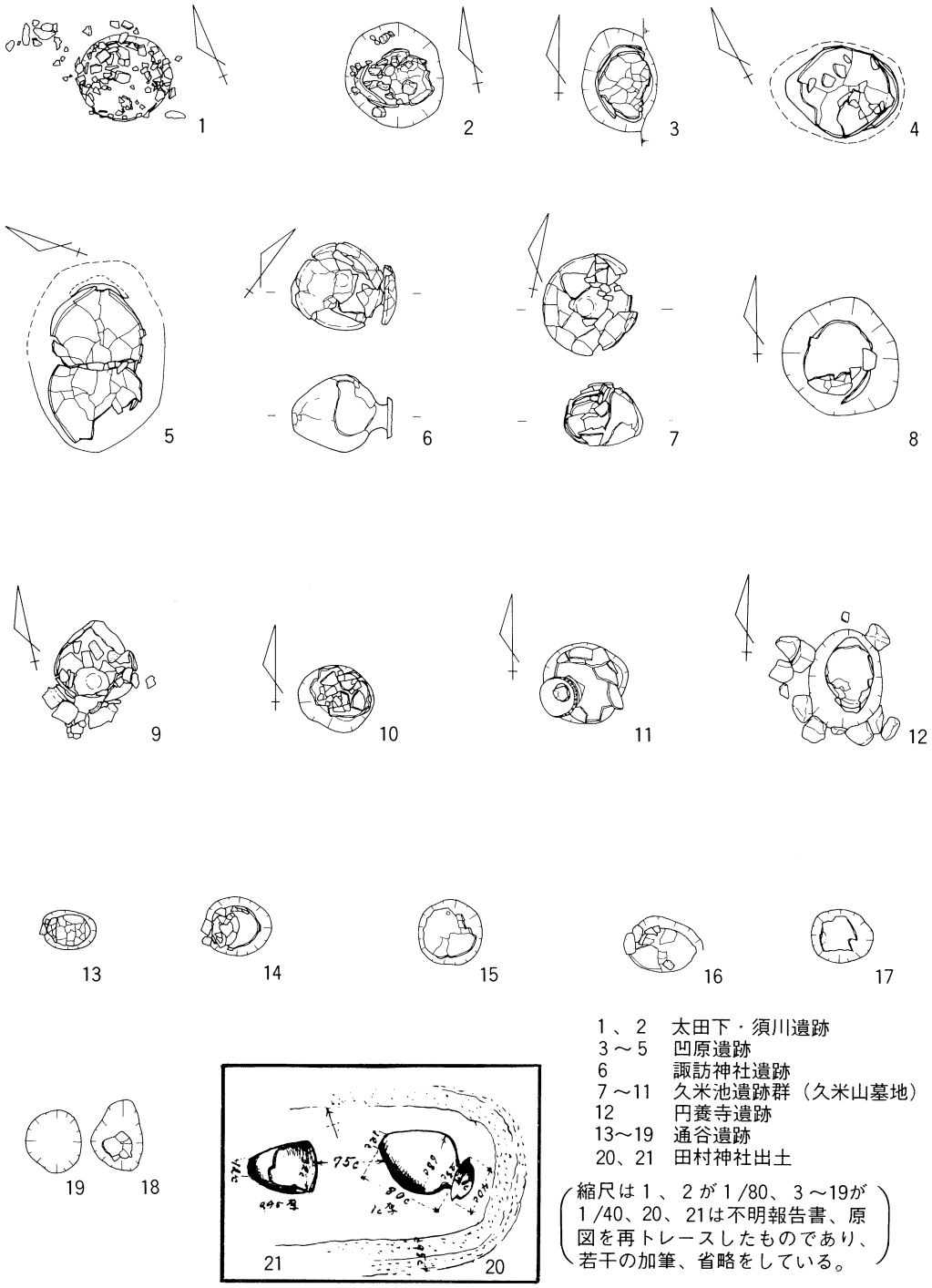
（第85図－８，第86図－13～19）

9　上佐山山麓甕棺墓群

高松市三谷町（第85図－９）

1．蛙股遺跡
2．太田下・須川遺跡
3．凹原遺跡
4．田村神社
5．諏訪神社遺跡
6．久米山遺跡群
7．久米八幡馬場先
8．通谷遺跡
9．上佐山山麓甕棺墓群
10．切谷遺跡
11．円養寺遺跡

第85図　高松市内の土器棺出土遺跡分布図



1、2　太田下・須川遺跡
3～5　凹原遺跡
6　諏訪神社遺跡
7～11　久米池遺跡群（久米山墓地）
12　円養寺遺跡
13～19　通谷遺跡
20、21　田村神社出土

（縮尺は1、2が1/80、3～19が1/40、20、21は不明報告書、原図を再トレースしたものであり、若干の加筆、省略をしている。）

第86図　高松市内より出土した土器棺

遺跡	遺構	掘方 長径(cm)	掘方 短径(cm)	掘方 深さ(cm)	棺身	棺身 口径(cm)	棺身 底径(cm)	棺身 最大径(cm)	棺身 高さ(cm)	棺身 整形・調整	棺蓋	棺蓋 口径(cm)	棺蓋 底径(cm)	棺蓋 高さ(cm)	棺蓋 整形・調整	立地	主軸	傾斜	備考
蛙股遺跡	1				壺(口辺部欠)		9	42	51	外：頸部に突帯刷毛目ヘラミガキ 内：刷毛目板ナデ	壺(底部)		10	13	内：ヘラミガキ	平地	N—31°—E	40°	頭部に6個の石
	2				壺	23	12	41	49	外：口縁に凹線3条 刷毛目 ヘラミガキ 内：板ナデ ヘラミガキ	鉢	52	12	19	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ 刷毛目	平地	S—48°—E	40°	穿孔有り 周囲に5個の石
	3															平地	N—25°—E		土器棺はないが，1，2と同様に石が4個円形になっている
太田下・須川遺跡	1(図—1)	110		55	壺		8	41	(38)	外内：刷毛目 ナデ	壺底部		6		外：ナデ 内：ナデ 刷毛目	平地	N—90°—E	30°	弥生後期後半 周辺に数個の石
	2(図—2)	120	110	60	壺		13.7			外：ヘラ磨き 内：刷毛目 指押さえ						平地	N—100°—E	平	弥生後期後半
凹原遺跡	1(図—3)	60	50	20	甕						鉢					平地	N—76°—E	平	
	2(図—4)	78	58	33	甕						鉢					平地	S—57°—E	25°	
	3(図—5)	113	80	27	甕(2個合口)						鉢					平地	N—70°—E	平	棺身は口縁部を欠いた甕2個を合わせている
諏訪神社遺跡	1(図—6)				壺	22	10	45	55	外：刻み目 ヘラミガキ 刷毛目 内：指頭圧痕 ヘラ削り	鉢	55	15			丘陵(先端斜面)	N—55°—E	平	壺棺胴部を割って開口部を蓋している。胴部をおおうように鉢が置かれている。孔有り
久米山遺跡群(久米山墓地)	1(図—7)				壺		10	46	57	外：押圧文 刷毛目 内：指頭圧痕 刷毛目	鉢	28	5	10	外：ヘラ削り 内：ヘラミガキ	丘陵(先端)	N—90°—W	15°	孔有り
	2(図—8)	70	65	36	壺		12	48	44	外：刷毛目 ナデ 内：刷毛目	高杯	27		11	内外：ヘラミガキ	丘陵(先端)	N—45°—W	55°	
	3(図—9)	150以上	140以上	35	甕	30	11	43	50	外：凹線2条 ヘラミガキ 内：ヘラ削り	鉢	41	8	16	外：凹線2条 刷毛目 内：ヘラミガキ	丘陵(先端)	S—23°—W	35°	孔有り 四角形の掘方で面積がひろい
	4(図—10)	45	37	10	甕	15	6	21	28	外：凹線1条 刷毛目 内：ヘラ削り	鉢	42	12	21	外：凹線4条 内：ヘラミガキ	丘陵(先端)	N—70°—W	15°	

第4表　高松市内の土器棺出土遺跡遺跡一覧表

遺跡	遺構	掘方 長径(cm)	掘方 短径(cm)	掘方 深さ(cm)	棺身	棺身 口径(cm)	棺身 底径(cm)	棺身 最大径(cm)	棺身 高さ(cm)	棺身 整形・調整	棺蓋	棺蓋 口径(cm)	棺蓋 底径(cm)	棺蓋 高さ(cm)	棺蓋 整形・調整	立地	主軸	傾斜	備考
久米山遺跡群(久米山墓地)	5(図—11)	50	48	43	壺	24	11	48	56	外：沈線6条　円形浮文　突帯1条　ヘラミガキ 内：ヘラミガキ　指頭圧痕						丘陵(先端)	N—100°—W	38°	完形の壺 単本棺
円養寺遺跡	1(図—12)	120	100	55	壺						壺胴部					山(屋根平)	南	30°	石囲い 穿孔有り
	2															山(尾根)			浅い土壙の中に棺の一部が残存
	3															山(屋根)			土壙と石囲いのみ検出
	4	70			甕											山(屋根)	南西	30°	丸底一土師器
通谷遺跡	1(図—13)	60	50	20	壺	17.1	7.5	35	39	刷毛目	鉢	15				山(尾根先端)	西	平	小石2個
	2(図—14)	80	70	25	壺	15.5	9	51	53.5	外：頸部に刻み突帯刷毛目 内：指頭圧痕	壺胴部					山(尾根先端斜面)	北西	40°	頭部に2個の石
	3(図—15)	80			壺	30.5	8	64	58.4	外：刷毛目 内：刷毛目	鉢	45		16.8	外：ヘラ削り 内：刷毛目　ヘラ削り	山(尾根先端斜面)	南東	50°	
	4(図—16)	120	70	40	壺	18.5	12.3		67.5	外：刷毛目	鉢2	44.3 34.7		20 16.4		山(尾根先端斜面)	西	20°	頭部に2個の石
	5(図—17)	70	50				10									山(尾根先端斜面)	西	5°	穿孔有り
	6(図—18)	70	65	25	壺	50.5	11		36	外：刷毛目						山(尾根平)		45°	
	7(図—19)	70		30			9	49.2	50.9	外：刷毛目 内：刷毛目　指頭圧痕						山(尾根先端斜面)	西		
田村神社出土	1(図—20)				壺	23	12	68	80		鉢	40	20			平地	南東	平	
	2(図—21)				壺	12	32									平地	東	平	上部は不明だが，鉢を蓋とする
久米八幡馬場先		合計9個　合口　傾斜を持つ　昭和8年発見　内1個は底径10cm，最大径74cm，高さ60cm。立地は丘陵																	
上佐山山麓甕棺墓群		宮本琢磨氏の分布調査により確認される。詳細は不明。立地は丘陵																	
切谷遺跡		宮本琢磨氏の分布調査により確認される。詳細は不明。立地は丘陵																	

10　切谷遺跡

高松市西植田町（第85図－10）

11　円養寺遺跡

高松市西植田町（第85図－11，第86図－12）

この土器棺のデータをまとめたのが第４表である。これは報告書と調査時の実測図を基に作成したが，若干手を加えている部分もありご容赦願いたい。

1　立地について

土器棺が検出された遺跡の立地は平野部と丘陵部に大別することができる。従来は丘陵あるいは山の尾根において土器棺が検出されていたが，平野部での検出例が増加している。平野部にある遺跡は，蛙股遺跡，太田下・須川遺跡，凹原遺跡，田村神社である。一方，丘陵部は，諏訪神社遺跡，久米山遺跡群（久米山墓地地区），久米八幡馬場先，通谷遺跡，上佐山山麓甕棺群，切谷遺跡，円養寺遺跡である。さらに，平野部の土器棺を詳細にみると，蛙股遺跡と太田下・須川遺跡のように微低地（特に蛙股遺跡では弥生時代後期の旧河道の西岸斜面）にあるものと，凹原遺跡や田村神社のように微高地にあるものに分けられる。このような立地の違いが生じる要因は居住域と大いに関連するものと考えられる。

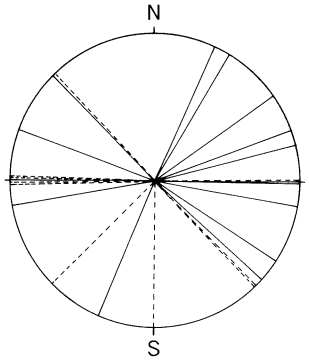
2　土器棺の構造について

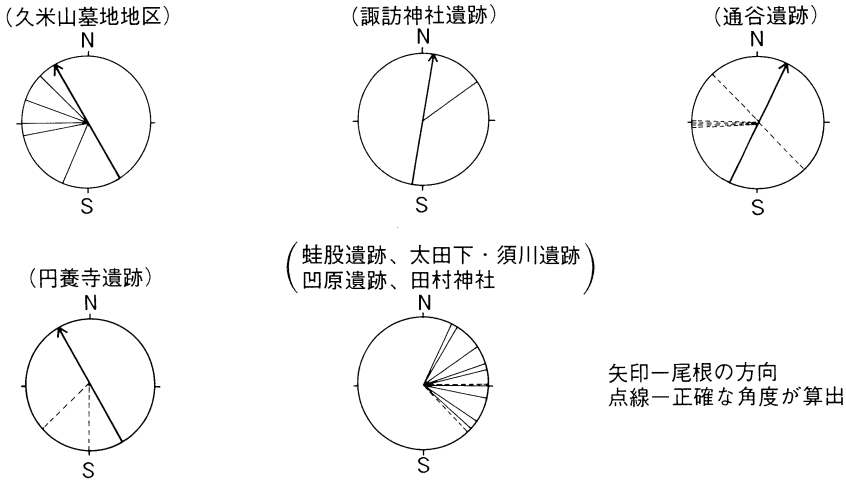
土器棺は土壙内に埋納されている。その方法としては土壙のみの場合と土壙内に数個の石を有する場合が見られる。後者に属するのが蛙股遺跡１～３，太田下・須川遺跡１，円養寺遺跡１．３，通谷遺跡１．２．４（以下，遺跡名の次にある数字は第４表の遺構番号である）である。蛙股遺跡の場合は旧河道という不安定な地盤に立地しており，土器棺を安定させるとともに防御の目的をもって石を周囲に置いたと考えられる。しかし，安定した地盤の丘陵部においても円養寺遺跡や通谷遺跡のように土壙内に石を有する土器棺がある。これらを検討すると，全てが頭部（開口部）にあたる位置に石があり，その断面を見ると傾斜している土器棺を安定させるように地山と土器棺の間に石が置かれているのがわかる。明らかに土器棺を安定させるためのものである。これは善通寺市の彼ノ宗遺跡においても見られる[(2)]。だが，円養寺遺跡では石囲い遺構の中に土器棺が埋葬されており，「甕棺墓の中でも特殊な身分的向上があったことを示唆する」[(3)]ものと考えられている。また，大川町大井遺跡の第６．７号土器棺は開口部に数個の石を置き蓋の代用としている[(4)]。これは両棺ともが単棺であることに関係している。このようにいろいろな様相を呈しており，土壙内にある石は傾斜する土器棺を支え安定させる目的だけでなく，蓋石としての機能や何らかの視覚的な目的を持つものがあると考えられる。

3　土器棺の主軸方向と傾斜について

まず，主軸方向について考えてみたい。主軸方向に関しては報告書や論文によって主軸，開口方向，頭位などいろいろ呼び方が異なっているが，棺身の口縁部が向く方向を示しており，ここでは主軸方向に統一する。高松市内で調査された土器棺の主軸方向を表したものが第87図である。第87図上は全ての主軸方向を集めたものであり，各遺跡ごとの主軸方向と尾根の方向を表したのが第87図の下である。ただし，平野部の遺跡は一つにまとめている。

この図を見ると，平野部と丘陵部との間に異なる傾向が明確に確認することができる。丘陵部の土器棺はいろいろな方向に向いており一見すると不規則的であるが，各遺跡ごとに主軸方向と屋根稜線の方向の関係を分析すると，一定の原則があることがわかる。久米山遺跡群（久米山墓地地区）（以下，久米山墓地地区と称する）では南南東－北北西の稜線に対し土器棺は西に向き，諏訪神社遺跡では南－北の稜線に対し北東を示し，通谷遺跡では南南西－北北東の稜線に対し西，北西，南東を示す。円養寺遺跡では南東－北西に対して土器棺は南と南西に向いている。すなわち，丘陵部における土器棺の主軸方向は尾根の稜線に対してほぼ直交すると

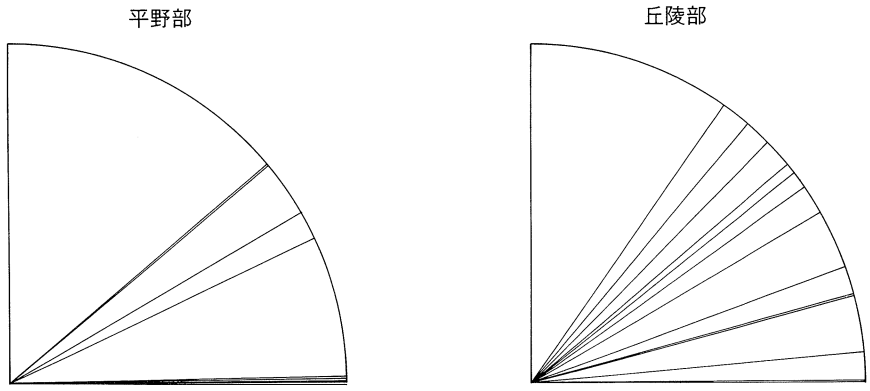




第87図　土器棺の主軸方位

いう原則に従って設定されているのである。これに対して，平野部にある土器棺は，東を中心とした一定の方向に集中している。平野部に土器棺を埋納した人々は何らかの意味で「東」を意識していたと考えられる。平成6年に調査された木田郡三木町の鹿伏・中所遺跡においても，15基の土器棺中10基が北ないし北東方向に主軸をもっていることが報告されている(5)。前述した彼ノ宗遺跡では主軸方向が北から西にかけての方向に向いている(6)。このように主軸方向が一定の方向に向く規則性があるという意味では，この時代の人々は土器棺に対する同一の意識を抱いていたと考えられる。

次に土器棺の傾斜について考える。第88図は平野部と丘陵部に分けて土器棺の傾斜角度を表してものである。ここにおいても両者の間には明瞭な違いが見られる。平野部の土器棺は水平のものと30度前後の角度のものに分けられる。これに対して，丘陵部では角度の集中はなくばらつきが顕著である。地形が大きく影響した結果であると考えられる。



第88図　土器棺の傾斜角度

4　土器棺の形態について

土器棺は棺身と棺蓋の組合せによっていくつかのタイプに分類することができる。

Ⅰ　壷－鉢　　身が完形で大形の壷

（蛙股遺跡2，諏訪神社遺跡1，通谷遺跡1，田村神社1）

身が大形の壷で口頸部を打ち欠いたもの

（蛙股遺跡1，久米山墓地地区1，通谷遺跡3．4）

Ⅱ　壷－高坏　　（久米山墓地地区2）

Ⅲ　壷－壷か甕の破片　　（太田下・須川遺跡1，円養寺遺跡1，通谷遺跡2）

Ⅳ　甕－鉢　　（凹原遺跡1～3，久米山墓地地区3．4）

V　単体の大形壷　　（太田下・須川遺跡２，久米山墓地地区５，円養寺遺跡４，通谷遺跡６．７，田村神社２）

この中で最も数の多いのは，タイプの棺身が大形の壷で棺蓋が鉢という組合せである。特異なものとしてタイプＩに属する凹原遺跡３号土器棺がある。棺身には合わせ口をした２個の甕が用いられ，北側の甕の底部を打ち欠き，そこに蓋としての鉢が置かれていた。

棺身として使用された壷・甕は大形の土器であるが，成人を埋納することは不可能である。これらの土器棺は小児用の棺であると考えられている。事実，彼ノ宗遺跡では土器棺からの小児の歯の出土が４例あったと報告されている。

棺身の土器には胴部に土器焼成後の穿孔が見られるものがある。この穿孔は内外面からの加工によってあけられ，蛙股遺跡２，諏訪神社遺跡１，久米山墓地地区１．３，円養寺遺跡１，通谷遺跡５の棺身に見られる。穿孔のもつ意義に関しては，水抜きするためとか呪術的な目的等いろいろ考えられている。弥生時代前期に畿内で発生し各地に伝わっていった方形周溝墓に副葬されている土器にも同様な穿孔されているものがあり，土器棺と同じ意識に基づいていると思われる。

土器棺を埋納する土壙の平面形は円形もしくは楕円形を呈し，土器棺よりやや大きい径を持つのが一般的である。しかし，諏訪神社遺跡１と久米山墓地地区５の掘り方は一辺150cm以上を測る方形であり，その中央に土器棺が埋納されていた。

5　小結

これまでいろいろな角度から土器棺について考えてきたが，注目すべき点を挙げてまとめとしたい。

①立地が平野部と丘陵部に分かれている。

立地条件は平野と丘陵と大きく異なるが，土器棺の構造，形態には共通した要素が見られ，構造上の違いは基本的にほとんどないといえる。ただ，後述するように主軸方向にはやや異なる傾向が見られる。

土器棺で考えなければならない問題の一つに，集落との関係がある。高松市内では集落に伴う土器棺が確認されたのは凹原遺跡と太田下・須川遺跡である。その他の平野部の遺跡では近接する集落は現在まで検出されておらず(7)，丘陵部の遺跡においても同じ尾根上に住居址が見つかっているものはない。このような丘陵部は死者を埋葬するための特別な場所として認識されていた可能性があると考えられる(8)。では，本遺跡をはじめとする平野部にある土器棺はどのような意識のもとに墓域としてその地点を選んだのであろうか。前述した凹原遺跡，太田下・須川遺跡では，土器棺が集落域と接する立地を示しているが，集団墓地の墓域としての性格を

有しておらず，単独で存在する。これに対して，本遺跡では旧河道跡の低湿地という本来墓域になりがたい場所に葬られており，最近類例が増えているが，極めて特異な埋葬である。

②土器棺の主軸方向が，平野部では東方を，丘陵部では尾根に直交する方向を示している。この主軸方向の問題が最も注目すべき点である。平野部にある4遺跡11例全ての土器棺が東を中心とした一定範囲内に主軸方向を示している。一方，丘陵部では4遺跡14例中13例が尾根に対して直交する方向である。これらの丘陵はほぼ南北方向に尾根筋が延びており，直交する土器棺の主軸方向は必然的に東あるいは西に向くことになる。13例の土器棺のうち大部分を占める11例が西方向となっている。このように高松平野では，平野部の土器棺は東を，丘陵部では東西方向に主軸方向を持つ傾向が確認された。県内にはこのような主軸方向でない土器棺も存在するが，ある一定した方向に向くという規則性を持つという点では高松平野の土器棺と同一である。香川の前期古墳の特徴として，埋葬方位が東ないし西方向優位の傾向のあることが言われており，この現象は弥生時代に成立した葬法が古墳時代にまで強く影響を与えた結果であると考えられている[9]。この前期古墳における東西方向に対する強いこだわりが，直接的に土器棺の主軸方向と結びつくことは考えられないが，何らかのつながりがあることを示唆しているのではないだろうか。今後の土器棺の研究には，弥生時代におけるその他の埋葬方法である土壙墓や箱式石棺・方形周溝墓等との関連，さらに高松以外の県内の土器棺をはじめとした東瀬戸内海沿岸地域を視野に入れた総合的な研究が必要であろう[10]。

最後にどうして主軸方向が東西方向に向くかということに関して個人的な考えを述べたい。人間は生まれやがて死ぬ定めであり，「死」は避けられない問題である。特に幼くして死亡した小児の場合は，その悲しみは大きく再生を願う気持ちが強いであろう。太陽は昇り，そして沈み，再び昇ってくる。そこに死者再生を願う死生感と太陽が結びついた要因が考えられる。主軸を東ないし西に向ける根底には，「太陽」に対する何らかの意識があるのではないだろうか。この考えに対する明確な根拠があるのではなく，個人的な考えであることを再度断っておく。先輩諸氏からのご批判を願う次第である。

註

（1）基礎とした報告書，実測図は下記の通りである。

太田下・須川遺跡―香川県教育委員会他『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第4冊　太田下・須川遺跡』　1995年

凹原遺跡―報告書は未刊であり，高松市が実施した発掘調査時の実測図を使用した。

田村神社―寺田貞次「田村神社出土大甕」『史跡名勝天然記念物調査報告第11』香川県　昭和15年

諏訪神社遺跡―報告書は未刊であり，高松市が実施した発掘調査時の実測図を使用した。
久米山遺跡群（久米山墓地地区）―報告書は未刊であり，高松市が実施した発掘調査時の実測図を使用した。
久米八幡馬場先―六車恵一「讃岐における合口土器について」『文化財協会報特別号第５集』香川県文化財保護協会　1961年
通谷遺跡―高松市教育委員会『高松市三谷町通谷遺跡調査概報』　1961年
上佐山山麓甕棺墓群―宮本琢磨氏の御教示による。
切谷遺跡―宮本琢磨氏の御教示による。
円養寺遺跡―円養寺遺跡発掘調査団「高松市円養寺遺跡調査概報」『文化財協会報特別号10』香川県文化財保護協会　昭和46年
なお，報告書未刊行の遺跡に関しては，現時点の資料を基にしており，本節の中で事実誤認や不明瞭な部分があれば全て私の責任である。正式な報告書が早急に刊行されることを願う。

（２）善通寺市教育委員会『彼ノ宗遺跡』1985年　検出された15例の土器棺のうち，土坑内に石があるものが６例数えられ，埋葬寺に壷棺や蓋を安定させるために挿入されたと考えられている。

（３）円養寺遺跡発掘調査団「高松市円養寺遺跡調査概報」『文化財協会報特別号10』　香川県文化財保護協会　昭和46年

（４）六車恵一「讃岐における合口土器について」『文化財協会報特別号第５集』　香川県文化財保護協会　1961年

（５）香川県教育委員会他『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　太田下・須川遺跡』　1995年

（６）前掲２）

（７）高松では集落と土器棺が分離しているが，県内では鹿伏・中所遺跡や彼ノ宗遺跡のように大規模な集落の中に土器棺がある遺跡も確認されている。なお，久米八幡馬場先は正確な位置は不明であるが弥生時代の集落として著名な久米池南遺跡と同一丘陵であると思われる。

（８）松本豊「弥生時代」『香川県史１原始・古代』　香川県　昭和61年

（９）前掲８）

（10）柴田秀樹「甫崎天神山土坑墓群について」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査８　甫崎天神山遺跡』　岡山県教育委員会他　1994年
土壙墓と土器棺の位置関係や主軸方向に関して論考している。

第３節　中世の水田について－１，２工区の土地利用の変遷－

高松平野は条里地割が良好な状況で遺存していることで従来より注目されていた。依存する中でわが国最古と言われている弘福寺領讃岐国山田郡田図の現地比定に関してはいくつもの論考が発表され(1)，「香川県史」1において讃岐の条里プランの詳細な研究がなされている。(2)さらに近年山田郡田図に関する学際的な研究が行われ報告書が刊行された。(3)このような文献史学や歴史地理学による研究だけでなく，最近では遺跡の発掘調査により条里プランに合致する遺構の検出が増加しており(4)，高松平野における条里プランの実像が次第に解明され始めている。ここでは1．2区で検出された遺構を基にこの付近の土地利用の変遷について考えてみたい。論を進めるにあたり，まず現地表における条里プランの復原を行い，次に1～4段階の遺構変遷について説明し，最後にまとめとしたい。

1　遺跡周辺の条里プラン

本遺跡の周辺における条里地割を現在の地割りの基に復原したのが第89図である[5]。それによれば，１区と２区の間にある水路は東西方向の坪界に，１区西側の水路と２．３区間の道

第89図　遺跡周辺の条里分布図

路はそれぞれ南北方向の坪界にあたっている。さらに，本遺跡から南へ約200ｍの位置には里界が延びている。すなわち，本遺跡は香川郡の２条16里に位置しているのである。

2　遺構の変遷

検出された水田や溝などの遺構は11～12世紀に比定されるが，その切り合い関係から１～４段階の変遷が考えられる。

第一段階　（第90図１）

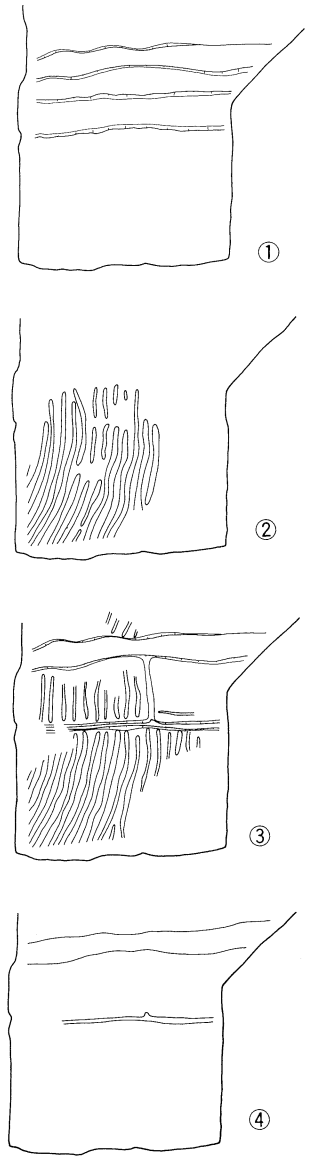
２区において，南北方向に延びるＳＤ01とその東側に併走する大畦畔が検出された。ＳＤ01は幅250cm，深さ28cmを測る溝で，埋土状態や底面の状況により常時かなりの量の水が流れていたと思われる。若干の土器と木製品が出土し，その土器の時期は11世紀末に比定されるが，８世紀中葉と考えられる須恵器も共伴している。地山整形の大畦畔は第四段階までその機能を果たしている。ＳＤ01と大畦畔は条里地割と同一方向であり，南北の坪界線にあたる調査区西側の水路からの距離は約87ｍである。

第二段階　（第90図２）

ＳＤ01が埋没したあとに，水田がつくられる。水田は１．２区に広がっており，１区では小規模な畦畔を伴う第５層水田，２区は第４層水田である。１区では土層観察により畦畔に伴う石が規則的な間隔で検出された。２区の水田は上位の第三段階の水田によって削平され地山基盤層のみ残存している。その基盤層には畝溝群と考えられる非常に浅い溝が並列している。その方向は北西部で僅かに曲がっているが大局的には東西方向を示している。この水田より12世紀初めに比定される土器が出土した。

第三段階　（第90図３）

前段階の水田が洪水によって埋没し廃棄された後，再び水田がつくられた。１区の第４層水田，２区の第３層水田である。２区の水田は土壌層と非土壌層に明確に分けられ，異なる様相をなしている。下位の非土壌層には南北方向の大畦畔と小畦畔，それらをつなぐ東西方向の小畦畔が検出される。その区画された部分には前段階と同様に東西方向の畝溝群が見られる。



第90図　２区遺構変遷図

第四段階　（第90図４）

前段階の水田土壌層が広範囲に拡大した段階である。２区では南北方向で併走する大畦畔と

小畦畔が検出された。小畦畔には数個の石でできた水口を伴っている。

3　条里型水田の時期について

前述したようにＳＤ01や大畦畔・小畦畔は条里地割と同一方向であり，検出された水田は条里プランに基づく条里型水田であると考えられる。その時期は出土土器より11世紀中葉～12世紀中葉に比定される。高松平野における条里地割の初現年代は，735年の銘がある山田郡田図に方格地割が描かれており，８世紀中頃には条里制が施行されていたと考えられる。事実，松縄下所遺跡では８世紀前半の土器を伴う南北方向の２本の直線平行溝が200ｍ以上検出された。この平行溝は条里地割の坪界にあたり，計画的な幹線道路としての性格を有すると考えられる(6)。本遺跡の２区で検出されたＳＤ01は，11世紀中頃の土器とともに８世紀の須恵器も出土している。したがって，高松平野での条里制の施行初現年代は８世紀前半を遡らないといえる。

次に，廃絶年代に関しては，今回の調査結果に限れば，ＳＤ01の埋没時期が11世紀中葉であり，その上面を覆う水田では12世紀中葉の土器が出土しており，この時期までは水田として機能を保持していたであろう。

4　小結

これまで弥生時代後期の旧河道埋没後の微低地における中世初頭の条里型水田について考えてきた。最後に注目すべき点を挙げてまとめとしたい。

まず，溝や畦畔が条里地割に基づくものであり，11世紀中葉以降の土地利用の変遷を明らかにすることができた。そして，条里制の施行，廃絶年代に関して僅かではあるが資料を提供することができた。

２点目は大畦畔の検出である。この大畦畔は規模や形態から判断すると，単に水田の区画としての畦畔ではなく道路としての機能も合わせ持っていると考えられる。

３点目は２面の水田の基盤層に畝溝群が見られることである。特に，２区３層の水田は，上層の土壌層と下層の非土壌層の間に異なる様相が見られる。上層は広域に広がる土壌層で，下層には溝が並行する畝溝群がある。このような様相の違いは何らかの耕作の過程を示すものと思われるが，作地の違いをあらわしている可能性も考えられる。すなわち，上層が水田，下層が畑作耕地の可能性である。現在まで県内では畑としての明確な遺構は検出されておらず，だだ，山田郡田図比定地の調査において土層観察や化学的分析により畑の存在が指摘されているのみである(7)。本遺跡ではプラント・オパール分析や花粉分析などの化学的な分析が行われていない。したがって，畑作の可能性を指摘するにとどめる。

註

（1）代表的な研究としては，昭和29年高重進，昭和32年福尾猛市郎と米倉二郎の研究があり，福尾・米倉説が定説となっている。

（2）金田章裕「条里と村落生活」『香川県史』1　香川県　昭和63年

（3）高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査』　1992年

（4）高松市内において条里地割に関係する遺構が検出された遺跡としては，浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，井手東遺跡，上天神遺跡，凹原遺跡，日暮・松林遺跡，多肥松林遺跡，天満宮西遺跡，松縄下所遺跡，空港跡地遺跡，空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅱ）がある。

（5）高松平野全域にわたる条里プランの復原は，金田章裕氏が前掲3）の附図において行っている。

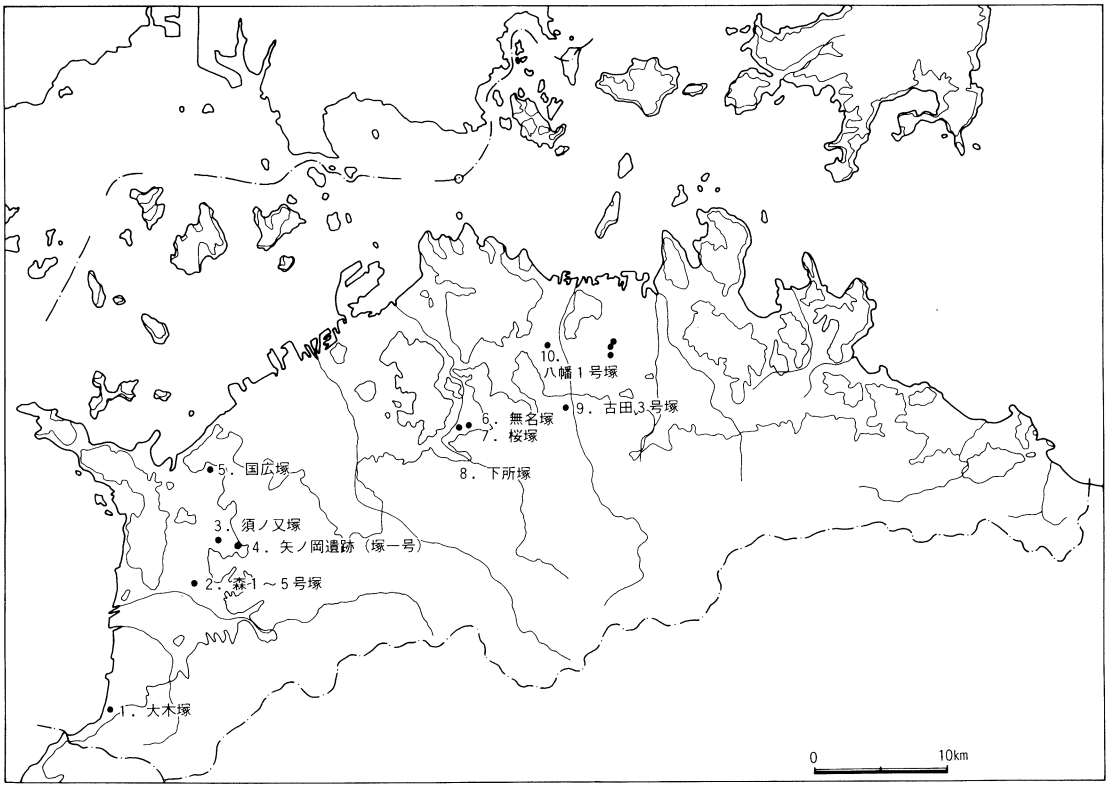
（6）山本英之　前掲3）　第2章　第3節
「高松平野の条里遺構」『条里制研究』　第8号　条里制研究会　1992年

（7）前掲3）

第４節　中・近世期に属する塚について

１　はじめに

中近世期に属する時期の遺構として塚というものが存在する。一般的に，これらの遺構はマウンドを持つのが普通で，現在も石の祠等がおかれて信仰の対象となっているところが多い。香川県においても塚とよばれる遺構についての調査例は少ないが，いくつか調査されており，今回，居石２号塚をまとめるにあたり，その性格等の参考にするため，県内の塚と呼ばれる遺構の調査例を集めた。それを一覧表にしたものが第５表である[(1)]。一覧表をみてもわかるとおり，問題点として地域が片寄っている点があげられる。結果として片寄った傾向がでている可能性が考えられる。調査例の少ない現在では仕方がないことである。ここでは県内において調査が行われている，これらの塚の分類を行い，その性格および築造された背景を考えることによって，居石２号塚および太田第２区画整理事業地内に存在する塚の性格を考えみたい。太田第２区画整理事業地内で調査を行った塚については附載として別にまとめた。



第91図　県内塚調査位置図

第5表　香川県内塚地名表

	塚名	所在地	外部状況（墳丘，盛土等）		内部状況（墓壙等）		出土遺物	時期
			規模	特徴	規模	特徴		
1	大木塚	三豊郡豊浜町大字和田乙1325番地	盛土 長軸15m，短軸10m，高さ2m基壇状石積み 内法約4.8m，外法5.4m 内法約3.1m，外法3.6m 内法約2.2m，外法2.6m	方形を画する3重の石列 石列には70～80cm程度の河原石の塊石 石積みには20～30cm程度の河原石	（土坑） 径1.6m，深さ0.32m	石積みの中央部で確認 土坑内には玉砂利，黒褐色砂質土が充塡	（土坑内） 白磁皿3，青磁碗1	
2	森1号塚（延命遺跡）	三豊郡豊中町上高野大地八反地	東西1.0m，南北5.3m，高さ0.8m	人頭大の河原石による集石	――	――	土師器小皿，備前焼擂鉢，青緑釉皿	
	森2号塚	〃	東西1.6m，南北4.7m，高さ0.47m	〃	――	――	土師器小皿，備前焼坏，擂鉢，壺	
	森3号塚	〃	東西2.1m，南北1.5m，高さ0.6m、(検出規模) 東西2.2m，南北2.2m，（集石除去後）	人頭大の河原石による集石 いびつな楕円形 暗灰色粘質土と淡灰茶褐色粘質土の版築	（石室掘方） 長辺1.3m，短辺0.74m，深さ0.16m （石室内法） 長軸1.07m，短軸0.45m 深さ0.14m	石室は墳丘版築後掘削後河原石による石室を構築	（集石部分） 土師器小皿，瓦質土器鍋 （石室内） 鉄釘，刀子	
	森4号塚	〃	東西1.3m，南北5.3m	集石はみられるが，良好な状態ではない	――	――	土師質土器火鉢，須恵器	
	森5号塚	〃	東西2.6m，南北2.8m，高さ1.45m	10～30cm程度の河原石による集石 版築により墳丘を形成した後墓壙を掘削する	（石室掘方） 長辺1.68m，短辺0.95m，深さ0.33m， （石室内法） 長軸1.19m，短軸0.55m，0.64m	石室は墳丘版築後掘削後河原石による石室を構築	（集石部分） 龍泉窯青磁椀，須恵器甕，壺，亀山焼甕，東播系甕 （石室内） 鉄釘，刀子	
3	須の又塚	三豊郡高瀬町下勝間824	長径7m，短径3m，高さ0.75m	墳丘埋土は大きく2層，墓壙検出面より約15cm上を基底とするほぼ円形の石列	（墓壙） 長さ1.4m，幅0.6m，深さ0.15m	墓壙内は両端上部に40cm大の石が対になって検出	土師器，備前焼，魚住焼，五輪塔石材，（出土遺物は後の盛土から出土）	
4	塚一号 矢ノ岡遺跡	三豊郡高瀬町上勝間矢ノ岡	径1.8m×高さ0.54m	近世から現代の間に塚一号周囲を掘削したために高まりとして残った可能性が大きい	――	――	須恵器	
5	国広塚	三豊郡三野町大字大見	径3m，高さ1.2m	マウンド裾部で小児頭大の扁平な塊石を2段程度積み上げた石列を平面的に敷き並べる　その上部に黄灰色粘土を堅く敲き締めた上に盛土が見られる	――	――	陶器，土師質土鍋片	

	塚名	所在地	外部状況（墳丘，盛土等）		内部状況（墓壙等）		出土遺物	時期
			規模	特徴	規模	特徴		
6	無名塚 西村遺跡	綾歌郡綾南町陶	（現状） 長さ2.8m，幅1.1m，高さ0.35m， （旧状） 径4m前後	楕円形 塚の東側に巡る0.5～0.9m幅，深さ10～15cm程度の溝が伴う	1.4m×0.5m，（石の範囲）	方形石積みの下部に石を並べ置いたような状況	刀，須恵器，土鍋の脚，近現代の瓦	
7	桜塚 西村遺跡	〃	南北6.5m，東西3.5m	方形　周囲縁辺に比較的新しい石積み囲い	1.3×1.0m	中央南よりに隅丸方形状土坑（底部に河原丸石が残存）塚本来の埋葬主体？ 盛り土の3～4層目あたりにも不正な土坑3カ所（骨片および灰を含んだ層）簡易な埋葬？	底部に近い壁面から寛永通宝6枚	
8	下所塚	綾歌郡綾南町大字萱原字下所519	東西2m，高さ0.3m，（南北は後世の破壊により不明）	1　長径1.7m，短径0.7m，深さ0.02～0.04m 2　長径1.7m，短径0.2m，深さ0.1m		2基の土坑1が2により破壊される	少量の土師器片	
9	古田3号塚	香川郡香南町池内字中筋183―1	南北2m，東西1m，高さ0.15m	長円形　耕作による削平が著しく本来の規模は不明	――	――	土師器羽釜，脚部	
10	八幡1号塚	高松市檀紙町八幡	4m×4mの方形，高さ1m，（その内0.6mは現代の盛土）	1.7m×1.0mの範囲で河原石による石組み遺構規則性は見られない	――	――	須恵器	

文献一覧

1　大木塚　安田和文『大木塚遺跡調査概報』豊浜町教育委員会1985．2
2　延命遺跡　片桐孝浩『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第八冊　延命遺跡』香川県教育委員会　(財)香川県埋蔵文化財調査センター　日本道路公団1990．12
3　須の又塚　岩橋孝「須の又塚」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成元年度』香川県教育委員会　1990．3
4　矢ノ岡遺跡　野中寛文『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二冊　矢ノ岡遺跡他』香川県教育委員会日本道路公団　1987．3
5　国広塚　國木健司「国広塚」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和63年度』香川県教育委員会　1989．3
6　無名塚　秋山忠「西村遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和53年度』香川県教育委員会　1979．3
7　桜塚　6の文献に同じ
8　下所塚　大砂古直生「下所塚」『西村遺跡Ⅲ－国道32号綾南バイパス建設工事にともなうう埋蔵文化財発掘調査－』香川県教育委員会　1982．3
9　古田3号塚　中西昇「古田3号塚」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和59～62年度』香川県教育委員会　1988．3
10　八幡1号塚　北山健一郎「八幡1号塚」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成3年度』香川県教育委員会　1992．3

2　塚の分類

まず県内において調査が行われている塚を整理してみたい。第５表に示した塚について分類をおこなったものが，第６表である。

- 塚
  - A　上部に積（集）石
    - 1　埋葬施設がある
      - a　石室を構築するもの
      - b　石室を構築しないもの（土壙等）
    - 2　埋葬施設がない
  - B　上部は盛土
    - 1　埋葬施設がある
      - a　石室を構築するもの
      - b　石室を構築しないもの（土坑等）
    - 2　埋葬施設がない
    - 3　内部は不明

第６表　塚分類表

この分類表にしたがい各塚をあてはめてみると以下のとおりになる。

Ａ１ａ
・森３号塚（豊中町）
・森５号塚（豊中町）

Ａ１ｂ
・大木塚（高瀬町）
・須の又塚（高瀬町）

Ａ２
・森１号塚（豊中町）
・森２号塚（豊中町）
・森４号塚（豊中町）
・瓦礫１号塚（高松市）
・汲仏１号塚（高松市）
・松ノ元１号塚（高松市）

Ｂ１ａ
・無名塚（綾南町）
・桜塚（綾南町）
・下川津遺跡
　ＳＴⅢ09，10（坂出市）○

Ｂ１ｂ
・下所塚（綾南町）
・居石２号塚（高松市）○

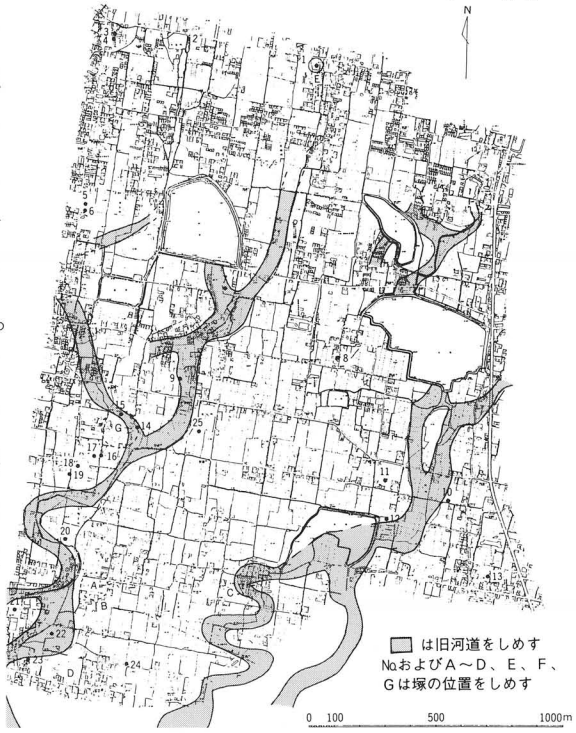
Ｂ２
・古田３号塚（香南町）
・八幡１号塚（高松市）
・塚１号塚（矢ノ岡遺跡）

Ｂ３
・国広塚（三野町）

※　○印は主体部に人骨が伴うもの

この分類表によって埋葬施設をもつ墓であるものと，ただの土盛り（集石）であるものが後

に信仰の対象となったものとに大きく２つに分けることができる。これらの出現要因として，前者は集落に伴う墓であるのに対して[2]，後者は水田耕作等の開発によって，耕作の邪魔になる礫等を水田の端においていたものが，後に信仰の対象となり塚と呼ばれるようになったものと考えられる。このように考えてみると扇状地にはこのように塚と呼ばれる土盛りが多く存在する。高松市太田区画整理事業地内周辺に眼を移してみると，区画整理事業地内において確認されている塚の多くが，南西から北東に延びる２本の線上の周辺に密集することがわかる。これを高橋学氏が作成した微地形分類図と重ね合わしてみると（第92図），区画整理事業地内を貫通する２本の旧河道と一致することがわかる。この結果と，発掘調査の結果を照らし合わしてみる区画整理事業地内で調査を行った塚は，その多くが耕作の邪魔になる礫の集積が，その要因である可能性は調査の結果からしても高いと考えられる。一方，居石２号塚のように旧河道沿いで，埋葬主体をもつものもみられることは，中世の集落でみられるような屋敷内墓と考えるのかは，周辺に当該期の集落の調査例がないため不明であるとしかいえない。



第92図　塚と旧河道の位置関係

3　まとめ

以上，簡単に中・近世期に属する塚について整理を行ったが，埋葬主体をもつ本来の塚（墓）が集落のどの位置に構築されるのか，土盛りを行う埋葬方法と他の埋葬方法[3]との間にどのような違いがあるの，また，埋葬主体の形態にどのような違いがあるのかまでは時間の関係で言及することができなかった。また，集石をもつ墓が中世から近世にかけてどのように存続するのかも不明である。これらについて，私の勉強不足もあり，うまくまとめることができなかった。今回は，時間的な制約もあることから次の機会に再度まとめてみたいと考えている。

註

（１）塚の調査例を極力集めるよう努力したが，報告文の中での記述が少ないため，表を作成する時点での記述内容に誤りがあるかもしれない。記述内容に不備がある場合は表を作

成した山元の責任である。

（2）延命遺跡の調査を行った片桐孝浩氏によると森1号～5号塚のうち埋葬主体が確認された塚については墓であると考えている。これらの塚が集落の端に位置していることから延命遺跡の集落に伴うものと考えられており，これらの墓は屋敷墓の可能性が高いと考えられている。片桐孝浩『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第八冊　延命遺跡』　香川県教育委員会　（財）香川県埋蔵文化財調査センター日本道路公団　1990．12

その他，片桐氏にはいろいろと御教示を賜ったがうまく活かすことができなかった。活かしきれなかった点については今後の課題としたい。

（3）中・近世の埋葬方法として土壙墓の存在があり，土盛りをもつ埋葬主体との性格の違いも考えなければならないし，副葬品についても輸入陶磁器を副葬するものとそうでないもの等検討すべき課題は多いが，時間的な制約もあり今回はできていない。

集落内における墓の時期，形態，構築場所等についての検討は下川津遺跡において大久保徹也氏が検討を行っている。

大久保徹也「下川津遺跡の古代・中世墓について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会　(財)香川県埋蔵文化財調査センター本州四国連絡橋公団　1990．3

附　　載

第１節　太田第２土地区画整理事業域内の塚について

太田第２土地区画整理事業域内には，居石２号塚と同様な塚（塚跡）が多く確認されている。これらの多くは，言い伝えや痕跡のみであったり，区画整理事業に伴う工事によって消滅したりで十分な調査の手がおよんでいないが，なおその中に２，３の確認調査例があるため，参考資料として附載するものである。

松の元１号塚（第93～95図）

高松市太田下町1602に所在する。区画整理事業に伴う整地工事に先立って，平成２年10月15～18日の間で確認調査を実施した。調査の方法は，長軸・短軸に沿って，中心から４方向にトレンチを延ばす形で設定した。

松の元１号塚は，長径7.5ｍ，短径6.3ｍの不整な楕円形で，長軸方向はＮ-17°-Ｅである。高さは1.8ｍを測る。水田中に孤立して存在する高まりで，地元ではこの高まりを塚であると伝承している。現在，東側をコンクリート畦畔によってわずかに削られ，また北側もコンクリート畦畔に沿う形に大きく削平整形されている。そのため，実際は長軸方向にさらに延びるものと思われる。

この塚の立地を地図から読みとると，旧河道上に塚が立地していることがわかる。実際，塚の周囲の水田床土下では，５～20㎝大の礫層が存在し，旧河道中に形成された中州とも考えられる。

トレンチの土層断面観察により，塚は６層に分かれることが判明した。

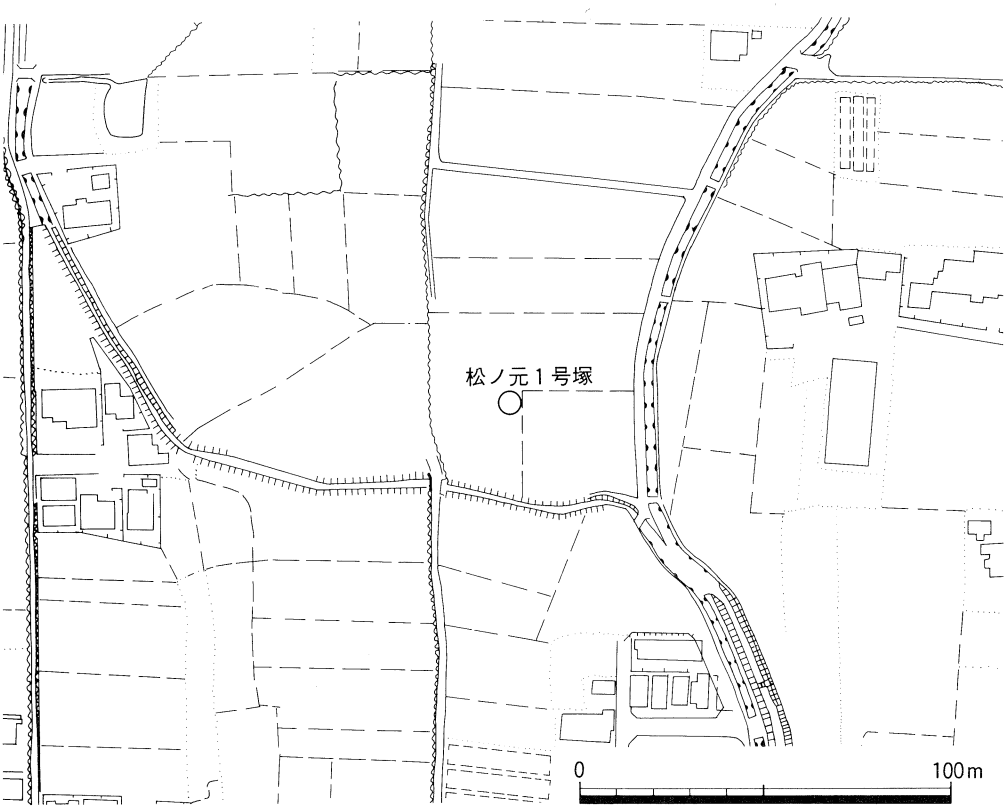
第１層は黒色腐植土の表土である。第２層は暗黄褐色土の礫混じり，第３層は暗灰色土の礫混じりで植物の根が繁茂している。第２・３層とも土の量より礫の量が多い。第４層は礫層で土をほとんど含まないことから，短期間で形成されたものと考えられる。第５層は黄褐色土の礫混じりだが，土の量より礫の量が多い。第６層は暗黄灰色砂質土の土壌層であることから一時期の地表層と推定され，第６層上面が塚形成前の地面であったと考えられる。塚の周囲では水田の耕作が長年続けられたため，この第６層は現在の地面より10～20㎝ほど高い位置にとり残されている。実際，塚周辺のベースとなっている第９層の上面は，塚の内側の方が塚の外側よりもレベルが高い。

各トレンチからは全部でコンテナ半箱ほどの遺物が出土した。

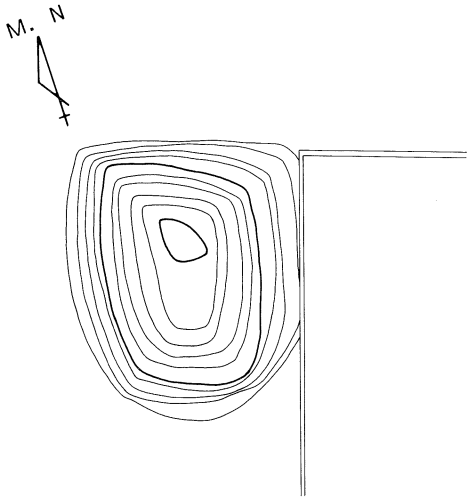
松ノ元一号塚出土遺物

最下層出土遺物（第97図）

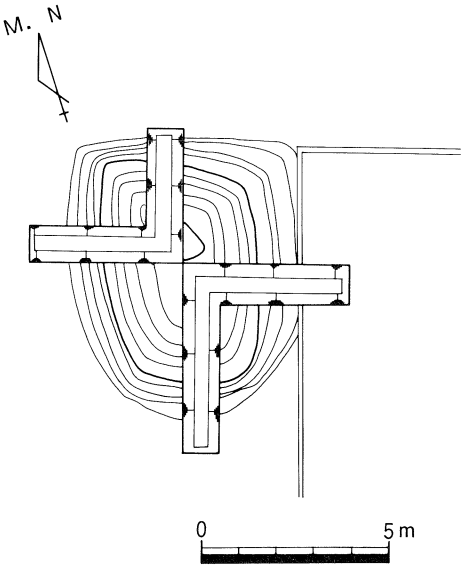
１は須恵器の皿である。法量は口径14.0㎝，残存高1.8㎝である。最下層出土遺物はこれのみである。



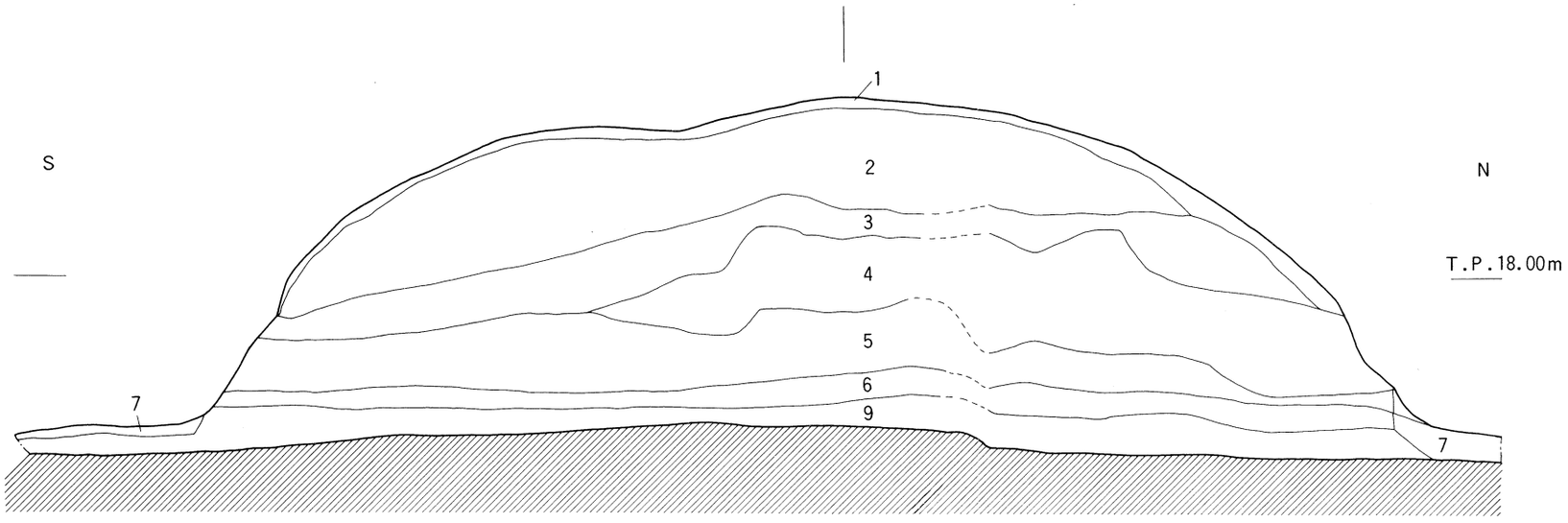
第93図　松ノ元１号塚位置図



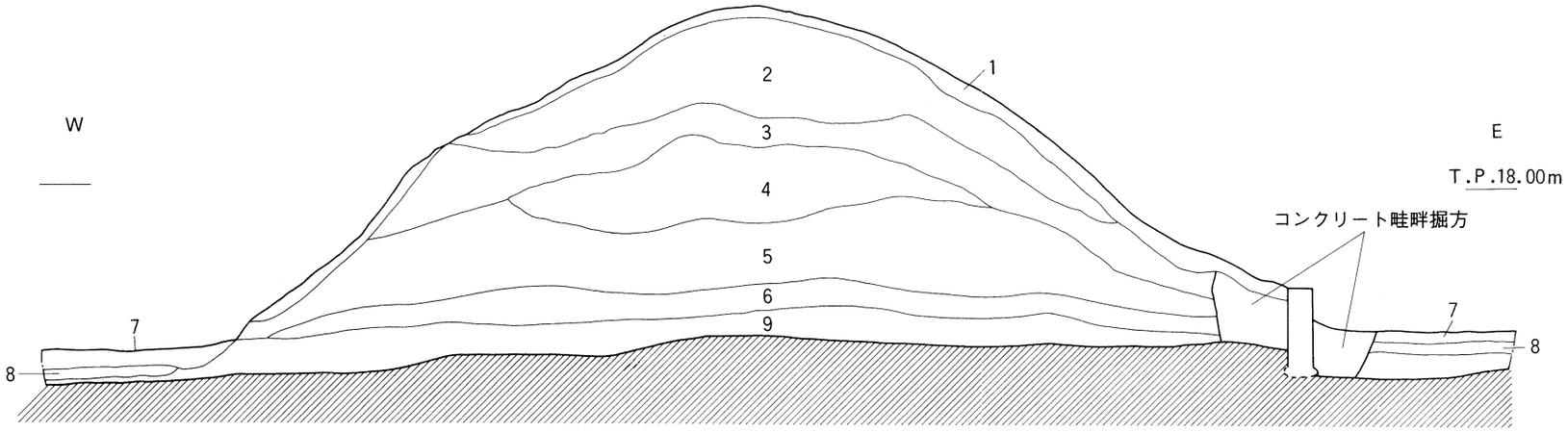
第94図　塚平面実測図



第95図　トレンチ配置図



塚南北土層図

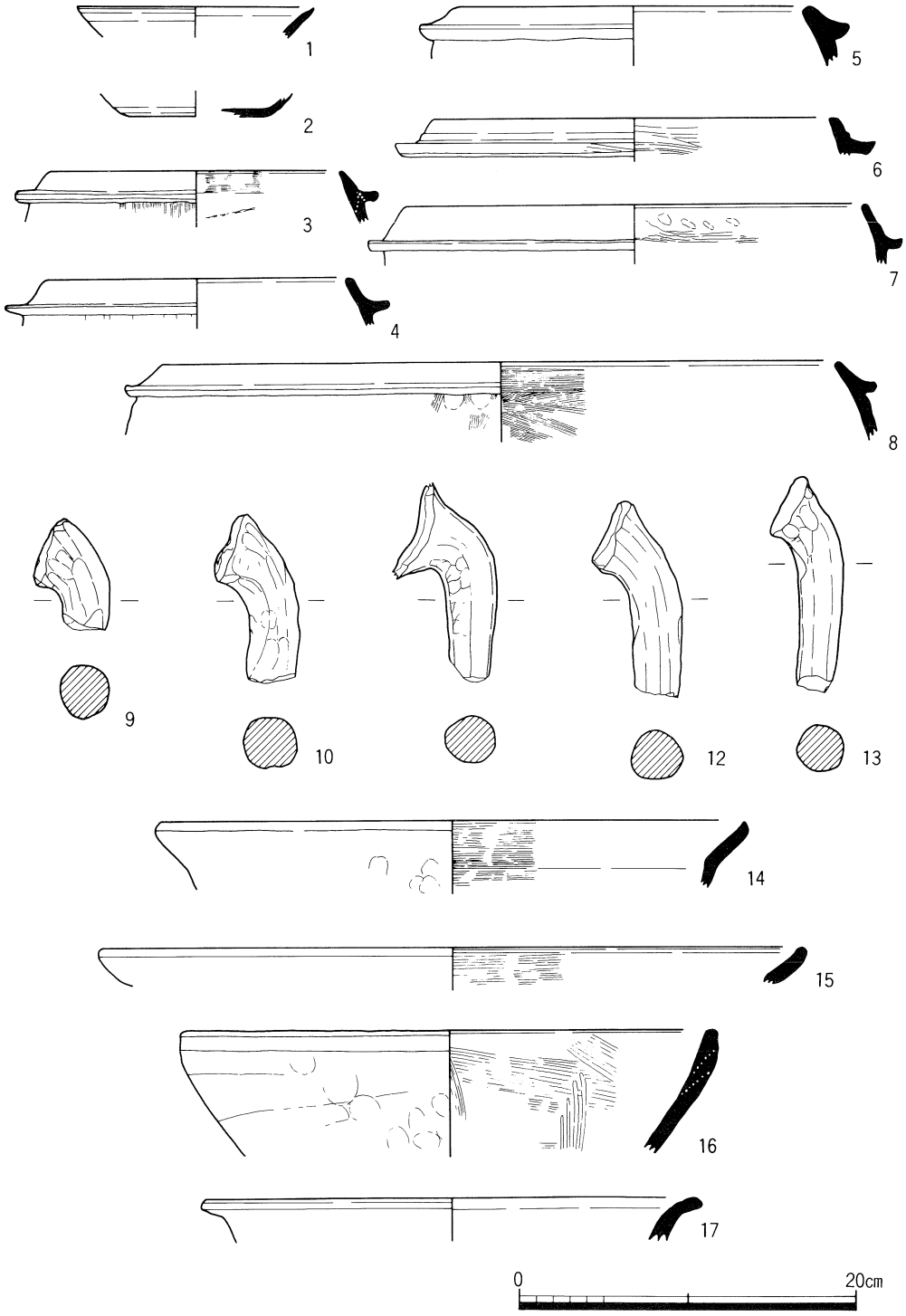


塚東西土層図

1．黒色腐食土（表土）
2．暗黄褐色土、礫混じり（5～15cm大の礫）
3．暗灰色土、礫混じり（5～15cm大の礫、植物根繁茂）
4．礫層（5～15cm大の礫）
5．黄褐色土、礫混じり（5～20cm大の礫）
6．暗黄色灰色砂質土（塚形成前の地表層）
7．黒色土（現耕作土）
8．暗青灰色土（現耕作床上）
9．上部　黄灰色砂質土
　下部　灰色砂礫

0　2 m

第96図　松ノ元1号塚墳丘土層図



第97図　松ノ元1号塚出土遺物実測図

2層出土遺物（第97図）

その他の出土遺物は2層からのみの出土である。2は土師器の坏である。3～8は土師器の脚付土釜の口縁部である。内傾する口縁部をもち，鍔が退化したものもみられる。調整は内外面ともナデを基調とするものとハケを基調とするものに分かれる。9～13は土師器の土釜の脚部である。ナデ調整による指頭圧痕が顕著に残る。14,15は土師器の鍋である。口縁部内面にハケ調整がみられる。16は土師器の擂鉢である。内面の調整はハケ，外面はナデを施す。条溝は4条が1単位である。外面には接合痕が顕著に残る。17は須恵器壺の口縁部かと考えられる。以上の出土遺物からすれば中世後半頃の時期が考えられる。

瓦礫（がらく）1号塚（第98図）

高松市多肥下町瓦礫11番地2に所在する塚である。区画整理事業に伴う整地工事に先立って，平成6年8月5～11日の間で確認調査を実施した。

瓦礫1号塚は，現況では東西に長軸をもつ不整長方形を呈する。西側端部が，長辺にやや斜行する短辺をもって明瞭に方形をなすのに対し，東側はやや南北に肥大し，東端部が弧状を呈するため，一見前方部を西に向けた前方後円墳を思わせる。東西主軸長23m，後円部（？）径14m，高さ約1mを測る。墳丘斜面はいずれの箇所も30°～50°の傾斜をもって直線に立ち上がり，頂部は平坦である。

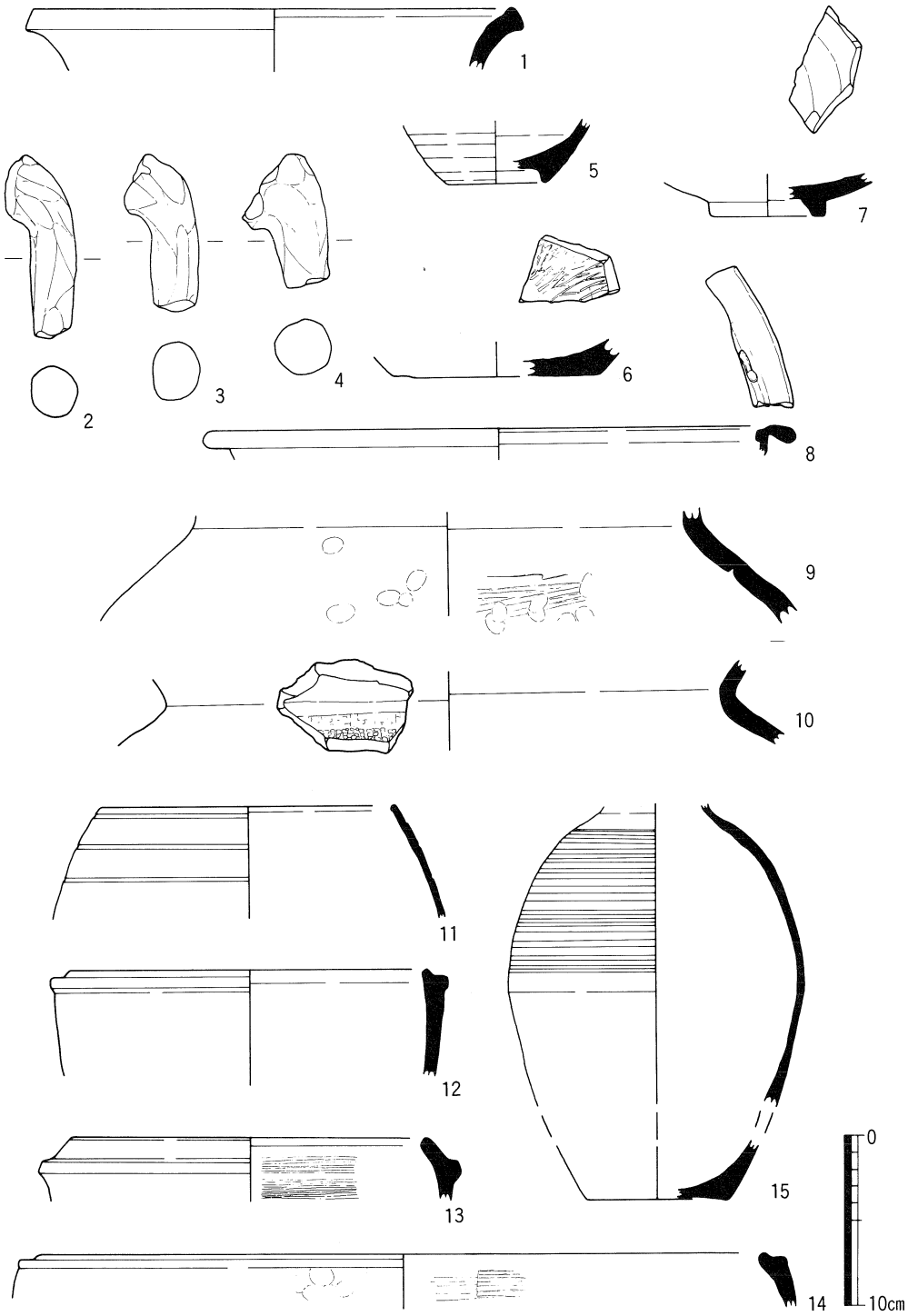
塚の性格と時期を確認するために，主軸上と主軸に直交して2本，計3本のトレンチを設定して，表層からほぼ30cmの深さまで掘り下げた。その結果，覆土は河原石，バラスを混淆する礫層で，墓壙等の主体部および墳丘施設は確認できなかった。トレンチから出土した遺物も，近現代の陶磁器に混じって土堝脚部等がみられるが混入遺物であり，遺跡とは認められなかった。

瓦礫1号塚出土遺物（第99図）

出土遺物のうち主だったものを図示した。

1は口径28.6cm，残存高3.7cmを測る壺の口縁部であると思われる。内外面ともにぶい褐色（7.5YR 6／3）を呈し，胎土に長石細粒を若干含んでいる。磨滅のため，調整等は不明である。2～4は羽釜の脚である。2は残存長10.6cm，径2.8cmで胎土に0.5mm以下の長石を含んでいる。色調は赤褐色（5YR 5／6）である。3は残存長9.2cm，径2.7cmであり，にぶい橙色（5YR 7／4）を呈し，胎土には1mm以下の長石，石英を多く含んでいる。4は残存長7.8cm，径3.3cmで，1mm以下の長石，石英，雲母を胎土に含んでいる。明赤褐色（5YR 5／6）を呈する。2～4とも調整にナデを行っており，指頭痕が明瞭に残っている。5は唐津焼と思われる壺の底部であり，底径5.8cm，残存高3.6cmを測る。外面に釉を施し，淡黄色（2.5YR

第98図　瓦礫1号塚墳丘測量図



第99図　瓦礫1号塚出土遺物実測図

7／4），内面はにぶい橙色（7.5YR 8／3）を呈する。6は陶器・擂鉢の底部である。底径12.2㎝，残存高1.9㎝を測り，内外面とも赤色（10R 5／8）を呈する。内面には使用による磨滅が見られるものの，3条1束の擂り目を施す。7は肥前系の皿である。底径6.8㎝，残存高2.5㎝を測り，外面灰黄色（2.5Y 7／2），内面淡黄色（2.5Y 7／2）を呈する。底部にはしっかりとした高台を持ち，内面には一部釉を施す。焼成は良好である。8は口径35.2㎝，残存高1.8㎝の瓦質土器・焙烙であり，耳には貫通していない穿孔が見られる。内面灰黄褐色（10YR 6／2），外面黒色（10YR1.7/1）を呈する。9は備前焼の壺であり，肩部径30.2㎝，残存高6.1㎝を測る。内面に指頭圧痕，ハケメ，つなぎ目が，外面には指頭圧痕が見られる。色調は外面黒褐色（10R 3／2），内面暗赤色（10R 3／4）を呈する。焼成は良好である。10は須恵器・甕である。頸径33.8㎝，残存高3.8㎝を測り，色調は内外面とも灰色（N 5／）を呈する。外面頸部にナデ，肩部にタタキが明瞭に残っている。11は口縁径17.8㎝，残存高6.6㎝を測る瓦質土器・羽釜であると思われる。内外面とも黒色（2.5Y 2／1）を呈し，外面に現存3条の沈線を施す。調整には内外面ともナデが見られる。12～14は土師器羽釜である。12は口径21.2㎝，残存高6.5㎝を測り，内外面とも赤褐色（2.5YR 4／8）を呈し，胎土には1㎜以下の長石，雲母を含んでいる。磨滅のため，調整は不明である。13は口径21.2㎝，残存高3.7㎝を測り，内面明赤褐色（2.5YR 5／8），外面橙色（5YR 6／8）を呈する。調整には外面にヨコナデ，内面にはハケを施している。0.5㎜以下の長石を胎土に含んでいる。14は口径44.2㎝，残存高3.2㎝を測る。内面にぶい黄橙色（10YR 7／2），外面にぶい黄橙色（10YR 7／3）を呈し，外面に指頭圧痕，内面にハケを施して調整を行う。胎土には0.5㎜以下の長石，角閃石を少量含んでいる。12～14とも内湾気味に立ち上がる口縁を持つが，12は傾斜が緩い。また，口縁端部と鍔の距離では12，14は約5㎜程度であるのに対し，13は約2㎝であり，口縁端部の形状も12，13では面取りを行い直線的であるが，14では丸いといった違いが見られる。15は徳利である。底径8.4㎝，残存高21.0㎝で，内面赤褐色（10R 4／4），外面暗褐色（7.5YR 3／2）を呈する。外面及び内面肩部に釉を施す。焼成は良好である。

瓦礫1号北塚（仮称）

瓦礫1号塚の確認作業中に周辺の工事関係者から同様の塚（盛土）が残っているとの情報を得て，急遽併せて確認調査を行った。

塚（盛土）は，南北長15m，東西幅5m，高さ80㎝ほどの土手状の高まりである。

長短軸に沿って十文字に設定したトレンチの掘削によると，埋土は黒褐色砂礫または黄褐色の川砂で，遺物は確認できなかった。

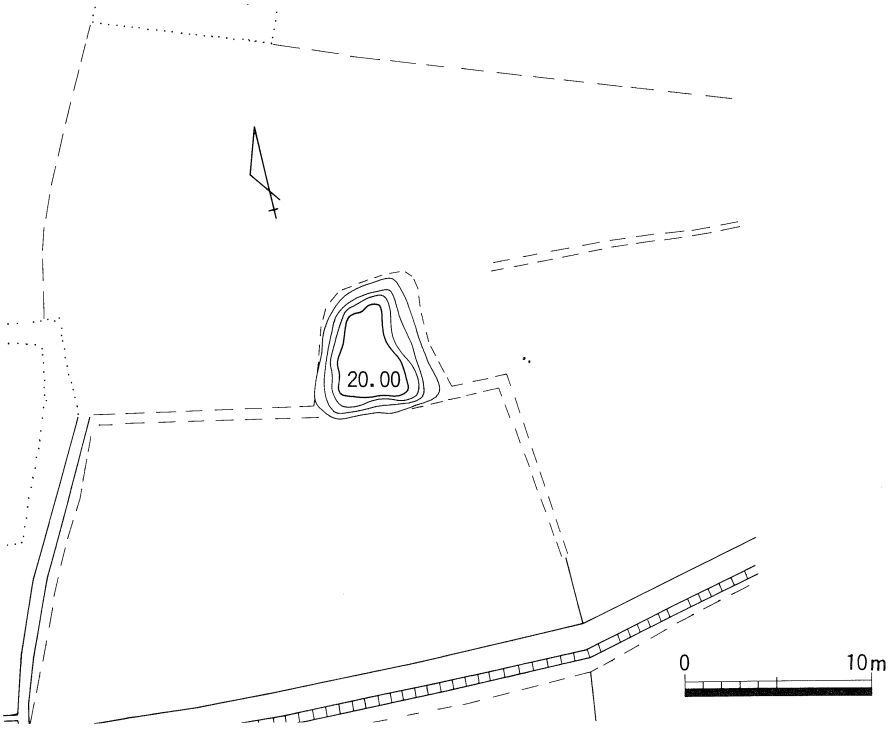
盛り土西側で出水状の凹地があり，湧水もみられたことから，この掘削に伴う排土の集積であると考えられるが，時期は確定できなかった。

汲仏（こんぼとけ）１号塚（第100図）

高松市多肥下町汲仏1241番地に所在する。区画整理事業に伴う整地工事に先立って，平成６年８月２～４日の間で確認調査を実施した。

塚は，水田の筆界に沿って削り残されたように存在し，墳裾の間際まで水田耕作が及んでいる。平面形は台形を呈し，最短辺が４ｍ，その他の３辺が９ｍほどの規模である。高さは水田耕作面から１～1.1ｍを測る。斜面の傾斜は50°前後で直線的に立ち上がり，頂部はややフラットになっている。

確認トレンチは，２本を頂部で十文字に交差するように設定し，基底部近くまで掘削を行った。この結果，土層は，塚の表面を10～50cmで全体に覆っていると思われる砂利混じりの現耕甘土層（第１層），直径５～10cm程の河原石の純層（第２層），基底部付近に広がる黒褐色砂礫層（第３層）に分けられる。目立った遺物は確認できなかったことから，耕作地の開墾または井戸等の掘削に伴う排土の集積が現代まで残存したものと考えられる。



第100図　汲仏１号塚墳丘測量図

第２節　蛙股遺跡出土火山灰分析

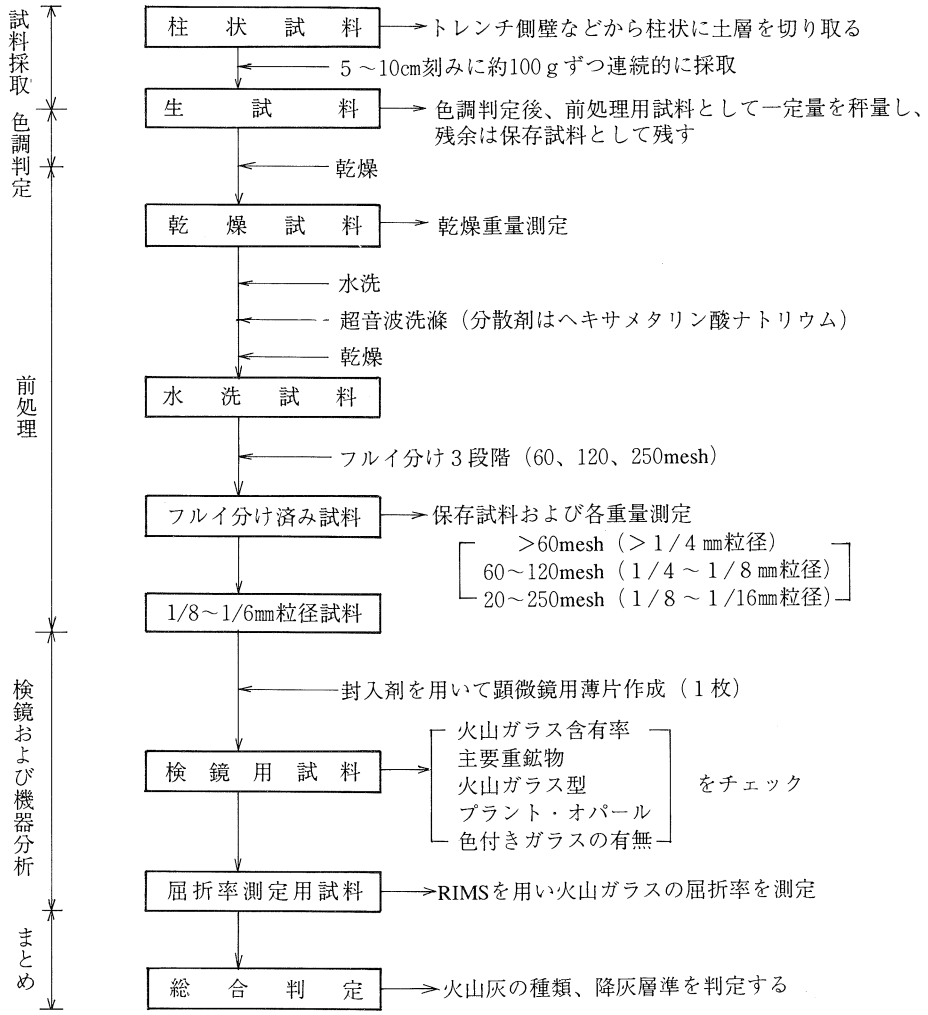
㈱京都フィッション・トラック
檀原　徹

１　試　　料

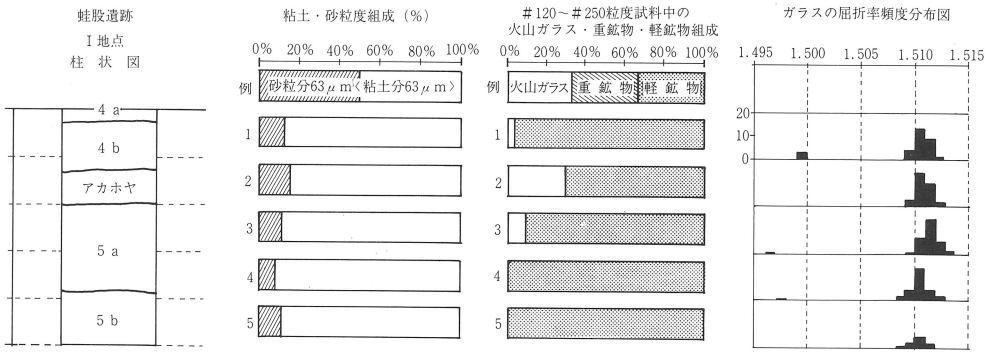
今回の分析試料は，高松市教育委員会の発掘担当者の手により採取された連続性状試料である。これらの試料は，実験室内で10㎝ごとに一定量サンプリングされ合計５個が分析に供された。なお試料の採取層準は，測定データを総合的にまとめた前掲の図１の柱状図中に示されている。

２　分析方法

試料の分析は，以下のフローチャートに従い行った。



土壌中火山灰（火山ガラス）抽出分析処理順序表



蛙股遺跡Ⅰ地点

主要重鉱物および備考*1	PO*2 含有（%）	主要火山ガラス型*3*4	色付ガラス有無
GHo. Opq. Opx. Cpx. Zr. Bi.	2	Hb. Ha. Cb. Ca.	＋
GHo. Opx. Opq. Zr. Bi.	3	Hb. Ha. Cb. Ca.	＋
GHo. Opx. Opq. Cpx. Zr.	5	Hb. Ha. Cb. Ca. It.	＋
GHo. Opq. Zr. Opx.	2	Hb. Ha. Cb.	＋
GHo. Opq. Zr.	2	Hb. Cb. Ha.	－

図１．一般国道11号高松東道路埋蔵文化財発掘調査事業
出土火山灰分析業務　蛙股遺跡Ⅰ地点　５試料
試料採取層準土層模式柱状図および分析結果

＊１　主要重鉱物の略称と鉱物名
Ol：カンラン石　Opx：斜方輝石　Cpx：単斜輝石　GHo：緑色普通角閃石　BHo：褐色普通角閃石
Bi：黒雲母　Gar：ザクロ石　Zr：ジルコン　Id：イディングサイト　Opq：不透明鉱物
＊２　PO：プラント・オパール含有率or有無
＊３　主要ガラス型の名称（吉川，1976）
Ha，Hb：扁平型（バブルウォール型）　Ca，Cb：中間型（軽石型）　Ta，Tb：多孔質型（軽石・繊維状型）
＊４　（吉川，1976）以外のガラス型の略称
SG：スコリア質ガラス　It：不規則型

次に処理工程について説明を加える。

（1）色調判定

未処理試料50～100ｇを白紙上にとり，新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）により判定表示する。

（2）前 処 理

まず半湿潤状態の生試料を30.0ｇ秤量し，50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後，2ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し，超音波洗滌を行う。この際，中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2％程度となるよう適宜加え，懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰返す。乾燥後，篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い，3段階の篩別（60，120，250mesh）を行い，各段階の秤量をする。こうして得られた120～250mesh（1／8～1／16㎜）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく，封入剤（Nd＝1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

（3）重鉱物分析

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イディングサイト等）を鏡下で識別し，ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお，試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際，一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物を凝集することが行われるが，風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため，今回の分析では重液処理は行っていない。

（4）火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し，特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

① 火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し，各含有率を測定した。

② 火山ガラス型

吉川（1976）の分類に準拠して，含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては，不規則型として一括した。

③ プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため，その有無と，比較的多い場合

には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④　色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は，広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで，色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには，スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐，褐，黄，緑色などのガラスは含まれない。

（5）火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製・保存された120～250mesh（1／8～1／16㎜）粒径試料を対象に，温度変化型屈折率測定装置（RIMS）※(1)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては，精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが，火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

なお具体的に測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ，次に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（SeriesおよびSample Name）が印刷され，Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。Ndの式はその浸液温度から屈折率を換算するもの，Ndは屈折率，tは温度を示す。この式は一次式であり火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるので，この式から火山ガラスの屈折率が計算される。

（As.＋De.）／2は合致温度を上昇させた時（Asceent）と下降（Descent）の平均値として求めた時の意味であるが，繁雑さを避けるため測定温度は表示せず，各火山ガラス片毎の屈折率のみが表示されている。測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。

count, min, max, range, mean, st. dev, skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数，最小値，最大値，範囲，平均値，標準偏差，そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し，横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。

＊　一つが1個の火山ガラスである。

3　分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され，前掲の図1に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値をもつものは，編年上意味のあるテフラ（広域テフラ）の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には，テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壌中に含まれる重鉱物の分析が広く行われているが，重鉱物分析結果をテフラ降灰

層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は，土壌中の重鉱物は母岩起源のものを含むのが普通であり，必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。しかも同一種類の鉱物でもその組成上かなりの多様性をもつことが普通であり，純粋にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。このため，今回の分析結果の考察においては，重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると，今回の試料中には少なくとも２種類の火山ガラスが識別される。それらは，各火山ガラスの特徴をもとに本地域に隣接する近畿地方でのテフラ・カタログ（表１）※(2)や今回の分析結果（表２）と対照すると，降灰年代の古いものから姶良Tn火山灰（BB55）※(3)，鬼界－アカホヤ火山灰－Ah（Ｂ５－３（U））※(4)に対比するのが自然である。前者は濃集度が低く降灰層準を決定するデータは得られないが，後者は鬼界－アカホヤ火山灰と判断されNo.２試料（Ｌ＝13.10－13.00ｍ）付近で火山ガラスの含有ピークが確認された。これは発掘時における野外観察の結果とよく一致する。

以　上

注）

※（１）横山卓雄・檀原徹・山下透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率判定。第四紀研究。25（１），21－30。

※（２）竹村恵二・檀原透（1988）：土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年―温度変化型屈折率測定装置を使用して―。考古学と自然科学第20号，日本文化財科学会誌。35－50。

※（３）町田洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―。科学，46，339－347。

※（４）町田洋・新井房夫（1978）：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰。第四紀研究，17，143－163。

表１．各遺跡より検出した火山ガラスの特性と琵琶湖ボーリングの火山灰，広域テフラの特性との比較（竹村・檀原，1988）

Table 1 Comparison among characteristics of volcanic glasses included in columnar samples at archaeological sites and those of volcanic ashes in Lake Biwa drilling samples and widerspread tephras.

比較試料＼項目	テフラ名・試料名	岩石と鉱物組成	^{14}C年代（BP）	火山ガラスの色と形	火山ガラスの屈折率レンジ(モード)	文献
鳥浜	No.6	――	――	T，C	1.499－1.503（1.501－1.503）	*1
	No.22	――	――	Ha，Hb（br）	1.510－1.512	*1
	No.49	軽石質・af，Ho，Bi	――	T，C	1.521－1.524（1.521－1.523）	*1
	――	――	――	――	――	
	56－54、51、50、48－27	――	――	Ha，Hb	1.497－1.501（1.498－1.500）	*1
板井	――	――	――	――	――	
	――	――	――	――	――	
	――	――	――	――	――	
	P 11　No.18	結晶質・Ho，Opx	19,600－20,400	T	1.501－1.504（1.502－1.504）	*2
	P 11　No.10	ガラス質	21,500－23,600	Ha，Hb＞C，T	1.499－1.502（1.500－1.501）	*2
京大構内	――	――	――	――	――	
	No.1	――	――	Ha，Hb（br）	1.508－1.512（1.509－1.511）	*1
	――	――	――	――	――	
	――	――	――	――	――	
	No.3，4，8，9，total	――	――	Ha	1.498－1.501	*1
琵琶湖	BB 7	――	――	C，T	1.499－1.504	*3
	B 5－3（U）	ガラス質・Opx，Cpx	――	A（br）	1.509－1.513（1.509－1.512）	*4、5
	BB 23	軽石質	――	B，C	1.520－1.524（1.502－1.504）	*4、5
	BB 51	結晶質・Ho，Opx	――	C	1.501－1.505	*4、5
	BB 55	ガラス質・Opx，Cpx，Ho	――	A＞B	1.499－1.502（1.500－1.501）	*4、5
広域テフラ	――	――	――	――	――	
	K - Ah	ガラス質・Opx，Cpx	6,300	bw＞pm（br）	1.508－1.514（1.501）	*6
	U - Oki	軽石質・af，Bi，Ho	9,300	pm	1.517－1.524	*7
	大山ホーキ	結晶質・Ho，Opx，Bi	20,000	――	――	*8
	AT	ガラス質・Opx，Cpx，Ho	21,000－22,000	bw＞pm	1.498－1.501（1.500）	*9
			(24,720)			*10

af：アルカリ長石，Opx：斜方輝石，Cpx：単斜輝石，Ho：角閃石，Bi：黒雲母，bw：バブルウォール型，pm：軽石型，br：色付ガラス，
＊1：竹村・檀原(1988)，＊2竹村・檀原(1987)，＊3：YOSHIKAWA(1981)，＊4：横山(1973)，＊5：横山（1976），＊6：町田・新井(1978)，
＊7：新井ほか(1981)，＊8：町田・新井(1979)，＊9：町田・新井(1976)，＊10：松本ほか(1987)。

表２．蛙股遺跡Ⅰ地点における火山ガラス濃集層準とその特徴

火山ガラス検出層準					屈折率（Nd）	主な火山ガラス型	対比される広域テフラ※(6)	降灰年代※(6)	備考
分布層準		最大濃集層準							
サンプルNo.	レベル	サンプルNo.	レベル	地層名					
No.1 〜 No.5	13.20 m 〜 12.70 m	No.2	13.10 m 〜 13.00 m	アカホヤ	1.508 〜 1.514 最頻値 ＝1.510	H型 （扁平型）	鬼界アカホヤ火山灰 （K－Ah）	6,300B.P.	今回の全分布層準で検出されるが，No.2試料（L＝13.10－13.00 m）で火山ガラスの含有量が30％に達する。濃集度はやや低いが明瞭なピークが認められるため降灰層準と認定できる。ガラス形態はH型を主として濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率が高いのが特徴。最濃集層付近ではプラント・オパールが相対的に多い。
No.1 〜 No.4	13.20 m 〜 12.80 m	――	――	――	1.498 〜 1.501 最頻値 ＝1.500	H型 （扁平型）	姶良Tn火山灰 （AT）	21,000 〜 22,000B.P.	ほぼ今回の全分析層準で検出されるが含有率は低く降灰層準を認定することは困難である。ただし分析層準下部でK－Ahガラスの相対含有量が減る傾向にあり，堆積時期がK－Ah降灰以前であることを示す。無色透明な扁平（バブル・ウォール）型ガラスを主とするが，亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。

※（6）　町田洋ほか（1984）：テフラと日本考古学――考古学研究と関係するテフラのカタログ――．古文化財の自然科学的研究．865－928．

保存用試料一覧表

No.	試料名	処理生試料乾燥重量(g)	篩別試料重量（g）			色調判定	備考
			＞1／4㎜	1/4～1/8㎜	1/8～1/16㎜		
1	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.20－13.10 m	24.5	0.01	0.05	3.08	5Y5／2	
2	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.10－13.00 m	23.9	0.23	0.27	1.89	5Y5／1	
3	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.00－12.90 m	23.7	0.37	0.35	1.89	2.5Y3／1	
4	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝12.90－12.80 m	24.7	0.17	0.29	1.35	2.5Y3／1	
5	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝12.80－12.70 m	24.8	0.24	0.37	1.84	10YR3／1	
	以下余白						

注. 1）表中の数字は保存試料の重量を示す。
2）1／8～1／16段階の保存試料は，一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
3）色調判定は，新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）による。

No.	試料名	重鉱物組成※（1）											備考
		01	Pyroxene		Amphibole		Opq	Id	Zr	Bi	Ap	Total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.20～13.10 m	0	2	1	0	56	12	0	1	1	0	73	
		0.0	2.7	1.4	0.0	76.7	16.4	0.0	1.4	1.4	0.0	100.0	
2	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.10～13.00 m	0	12	0	0	33	10	0	2	1	0	58	
		0.0	20.7	0.0	0.0	57.0	17.2	0.0	3.4	1.7	0.0	100.0	
3	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.00～12.90 m	0	14	3	0	28	8	0	2	0	0	55	
		0.0	25.5	5.5	0.0	50.9	14.5	0.0	3.6	0.0	0.0	100.0	
4	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝12.90～12.80 m	0	1	0	0	15	5	0	3	0	0	24	
		0.0	4.2	0.0	0.0	62.5	20.8	0.0	12.5	0.0	0.0	100.0	
5	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝12.80～12.70 m	0	0	0	0	15	4	0	1	0	0	20	
		0.0	0.0	0.0	0.0	75.0	20.0	0.0	5.0	0.0	0.0	100.0	
	以下余白												

注．※（1）上段　計測粒子数　　下段　%

なお各鉱物とその略称は，以下のように対応します。

Ol：カンラン石，　Opx：斜方輝石，　Cpx：単斜輝石，　BHo：褐色普通角閃石，
Gho：緑色普通角閃石，　Opq：不透明（鉄）鉱物，　Id：イディングサイト，　Zr：ジルコン，
Bi：黒雲母，　Ap：アパタイト，　Gar：ザクロ石，　VG：火山ガラス，

火山ガラス屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲(range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 固体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.20－13.10 m	1.4991 1.5094	1.4998 1.5120	1.4995 1.5107	3 27	1.510≦Nd＜1.511	H，C
2	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.10－13.00 m	1.5087	1.5124	1.5108	30	1.510≦Nd＜1.511	H，C
3	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝13.00－12.90 m	(1.4963) 1.5090	(1.4963) 1.5131	1.4963 1.5113	1 29	1.511≦Nd＜1.512	H，C
4	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝12.90－12.80 m	(1.4976) 1.5076	(1.4976) 1.5129	1.4976 1.5103	1 29	1.510≦Nd＜1.511	H，C
5	蛙股遺跡Ⅰ地点 L＝12.80－12.70 m	1.5089	1.5118	1.5103	10	1.510≦Nd＜1.511	H，C
	以下余白						

※　H：扁平型
　　C：中間型
　　T：多孔質型

第3表蛙股遺跡Ⅰ地点

通番	試料名	乾燥重量(g)	粒度組成(g) 砂粒分(mesh size) >60	~120	~250	粘土分 <250	鉱物・ガラス組成(%) 火山ガラス	重鉱物	軽鉱物	主要重鉱物および備考*1	PO*2 含有(%)	*3*4 主要火山ガラス型	色付ガラス有無
1	L＝13.20－13.10m	24.5	0.0	0.1	3.1	21.4	4.0	0.2	95.8	GHo.Opq.Opx.Cpx. Zr.Bi.	2	Hb. Ha. Cb. Ca.	＋
2	L＝13.10－13.00m	23.9	0.2	0.3	3.1	20.3	30.0	0.2	69.8	GHo.Opx.Opq.Zr.Bi.	3	Hb. Ha. Cb. Ca.	＋
3	L＝13.00－12.90m	23.7	0.4	0.4	1.9	21.1	9.0	0.2	90.8	GHo.Opx.Opq.Cpx.Zr.	5	Hb. Ha. Cb. Ca. It.	＋
4	L＝12.90－12.80m	24.7	0.2	0.3	1.4	22.9	0.5	0.1	99.4	GHo. Opq. Zr. Opx.	2	Hb. Ha. Cb.	＋
5	L＝12.80－12.70m	24.8	0.2	0.4	1.8	22.4	0.5	0.1	99.4	GHo. Opq. Zr.	2	Hb. Cb. Ha.	－

＊1　各鉱物とその略称は以下のように対応します。
Ol；カンラン石　Opx；斜方輝石　Cpx；単斜輝石　GHo；緑色普通角閃石　BHo；褐色普通角閃石
Bi；黒雲母　Gar；ザクロ石　Zr；ジルコン　Id；イディングサイト　Opq；不透明鉱物

＊2　PO含有はプラント・オパールの含有量（%）を示します。

＊3　火山ガラス型とその略称は吉川（1976）に従い以下のように対応します。
Ha. Hb；扁平型（バブルウォール型）　Ca. Cb；中間型（軽石型）　Ta. Tb；多孔質型（軽石型。繊維状型）

＊4　なお，吉川（1976）以外のガラス型について次の略称を用います。
Sg；スコリア質ガラス　It；不規則型

〔屈折率値頻度分布〕

(No.)	1	2	3	4	5
試料名	L＝13.2	13.10	13.00	12.90	12.80
1.495＝＜Nd＜1.496	0	0	0	0	0
1.496＝＜Nd＜1.497	0	0	1	0	0
1.497＝＜Nd＜1.498	0	0	0	1	0
1.498＝＜Nd＜1.499	0	0	0	0	0
1.499＝＜Nd＜1.500	3	0	0	0	0
1.500＝＜Nd＜1.501	0	0	0	0	0
1.501＝＜Nd＜1.502	0	0	0	0	0
1.502＝＜Nd＜1.503	0	0	0	0	0
1.503＝＜Nd＜1.504	0	0	0	0	0
1.504＝＜Nd＜1.505	0	0	0	0	0
1.505＝＜Nd＜1.506	0	0	0	0	0
1.506＝＜Nd＜1.507	0	0	0	0	0
1.507＝＜Nd＜1.508	0	0	0	1	0
1.508＝＜Nd＜1.509	0	1	0	2	1
1.509＝＜Nd＜1.510	4	3	1	5	2
1.510＝＜Nd＜1.511	13	14	7	14	5
1.511＝＜Nd＜1.512	9	10	15	5	2
1.512＝＜Nd＜1.513	1	2	5	2	0
1.513＝＜Nd＜1.514	0	0	1	0	0
1.514＝＜Nd＜1.515	0	0	0	0	0

右ページ写真図版の凡例

重　鉱　物

Ol：カンラン石　　Id：イディングサイト

Opx：斜方輝石　　Zr：ジルコン

Cpx：単斜輝石　　Bi：黒雲母

GHo：緑色普通角閃石　　Ap：アパタイト

BHo：褐色普通角閃石　　Gar：ザクロ石

Opq：不透明鉱物

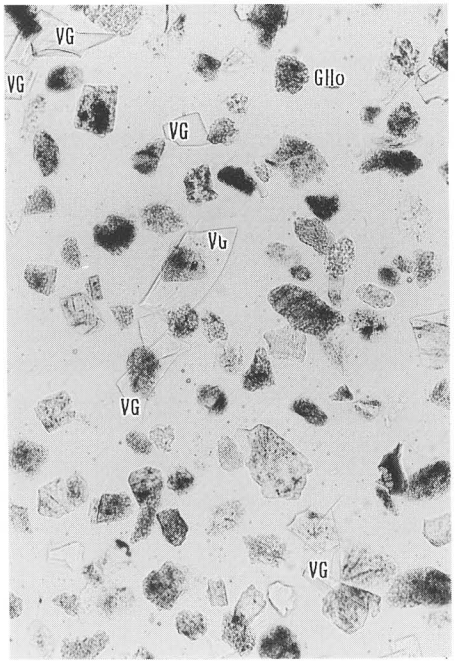
そ　の　他

VG：火山ガラス　　CVG：色付火山ガラス

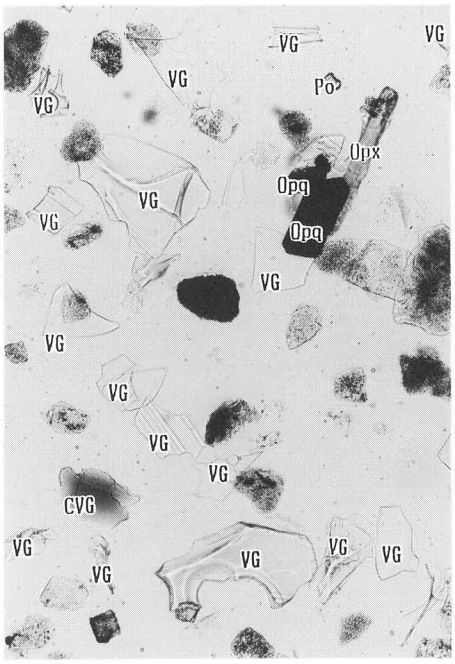
Po：プラント・オパール

＊但し，写真倍率は焼付ごとに毎回多少の違いが生じるが，
およそ90～93倍程度である。

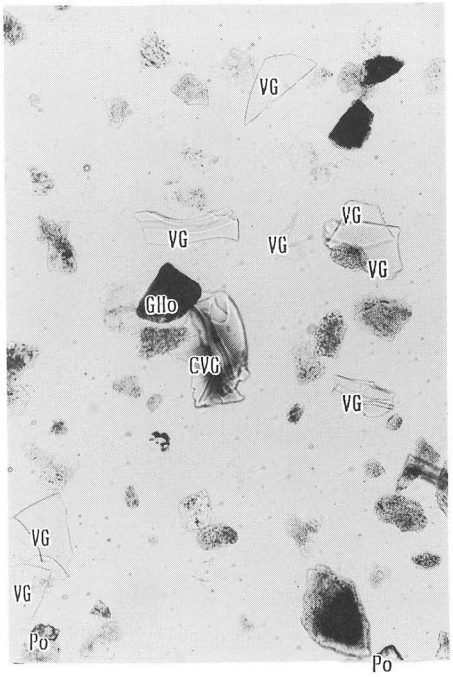
蛙股遺跡Ⅰ地点



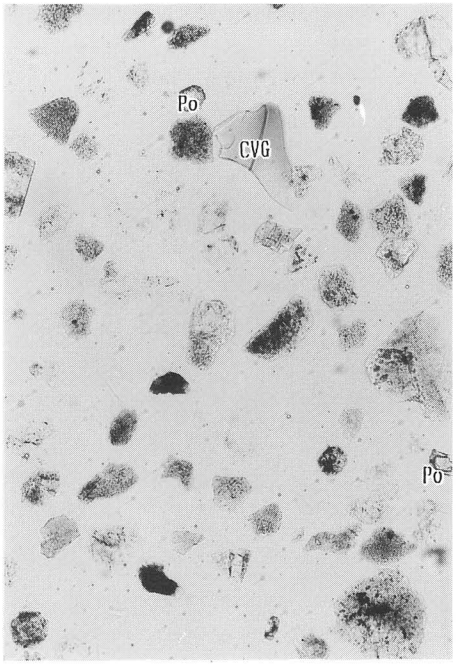
1． 13.20～13.10 m



2． 13.10～13.00 m



3． 13.00～12.90 m



4． 12.90～12.80 m

遺物観察表

1区　ＳＤ01

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
1	—	弥生土器 甕	口径 15.4cm 残存高 2.8cm			口縁部内外面 体部内面	ナデ 指頭圧痕	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 6／4 にぶい黄褐	良好	
2	—	弥生土器 高杯口縁	口径 21.3cm 残存高 2.3cm			口縁部内外面	ヘラミガキ		外内10YR 6／4 にぶい黄褐	良好	外面　赤色顔料塗付
3	—	弥生土器 甕　底部	底径 5.6cm 残存高 1.2cm			底部内面	ケズリ後ナデ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外2.5Y 6／2 灰黄 内2.5Y 7／3 浅黄	良	
4	—	〃	底径 5.8cm 残存高 1.8cm			底部内面 底部外面	ヨコナデ 指頭圧痕 ヘラケズリ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外10YR 6／2 灰黄褐 内10YR 5／1 褐灰	良	

ＳＤ02

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
5	—	弥生土器 壷	口径 15.5cm 残存高 6.7cm	口縁端部	凹線文３条			1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外10YR 4／3 にぶい黄褐 内10YR 5／4 にぶい黄褐	良	
6	—	弥生土器 甕	口径 16.2cm 残存高 2.9cm			口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外10YR 6／3 にぶい黄橙 内10YR 7／3 にぶい黄橙	良	
7	—	〃	口径 17.0cm 残存高 4.7cm			口縁部内面	指頭圧痕	1mm以下の石英，角閃石を含む	外5Y 7／3 浅黄 内5Y 7／1 灰白	良	
8	—	弥生土器 高坏坏部	口径 19.0cm 残存高 3cm	杯部外面	竹管文	口縁部内面 〃　外面	ヘラミガキ ヘラケズリ後ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外10YR 7／3 にぶい黄橙 内10YR 6／3 にぶい黄橙	良	
9	—	弥生土器 高坏柱状部	柱状部径 3.6cm 残存高 5.0cm			口縁部内面 〃　外面	シボリ目 ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 7／3 にぶい黄橙	良	
10	—	弥生土器 底部	底径 3.3cm 残存高 2.3cm			底部内面 底部外面	ヘラケズリ後ナデ ヘラミガキ後ナデ	1～2mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 5／3 にぶい黄褐	良好	

ＳＤ03

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
11	—	弥生土器 甕	口径 13.2cm 残存高 1.0cm	口縁端部	凹線文２条			１mm以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR５／４にぶい褐	良好	

土器棺１

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
12	—	弥生土器 鉢	残存高13.0cm			口縁部内面 〃　外面	ヘラミガキ 磨滅の為調整不明	２mm以下の石英，長石を含む	外内５Ｙ６／１灰	良好	土器棺蓋に転用
13	29	弥生土器 壷	底径 9.1cm 器高 51.4cm	頸部下端	刻目突帯文１条	口縁部内面 内面下半 外面上半 〃　下半	ヨコナデ ハケ目，板ナデ ヘラミガキ ハケ目	１～２mm以下の石英，長石，角閃石を多量に含む	外内10YR６／４にぶい黄橙	良好	土器棺身に転用 頸部以上を打欠き？

土器棺２

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
14	29	弥生土器 鉢	底径 52.3cm 器高 19.0cm			口縁部内外面 体部内面 〃　外面	ナデ 上半ハケ 下半分割ヘラミガキ ヘラミガキ	１mm以下の石英，角閃石，２mm以下の長石も含む	外内10YR６／４にぶい黄橙	良好	土器棺蓋に転用
15	29	弥生土器 壷	底径 12.0cm 器高 49.3cm	口縁部 体部外面	凹線文３条 穿孔	口縁部内外面 体部内面上半 〃　外面下半 頸部外面	ヨコナデ ヘラミガキ，板ナデ ヘラミガキ ハケ目	２～３mm以下の長石，石英，角閃石を多量に含む	外内10YR６／４にぶい黄橙	良好	外面　黒斑

ＳＲ01　８～10層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
16	—	弥生土器 壷	口径 16.8cm 残存高2.2cm			口縁部内外面	ヨコナデ	１mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外内7.5YR５／４にぶい褐	良好	
17	—	弥生土器 壷	口径 17.0cm 残存高 6.4cm	口縁端面	擬凹線文	口縁部内外面 頸部内面 〃　外面	ヨコナデ 指頭圧痕，シボリ目 ハケ目	長石，石英，角閃石を多量に含む	外内2.5YR６／２ 灰赤	良好	
18	30	〃	残存高19.0cm			口縁部内面 〃　外面	指頭圧痕，ヘラケズリ ハケ目，ヘラミガキ	〃	外2.5Ｙ６／２灰黄 内2.5Ｙ５／２暗灰黄	良好	煤付着

19	—	弥生土器 壺	残存高 9.3cm			口縁部内面 〃　外面	指頭圧痕 ハケ目後ヘラミガキ	1㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 6／3にぶい黄橙 内10YR 6／4にぶい黄橙	良好	
20	—	弥生土器 壺　底部	底径　2.2cm 残存高 2.7cm			底部内面 〃　外面	ヨコナデ，指頭圧痕 ハケ目	石英，角閃石を多量に含む	外10YR 1.7/1黒 内10YR 8／1灰白	良好	黒斑
21	—	〃	底径　3.6cm 残存高 3.0cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	3㎜以下の長石，石英を含む	外内2.5Y 8／1灰白	良好	底　煤付着
22	—	〃	底径　3.6cm 残存高 2.0cm			底部内面 〃　外面	板ナデ ヘラケズリ	石英，長石を含む	外内2.5Y 8／1灰白	良好	黒斑
23	—	〃	底径　4.5cm 残存高 3.3cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ 板ナデ後ヘラケズリ	1㎜以下の石英，長石，角閃石を含む	外内2.5Y 8／1灰白	良好	
24	—	〃	底径　3.0cm 残存高 7.5cm			体部内面 〃　外面	ヘラケズリ 後ナデ ハケ目	3～4㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 8／1灰白 内10YR 8／2灰白	良	
25	30	弥生土器 甕	口径　10.8cm 残存高 5.9cm			口縁部外面 体部内面	ヨコナデ ヘラケズリ	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 5／2灰黄褐 内10YR 5／4にぶい黄褐	良好	
26	32	〃	口径　12.2cm 残存高 4.7cm			体部内面	ヘラケズリ	石英，角閃石を多量に含む	外内10YR 7／3にぶい黄橙	良	
27	30	〃	口径　14.0cm 残存高 8.5cm			口縁部内面 体部内面 〃　外面	ヨコナデ 指頭圧痕，ヘラケズリ 磨滅の為調整不明		外5Y 8／1灰白 内5Y 8／2灰白	良好	
28	32	〃	口径　15.2cm 残存高 6.1cm			体部内面 〃　外面	ヘラケズリ タタキ後ハケ目	1㎜以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 7／3にぶい黄橙	良好	
29	32	〃	口径　16.8cm 残存高6.75cm			口縁部外面 体部内面 〃　〃	ヨコナデハケ目 磨滅の為調整不明	1～2㎜以下の長石，石英を含む	外内2.5Y 8／1灰白	良好	
30	30	〃	口径　16.2cm 残存高10.7cm			体部内面	ヘラケズリ	1～2㎜以下の石英，長石を多量に含む	外内2.5Y 8／1灰白	良好	

31	32	弥生土器 甕	口径 19.5cm 残存高 8.5cm			体部内面 〃 外面	指頭圧痕 タタキ	1～2mm以下の石英，角閃石を含む	外2.5Y8/1 灰白 内2.5Y7/1 灰白	良好	
32	—	〃	口径 21.8cm 残存高 7.8cm			体部内面 〃 外面	ハケ目 〃	1～2mm以下の石英，長石を含む	外7.5YR1.7/1 黒 内2.5Y8/2 灰白	良好	外面 黒斑
33	—	〃	口径 28.0cm 残存高4.3cm			体部内面	ナデ ハケ後ナデ	1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外内10YR6/3 にぶい黄橙	良	
34	32	〃	口径 12.7cm 残存高 9.5cm			口縁部内外面 体部内面 体部外面	ヨコナデ 指頭圧痕 ヘラケズリ タテハケ目	1～2mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外10YR8/1 灰白 内10YR8/2 灰白	良好	黒斑
35	32	〃	口径 15.2cm 残存高 5.5cm			口縁部内外面 体部内面 〃 外面	ヨコナデ 指ナデ後ハケ目 ハケ目	1～2mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外内2.5Y5/3 黄褐	良好	
36	—	〃	口径 15.0cm 残存高12.0cm	口縁部内面	擬凹線文	口縁部内外面 体部内面(上半部) 〃 (下半部) 体部外面(上半部) 〃 (下半部)	ヨコナデ 指ナデ ヘラケズリ タタキ、ハケ目 ヘラミガキ	1～2mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外内10YR5/4 にぶい黄褐	良好	
37	32	〃	口径 12.6cm 残存高14.8cm			口縁部内外面 体部内面（上半部） 〃 （下半部）	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	外10YR5/4 にぶい黄褐 内10YR5/3 にぶい黄褐	良	口縁から体部煤付着
38	30	〃	口径 14.8cm 残存高20.6cm	口縁部内面	擬凹線文	体部内面 〃 外面（上半部） 〃 （下半部）	ヘラケズリ ハケ目 ヘラミガキ	1～3mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外2.5YR7/2 明赤灰 内2.5Y5/3 にぶい赤褐	良好	
39	32	〃	口径 14.2cm 残存高 8.5cm	口縁部内面	擬凹線文	口縁部外面 体部外面	ヨコナデ ハケ目，ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外内10YR6/2 灰黄褐	良好	
40	—	〃	口径 15.2cm 残存高14.3cm	口縁部内面	擬凹線文	口縁部内外面 体部外面（上半部） 〃 （下半部）	ヨコナデ ハケ目，タタキ ハケ目，ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外内7.5YR5/4 にぶい褐	良好	外面 煤付着
41	32	〃	口径 15.0cm 残存高16.6cm			口縁部内外面 体部内面(上半部) 〃 (下半部) 体部外面(上半部) 〃 (下半部)	ヨコナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケ目 ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外内10YR5/3 にぶい黄褐	良好	
42	30	〃	口径 16.3cm 残存高26.9cm			口縁部内外面 体部内面(上半部) 〃 (中部～下半部) 体部外面(上半部) 〃 (中部～下半部)	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ ハケ目 ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR7/2 にぶい黄橙	良好	煤付着

43	—	弥生土器 甕　底部	底径　4.5cm 残存高 4.4cm			底部内面	ヘラケズリ	1～2㎜以下の石英を多量に含む	外2.5Y8/2 灰白	良好	
44	—	〃	底径　3.2cm 残存高 5.8cm			底部内面	ヘラケズリ	1㎜以下の石英，角閃石を含む	外2.5Y8/1 灰白 内2.5Y6/1 黄灰	良	
45	—	〃	底径　3.4cm 残存高 5.7cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	〃	外2.5Y7/2 灰白 内5Y5/1 灰	良	外面底部黒斑
46	—	弥生土器 甕　底部	底径　2.8cm 残存高 8.8cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ タタキ	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外7.5YR8/2 灰白 内10YR8/1 灰白	良	外面底部黒斑
47	—	〃	底径　4.8cm 残存高 3.0cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ 後ヨコナデ	1㎜以下の角閃石，5㎜以下の石英を含む	外2.5Y2/1 黒 内2.5Y7/2 灰黄	良好	底部　黒斑
48	—	〃	底径　4.6cm 残存高 3.0cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外内2.5Y6/2 灰黄	良好	煤付着
49	—	〃	底径　5.2cm 残存高 4.4cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ハケ目	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外7.5YR4/2 灰褐 内7.5YR5/4 にぶい褐	良好	
50	—	〃	底径　5.0cm 残存高 9.0cm			底部内面 〃　外面	ナデ ヘラミガキ	1～2㎜以下の角閃石を含む	外5Y2/1 黒 内5Y3/1	良	
51	—	〃	底径　3.2cm 残存高 7.5cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外2.5Y2/1 赤黒 内2.5Y7/2 明赤灰	良好	外面 煤付着
52	—	弥生土器 鉢	口径　20cm 残存高 5.9cm			口縁部内面	ナデ	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外内2.5Y5/3 黄褐	良	
53	—	弥生土器 鉢　体部	残存高 7.5cm			底部内面 〃　外面	ナデ ヘラケズリ	1～2㎜以下の石英，長石を含む	外7.5Y8/1 灰白 内2.5Y8/2 灰白	良	黒斑
54	31	弥生土器 鉢	口径　21.8cm 残存高14.2cm			体部内面 〃　外面	ハケ目，ヘラケズリ ハケ目，タタキ	1～2㎜以下の石英，長石を多量に含む	外内10YR8/2 灰白	良	

55	31	弥生土器 鉢	口径　17.5㎝ 残存高 6.0㎝			調整不明		1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外内2.5Y 8／1 灰白	良好	
56	31	〃	底径　6.0㎝ 残存高20.0㎝			体部内面(上半部) (下半部) 体部外面(上半部) (中部) (下半部)	ナデ 板ナデめちナデ 磨滅のため調整不明 タテヘラミガキ 板ナデ指頭圧痕	2㎜以下の石英，長石，角閃石を含む	外内2.5Y 6／2 灰黄	良好	黒斑
57	31	〃	口径　22.4㎝ 残存高 7.0㎝	口縁部内面	擬凹線文	体部内外面	分割ヘラミガキ	〃	外2.5Y 7／3 浅黄 内10YR 5／3 にぶい黄褐	良好	
58	—	弥生土器 高坏　坏部	口径　18.2㎝ 残存高 5.9㎝	口縁部内面	擬凹線文	口縁部内外面 坏部外面	ヨコナデ ヘラケズリ 後ヘラミガキ	1～2㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外内　灰黄褐	良好	
59	—	〃	口径　19.0㎝ 残存高 5.2㎝	口縁部内面	擬凹線文	口縁部内外面 坏部外面	ヨコナデ ヘラケズリ 後ヘラミガキ	1～2㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外内2.5Y 6／3 にぶい黄	良好	
60	—	〃	口径　21.0㎝ 残存高 5.7㎝	口縁部内面	擬凹線文	口縁部内外面 坏部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1～2㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外内10YR 7／4 にぶい黄橙	良	
61	—	〃	口径　21.6㎝ 残存高 6.7㎝	口縁部内面	擬凹線文	口縁部内外面 坏部内面	ヨコナデ ヘラミガキ	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 6／3 にぶい褐	良好	
62	31	〃	口径　23.2㎝ 残存高 8.2㎝	口縁部内面	擬凹線文	口縁部外面 坏部内面 〃　外面	ヨコナデ ヘラミガキ 後粗いハケ ヘラケズリ	1～2㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外内10YR 6／3 にぶい黄橙	良好	
63	—	弥生土器 高坏　坏部	口径　28.2㎝ 残存高 5.3㎝	口縁部内面	擬凹線文	坏部内面 〃　外面	板ナデ ヘラケズリ	1～2㎜以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 6／3 にぶい黄橙	良好	
64	31	弥生土器 高杯	口径　25㎝ 残存高18.2㎝	〃 脚部	〃 円形透孔	口縁部内外面 坏部内面 〃　外面 脚部内面	ヨコナデ 分割ﾍﾗﾐｶﾞｷ ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ ヘラケズリ	1～2㎜以下に石英，角閃石を多量に含む	外内10YR 6／3 にぶい黄橙	良好	
65	31	弥生土器 製塩土器	口径　10.7㎝ 残存高14.7㎝			坏部内面 〃　外面	ナデ タタキ ヨコナデ	1㎜以下の石英，長石，角閃石を含む	外内2.5Y 8／1 灰白	良好	

SR01　6，7層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
66	33	弥生土器 壺	口径 10.4cm 残存高 4.9cm	頸部外面	ヘラ描文			1mm以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 5／6 明褐	良	
67	—	〃	口径 12.4cm 残存高 7.2cm	口縁部外面	凹線文3条	頸部外面	ヘラミガキ	石英，角閃石を多量に含む	外内7.5YR 6／2 灰褐	良	
68	33	〃	口径 13.0cm 残存高10.9cm			頸部内面 〃 外面	シボリ目 ヨコナデ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 6／2 灰黄褐	良	
69	33	〃	口径 15.0cm 残存高 8.4cm	頸部外面	列点文	口縁部内外面 頸部内面	ヨコナデ シボリ目	1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	〃	良好	
70	33	〃	口径 15.0cm 残存高 8.6cm	口縁部端面 頸部外面	凹線文3条 凹線文8条以上			1mm以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 5／3 にぶい褐	良	
71	—	〃	口径 15.5cm 残存高 3.4cm	口縁端部	竹管文	口縁部内外面	ナデ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 6／3 にぶい褐	良	
72	33	〃	口径 8.5cm 残存高 4.9cm	口縁端部	凹線文			1mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 6／3 にぶい黄橙	良	
73	33	〃	口径 14.5cm 残存高 2.3cm	口縁端部	凹線文3条	口縁部外面	ヨコナデ	1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外10YR 6／4 にぶい黄橙 内10YR 6／2 灰黄褐	良好	
74	—	〃	口径 15.0cm 残存高 2.9cm	口縁端部	凹線文3条	口縁部内外面	ナデ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 5／3 にぶい褐	良	
75	33	〃	口径 15.2cm 残存高 1.4cm	口縁端部	凹線文2条	口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 6／4 にぶい黄橙	良好	
76	—	〃	口径 17.0cm 残存高 3.2cm	口縁端部	凹線文3条	口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外7.5YR 6／4 にぶい橙 内7.5YR 6／3 にぶい褐	良	

77	33	弥生土器 壺	口径 17.8㎝ 残存高 5.7㎝	口縁端部	凹線文３条	口縁部内外面 頸部外面	ヨコナデ ハケ目	石英，角閃石を含む	外内 10YR 6 / 3 にぶい黄橙	良好	
78	33	〃	口径 18㎝ 残存高 7.3㎝	口縁端部	竹管文	頸部内面 〃 外面	ヘラケズリ ハケ目	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外7.5YR 5 / 3 にぶい褐 内7.5Y 5 / 2 灰褐	良	
79	34	弥生土器 甕	口径 14.1㎝ 残存高 3.8㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内外面 頸部内面	ヨコナデ ヘラケズリ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 2 / 2 黒褐 内10YR 6 / 4 にぶい黄橙	良好	
80	34	〃	口径 14.0㎝ 残存高 4.9㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内面 〃 外面	ナデ ハケ目	石英，角閃石を多量に含む	外内7.5YR 5 / 3 にぶい褐	良	
81	34	〃	口径 14.5㎝ 残存高 4.4㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内面 〃 外面	ヘラケズリ ヨコナデ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 5 / 3 にぶい黄褐 内10YR 6 / 3 にぶい黄橙	良	
82	34	〃	口径 15.5㎝ 残存高 2.4㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内外面	ヨコナデ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 7 / 3 にぶい黄橙 内10YR 7 / 2 にぶい黄橙	良好	
83		〃	口径 16.0㎝ 残存高 2.4㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内面 〃 外面	ナデ ヨコナデ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 6 / 3 にぶい黄橙 内10YR 6 / 4 にぶい黄橙	良好	
84		〃	口径 16.1㎝ 残存高 4.5㎝	口縁端部	凹線文	口縁部内外面	ヨコナデ	１㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外7.5YR 5 / 4 にぶい褐 内7.5YR 5 / 3 にぶい褐	良好	
85	34	〃	口径 17.4㎝ 残存高 3.6㎝	口縁端部	凹線文	口縁部内外面 頸部内面 〃 外面	ヨコナデ ヘラケズリ ハケ目	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外内 10YR 6 / 3 にぶい黄橙	良好	
86	34	〃	口径 19.0㎝ 残存高 2.2㎝	口縁端部	凹線文３条	口縁部内外面 頸部内面	ヨコナデ ヘラミガキ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外7.5YR 6 / 6 橙 内7.5YR 5 / 4 にぶい褐	良好	
87	34	〃	口径 13.7㎝ 残存高10.4㎝	口縁端部 体部外面	凹線文３条 刺突文	口縁部内外面 体部内面 〃 外面	ヨコナデ ヘラケズリ ハケ目，ヘラミガキ	１㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外10YR 6 / 3 にぶい黄橙 内10YR 6 / 2 灰黄褐	良好	
88	34	〃	口径 16.0㎝ 残存高 7.5㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部外面 体部内面 〃 外面	ヨコナデ ナデ後ハケ タタキ後ハケ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 5 / 3 にぶい黄褐 内10YR 6 / 2 灰黄褐	良好	

89	—	弥生土器 甕	口径 14.1㎝ 残存高 2.7㎝	口縁端部	凹線文３条	口縁部内外面	ヨコナデ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外内 10YR 5 / 4 にぶい黄褐	良好	
90	34	〃	口径 16.3㎝ 残存高 2㎝	口縁端部	凹線文３条	口縁部内外面	ヨコナデ	１㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外7.5YR 6 / 1 褐灰 内7.5YR 7 / 1 明褐灰	良好	
91	34	〃	口径 17.0㎝ 残存高 2.3㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内外面	ヨコナデ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 6 / 3 にぶい褐	良好	
92	34	〃	口径 16.2㎝ 残存高 5㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内面 〃 外面 頸部〃	指ナデ ヨコナデ ハケメ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 6 / 4 にぶい黄橙 内10YR 7 / 4 にぶい黄橙	良好	
93	34	〃	口径 16.3㎝ 残存高 4.5㎝	口縁端部	凹線文４条	口縁部内面 〃 外面 頸部内面	ヨコナデ ナデ ナデ	角閃石を多量に含む	外7.5YR 6 / 3 にぶい褐 内7.5YR 7 / 2 明褐灰	良	
94	34	〃	口径 16.6㎝ 残存高 4㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内外面 頸部外面	ヨコナデ ハケ目	１㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外内 10YR 5 / 3 にぶい黄褐	良好	
95	34	〃	口径 18.1㎝ 残存高 3.6㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内外面 頸部内面	ヨコナデ ナデ	１㎜以下の石英，角閃石を多量に含む	外内 10YR 7 / 2 にぶい黄橙	良好	
96	34	〃	口径 17.8㎝ 残存高 3.8㎝	口縁端部	凹線文３条	口縁部内面 頸部内面	ヨコナデ ナデ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外7.5YR 5 / 3 にぶい褐 内7.5YR 6 / 3 にぶい褐	良好	
97	34	〃	口径 15.4㎝ 残存高 6.9㎝	口縁端部	凹線文３条	口縁部内外面 体部内面 〃 外面	ヨコナデ ナデ，ヘラケズリ ハケ目	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外内 10YR 6 / 3 にぶい黄橙	良好	
98	—	〃	口径 16.4㎝ 残存高 5.9㎝			口縁部内外面 体部内面	ナデ ナデ，ヘラケズリ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 5 / 3 にぶい褐	良	
99	34	〃	口径 15.8㎝ 残存高13.4㎝	口縁端部	凹線文２条	口縁部内面 体部外面	ヨコナデ ヘラケズリ	１㎜以下の石英，角閃石を含む	外10YR 7 / 3 にぶい黄橙 内10YR 7 / 2 にぶい黄橙	良	煤付着
100	—	弥生土器 甕 底部	底径 3.9㎝ 残存高 2.1㎝			底部内外面	ナデ	１～２㎜以下の石英，角閃石を含む	外7.5YR 5 / 6 明褐 内7.5YR 7 / 2 明褐灰	良好	

101	—	弥生土器 甕　底部	底径　4.9cm 残存高 3.0cm			底部内面 〃　外面	ヘラミガキ ヘラミガキ	1～2mm以下の石英，角閃石を多量に含む	外7.5YR 3／2 黒褐 内7.5YR 4／2 灰褐	良好	
102	—	〃	底径　5.8cm 残存高 2.6cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外10YR 6／2 灰黄褐 内10YR 6／3 にぶい黄橙	良好	
103	—	〃	底径　7.1cm 残存高 3.1cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ハケ目	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内2.5Y 7／3 浅黄	良好	
104	—	〃	底径　5.0cm 残存高 1.3cm			底部内面 〃　外面	ナデ ヘラミガキ	1mm以下の角閃石を多量に含む	外7.5YR 8／2 灰白 内7.5YR 7／2 明褐灰	良好	
105	—	〃	底径　6.0cm 残存高 1.9cm			底部内外面	ヨコナデ	1mm以下の角閃石を多量に含む	外7.5YR 4／2 灰褐 内7.5YR 6／3 にぶい褐	良好	
106	—	〃	底径　6.0cm 残存高 2.2cm			調整不明		1mm以下の角閃石を多量に含む	外内10YR 6／3 にぶい黄橙	良好	
107	—	〃	底径　6.4cm 残存高 3.0cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1mm以下の角閃石を多量に含む	外10YR 5／1 褐灰 内10YR 5／2 灰黄褐	良好	
108	—	〃	底径　6.8cm 残存高 2.7cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1mm以下の角閃石を多量に含む	外10YR 5／2 灰黄褐 内10YR 6／4 にぶい黄橙	良好	
109	—	〃	底径　5.8cm 残存高 3.2cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1mm以下の角閃石を多量に含む	外7.5YR 5／3 にぶい褐 内10YR 6／3 にぶい黄橙	良好	
110	—	〃	底径　5.5cm 残存高 3.0cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ナデ	1mm以下の角閃石を多量に含む	外7.5YR 4／1 褐灰 内10YR 5／3 にぶい黄褐	良好	
111	—	〃	底径　6.2cm 残存高 2.1cm			底部内面 〃　外面	タタキ ヨコナデ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外10YR 7／2 にぶい黄橙 内2.5Y 6／3 にぶい黄	良好	
112	—		底径　6.4cm 残存高 3.0cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1mm以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 5／3 にぶい褐	良好	

113	—	弥生土器 甕　底部	底径　5.6cm 残存高 4.3cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ 後ナデ ヘラミガキ 後ヨコナデ	1mm以下の 角閃石を多 量に含む	外7.5YR 4／2 灰褐 内7.5YR 2／2 黒褐	良好	
114	—	〃	底部　6.0cm 残存高 4.7cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ 磨滅の為調 整不明	1mm以下の 角閃石を多 量に含む	外7.5YR 5／6 明褐 内7.5YR 5／8 明褐	良好	
115	—	〃	底径　6.8cm 残存高 4.6cm			底部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	1mm以下の 角閃石を多 量に含む	外10YR 6／2 灰黄褐 内10YR 6／3 にぶい黄橙	良好	
116	35	弥生土器 高坏　坏部	口径　16.0cm 残存高 3.6cm	杯部外面	竹管文	口縁部内外面 杯部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	石英，角閃 石を含む	外7.5YR 6／4 にぶい橙 内7.5YR 5／4 にぶい褐	良好	
117	35	〃	口径　27.6cm 残存高 2.1cm	口縁端部外 面	凹線文2条	口縁部内外面 杯部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の 石英，角閃 石を多量に 含む	外内10YR 6／ 2 灰黄褐	良好	
118	35	〃	口径　27.8cm 残存高 2.5cm	口縁端部外 面	凹線文2条	口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英，角閃 石を含む	外内10YR 6／ 3 にぶい黄橙	良好	
119	35	〃	口径　32cm 残存高 4.3cm	口縁端部外 面	凹線文3条	口縁部内外面 杯部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の 石英，角閃 石を含む	〃	良	
120	35	〃	口径　32.4cm 残存高 2.8cm	口縁端部外 面	凹線文3条	口縁部外面	ヨコナデ	1mm以下の 石英，角閃 石を含む	〃	良	
121	35	〃	口径　31.0cm 残存高 3.6cm	口縁端部外 面	凹線文3条	口縁部内外面 杯部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の 石英，角閃 石を含む	〃	良	
122	—	弥生土器 高坏 柱状部	残存高 4.5cm			柱状部内面 〃　外面	ヘラケズリ 後ナデ ヘラミガキ	1mm以下の 石英，角閃 石を含む	〃	良	
123	35	弥生土器 高坏　脚部	底径　8cm 残存高 4.4cm	脚部外面	櫛描直線文 6条	脚部内面	ヨコナデシ ボリ目	1mm以下の 石英，角閃 石を含む	〃	良好	
124	33	〃	底径　12.6cm 残存高　10cm	脚部	円孔透孔6	脚部内面	ヘラケズリ， ハケ目	長石，石英， 角閃石を多 量に含む	外内10YR 7／ 2 にぶい黄橙	良好	

125	35	弥生土器 高坏　脚部	底径　16.0㎝ 残存高 4.8㎝			脚部内面 〃　外面	ヘラケズリ ナデ	1㎜以下の 石英，角閃 石を多量に 含む	外2.5Y5／3 黄褐 内10YR5／3 にぶい黄褐	良	
126	35	〃	底径　16.5㎝ 残存高 4.3㎝	脚端部 脚部	凹線文3条 円形透孔	脚部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヘラミガキ	石英，角閃 石を多量に 含む	外内10YR6／ 2 灰黄褐	良好	
127	35	〃	底径　16.5㎝ 残存高 3.4㎝	脚端部	凹線文2条	脚部内面 〃　外面	ヘラケズリ ヨコナデ	1㎜以下の 石英，角閃 石を含む	外10YR6／4 にぶい黄褐 内10YR5／3 にぶい黄褐	良好	
128	35	〃	底径　16.5㎝ 残存高 5.0㎝	脚端部 脚部	凹線文2条 円形透孔	脚部内面 〃　外面	ヘラケズリ ナデ	1㎜以下の 石英，角閃 石を含む	外内10YR6／ 2 灰黄褐	良好	
129	35	〃	底径　18.2㎝ 残存高 3.4㎝	脚部外面	凹線文2条	脚部内面 〃　外面	ヘラケズリ ナデ	1㎜以下の 石英，角閃 石を含む	外7.5YR5／3 にぶい褐 内7.5YR4／3 褐	良	
130	35	〃	底径　18.8㎝ 残存高 4.8㎝	脚部外面	凹線文4条	脚部内面	ヘラケズリ	1㎜以下の 石英，角閃 石を含む	外内7.5YR5／ 4 にぶい褐	良	
131	—	弥生土器 鉢	口径　42.0㎝ 残存高 9.6㎝	体部外面	凹線文3条	口縁部内外面 体部内面 〃　外面	ヨコナデ ハケメ，ヘ ラミガキ ヘラミガキ	石英，角閃 石を含む	外10YR5／3 にぶい黄褐 内10YR4／2 灰黄褐	不良	

1区　5a層

挿図番号	図版番号	器　種	法量(㎝)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
132	—	黒色土器類 椀	口径　8.7㎝ 残存高2.2㎝			底部内面 〃　外面	ヘラミガキ ナデ	1㎜以下の 石英，角閃 石を含む	外2.5Y8／2 灰白 内2.5Y2／1 黒	良	反転復元

2区　3層

挿図番号	図版番号	器　種	法量(㎝)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
133	—	須恵器 坏身	底径　5.2㎝ 残存高1.5㎝					密	外2.5Y6／3 にぶい黄 内5Y6／3 オリーブ黄		反転復元 堅緻

1区　2，3層

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
134	—	染付皿	口径　9.6cm 残存高1.7cm	口縁部内面	雷文帯			密	外内7.5GY 8／1 明緑灰	良好	
135	—	磁器碗	口径　12.6cm 残存高1.8cm					密	外内2.5GY 7／1 明オリーブ灰	良好	
136	—	土師器 坏	口径　13.6cm 残存高2.8cm			調整不明		1mm以下の石英を含む	外内7.5Y 8／1 灰白	良	

2区　SD01

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
137	—	須恵器 坏蓋	口径　14.0cm 残存高 1.1cm			口縁部内外面	ヨコナデ	密	外内10YR 7／1 灰白	良	反転復元
138	—	須恵器 坏蓋	底径　7.1cm 残存高 1.3cm			天井部外面	ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む	外N 6／0 灰 内N 7／0 灰	良好	反転復元
139	—	須恵器 坏身	口径　11.2cm 残存高 1.7cm			口縁部内外面	ヨコナデ	密	外内N 6／3 灰	良	反転復元
140	—	〃	口径　11.2cm 残存高 2.5cm			口縁部内外面	ヨコナデ	密	外10BG 7／1 明青灰	良好	反転復元
141	—	須恵器 坏	口径　14.2cm 残存高 1.9cm			口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む	外内N 7／0 灰白	良好	反転復元
142	—	須恵器 高坏　脚部	底径　9.9cm 残存高 1.3cm			脚部内外面	ヨコナデ	密	外N 5／ 灰 内N 6／ 灰	良好	反転復元
143	—	土師器 坏	底径　6.6cm 残存高 1.3cm					1mm以下の砂粒を多量に含む	外内2.5Y 8／2 灰白	良好	反転復元

144	—	弥生土器 甕　底部	底径　7.5cm 残存高 2.4cm					1mm以下の砂粒を多量に含む	外10YR 6／6 明黄橙 内10YR 7／6 明黄橙	良	

3区　3層

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
145	—	須恵器 坏蓋	底径　11.0cm 口径　14.0cm 器高　1.6cm					1mm以下の角閃石，石英を含む	外内N 7／ 灰白	良好	堅緻 反転復元 口縁端部 黒斑
146	—	〃	口径　18.0cm 残存高 1.7cm			内外面	ヨコナデ	密	外内N 8／ 灰白	良好	
147	—	須恵器 坏身	残存高 2.6cm			内面 外面	ナデ ヨコナデ	密	外内N 7／	良好	堅緻 反転復元
148	—	〃	残存高 2.5cm			内外面	ヨコナデ	密	外内5PB 7／1 明青灰	良好	堅緻 反転復元
149	—	土師器 坏	底径　8.0cm 残存高 0.9cm			内外面	ヨコナデ	密	外内2.5YR 7／3 淡赤橙	良	
150	—	〃	底径　10.0cm 残存高 1.5cm			内外面	ヨコナデ	密	外内7.5Y 8／1 灰白	良	
151	—	須恵器 皿	底径　6.0cm 残存高 1.1cm			内面 底部外面	ナデ ヘラ切り	密	外内N 7／ 灰白	良好	堅緻 反転復元
152	—	〃	底径　9.9cm 残存高 1.0cm			内外面 底部外面	ナデ ヘラ切り	密	外内N 5／ 灰	良好	堅緻 反転復元
153	—	須恵器 坏	底径　10.0cm 残存高 1.2cm			内外面 底部外面	ナデ ヘラ切り	密	外内N 5／ 灰	良好	堅緻 反転復元
154	—	〃	底径　9.2cm 残存高 2.4cm			内外面 底部外面	ナデ ヘラ切り	密	外内N 7／ 灰白	良好	反転復元

155	—	須恵器 坏	底径　11.0㎝ 残存高 2.5㎝			内外面	ヨコナデ	密	外内N５／ 灰	良好	堅緻 反転復元
156	—	須恵器 壷	残存高 4.0㎝			頸部内外面	ナデ		外N３／ 暗灰 内N４／ 灰	良好	
157	—	須恵器 高坏 柱状部	残存高 4.8㎝					１㎜以下の 石英，長石 を含む	外N５／ 灰	良好	堅緻 反転復元
158	—	東播系 こね鉢	口径　28.5㎝ 残存高 4.0㎝			口縁部内外面	ヨコナデ	１㎜以下の 石英を多量 に含む	外内N７／ 灰白	良	

3区　ＳＤ04

挿図番号	図版番号	器　種	法量(㎝)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
159	—	須恵器 坏	口径　12.0㎝ 残存高 1.9㎝					１㎜以下の 石英を含む	外2.5Ｙ８／２ 灰白 内2.5Ｙ８／４ 淡黄	良	堅緻 反転復元
160	—	須恵器 坏身	残存高 1.6㎝			内面	ヨコナデ	密	外7.5Ｙ６／ 灰 内Ｎ８／ 灰白	良好	
161	—	須恵器 皿	口径　10.0㎝ 残存高 0.9㎝			底部内外面 〃　外面	ナデ ヘラ切り	密	外内Ｎ８／ 灰白	良好	反転復元

3区　ＳＤ05

挿図番号	図版番号	器　種	法量(㎝)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
162	—	土師器 甕	口径　31.4㎝ 残存高 7.2㎝			口縁部内外面 体部外面	ヨコナデ ハケ目	１㎜以下の 石英，角閃 石，長石を 多量に含む	外10YR７／３ にぶい黄橙 内7.5YR７／４ にぶい橙	良好	

4区　ＳＤ01

挿図番号	図版番号	器　種	法量(㎝)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
163	—	弥生土器 壷	口径　16.6㎝ 残存高 7.0㎝	口縁部内面	擬凹線文	口縁部外面 頸部内面	ヨコナデ 指頭圧痕	１㎜以下の 石英多量に 含む	外7.5YR６／３ にぶい褐 内５YR５／６ 明赤褐	良	

164	—	弥生土器 高坏　脚部	底径　16.0cm 残存高 1.5cm					2㎜以下の角閃石と1㎜以下の石英を含む	外内10YR 6／4 にぶい黄橙	良	
165	—	土師器 皿	口径　14.0cm 残存高2.5cm			口縁部内外面	磨滅の為調整不明	石英，長石を含む	外10YR 7／3 にぶい黄橙 内10YR 7／4 にぶい黄橙	不良	
166	—	土師器 椀底部	底径　6.0cm 残存高 1.0cm					石英を含む	外内5YR 6／6 橙	不良	

4区　SX01

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
167	—	弥生土器 壷	口径　9.2cm 残存高 1.7cm					1㎜以下の石英を含む	外内10YR 6／6 明黄褐	良	
168	—	弥生土器 鉢	口径　20.2cm 残存高 1.6cm			口縁部内外面	ヨコナデ	2㎜以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR 5／4 にぶい褐	良好	

4区　SK01

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
169	—	陶器 皿	口径　10.0cm 残存高 1.5cm			外面	ヘラケズリ	密	外内10R 4／2 灰赤	良	口縁部内外面 煤付着

4区　SK06

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
170	—	染付碗蓋	口径　8.2cm 残存高 1.4cm					密	外内10Y 8／ 灰白色	良好	
171	—	染付青磁 碗	口径　14.1cm 残存高　4cm					密	外内10GY 8／1 明緑灰色	良好	

4区　ＳＫ07

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
172	—	土師器 坏	底径　7.4cm 残存高 1.5cm			内外面	ナデ	密	外内2.5Ｙ８／２ 灰白	良	

居石２号塚西側墳丘

挿図番号	図版番号	器　種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎　土	色　調	焼成	備　考
173	36	染付磁器 小皿	口径　6.4cm 底径　3.2cm 器高　2.2cm	体部外面	笹文			密	外内 淡明青灰	良好	
174	36	染付磁器 皿	口径　9.6cm 底径　4.8cm 器高　1.9cm			内面見込	蛇の目釉剥ぎ	密	外内 灰白	良好	
175	36	染付磁器 碗	口径　10.0cm 底径　3.9cm 器高　5.0cm	体部外面	牡丹唐草文			密	外内 淡灰白色	良好	
176	—	染付磁器 皿	口径　9.8cm 残存高 2.3cm	内面	唐草文			密	外内 淡灰青白色	良好	
177	36	土師器 焙烙	口径　45.0cm 残存高 7.5cm	口縁部	穿孔（未貫通）	口縁部内外面 胴部内面 〃　外面	ヨコナデ ハケ目 タタキ後ハケメ	１mm以下の石英，角閃石を含む	外内10YR３／３ 暗褐	良	
178	36	〃	口径　46.0cm 残存高 8.4cm	口縁部	穿孔（未貫通）	口縁部内面 胴部内面 〃　外面	ナデ ヘラミガキ ナデ	１mm以下の石英を含む	外内10YR５／３ にぶい黄橙	良	胴部外面 煤付着
179	36	〃	口径　45.8cm 残存高 6.9cm	口縁端部	穿孔１対	口縁部内面 胴部外面	ナデ ナデ，ハケメ	石英を含む	外内10YR４／３ にぶい黄褐	良	外面 煤付着
180	36	〃	口径　44cm 残存高 8.2cm			口縁部内外面 胴部内面 〃　外面	ヨコナデ ハケ目 ハケ目，ナデ	１mm以下の石英，角閃石を含む	外内7.5YR３／４ 暗褐	良	
181	36	〃	口径　46.4cm 器高　8.5cm	口縁部	穿孔（未貫通）	口縁部内外面 胴部外面	ヨコナデ	１mm以下の石英を含む	外内10YR３／３ 暗褐	良	胴部外面 煤付着

182	36	瓦質土器 焙烙	口径 43.0㎝ 残存高 8.0㎝			口縁部内外面 胴部外面	ナデ 〃	石英，角閃石を含む	外2.5Y2/1黒 内7.5YR 3/1黒褐	不良	

東側墳丘集石内

挿図番号	図版番号	器種	法量(㎝)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
183	—	土師器 小皿	口径 9.0㎝ 残存高 1.3㎝			内外面	ヨコナデ	石英，角閃石を含む	外内7.5YR 8/4 浅黄橙	良	
184	37	〃	口径 9.4㎝ 底径 5.6㎝ 器高 1.7㎝			内外面	ナデ	1㎜以下の石英を含む	外7.5YR 8/3 浅黄橙 内7.5YR 8/4 浅黄橙	良	
185	37	〃	口径 9.4㎝ 底径 5.4㎝ 器高 1.8㎝			内面 外面	ヘラ切り後ナデ ナデ	1㎜以下の石英，角閃石を含む	外内10YR 7/3 にぶい黄橙	良	
186	37	染付 小坏	口径 7.0㎝ 底径 3.3㎝ 器高 5.2㎝	外面	山水文			密	外10Y 8/1 灰白 内7.5Y 8/1 灰白	良	全体に貫入が著しい
187	37	〃	口径 6.8㎝ 底径 3.1㎝ 器高 4.9㎝	外面	花卉			密	外内10Y 8/1 灰白	良	
188	37	陶器 碗	口径 11㎝ 底径 4.6㎝ 器高 7.8㎝					石英，角閃石を含む	外(上部)2.5Y 8/2 灰白 〃(下部)5YR 4/3 にぶい赤褐 内5YR 3/3 暗赤褐	良	
189	37	陶器 皿	口径 18.6㎝ 底径 8.0㎝ 器高 3.9㎝					石英，角閃石を含む	外内7.5YR 5/3 にぶい褐	良好	
190	—	神酒徳利	器高 10.8㎝	体部外面	「御神前」の銘あり			密	外内 淡灰白	良好	色絵
191	—	染付磁器 碗	底径 4.9㎝ 残存高 3.7㎝	体部外面	唐草文			密	外内7.5Y 6/2 灰オリーブ	良好	貫入が著しい
192	—	染付碗	底径 4.4㎝ 残存高 2㎝	体部外面	染付			密	外内7.5GY 8/1 明緑灰色	良好	

193	—	陶器 碗	底径　3.2cm 残存高 2.8cm					密	外内5Y8/2 灰白	良好	
194	—	碗	底径　4.5cm 残存高 3.6cm					密	外10YR 2/3，10YR 7/8 黒褐，黄橙 内5Y8/2 灰白	良好	
195	—	陶器 燈明皿	口径　10cm 残存高 1.6cm			内面 外面	ヨコナデ ヘラケズリ	密	外内5YR 3/3 暗赤褐	良好	口縁部内面 黒色の痕跡 （煤？）
196	37	肥前系磁器 碗	口径　11.2cm 底径　5.0cm 器高　7.6cm					密	外内2.5YR 7/3 浅黄	良好	全体に貫入が著しい
197	—	擂鉢 （堺）	底径　10.0cm 残存高 2.0cm			外面	ヘラケズリ	1mm以下の石英を含む	外10YR 4/3 にぶい黄褐 内5YR 3/6 暗赤褐色	良好	条溝
198	—	擂鉢（備前）	口径　30.0cm 残存高3.75cm			口縁部内外面	ヨコナデ	密	外内5YR 3/4 暗赤褐色	良好	条溝
199	—	擂鉢	口径　34.0cm 残存高 4.2cm			口縁部内外面	ヨコナデ	密	外内5YR 5/4 にぶい赤褐	良好	条溝

図　　版

1．1区南壁土層堆積状況

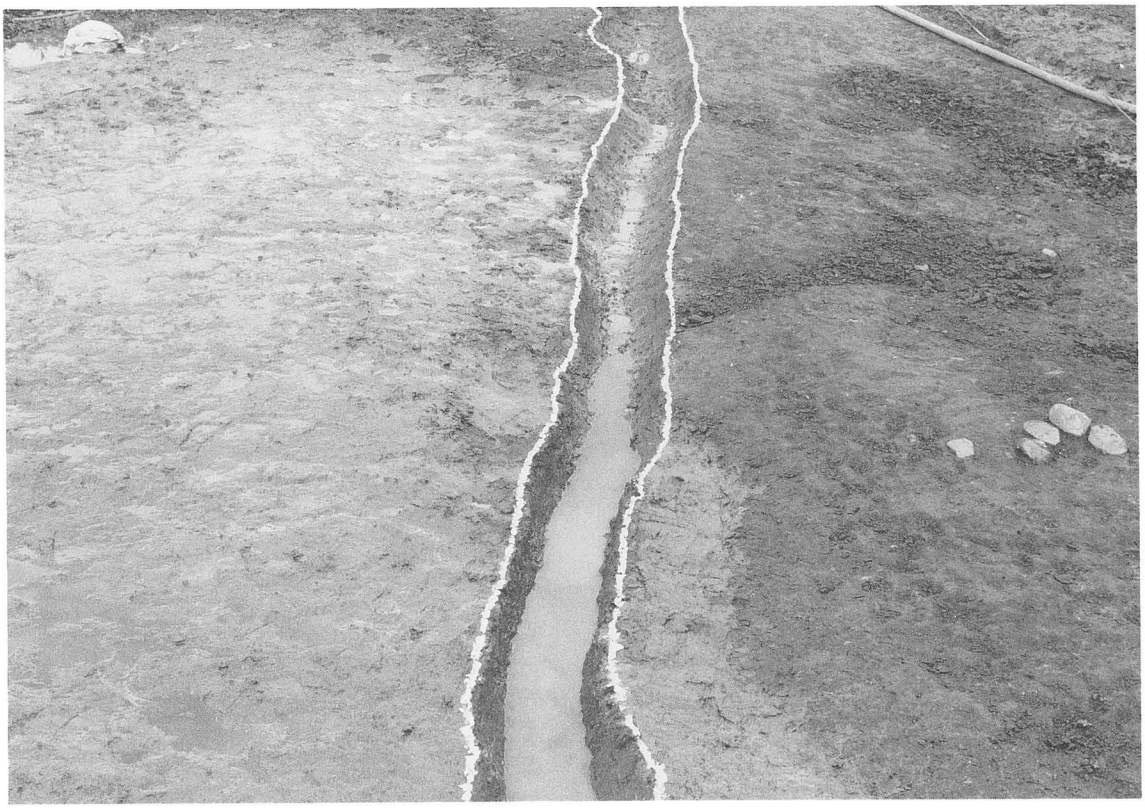
2．1区南壁土層堆積状況

3．1区南壁土層堆積状況

図版2

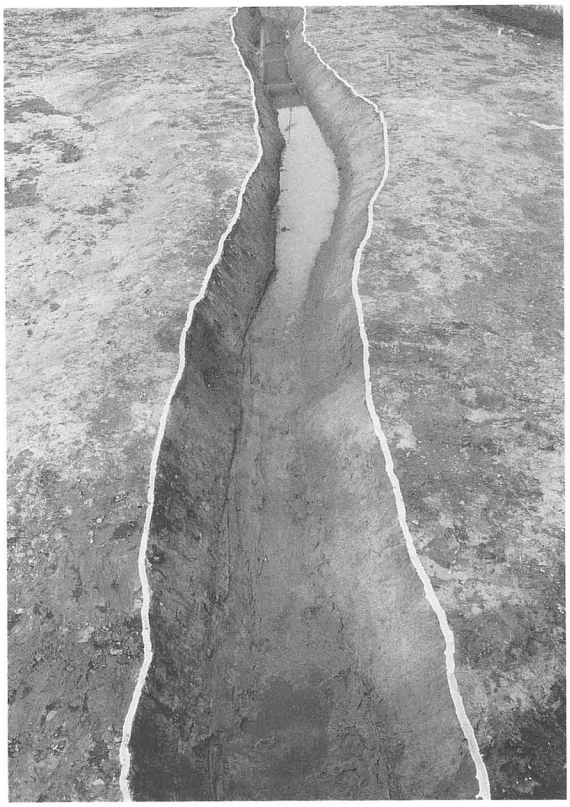
1．1区ＳＲ01完掘状況

2．ＳＲ01土器出土状況



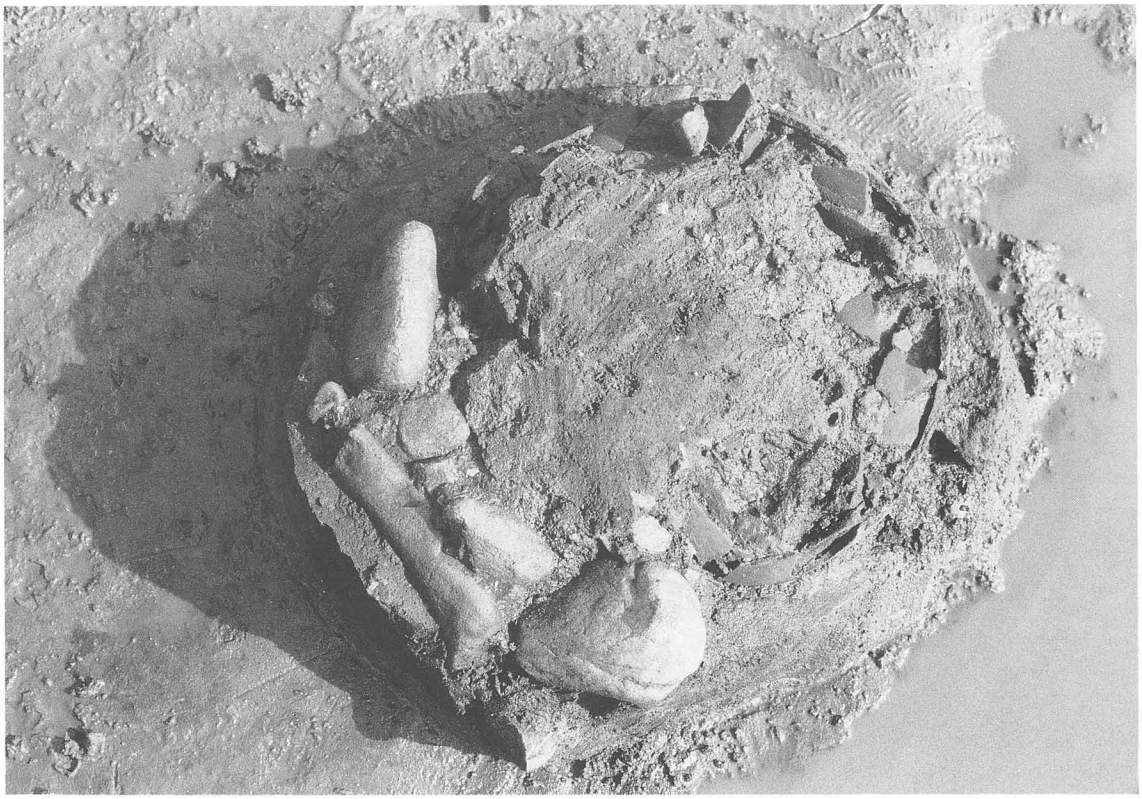
1．1区ＳＤ01完掘状況

2．1区ＳＤ02完掘状況



3．1区ＳＤ03完掘状況

図版4



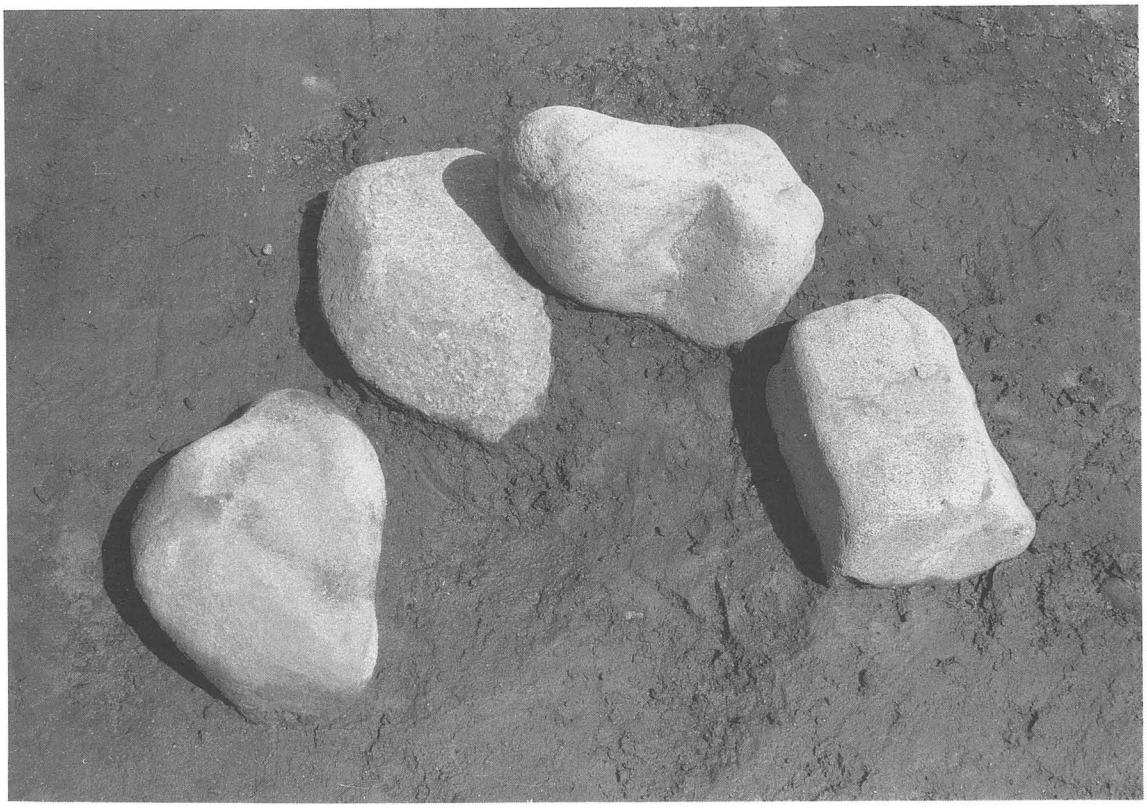
1．1区土器棺1検出状況

2．1区土器棺1完掘状況

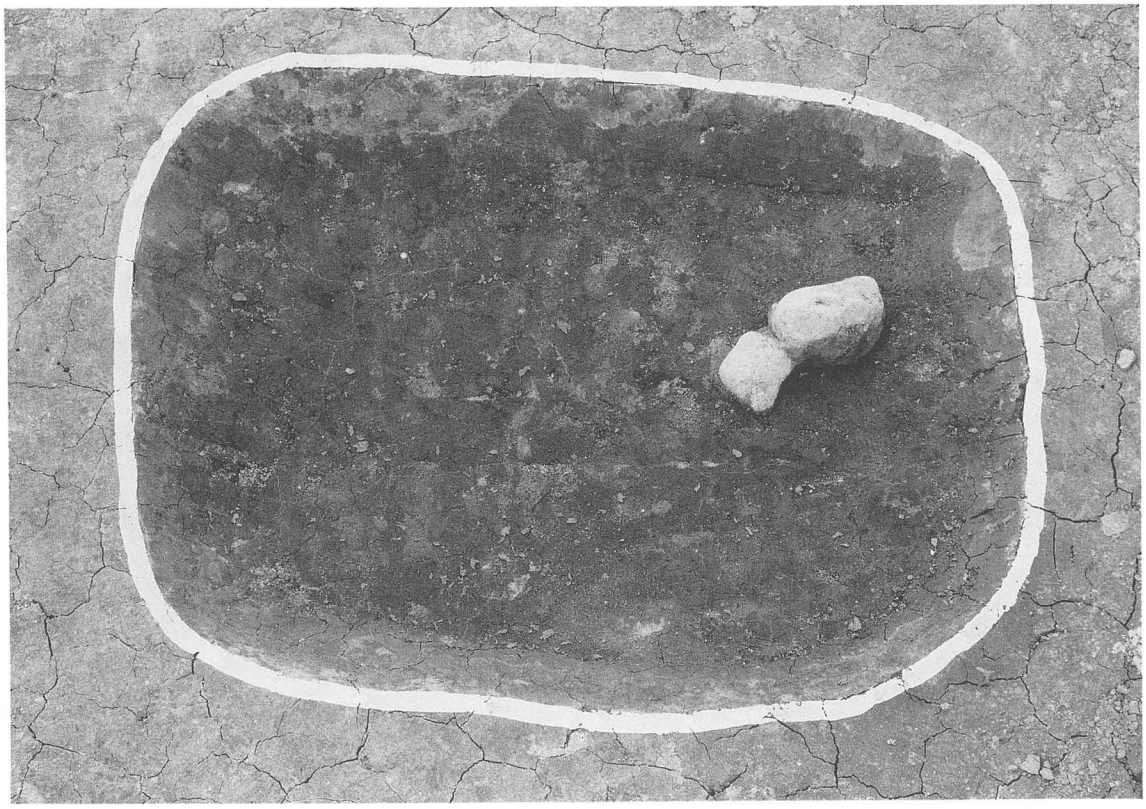
1．1区土器棺2検出状況

2．1区土器棺2完掘状況

図版6



1．1区土器棺3完掘状況



2．1区ＳＫ03完掘状況

1．1区ＳＫ04完掘状況

2．4ａ層水田足跡検出状況

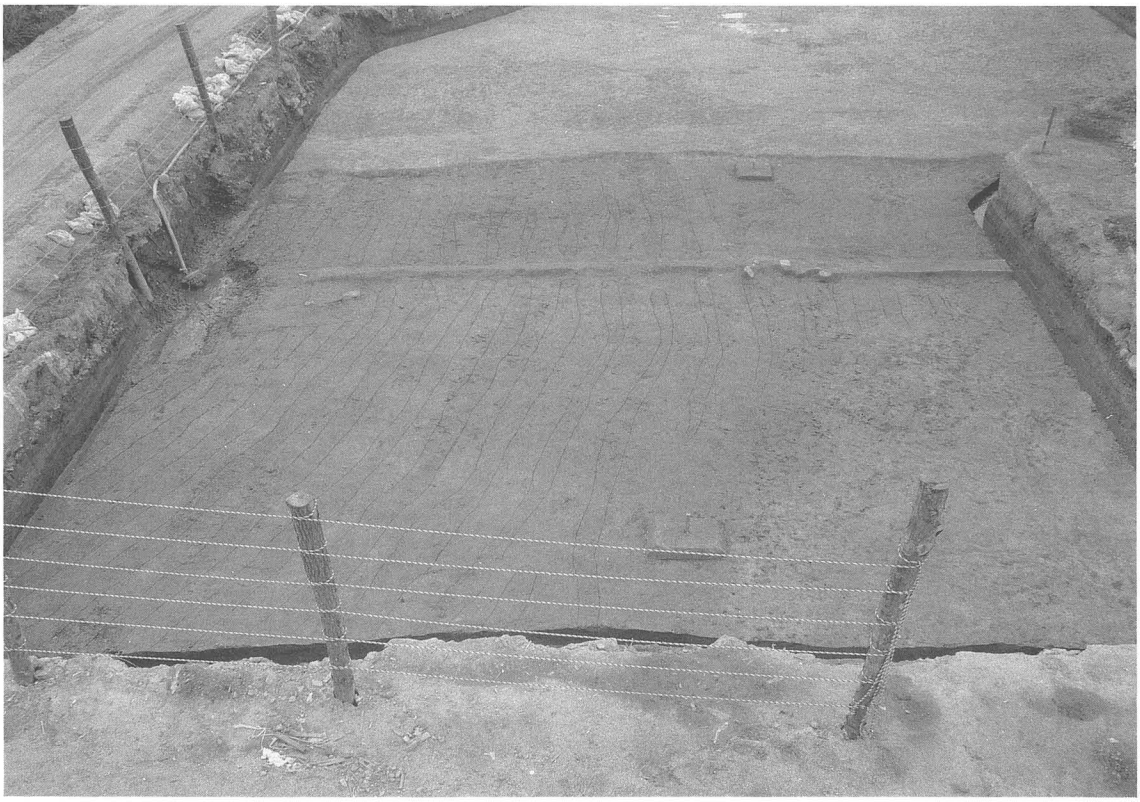
1．1区ＳＤ04、05完掘状況

2．1区完掘状況（南東から）

1．2区3a層水田完掘状況

2．2区3a層水田畦畔

図版10



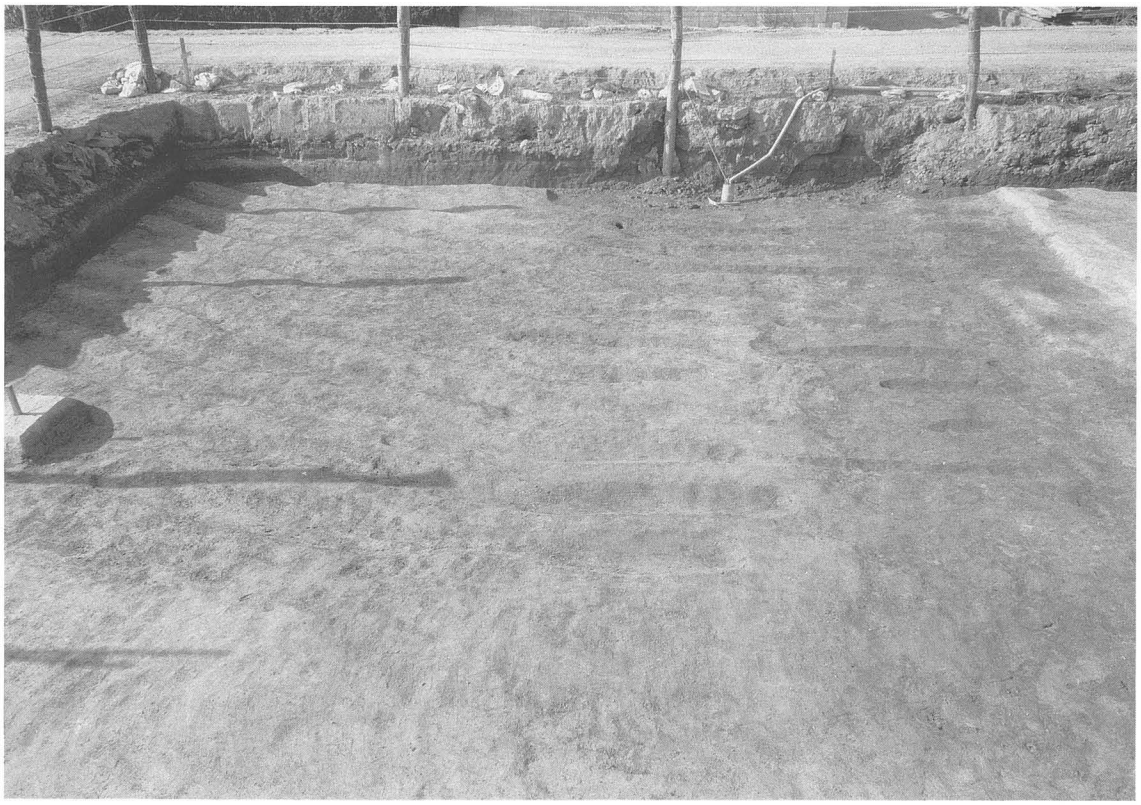
1．2区3b層畝状遺構検出状況

2．2区3b層畝状遺構検出状況

1．２区３ｂ層畝状遺構完掘状況

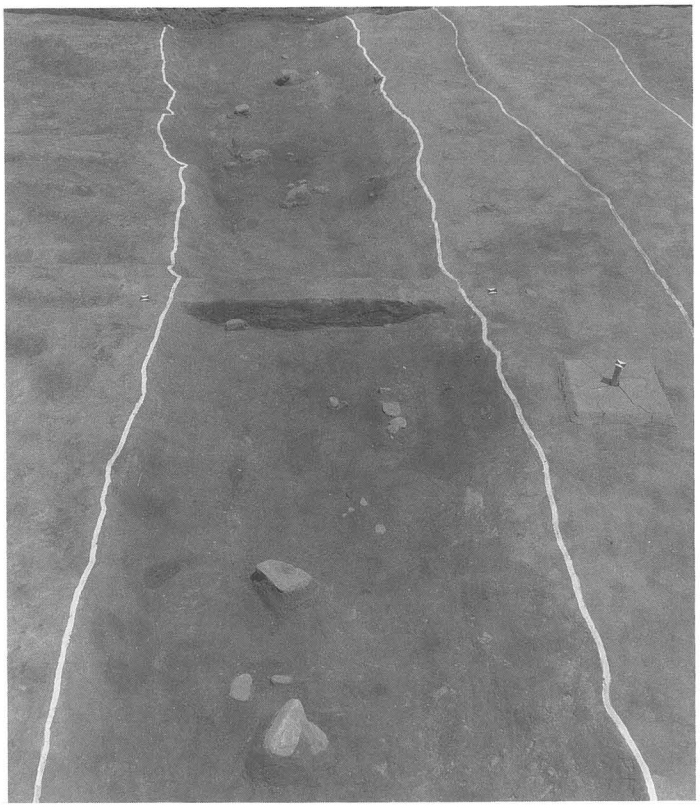
2．２区３層水口完掘状況

1．2区4b層畝状遺構検出状況

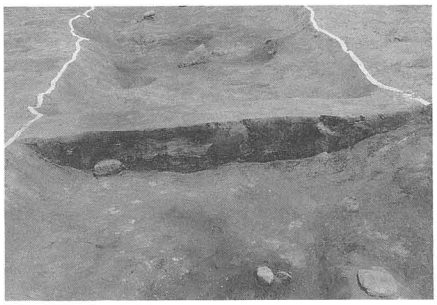


2．2区4b層畝状遺構完掘状況

1．２区４ｂ層畝状遺構完掘状況



2．２区ＳＤ01完掘状況



3．２区ＳＤ01土層堆積状況

図版14

1．2区ＳＲ01完掘状況

2．2区ＳＸ01完掘状況

1．2区完掘状況（西から）

2．発掘作業風景